

魁魂

Spirit of Preceed



魁魂

Spirit
of
Preceed

〔著者〕
松本
修一



魁 魂 (Spirit of Preceed)

30年前に株式会社プレシードを創立した頃、今から振りかえれば、世界は冷戦が終わりベルリンの壁が取り払われ、国内はバブル真っ盛りだったようです。当時、私はサラリーマン技術者を退職して3年、友と創業したベンチャー企業を路線の違いから分離独立し、新たな操業へ向かいました。一人で企業を興したその時の不安感は今でもよく思い出します。

脱サラ、そして二度目の創業と全く長期ビジョンもないスタートでした。思いだけが先走り、実態がつつま合わせで付いて来るといふ状況でした。企業名もprecede(先行するの意)とprecise(精密)の英単語から取ってPreceedと命名しました。

あれからあつという間に30年という月日が流れ、どこへ行っても最年少の若手社長だったのが、今では高齢者の仲間入りすることになってしまいました。その間に色々な出来事、事件、問題、社会現象に出会いながら経営のかじを取り生き延びてきました。その折々に社内にもメッセージや業務命令を発したり、或は自分の備忘録に時事の考えを書き残してきました。回顧録ではなく、未熟な経営者がその時点で考えたり発言したことは、正鵠を射たものもあれば、大きく的外したものもあります。成功事例というより七転八倒の記録と言えます。後継者諸君へ経営の記録として何かの参考に供えるのではないかと思い、記録として残すことにしました。

最後に、本誌の資料整理・編集をやり遂げてもらった、現プレシード取締役小野上典明氏に心より感謝申し上げます。

魁魂

Spirit of Preced

目次



魁魂 1

歴史

創業の思い	10	
「薄氷を履む思い」で経営二十年	14	
サヨウナラ関西社員寮	17	
還暦断髪式報告	19	
「新人の頃」その1	22	
「新人の頃」その2	25	
「新人の頃」その3	28	
「新人の頃」その4	30	
「新人の頃」その5	33	
「新人の頃」その6	36	
「新人の頃」その7	38	
出張エピソード	41	
会社の老化	43	
老化	46	
コンピュータとの思い出	49	
コンピュータとの思い出	52	
コンピュータとの思い出	56	
コンピュータとの思い出	62	
「技術集団F/AプロジェクトG」誕生	64	
大嵐の水河期に突入した	67	
創業20周年を迎えて	70	
プレシードが食品メーカーに!?	77	
社歴を語るその1	80	
社歴を語るその2	86	
社歴を語るその3	88	
社歴を語るその4	91	
社歴を語るその5	94	
社歴を語るその6	96	
社歴を語るその9	99	
社歴を語るその10	102	
社歴を語るその11	105	
社歴を語るその12	108	
プリウスのレストラン	111	
「30周年キックオフ決起大会」によせて	114	
有田政司 寄稿 プレシードと共に歩んだ30年	117	

経営のこころ

一所懸命・命懸けの面白さ
Interactiveという言葉について
忙しさの中で
ラジオ体操への思い
掃除にかける思い
乾いた雑巾
感動を創造する その2
厳しさを楽しむ心のゆとりを
ワンマン経営回帰宣言
仕事に感謝・仕事は段取り
タクシードライバ
新たな挑戦の報告と掛ける思い
「時間がない」とは？
人を活かす
すべてを変えろ
文化統治
皿回し
ジャズバンド型組織
ストップウォッチで測るような作業を積み上げよう
時間を味方に
最初の12秒
「カラオケとクラウン
戦艦大和
3分間スピーチ復活によせて
我社の求人について
workerからplayerへ
新人諸君へ volume 1
厳しさの中で目指すもの

124
127
127
129
131
133
134
136
138
147
149
154
157
158
162
166
168
171
173
177
180
184
187
190
193
195
198
200
202
205
208

主体者たれ
ジェネラリストの育成と人事交流
命令・報告、提案・許可
人事を考える
変化せよ、自分を変え、組織を変える
ベクトルを合わせよう
朝令暮改
信じよう「継続は力なり」→特に新人諸君へ→
熟練に学ぼう
厳しい状況下の運営「夢と覚悟」
「箕」→自分と周りを箕ける→
自分の壁を越えよう
I o T
もう一度 報・連・相
毎朝鏡と語ろう
ビジネスカタバロト事業戦略
何故ブレイシードを誇れるか
リーダーの立つ位置
過渡期という言葉
失敗は無駄か？
仕事は面白い？面白い！
我社はビジョナリーカンパニー
松下村塾はビジョナリーカンパニー
クリティカルワークとルーティンワーク
心は常在工場
経営理念
社は

211
214
217
220
222
224
229
231
233
234
236
241
243
246
248
250
252
259
262
268
271
274
277
280
283
286
288
292

生き方

「フェア(公平)」ということ
50歳によせて
なぜ働くのか？働く意義を考えてみよう
なぜ働くのか2
なぜ働くのか3
なぜ働くのか4
なぜ働くのか5
参禅記 その1
参禅記 その2
参禅記 その3
参禅記 その4
参禅記 その5
参禅記 その6
参禅記 その7
参禅記 その8
参禅記 その9
参禅記 その10
参禅記 その11
参禅記 その12
参禅記 その13

296
300
303
305
307
309
311
314
316
318
320
322
324
326
328
330
333
335
338
340
342
344
347
349
351
353
355
356
358
360
362
364
366
368
370
375
378
380
382

参禅記 その14
参禅記 その15
参禅記 その16
参禅記 その17
参禅記 その18
参禅記 その19
参禅記 その20
参禅記 その21
参禅記 その22
熊本城マラソンへの道その1
熊本城マラソンへの道その2
熊本城マラソンへの道その3
熊本城マラソンへの道その4
熊本城マラソンへの道その5
熊本城マラソンへの道その6
熊本城マラソンへの道 総括
60歳のクラス会
手を合わせる
誰にも負けぬ努力をする
人は理想に従って勝ち、欲望にしたがつて敗れる

337
340
342
344
347
349
351
353
355
356
358
360
362
364
366
368
370
375
378
380
382

生は奇なり 死は帰なり
 守破離
 通勤電車の中で
 上原良司陸軍大尉
 残り時間
 貧乏、病弱、無字歴
 常識を疑う
 五省
 習慣力
 人生指数
 盛和塾世界大会に参加して
 金持ち、時間持ち、健康持ち
 早起きのススメ
 「誠」について
 この秋は雨か嵐かしらねども、
 今日のために田草取るなりこだい

3 8 5
 3 8 8
 3 9 1
 3 9 3
 3 9 7
 4 0 3
 4 0 4
 4 0 7
 4 0 9
 4 1 1
 4 1 4
 4 1 9
 4 2 2
 4 2 2
 4 2 6
 4 2 8

リーダー論 その1
 リーダー論 その2
 自分らしくあり続けるためのコスト
 人物を語る 徳永健太郎氏
 梅の花の時期の想いで／こころより我に働く仕事あれ／
 自らの存在意義を問え
 私の壁
 自己投資
 同景異見
 人は自分に解ける問題しか出せない
 負けず嫌いの負け好き
 努力と根性
 空き家と唐様で書く三代目
 欲望
 生きていく美学
 器量

4 3 1
 4 3 6
 4 4 1
 4 4 4
 4 4 7
 4 5 2
 4 5 4
 4 5 7
 4 6 1
 4 6 4
 4 6 9
 4 7 2
 4 7 2
 4 7 6
 4 7 9
 4 8 2
 4 8 5

熊 本 地 震

実録 「熊本地震」
 熊本地震への対応
 熊本県の一中小企業経営者の復興構想私案メモ

4 9 0
 5 1 2
 5 2 1

未 来 へ

背伸びをし続ける会社
 語り遺す技術と経営
 想像力を発揮せよ
 備えよ常に
 変化することにこだわろう
 見果てぬ夢
 変化して進化
 理想を追え
 常に理想を求めて
 2019年から未来へ予感
 今後のプレシードへ

5 3 4
 5 3 8
 5 4 2
 5 4 5
 5 4 9
 5 5 3
 5 5 6
 5 5 8
 5 6 2
 5 6 5
 5 7 6



歴史

平成元年（1989年）11月1日、社長松本修一が株式会社プレシードを立ち上げた。
以来30年間、社員は100名を超える規模となり、
機械装置製造分野ではそこそこ名前が知られる存在となってきた。
30年間で振り返れば、薄氷を踏む思いでの経営や、リーマンショックによる
氷河期の経験など、楽しい出来事より苦しかった出来事の方が鮮明に思い出されてくる。
まさに苦節30年の歴史である。

この章では、社長松本修一がサラリーマン時代の経験を語り、
その経験がプレシード創業への思いにつながり、
会社の歴史に引き継がれていくことを語っている。
また、創業時のメンバーであった、現プレシードタイ社長の有田政司にも
30年のプレシードへの思いを語ってもらった。

小野上記

創業の思い

1989年11月1日に株式会社プレシードは発足した。技術的にも事業運営的にも、今振り返ればほとんど成功する要因がないような出発だった。

営業や財務など全く無知な社長が、ほとんど業界素人で30代の男3人と、20代前半の若者一人を引き連れての船出だった。見知らぬ土地で倉庫を借りて、全て見よう見真似で始まった。床のペンキ塗り、中古車選び、部屋の改装、基本工具や事務用品の選定と購入、銀行取引の開設、どれも真剣に考え行動した。かき集めた一千万円の資本金が全てだった。金が尽きる前に事業が立ち上がらなければ、全てが始まる前に終わってしまう。その緊張感は振り返ってみれば素晴らしかった。そのときに考え決意したことが、今もプレシードの基本理念となっている。

「何のために創業するのか？」金を貯める為ではなく、技術者が技術を一生懸命追いかければ未来が開ける。仕事で感動できる会社を造る。贅沢な生活などは考えなかった。

「運営方針は？」絶対に社会に迷惑をかけない、できれば社会に直接役に立つ企業となる。他人の利益を略奪しない、できれば譲る余裕を持つ。正義に反しない、出来

れば悪を糾す。働く者たちが自己責任のもと自由に企画立案し実行する。失敗の責任を取れる者たちが成功の報酬も受け取る。しかし、一人の失敗は仲間が支えあう。理想を追い求めることを心に誓った。

「何を目指すのか？」上場し、会社を社会的な存在にし、運営をオープンなものとする。上場利益で十分な開発資金を集め、本格的な技術開発企業に脱皮する。しかし、これは恥ずかしくて5年間は語れなかった。

「社長としての覚悟は？」絶対に社員より楽をしない。絶対に協力者に金銭的迷惑をかけない。生命保険で穴埋めする覚悟を持つ。同族会社としない。家族を経営に立ち入らせない。会社の金を自らの手で動かさない。絶対に朝の始業に遅れない。上場を果たすか又は「死の宣告」を受けるまで喫煙をやめる。多くの制約を作り墮落する自分の歯止めも作った。

思いが時として弱くなる心を奮い立たせた。思いっきりワクワクしながら製品開発や技術開発に取り組みたい。子供の頃、食事の声を掛けられ、食事のために中断するのが惜しくてたまらなかったような物作りの興奮を味わう日々を再現したい。まだ、創業の時に見た夢は実現していないけれど、私はこの夢を追う。プレシードという同

じ船に乗っていても、求めるものは違っていい。この組織を利用し、自己実現を図り、まわりの仲間にも好影響を与えるのであればそれでもいいと思う。経営を担う世代が代わり、追い求めるテーマが変わっても構わない。創業の思いを理解し、世に貢献できる企業であることを目指すのであれば。

当初より理想的な企業を目指しはしても作れるとは思っていないし、世の中が変わるのに、会社が変わらないということはある得ない。むしろ進化であれば、企業は絶えず変化し続けねばならない。凡庸な創業者の決めたことを後生大事に守り続けるものであってはならない。ただ、後継者達には思いだけを理解して欲しい。私が伝えたこの思いは、百年後の評価に耐えると信じている。若い頃一時、人生の目標を見失っていた私にとって、企業を育てるというのは、何よりも面白く生きがいとなっている。どんなに苦しくとも、目標や生きがいがある人生は幸せである。プレシードに勤務する人たちにも、働く中に何か生きがいを見つけて欲しいというのが私の願いであり目標でもある。お金を得る為に、苦しくても我慢して働くことも確かに尊いと思う。しかし、私はプレシードの中には仕事そのものが目標になり生きがいとなる様々な職種を作っていきたい。営業、総務、労務管理、財務管理、機械設計、電気設計、

ソフト設計、旋盤工、フライス工、SE、広報、購買、保全、もっともつとあっている。やりたいものが自らの生きがいとし、責任をとる覚悟で始めてくれるのである。働かされる職場ではなく、自らの意思で行動する者たちの集団でありたい。

創業後11年が経過しようとしている。いつまでも独裁者として君臨すべきではないのかもしれない。10年にして、たったここまでの責任は重い。10年の人生を共に費やしてしまった社員達がいるし、他の仕事で働いて支えてくれた妻もいるのだから。

2000年8月31日

「薄氷を履む思い」で経営20年

サラリーマンを辞めて20年になる。この間、俗に言う「枕を高くして寝る。」という思いをしたことがない。最近では外部の人に「順調に会社が成長して言って良いですね。」といわれることがある。勿論、お世辞半分であろうが、世間の会社の成長とこの大半はこんなものなのかもしれないと思う。

マスコミを賑わす急成長のベンチャーなどごく例外の企業だし、それも暫く静観していると、色々な問題や危機を内蔵していることがよくある。それにしても私にとって経営とは、まさにクレパスの上の薄氷の上を細心の注意を配りながら歩いている思いだ。私がよく口にする心境だが、「毎年春には来年も桜が観たいと思い、大晦日には来年も同じ除夜の鐘を聞きたいと思う。」というのが率直な経営の心境だ。私にとって日々が無事に過ぎていくのは言葉通り「在り難いこと」と肌身で感じる。だからこそ経営は日々の緊張感、充実感を楽しめる職でもある。

このような私の不安の気持ちとは裏腹に、外から見ると厚い氷の上を確実に歩いて行っているように見えるらしく、「運が良い」とか「やっている事業が流行の先端で

羨ましい」とか言われる。笑って聞き流しているが、私にとって経営は必死に足元の氷の厚いところを探し、さらにその先の方向に、薄いところや障害がないか情報を集めながら歩いていることである。たまにはそれでも一歩足を下ろすと氷にひびが入ったり、突然の振動で氷が前方で割れてしまっって引き返したりもする。引き返す氷も見つけられなくて途方にくれる瞬間もあった。遠く高いところを目指すために担いだ装備が重くなりすぎて、氷の薄い部分を歩くのに危険を感じることもあった。目指す方向に自信はあっても、ここ数日の食料が底を尽きかけ倒れてしまいそうなこともあった。本当の死を覚悟したこともいくたびあったが、そのときは笑顔で必死にそれを隠しとおした。歴史は語れても現状は語れない場合があるのが、経営の孤独の最たるところか。

薄氷の上を歩く孤独を支えてくれるのが、人の励ましと期待である。取引先、社員、家族が、自分が無事に歩いていくのを見つめながら期待しているのを感じるとき、疲労感や絶望感が吹っ飛び、次の一步に熱い思いをこめて力を踏み込む。時として逆に、支援してくれるはず、最も理解してくれているはずの人が、私の歩む氷にひびを入れたり、急に重い荷物を肩に投げ載せたり、或いは遠くに去っていくとき、絶

望と無気力に支配される。しかし、経営で立ち止まることは、その場の氷が割れて死の谷へ落ちることを意味する。今日も明日も何があるかと歩くのが経営だと、ド素人だった私もこの20年で骨身に沁み込んだ。何と言われようと、どんなに気力が失せたり体調を崩しても、今日歩むのは止められない。それを支えているのは、今となっては自分が実現したい理想と、自分の生き方への誇りや意地だけかもしれない。金や名誉のためであれば辞めてしまいかねないし、顧客や社員の支援も移ろいやすいが、経営が自分の人生の完結そのものと重なっていれば、達成かその前に死ぬかの選択しかない。完結した日には、きっとこのすばらしい人生に感謝するという気持ちに満たされると思う。

経営は自己実現にはもっともいい手段であり近道のような気がする。

2005年6月12日

サヨウナラ関西社員寮

2012年11月で関西の社員寮を閉鎖することになった。最後の住人であった熊本からの転勤者おじさんたち二人も、其々関西R&Dセンター近くの賃貸マンションに引っ越すことになった。あらゆるものには終わりが来るように始まりもあった。

関西社員寮は2011年8月、関西営業所の奈良からの移転先として始まった。関西営業所は京都、奈良を経てこの地に根を下ろした。我社の市場や顧客をカバーするには、「何処にも便利でどこにも不便な場所」と言っていた。確かに不便な地ではあるが、閑静な住宅街で一号線のすぐ近く、愛知から大阪までカバーする一号線や京滋バイパスなど交通の要所に立地していた。

元々社員寮を兼ねた営業所として開所したが、2012年に関西R&Dセンターにその機能を移して社員寮として使っていた。7LDKの豪邸で、一説では別荘として建てられたとも聞く。日本庭園付邸宅で、多い時で3名が居住し、私も含め関西出張者の宿泊所として使用していた。私が泊まる時は、近くの居酒屋などでよく酒を酌み交わした。

これもまた過去となり、何年かすれば話に出ることもなくなるので、どこかに書き残したいとこれを書いた。企業が継続する中で色々なものが始まつたり無くなつたり、消えて行つたりする。しかし、始まる時、誰かの夢や思いや信念で始まつている。たとえ消えてゆくのは時代の流れで仕方ないにしても、その思いや歴史は残していきたいと思う。これが消えていく事柄に対しての感謝と償いだ。

関西営業所（社員寮）よ、有難うございました。合掌

2012年11月8日

還暦断髪式報告

昨年11月、HP上で還暦を迎えたらBBQ大会会場で丸刈りにすると宣言して遂にその日がやってきた。計画では、私の義理の姪で現役理髪師に依頼していたにもかかわらず、BBQ大会を嵐で順延したため素人同士の刈っこになってしまったが、何とか首尾よく終わった。同行の士は30年の付き合いの我社内のN氏と、飛び入りの友達経営者K氏が加わつての厳粛なお笑い行事となった。私がN氏のエリ際刈りを思わず手が滑つて刈り込みすぎたときは、思わずゴメンナサイというより笑いがこみあげて止まらなかった（笑）。Nさんごめんなさい。

丸刈り完了後、当日は晴天の為、太陽を身近に感じることに新鮮さを感じた。丸坊主の頭に触ると心地いい感触、鏡が無く終わっていきなりの写真を見せて貰って全て観念した。この丸刈り頭で当面暮らすのに新鮮さとプラス効果を考え始めた。

自宅に帰って入浴洗髪すれば、シャンプーの量は1/3でも多すぎる泡立ちとなり、水で流せば殆ど乾いてしまう。実に経済的で、時間の短縮など無精者の私には有難い。当面ヘアクリームも必要ないようだ。但し、明日からはどこへ行くにもこの丸

刈り頭だ。知り合いの反応が楽しみでもある反面、勝手に何か不始末の反省と思われるのも怖い。初対面の人には人相悪く強面、硬派の人間と思われるのも気になるところだ。決して何かを反省しての所業ではないのはここで改めて伝えたい(笑)。

人生を60年も生きると、思っていなくてもその日はやって来るものだといくづく感じるこの頃だ。そうであればせめてこの機会に今までの生き方と今からを考える機会にしよう、この還暦を自分なりに見つめることとした。還暦断髪式を世間に広めたいくらいに有意義な所業だ。否が応でも昨日までと違った自分が鏡の中にいる。節目を過ぎた人生を考えることを忘れにくい一つのテクニクだ。きつと毎日鏡を見るたびに、暫くは「俺の人生は今からはどうあるべきか」を考えることになるだろう。

先週の誕生日を含む一週間、近くの禅寺で早朝4時半からの座禅に挑戦した。折角由緒ある禅寺があるので人生を見直す機会にと思つてのことだ。今後もしばらくは週一回程度は参禅を続けたいと思つている。

物事が変わる「きつかけ」というのは、待つていてもなかなか来るものではない。「きつかけ」は自ら考え求めて作るものだとい頃から思つている。今住んで居る所

も仕事も肩書も社会との交流も全て自らが求めたものであり、変えるということを考えてもおかしくないのだが、何もしなければこのままの延長で人生を走り終わるだろう。それを肯定するか否定するか、どちらにしても今まで60年も十分生きたが、これ以上生きることが許されるのなら、今の延長か別の生き方の要素を取り入れるかを一度固定観念から外れたところで自由に考えてみたいと思つている。

数日前にはある施設を訪問した。何か自分の今後の人生でかわりが出来ないかと模索するためだ。未だ結論は出していないが、この還暦という節目の機会に、これまでの私の人生の延長にはなかった要素を取り入れることを積極的に考えてみたい。

2013年4月14日

「新人の頃」その1

前にも書いたと思うが、私は大学を入学前に浪人し、4年で出るところを7年も懸かってしまった。さすがにその頃は、人より出遅れてグウタラな人間に堕ちていきそうな不安があった。就職したら兎に角今までの生き方を捨てて、暫くはがむしゃらに働いてみようと思ったのがサラリーマンのスタートだった。

私は1985年5月入社、すなわち中途採用だ。大学を出ることを先ずめざしていたから、卒業後は出てから考えるということで、先ず勉強して教師または公務員試験目指し、通ったら5年くらい一生懸命やりながらライフワークを探そうなどと甘い考えていた（その頃の競争率は20倍以上、とても通っただろうとは言い切れないが）。ゴールデンウィーク前の新聞求人欄に、平田機工が「海外市場開拓課社員募集」の広告を出しているのを見て応募した。

もし、その時、新聞を見なかったら、或は求人が技術や製造要員だったら、恐らく応募していなかったし、今の設備機械業界にいることはなかっただろう。当時は無名

の会社だったし、工場で機械を作る気も全くなかったから。人生とはたった新聞の小さな求人広告によってでさえ変わってしまう。今はこのような体験する人も少なくないかもしれないが。

採用試験は2回の面接のみで中途採用となった。社長面談でいろいろあったがここは省く。決して採用のお願いはしていない。

給与は入社後に総務が遣ってきて「社長が言った給与は、新卒の給与より高い。新卒給与にしてくれ」と言ってきた。配属も場末の部署“粉体機器部”で、全く新人教育もなく、就業規則の説明もなく、私の社会人生活が始まった。全く社会人教育など受けたことも無いので、そんなものと思ったが、これは後まで私に大きな弱みとなった。

颯爽としたホワイトカラー国際派ビジネスマンをイメージして門戸をたたいたのが、現場工場配属という。兎に角一度叩いた門だし、どうせ遅れた人生だし、3年間はとにかく走ってみようとすべて受け入れた。こうして私の悲惨な職業人生活が始まった。(笑)

専門外の会社に新人教育も受けずに配属され、中途なのに給与は新入社員給与、一年近くの新人教育班が運営されている中で、ただ一人私だけが現場から始まった。今のフリーターの人達の就職と同じで、一度も社会人教育を受けていないというのは、会社組織とは何か、という根本さえ知らないということ。挨拶の仕方、名刺交換の仕方、服装の考え方、社内報告や起案、経費の使い方、出張の注意事項、賞罰運用など一切教えられない不安は実体験している。

だからこそ自社では新人教育など大切にしたいと思う。

2015年7月6日

「新人の頃」その2

さて、化学系を卒業して機械系企業への就職でもあり、専門知識は大幅に欠落していた。機械工具も工作機械も知らなかった（旋盤は知っていたが、フライス盤とはどんなものか3、4年知らなかった）。同じ職場にいた機械系高校を卒業した年下先輩社員を先ず師匠とすることとした。

工業高校の教科書を貸してもらい勉強することから機械業界への挑戦が始まった。不安もあったが、内心では物理は自信過剰ともいえる絶対的な自信があった。世の中は物理と化学で全て解き明かすことが出来るから、自分に分らない筈はないという過信ともいえる信念が無知の自分を支えた。年下の師匠には敬語で話し礼を尽くすことから始まった。（ちなみに3年後には私の部下となり、その時点で敬語はなくなった。）

工場の現場で何の知識もない遅れた新人だ。先ず誰よりも体を動かして休まず働いて追いつこうと思って働いた。当初は「何も知らない大卒だ」と、現場のオッサンたちから馬鹿にされた。（後にこのオッサンたちも私の部下になった。でも年長者への礼を尽くし敬語で敬い復讐はしなかった（笑））

夏の工場現場は凄まじかったが、屋外の道路工事を見る度に、この仕事より恵まれている仕事と思つて特に不満はなかった。作業服は一日で肩付近に汗が乾いて白い塩が吹き出ていた。その頃の私にはそれは夏の風物詩で当たり前の事だったが、今思えば汗のかき過ぎ、水分の取りすぎもあった。兎に角、休憩時間に水を飲むのが楽しみだった。仕事中に水飲み用ウォータークーラーの横を通ることがあると、思わず駆け寄つて飲み始めると旨さで口が止まらない、今も忘れられない至福の時だった(笑)。本当に旨かった。ただの冷たい水だが、ずぶ濡れに汗かいている私には、最高に旨いものだったのは終生忘れない。

汗を一杯かいて帰る間際、汗が引くすがすがしさとけだるさの中で、大学時代に少しかぶれた郷土が生んだプロレタリアート作家徳永直の文学をよく思いだした。いま改めて本を紐解くと、「私たちはもつと労働について語らねばならない。労働の持つ内容は、現在語られている多くの恋愛小説よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないしは消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を役する物である」と。

今思えば若くて青い労働者人生の始まりだった(笑)。いつまで続くのか見えない苦

しさは本当に本当に肉体も精神もきつかった。今思えば大切な思い出だ(笑)。

2015年7月12日

「新人の頃」その3

初めて働く熊本の工場の夏は、ひ弱な私には強烈だった。夏場は水分の取り過ぎと疲労もあって、朝は全く食欲がなかった。入社時に3年間は絶対にやめないと自らに誓っていなければ辞めていたかもしれない。将来この仕事に夢を見出すなど全くできなかった。この職場で働いて、現場で鉄板に穴をあけたり溶接したりして力をつけて、工場長などという世界で一生を終えて満足するのか、広い世界に出ていく構図が描けるのか、辞めるまで自問する日々は続くことになるが、まずは今日の暑さで自分に言い聞かせた。「食えなけりや倒れるぞ」と。毎朝、ご飯と味噌汁の朝食は喉を通り難くても必ず食べた。

無理に食べていた夏の朝食も、3年もすれば当たり前の習慣となった。学生の頃、殆ど朝食を軽んじていたのが、この頃に毎日朝食をとる習慣がついた。今思えばこの頃のお蔭でその後に健康を保って働けているようにも思う。苦しい仕事で始まったが、3年もすると仕事自体には体も慣れて、問題つぶしをしながら納期に仕事を仕上げるのもそれなりに面白さも感じ始めた。苦しいことも継続すればその苦しみは次第

に薄れ、やがてそこに楽しささえ見つけ出すという大きな経験をした。人は慣れるという素晴らしい能力を持っている。耐えて我慢して活路が開けるという教訓は後の経営の下地にもなった。

仕事の面では、旧来のやり方や部品の規格変更などの業務改革が力試しとして面白くてたまらなかった。勿論、経験不足や無知ゆえの失敗もあった。現場のオッサンたちが鬼の首を取ったように歓び馬鹿にした。しかし、次第に実績を上げる度にその声も静かになっていった。

2015年7月19日

「新人の頃」その4

未だパソコンが仕事に導入されていない時代だったが、出始めのBASIC言語のパソコン（まだパーソナルコンピュータと呼んでいた時代）を給与の2倍出して購入したのを憶えている。新しい技術には飢えていた。九州の田舎工場の片隅で遅れていく不安があった。気前よく自前の金と時間を注ぎ込んだが、たちまち虜になった。これは人間の考え方を整理し法則さえつくれば間違いない仕事を早くやってくれる。面白いオモチャであり帰宅すると夜はパソコンに熱中した。

遊ぶうちに仕事に使うのが一番面白いと思うようになり、当時作っていたバケットコンベアの設計プログラム作りに熱中した。会社を持ち込んでシミュレーションして見せても理解を得られなかった。何回かやって見せているうちに、全社にパソコンを導入し始めようということになった。私の部署にもやっと当時の新型パソコンが届いた。松下電器のそのパソコンは流れの主流でもなく不満はあったが、早速実務に使うべくBASICプログラムを作ることに取り掛かった。

少なくともプログラム入力は、会社でやってよいれっきとした業務となり、早速設

計プログラムの完成に取り組んだ。練りに練っていた構想であり、短期間に作り上げ部品の規格化も進め、あっという間に間違いない設計が出来るようになり、大きな利益に貢献した。収入増はわずかだったが(笑)。

もしこのパソコンと学生時代に出会っていたら、きっとこのプログラム開発の道を選んだらうとその頃思ったが、ちょうど結婚もした時期にその切り替えは出来なかった。

後日談だが、私の退職後もそのソフトは使われ続けたが、計算法もプログラムも我流で作った為、やがて社内で発展させることも出来ず、設計の根本が忘れ去られていき、やがてその分野から撤退したと聴く。標準化で手に入れた削減時間を進化とその先の装置分野へ向かいなかったが、若い私からすれば変化が遅く、やがて職場を去ることとなる。

4年目の夏だったか、体重が3カ月で10kg以上落ち、歩くのがフワフワするくらい軽くなって、異常に喉が渴いて堪らない状態となって、少し不安持ちながら働いているうちに、工場の屋根直下の機械の上で目の前が真っ暗になってもうろうとなった。どうにも現場で歩けるような状態に戻れないので、早速し車を運転して帰った。その

時の状態は、「今、車が衝突したらドア開けで逃げ出せないかな」と思いながらの運転だったのを覚えている。数日後に分かったのが、甲状腺機能亢進症、酷くなると激やせ、異常発汗、せつちなどだが、今の体型から見れば想像できない(笑)。

2016年2月25日

「新人の頃」その5 出張

入社2、3週間たったころ、後のエピソードとなる出来事があった。工場事務所で自主的な新人研修として資料など読んだり、機械整備などしていた時、広島のプロトエンジニアリングの会社から電話が入って、直属のM次長が悩んで来た。

聴いてみると、テストプラントに納めて動いていたバケットコンベアがトラブルで回復できないとの連絡だが、出張させる人員がないとのこと。人選できずに出張させる返事が出来ないで苦慮していた。私はそれを聴いて「では僕に行かせてください。」と言った。どうせ機械は物理の法則で動いている。理屈に合って動いていたのだからそこに戻せばいいだけだ、と自信過剰で言ってしまった。

さすがにM次長はエツという顔をしたのは今でも覚えている。それでも適当な出張候補者がいない実情は変わらないので、私にこう言った。「仕方ないから行ってもらうが、修理できなくていい。ただし、出来なくても新入社員とは絶対言うな、入社3年くらいで言って帰ってくればいい」と。

さっそく生まれて初めての出張となった。出張の方法も分からず、相手先住所だけ

聞いて深夜の寝台車に乗ったが、広島下車は早い時刻だ。県外など個人的にはめったに行かない時代だった。乗り越さないように注意した。当時は携帯電話どころか、まだFAXも普及していない時代だ（確か電送写真という言葉があつて新聞記事などでは多用されていた）。長距離電話さえ高くて使えない時代だった。図面や資料はすべて持参しないと送ってもらうことさえできなかった。会社を出たらすべて自分が頼りの孤独な時代だ。

テレビドラマで見る出張には、作業服など持っていくシーンは見たことがなかった。で、着替えは持つて行ったが、作業服は持参しなかった（笑）。だれも教えてくれなかった。真夏の出張で現場では汗まみれ、おまけに運んでいたものが活性炭で、腕は直ぐに真っ黒となった。年長者の顧客技術者を指示し必要箇所のカバーを開けさせたり、二手に分かれて声かけあったりして作業し、無事機械は復旧した。大手プラントエンジニアリング会社を相手に、入社3週間でトラブル解決しお礼を言わせた。これが技術に関しての自信過剰の始まりか（笑）。

その後今日まで、星の数ほどの技術トラブルには巻き込まれたが、自信喪失だけにしたことがない。技術の女神は出来なと思った心には、ヒントさえ与えて呉れない

気がするのは、長い技術者生活からの教訓だ。技術者には我が身の無知を知る謙虚さは常に必要だが、ある時は自分への過剰なくらいの自信も必要だ。「俺がやらなきゃ誰が遣る」、「必ずやり遂げる」という過信が瀬戸際で時として我が身を支える。

汗と活性炭で汚れた腕や靴を整え、服を着替えてその日の寝台で帰ったような気がする。なぜなら宿泊の手順や宿の取り方も知らなかったから。その頃の初めての地域への出張は、駅に着いて、宿の広告看板見て或は電話帳で調べて電話するのが殆どだった。これが私の初めてのお使いならぬ初めての出張だ。

2015年8月3日

「新人の頃」その6 出張2

無事修理を終えて、会社としても面目たったようで、翌日出社するとM次長は大喜びだった。こいつは使えるということになり、入社3カ月目の8月には全国を動き回っていた。終わって会社に電話すると、次は〇〇県へ回ってくれ、が何度も続いたこともあった。夜遅く顧客の工場を出て、家もまばらな地域を歩きながら、「俺は一体ここどこでなにをしているんだろう。どこの会社所属だったろう。」という気にさえた。

人にとって自分の帰属意識はすごく大切なことだとその頃思った。誰のために働いている、どのようなチームの為に頑張っているのか自覚できないと、孤独感が疲労に変わる。だから私は新人諸君の帰属意識醸成はすごく気になる。

アメリカの海兵隊は、米軍では陸海空軍に比べると小さな組織だが、チームの団結と、一人一人が仲間を支え合い、どんなに窮地に陥っても裏切らないということを徹底的に教える。たとえ戦死しても、必ず遺体を回収し敬意をもって丁重な葬儀で迎えるという掟がある。だから4軍の中で最も強い集団ともいえる。

最近とは本社と離れたところに入社した社員諸君や、途中入社で会社の運営方針、歴史、「人を活かす」という経営理念への思いも語らず業務についてももらうこともある。そういったときに、その人たちにどうやって多くの仲間が支えていることを自覚させるか、経営は人を活かし能力を育てたいと思っているか、それを伝えることは経営として大変重要なことのように感じ、気になることも多い。私が新人だった頃と同じ思いをさせたくないという気持ちで焦ることも多い。

人は道具ではない、情が通じ合って個人の寄り合いがチームの力となり会社の力となる。孤独感に襲われないように常に配慮が必要だ。新人の時に感じた教訓であるのだが、活かせていないジレンマがある。

2015年7月20日

「新人の頃」その7 出張エピソード

会社に戻ると、新米社員として現場で作業服で汗にまみれる日々だが、出張すればネクタイ占めてカッコよく一人前で相手と話が出来る。恥もかくが、面白かった。確か秋頃に東京の晴海の展示場に出展しその説明員としてつくことになった。一週間近い出張だったが、洗濯機もないので、下着までランドリーサービスに依頼した。後にも先にもランドリーサービスにパンツと肌着と靴下を出したのはこれが最初で最後、何事も知らぬとは恥と金が避けられないものだ。

出張のエピソードは多い。川崎に夕方ついて修理を終えて駅前に戻りホテルを探した。何軒回っても空いてなく、ついに繁華街の素泊まり8000円の部屋に落ち着いた。当時の会社規定では一泊4000円まで、夜遅く寝るだけで何の責任もないのに4000円も無駄なカネ使うのが堪らなく悔しかった。当時の平田機工の出張手当が3000円だったのは鮮明に覚えている。その3000円が不足の時の補てんだし、公衆電話で長距離掛けるときの補てんだと総務に言われた。足るわけがない、短期で動く私の出張はいつも赤字だった。据え付けなど長期出張者が多い会社だったので、30

00円で2食付という郊外の工事宿が多かったようだが、私は同じ宿は一泊やせいぜい3泊の出張が多く、ビジネスホテルが多かった。

お化け屋敷のような宿に泊まったことがある。夜10時頃、ほぼ古びた民家という佇まいの旅館を訪ね、「一晩泊れますか?」、「はい、大丈夫ですよ」。ミシミシと古い階段を案内され二階に上る。布団は押し入れから出してくれ、寝るときに自分で敷いてくれとのこと。「その前に食事と風呂をお願いします。ビールも一本ください。」といて裸電球の小さな浴室に降りた。

風呂の横の台所で「爺さん、あんたのビール一本残ってたでしょ?」というのが聴こえた。風呂から出て台所に行くとき食事とビールが置いてある。近くに居るおじいさんに申し訳ない気持ちでビールと食事をとった。狭い階段をミシミシ軋ませて登り床に就いた。ここはほんとに旅館なのだろうか。なんでこんなところに泊まることになるんだ、と仕事を恨んだ。翌日、若かった私は苦情も言えずお礼を言っただけで宿を後にしたが、料金は一丁前の料金だった。

今回で「新人の頃」を終わるが、思い出せば新人の頃は無知であったが、新鮮で張り切っている人間というのは失敗以上に成果も出せる。「初心忘るべからず」という

程に初心は忘れがちだ。常に新人の挑戦者魂を一生忘れずに持ち続けたものだ。新人とは二度と帰ってこない素晴らしい時代だと思う。

今思えば恥ずかしいことも多かった。いろいろ気づいたこともあれば、ずっと後に気づいたこともある。今でも覚えてる上司に言われたこと。

・「松本君、もう少し髪はさっぱり刈り上げたらどうだ。」：学生上がりの私には十分サッパリしてるつもりだったが、仕方ない思いで散髪に行った。

・入社2、3年で仕事に慣れてきたころ、賞与の自己査定に「平均支給の200%以上」と書いた。勿論、それより遥かに低く、上司は支給後に申し訳として「君の賞与は充分周りより多いんだ」と言った。

・日頃ネクタイをしていなかった私に、「他の者はともかく君だけでも毎日ネクタイをつけるべきだ」と。

今思えば、どれも世間知らずで気を遣わせて申し訳ない思いだ。色々と言いくいことを言わせてしまった。言う側は、迷いに迷った挙句言うのが部下を持つようになってよくわかる。もう故人となってしまった上司にお詫びと感謝をしたい。

2015年7月20日

会社の老化

会社は生き物ではないが、法人というように人間の様な生き物であると思う事も多い。その一つが老化だ。単なる組織である会社の老化をどの様な時に感じるか。それは社長の老化とリンクしている時に感じるが多い。

30代で創業して間もない頃、地元の経営者の社長室に招かれることも多かったが、その時によく感じたことだ。古い資料の山に古い事務服着た総務のおばさんに案内され、タバコのヤニで茶色くなった壁の社長室に通される。そこに髪が薄くなった白髪の社長が破れかかったソファの応接セットで緩慢な動作で出迎える。その様なイメージの古い会社：我が社がそのようになってはいないかと不安を持ちながら生きて来た。そして今、周りを見回すと、環境も鏡の自分もそうではないかと不安を感じる。

サミュエル・ウルマンの「青春」に謳うように、「人は歳と共に老いるのではない理想を失うときに老いが来る」とは言いながら、それを自身の言い訳にしてはならない。明らかに体のあちこちに現れている老化が行動の老化をもたしている。若い頃のペースで無理をすれば疲労が抜けにくいし、ひよっとすれば判断力も鈍ってきて

いるのかもしれない。

トップは大きな明るい声と俊敏な動作で組織を引っ張らねばならないというのが私の持論だ。感度が落ちた社長と共に会社が老化してはならない。常に気力、知力、体力が伴う判断決断力が社長には求められる。技術や時代の早い動きを先駆けて素早く捉え、その対応策を先手打って生きて行い、というと思いPRECEEDと名付けた。果たして今プレシードしていると言えるか自問することが多い。

薄汚れた会社を古い資料の山と共に動作緩慢社長が次期社長に委譲すれば、時期のスタートの原点がそこになってはしまわないかと不安になる。20年以上朝から掃除をしてきたが、私にとってリーダーが行う掃除とは、それが最も必要な場所を探し、汗を流し行くものでなくてはならない。まして社長が中途半端な掃除を行ってはならない。次期社長は、それを又はそれに代わる優れたものをもってスタートを継承してくれるだろうか……。ふとそんなことを考える日々が多いこの頃だ。

2015年11月19日

老化

紅顔の少年だった私も今は前期高齢者の入り口にいる。若い頃人生が退屈であつたという間に白髪の老人にならないかなと、罰当たりなことを思っていた時期もある。お蔭様で退屈しない人生を送ってきた。いや人より波乱万丈だったかもしれない。高杉晋作の「面白きことも無き世をおもしろく」、啄木の「こころよく我に働く仕事あれ、それを仕遂げて死なんと思ふ」に憧れた。未だ道半ばで在り、何も成し遂げたとは思わないうちに既に人生の夕暮れに來てしまった。老化を楽しむほどの心境には達していないが、老化を受け入れるのを急がねばならない。

社長業に就いて30年近くが経とうとしている。ほとんどの会合へ出かけると、1、2を競う若手社長だったのが、今ではともすれば最年長経営者という時さえある。改めて自分ながら歳を重ねてしまったという思いが募る。

30代の頃の私は明らかに知識も経験も無く、失敗や無駄が多い経営者だった。「安打数が勝負だ。きつくてもたくさんバッターボックスに立てばいい」と言い続け、色々なことに挑戦してきた。勿論失敗は多かった。しかし、あの頃の自分の行動には

スピード感と明るさ、積極性があつたように思う。朝早く出社し、トイレ掃除から一日を始め、休み少なく夜遅くまで仕事した。夜10時に家に帰れば、早過ぎてどうかしたのかと問われたこともあつた。週休2日やゆとりの時代などと言われ始めた時代の中で、歩調を合わせるように私も老化したのかもしれない。

今、自分の行動を客観的に見ようと思えば、明らかに老人のそれになつてしまつた。部屋も服装もすっかり老人らしくなつてゐる。これは実害なければ良しとしても、朝早く出社して汗を流してトイレ掃除をして、ラジオ体操ではジャンプも柔軟性も負けない運動をしようと突つ張つて生きていたのはどうなつただろうか。今はそれらを全て失つてしまつたのをラジオ体操のジャンプで歴然と事実を見せつけられる。恐らく思考のスピードも疲労しない頭脳も失いかけてゐると思う。

「個人の老化に会社を巻き込みたくない。タバコのヤニの染みついた社長室に座つてゐる老いた社長になりたくない。」と若い頃より言つてきた。実際その様な社長室を若い頃に多く訪問したこともある。老化した社長を見てゐる次世代経営幹部は、社長の若い頃を知らない。老人の最大の不幸は、その若い頃を若者が見たことが無いという事だと思ふことがよくある。芸能人の華やかな時代を知るファンが老人役の端役

となつたスターを見るとときこれが老化だと思ふことがある。

芸能人は例え90歳でも老人を味としてその役に生きて活路を見いだせようが、老化した社長を手本として事業継承がスタートすれば、間違いなく破局へ向かう。もう遅いかもしれないが、何としても元氣な社長像を残して事業継承せねばならないと思う。白髪頭で顔や手にシミが増えた老人が私の会社の社長であつてはならないと40代の頃に自分に誓つていたが、愈々その自分との約束の履行をせねばならない時期がカウントダウンになつてきた。いや、とうに超えてしまつてゐるのは認めよう。せめて歩く速さだけは負けないうちにバトンタッチしたい。これも年寄りの悪あがきにか見えないのかもしれないが。

2017年8月7日

「コンピューターとの付き合い方」その1

確か就職した年の1981年の夏頃だったろうか、人に勧められて東芝の「パソコンA」を買った。今でも自宅倉庫に眠っている。当時パーソナルコンピューターがパソコンと呼ばれ始め出回り始めていたころだ。先行して発売されていたNECのPC-8001、シャープのMZ-80への挑戦機として東芝が世に出したZ-80AをCPUとして搭載のパソコンだったように覚えている。メモリーは64KBだった。価格は20数万円、当時の私の給与の2カ月分位の大きな個人投資だった。

この大金をはたいて買ったマシンで夜な夜なBASICプログラムを勉強し、簡単な計算ゲームなど作って、カセットテープに保存した。まだフロッピーディスクもなかったころだ。

それまでの私のコンピューターとの関わりは、大学実験で、フォートラン言語で電算セクターのコンピュータを少し使った程度。今のパソコンの能力の数千分の一、いや恐らく数百万分の一以下程度だが、当時数億円の施設で靴を履き替え白衣で使わねばなかった。大学を出る頃にはマイコンボードと出会い、アセンブラを少し遊んだ程度だった。

さて、話を私の宝であり遊び道具「パソコンA」に戻そう。嬉しくて暫くBASICで遊んだ記憶がある。人間の思考モデルをこのプログラムのように整理して考えれば無駄なく考えを整理できると妙に感心した思い出がある。

ゲーム以外に実用で何かテーマないかと考えた。そうこうするうちにかねてから考えていたバケットコンベアの設計をパソコンでしたくなった。家に帰ると夜な夜な、或は休日プログラムに熱中した。

当時のプログラムはラジカセのテープに保存した。毎回使うたびにパソコンにアナログ音に返還したテープから書き込み、終わるときにはカセットテープに書き込んだ。今思えば一行づつプログラムを書く所作は実に面倒だが夢中になった。思うように考えを論理的に整理しプログラムに変える作業は実に面白かった。人生で最大に一つの事に熱中した瞬間かもしれない。麻雀を憶えての頃よりその面白さに虜になってしまった。就職前にパソコンと出会っていたらきっとプログラマーの道を選んだだろうと本気で思った。ビル・ゲイツに成れただろうか(笑)。

人間の考えを整理し、漏れないような論理に組み上げプログラムにすれば、あつという間に間違いない結果が出る。考えに漏れがあれば思わぬ結果がアウトプットされてくる。これはその後の技術開発や経営の予測にも習い性となった。期待する結果だけでなく、油断すれば全く予測しなかった情けない結果が出てくるというのは、プログラムで遊ぶうちに身についたものかもしれない。

何とか最新8ビットパソコン(笑)で数値算出だけは出来るようになって会社を持ち込み、当時の上司にその正確さ速さをアピールした。勿論、プリンターもなかったし、画面に出てくる数字とカタカナ、アルファベットだけがその全てだったが、設計が苦勞している部品の選定と数量を算出して見せて、何とか素晴らしさを伝えた。

2017年5月8日

コンピューターとの付き合い方 その2

1982、3年頃だったろうか定かではないが、個人のパソコンで遊びに興じていた丁度その頃、社内にパソコンを導入する時期となって、早速パソニックの16ビット事務用パソコンを導入して貰った。まだ「一太郎」のような自動変換ソフトもない頃の定型の漢字と文字しか書けないプリンターではあったが、一式の導入となった。連続用紙だったが、プリンターで計算結果が漢字交じりで書き出せるという事が嬉しくてたまらなかった。

早速、本格的にそのパソコン用のBASICプログラムを組み直し、搬送能力計算シミュレーション、必要バケット容量、所用動力、チェーン張力計算と長さ、バケット数、フレームやカバー等の規格部品リスト、購入部品リスト作成、等々、今まで2日以上かかっていたものが一瞬で間違いないDATAが得られるようになった。

自分でも極めて満足度が高い成果を得た。何しろDATA設計が終われば、後は規格図面集に数量を書き入れれば30分で終わる。早く間違いない設計終了だから実に小気味よかった。有頂天になったが、その評価は私の所属する小さな部署内から出ること

はなかった。しかし、部品の標準化とこの設計プログラムで大きな利益貢献をしたと今でも確信している。

その後、その数値CADともいえるコンベア設計支援ソフトは順調に活用され、暫くして私が会社を辞めることになった時も、その設計には何も困らなくなっていた。しかし、予想外のことが起きたと、後にうわさに聞いた。ずっとそのプログラムに頼って設計をしていたので、使う設計者がそのプログラムの意味が次第に分からなくなり、プログラム変更や発展進化が困難になっていったと聞いた。

私はプログラムソフトの使い方は教えていたが、演算の内容説明は全く遺っていないかった。BASICプログラムが理解できて、尚且つバケットコンベアの設計計算式を理解できている人間は何処にもいなかった。恐らく世の中にもいなかった。

意味も分からないでプログラムを使い続ける恐ろしさは今では我社のみならず多くの職場で起きているような気がする。コンピュータを使うということが人の作ったアプリケーションソフトを使うという事に他ならないのが殆どだ。ワードやエクセルは未だ考え方は使用者の物だが、構造解析やシミュレーションソフトやCAD、経理ソフト、購買ソフト等々、その実際のプログラムの作りは開発者任せであり、結果は

ソフトが教える立場だ。その草分け的出来事だったのかもしれない。

この出来事は私の退職後十年位の出来事だったかもしれないが、その影響かどうか、会社ではそのコンベアから撤退することになった。今はソフトの管理を怠れば当たり前前に起きうる出来事だ。

元々、同じような仕事の繰り返し設計でコンベアを進化させる時間が取れないからコンピュータ化したものだったが、逆に私がその業務の発展を止めてしまったのかもしれない。例えて言えば、手作りの饅頭は百年作って売り続けることは難しくないが、一度完全自動化してしまうと、やがてその設備がなければ饅頭が作れなくなってしまうようなものだ。人間の進化に潜む弱点を我々は常に配慮し続けなければならぬ事例だ。

さて、ここまでが私がプログラマーにはなり損ね、初期のコンピュータを駆使した自慢話だったが、これからは私がコンピュータにどんどん取り残されることになっていく。

2017年5月14日

「コンピューターとの思い出」その3

1986年、会社を辞めて友と二人で新会社を創業することとなった。早速パソコンを買うこととなった。NECの9801シリーズだったと思う。そこで初めて初期のワープロソフト「一太郎」と出会う。ローマ字で文章を入力すれば候補の漢字に返還される。今思っても画期的なワープロソフトだった。

当時はワープロという80万円程度の専用機が普及していて、パソコンのソフトでは個人ユースの領域に留まると言われていたが、「一太郎」の進化で日本語ワープロはパソコンソフトの時代となっていた。

暫くすると、日立や沖電気などのワープロ専用機は消えて行った。このソフトの出現は、手書き文章の社会だった一般社会へのパソコン普及の先駆けとなり、画期的な出来事だった。私のような悪筆の極みの文字を書く者には、正に良き時代の到来だった。余談だが、私は子供の頃に友達が行くお稽古事であるソロバンと習字の塾に行かせてもらえなかった。どちらかに通っている友達が多く、共通の世界が欲しかったので、ある時父に塾に行きたいとねだったことがある。その時の父の返事を今も忘れない。

「商人の子供でもないし、商人に成らんでよか」という一言で私の希望は絶たれた。

私はそれ以来負け惜しみで、高校時代には「俺が仕事するときには電子計算機が普及するし、文字は高速タイプライターが普及する」と言っていた。何と10年でその時代が遣って来たのを不思議に感じていた。

話を戻そう。私もその頃まではパソコンの進化にずっと関っていききたいと思っていた。開発者とまではいかなくても、ソフトの開発に時代が変わっていくことの無限の可能性を感じていた。それでも今のように普通の会社からオフコンが消え、すべてがパソコンに入れかわるとは思わなかった。

未だパソコン通信がモデムカプラーでやっと普及し始めたころだった。最先端であるFAX以上の遠隔情報伝達方法はまだ身近には存在しなかったが、どんどん進化するパソコンにゾクゾクする興奮と大きな夢を感じた。

しかし、冷静で客観的に時代と自分を見れば、脱サラして何か仕事を立ち上げて食べていかねばならないその時の状況で、パソコンやソフトに夢中になっている時間はもう自分の人生の中では取れないだろうと判断した。パソコンが上手くなるより経営

に専念すべしと思った。

大好きだったパソコンに別れを告げねばならないと思い、当時新会社設立時に社員として引き込んだ現PTI有田社長に、当時のパソコンを教えながら「俺は今、お前にパソコンを教えているが、将来は逆に俺が教わる立場になるだろう。残念ながらパソコンに時間をつぎ込む余裕は俺には戻ってこないだろう。どの様なことが出来るかだけは、今後も知って行きたい。宜しく。」と言ったのをハッキリ覚えている。寂しいパソコンとの別れだった。

今、正にその予言が実現し、全くのパソコン音痴となってしまうた自分がいる。有田社長はパソコンにのめり込んでいった。今は彼の足元にも及ばないだろう。

MS-DOSが普及し始める頃から全く私の世界からパソコンは遠ざかって行った。しかし、やがていずれコンピュータは論理的な思考と目的さえしつかり持っている人間なら、誰にでも意思疎通が簡単にできて、アプリケーションを使う悩ましさから解放されるとも思っている。今は未だ過渡期の道具に過ぎない、今憶えても3年遠ざかればまた覚えることが溢れるのが現在のコンピュータだが、既にパソコンではなく

携帯電話とそのアプリで世界中とやりとりしながら運用する時代となっている。もう私がパソコンと出会ってから何世代も更新されて進化している。今からの時代を少し予測してみよう。

2017年5月21日

「コンピューターとの付き合い」その4

2007年初頭にiPhoneがステイプ・ジョブスによってアメリカで発表されたとき、殆どの人は携帯電話の物理キーボードがソフトキーボードになったくらいを意識しなかった。メールが広く開ける位の意識は在っただろうが、携帯電話が今までと全く変わってしまった、生活の中での存在感が変わるという予測が出来た人がどのくらいいただろうか。パソコンと携帯は全く別の使用領域だった。パソコンの内容が携帯電話画面上で開けるようになることを期待していなかった。そういう習慣が無かったから。

2008年6月日本でもiPhone3Gが発売された。噂ではそのうちパソコンが要らなくなるなども出始めたが、殆どの人は携帯電話の延長線上でしか考えていなかった。いや、今でもスマホを携帯電話での範疇でしか考えていない人は多い。しかし、この10年を振り返れば、スマホが全く新しい時代を拓き始めたのは誰にでもわかる。若者はスマホで大学のレポートを書く時代になって、キーボードをハイテクイメージで使ってきた我々世代には、それがもはや時代遅れにさえなりつつあるのを知らない

人も多い。

アプリというソフトをほぼタダで手に入れて、生活で多くの情報を手に入れるのが実に簡単になった。20年前にはエンサイクロペディアとかいう百科事典CDを購入して、たった一枚のCD盤で百科事典を手にした感動を覚えているが、今ではその数万倍の情報をポケットに入れたスマホで探し出すことが出来るようになった。

知識はそのことや時代を知っていなくても、その様な考え方やジャンルが有ることを知っていれば探せるようになった。今後は知りたいことを考えていることをスマホに相談すれば、それに役立ちそうな情報やアイデアを提供してくれるようになり、何を食べたいかを語らなくても、今日食べたいような食事や行きたくなるレストランを案内し、予約までしてくれるのが当たり前になっていくのだろう。確かに便利な時代になっていくのだろうが、悩んだり失敗することがあった今の時代は贅沢な時代と振り返るようになるのかもしれない。

私は子供の頃、冒険や探検が大好きだった。見知らぬ土地へ出かけ、本で見た絵や白黒写真の世界を実際に見て歩いてワクワクして見るのが夢だった。今では出かける

前にあらゆる動画が用意されているし、エベレストの登頂さえ4K動画で生中継できるようになった。ポケットのスマホを開けばアプリに溢れている。アプリが色々なことを手助けしてくれるが、その仕組みさえ私には分からなくなった。原理はアセンブラとそれを人間的に言語化したBASLICのような論理ソフトの積み上げで出来ていると思うのだが、最早何が出来て何が出来ないのかさえ分からない。道理が分からないことに不安と不満を感じながらも活用している。今後ディープラーニングという自己進化していくプログラムは、今までのソフトの領域を超え個性や自我を持つ日が来るかもしれない。

現代社会には個人情報盗まれ、あつという間に世界中に拡散する危険さえある。全ての仕組みが自然界のように環境適合の試練の中で自然淘汰された今までの社会に安心感を持つのは私だけだろうか。人工的にツギハギで未完成なソフトが次々と積み上げられていくコンピュータ社会も、ある日突然自然界の新型インフルエンザと同じように、新型ウィールスによって壊滅的な打撃を被るかもしれない。それが人の作ったウィールスソフトであっても諦めがつかないが、やがてそれはディープラーニ

ングが進化して人間を不要に感じたネットワークのコンピュータが人を排除するために産みだすかもしれない。SFとしての世界であればいいのだが。

今は人不足の時代と言われる時代であるが、やがてネットワークコンピュータが情報も物も動かす時代となった時、多くの人が不要になり、人間がコンピュータにとって家で飼われる猫のような存在となり、さらには存在意義も無くなるのではなからうか。人間という生物が生きて行く為には、動植物の育成と分解を繰り返しねばならないことが、コンピュータにとって無価値であり無駄であると判断された時、人間はデリートされ、人間という有機物繁栄の時代が終わるかもしれない。

横道にそれで少しオーバーで杞憂であったかもしれないが、人が生きるのは感動を追いつめる為と定義する私にとって、今後の未知と出会っての感動は何処へ求めればいいのかと思うてしまう。

子供の頃、明日の天気予報は当たらなかった時代であったし不便であったが、面白くもあったと最近思う。昔のてるてる坊主を笑う人も、何故明日の天気が分かるのかを知る人は殆どいない。

ピラミッドもイースター島もアフリカの奥地も遙か彼方であり、僅かな写真でしか知らない未知の領域であったし、子供の私には夢いっぱいの世界に感じたが、いまは30分も経ずして動画も写真も今日の物が手に入るだろう。

分からなかったことがすぐに分かるようになった時代は、不思議なことになぜ分かるのが分からない上に成り立ってもいる。確かに便利になったが、分からない、面倒くさい、知らないという事は人間らしい贅沢さであったという時代もやがてやってくるかもしれない。

世界中の知識も景色も手元で手に入れることが出来て、すでに未来でさえコンピュータで見え始めて来た時代に、もうこの辺でコンピュータの進化は終りにさせたいとも思うのだが……。社会がこの道を進む以上は、先端にいて観察と意見を述べる存在でありたいとも思う。

この私のように、コンピュータから見れば危険な思想を書いた人間はコンピュータによってネットワーク検索で読み取られて、人もデータも抹殺される時代がやがて来るかもしれない(笑)。怖いSFの世界が今そこまで来ていると思う私の想いは杞憂で在りたいものだ。

関心あるうがなからうが、社会の変化は加速度的に身の回りで動いているのは間違いない。変化が次の変化を連鎖して積み上げるのがネットワーク時代の変化だ。人が付いて行けないと言いだめた時がシンギュラリティとなり、コンピュータ支配のが始まると思っている。

このような時代をどう捉え、どう対応していくかの議論と行動をする集団を社内に限らず育てたい。

2017年5月28日

新工場立ち上げに当たって

今週頃からいよいよ新工場の運用が始まる。快適で便利になると安易に飲んでばかりもられない。慎重に今後の運用法を検討して実行しないと、広くなったことにより歩く距離が増え、探す範囲が広がり、生産性の低下につながることもなりかねない。空調費の増大、清掃メンテナンス経費の増大にもつながる。我々は広くなった工場から何をメリットとして享受しようとしているのか。それを明確にして、最大限の効果をを得る為の設計図が必要となる。現状からの発想や、現状改善にとどまらず、プレシードにとつての理想工場を描きあげそれに近づける運営を図らねばならない。理想工場とは最低のコストで最大の付加価値を生み出す仕組みを持つことである。働く一人一人が一分間にいくらの付加価値を生み出しているかが製造業の比較基準である。一人当たり50円／分の付加価値を生む工場よりも100円／分の高付加価値を生み出す工場のほうが遥かに世の中の為になっているし、そこで働く人たちは高収入で早く帰って勉強や家庭団欒など自由に使える時間が増える。研修や福利厚生や新たな設備にも贅沢に金を投入できる。それが次の生産性の向上を生む。そういう製造現場を創るのが本当の仕事である。日々の作業を通じてそのような生産性の高い工場をつくってみようではないか。

我々が創るものは常に変わっていく。そこには仕事が不定形になりやすい宿命があるように見えるが、実は多くの仕事は物の調達方法や受け渡し方並べ方、検査の仕方など標準化できることがほとんどである。しかし、実情は忙しさと創る物が変わるのいいことに作業が標準化されていないのではないだろうか。標準化された手法の組み合わせで特殊な装置を創るのではあるが、臨機応変ばかりで仕事を構成するといわゆる「クラブ活動的工場」になってしまい、生産性や利益を捨て、技術の蓄積さえも放棄することになってしまう。

新しい工場の立ち上げに当たって、プレシードにとつての理想工場を考え運営することに挑戦しようではないか。

*この工場を運用していくことで毎月60万円以上の経費が増加する。

2000年9月4日

「技術集団F A未来プロジェクトG」誕生

熊本県内でF A（ファクトリーオートメーション）装置開発を業務とする五社が技術集団グループを結成した。メンバーは熊本アイディエム、クラフテックテラシステム、セイブ、プレシードの五社で何れも県内でF A装置開発のメーカーとして創業し10年以上経過している。

一昨年末、県内一円でメンバー企業の一社が「創業者が経営し大企業系列に属さないF A装置開発に取り組むメーカー」に広く呼びかけた。その結果上記の五社が集まり、以後一年半に亘り月一回以上の会合を重ねてきた。F A業界は比較的歴史も浅く、今までほとんどお互いの企業が知り合い合い協力するような組織がなかった。その為、各企業がまったく単独で未経験の開発に取り組み、多くの失敗も重ねながら経験と実績を積んできた。今回のグループ設立は企業単独の実績を複数の企業で共有し、開発スピードの加速、コスト削減を図ると共に、今まで一社では受注出来なかった大型プロジェクトの受注を目指すことを主な目的とする。今後も毎月会合を重ねながら企業経営、社員教育、技術相談、営業協力、業界の情報交換など相互に支援し合うグループを目指す。

F A装置業界は半導体や電子部品など急激な技術開発が進む中で常に最先端の技術を装置に反映し続けていくことが求められる。そのような背景の中、一社で組織が肥大化して時代の動きへの対応力を失うことを恐れると同時に、常に開発投資を継続していくことも要求されている状況にある。小さな企業の機動力と、大きな組織の瞬時的処理能力、事業範囲の大きさを併せ持ちながら個々に責任を持つ企業集団をイメージしている。急激なモノ作り環境の変化が進む中、企業運営には様々なテーマがあり、一社で全てに対応していくには多くの投資や労力が必要となる。五社の企業がそれぞれの強み、経験をお互いに寄せ合うことで大企業に勝る技術開発力と機動力を運営していくことができる。五社を合わせれば過去数百件のF A装置開発、納入の実績を持つ。これらの実績を活かす事で今後ますます加速することが予測される技術開発と受注競争、国内から海外へと拡大する市場への対応などの時代要求に対応していく。

運営は参加企業全てが運営の主体者としての意識を持ち続ける為に、運営責任者を輪番制で行っている。この7月「技術集団 F A未来プロジェクトグループ」の構想を伝える為のパンフレットも出来上がり、本格的な対外的な活動を開始した。

会合を重ねる中で、共同営業、共同購買、共同開発、社員教育、組合設立など様々なテーマが取り上げ検討されてきた。今後は検討項目として、県内の多くの企業や企業グループと連携しながら、半導体以外にもバイオ、農業、医療などの自動化のテーマや開発後の生産体制造りのテーマにも積極的に取り組み、共に考え議論しあいながら運営をますます活性化させていく考えである。

2002年7月19日

大嵐の氷河期に突入した

今、アメリカのサブプライムローンが引き金となって世界中の経済が破綻直前の危機にある。世界同時である以上、打開策を見つけるのが極めて厳しい状況にある。すべてをサブプライムローンのせいにするような世論が多いが、歴史的流れの中では、原因は世の中がグローバル化、通信・物流の高速・低コスト化、生産能力の過剰対応など多くの大変革が起きているからにはかならない。人類が火を使うことを始め、農耕、産業革命以来の大変革の流れの真ただ中にある。大きな犠牲の後に新たな企業が生まれてくる。

あまり体力も無い当社であるが、何としても生き残る力を身に着け、知恵を駆使しなければならない。過去のやり方や言い訳などどうでもいい、結果を出せる企業であり人でなければ、存在価値を厳しく問われる時代がくる。一刻も早くその対応ができた企業が生き残る。

考えてもらいたい、存在を求められる人・会社である為何をすればいいかを。私の頭の中はそれで一杯だ。変えることが出来ない過去はどうでもいい、明日から存在意

義を示せる会社であることを顧客や社会に示さねばならない。

経営者の集まりがある度に周辺では「仕事が半減した」、「いや3割になった」、「2割しかない」、「○○が危ない」など、日増しに深刻化した話になっている。急激な落ち込みと、減って回復の見込みが誰にも見えないのが今回の不況の特徴だ。

幸いなことに、プレシードは今繁忙を極めている。料理する材料が全くない時代というのに恵まれたことと言えるが、内情は赤字プロジェクトの山になっている。特に大きなプロジェクトが赤字になると大きな痛手となる。1千万円の赤字は社員一人当たり20万円の利益が消滅したことになる。たった一件のPJで3千万円の赤字を起こすと、社員全員の年間賞与予算が消滅する。改めて数字の厳しさを思い直して貰いたい。

過ぎ去ったことは変えられないが、未だ間に合うことにコスト削減を第一に取り組んでもらいたい。一人が2時間かけて図面修正すれば100万円以上コストダウンが可能な時もある。営業の1日の交渉で数百万円の追加予算獲得もある。材料をSUSからユニクロメッキと僅か数文字書き換えるだけで十数万円コスト削減できることも多い。機械加工部品を製缶加工品へ、高価な直動から低下なレール等、コストダウンは枚挙にいとまがない。またこの努力を本気でできた会社のみが生き残ると思っ

ている。

昨日までのやり方でも赤字だった体質では、厳しい明日から更に生き続けることなど出来ない。いま、手をつける材料がある間に利益を出せる体質に改善せねばやがて材料さえなくなる。それはもう来月始まるかもしれない。

安心して貰いたい。どんな状況になっても会社の為に努力を惜しまない社員を見捨てるようなことは絶対にしない。しかし、世間では大手企業まで従業員解雇の嵐が吹きまくっている。ほとんどの企業が重い荷物は載せておけない船になってきている。我が社も過去の赤字で船底に穴があいた会社であることは間違いない。これからは一人一人にチームへの貢献度を問わざるを得ない。必死で船を修理し嵐を避けながら好天の日まで頑張ろう。

2008年11月6日

創業20周年を迎えて

平成元年11月1日に株式会社プレシードを操業して今日で満20周年を迎えました。会社は10年続けば一人前といわれる中、20年を迎え、人であれば成人をさせることができたのは、創業者として実に感慨深いものがあります。実に多くの方々との出会い、共に考え共に苦労し、支えられてきました。幾多の困難とも出会いました。とてもこれを越えることはできないのではないかと絶望に支配されそうなことも幾度となくありました。しかし、思いを強く持ち、決して諦めなければ道は開けていくことを体験してきました。これが今、私が手に入れた最大の財産かもしれません。

創業の時代からよく口にした言葉に「常に夢を持つこと。志を捨てず難きに就く。」という日本ビクター創業者高柳健次郎氏の言葉がありました。今でもこの言葉は心に刻んで、事あるごとに思い出して気持ちを新たにしています。この言葉がなかったら、今の私もプレシードもなかったかもしれない位に大切な言葉です。創業のころ、氏は存命でした。いつの日かお会いできたらと思っている内に、プレシード創業の翌年に他界され、叶わぬ夢となりました。

一緒に仕事した人、講演会、テレビや本、新聞で出会った人たちから多くを学び、反省もしながら弱い自分を今まで引っ張ってきました。今はただ感謝でいっぱいです。今も困難の中にいるのは間違いありませんが、過去の体験と実績、会社の内外にいる多くのプレシード支援者の力で次の時代への道を開いていけるものと確信しています。

ここで20年を節目に昔を語り残しておこうと思います。常日頃、変えられない過去を振り返ることを是として生きてきませんでした。過去の栄光や思い出を語るつもりはありませんが、時代背景や経緯を語り書き残しておく必要もあるかと思ひ少し付き合ってみてください。

先ず創業前のプロローグ

1985年（昭和60年）春、勤務していた日社の上司に退職願を提出しました。個人的には三男が生まれる直前の32歳でした。上司より強く慰留され、諦めるというより決定を先延ばしにしました。しかし、どうしても思いは断ち難く、11月頃再度辞表を提出し妻への電話などもありましたが、出産休暇中の妻の「やりたいように生きて

もらいたい。」との言に説得を諦めてもらいました。「ここで辞めることを諦めたら、きつと将来仕事に行き詰ったりしたときに『あの時辞めておけばよかった』と思うに違いない。」と想像し、決心を変えずに崖から飛び降りる覚悟で1986年1月正式退職となり、何の仕事の準備もなく現有田取締役の兄上と株式会社アリテックを創業し、現有田取締役を社員雇用して私が専務取締役となりました。熊本で技術開発型企業を興したいという実に漠然とした情熱だけで、「こんなに一生懸命に仕事したい人間がうまくいかないわけがない。」という厚かましい思いだけでした。当然、うまくいくはずもなく、あつという間に資本金880万円は底をつき給与も持ち帰れない月が続き、私がやれることは、元の会社でやっていたことの周辺だけだろうと思ひなおし、設備機械の設計や部品加工のブローカー的アルバイトで食を繋ぎました。2年目になると、時はバブル景気もあつて装置の受注もあり、車一台分のガレージでドリルとサンダーのみの加工機？で設計から完成機納品までを外注頼みで指導しました。見積もしたことがないひどいスタートでしたが、人件費はタダ、手直しはサンダーとドリルでやりながら先ずは仕事を動かし始めました。

3年経過すると利益は順調に拡大していきましたが、場所も設備も人材も最低限は確保したいという思いから、回路基板開発中心のアリテックより分離独立することとし、高速ICから遠くならない場所で場所探しを急ぎ、熊本IC、御船ICを諦め松橋にオンボロ倉庫を見つけ賃貸交渉をするに至りました。

創業

1989年（平成元年）11月1日、1が続く日を選んで操業日としました。社名は私が英語の“precede（前もつて準備する、先行する）”という言葉に「受身にならず市場と顧客に先手で対応したい。」と願いを込めて株式会社プレシードと決めました。

肥後銀行川尻支店に10月31日、親からの借金、保険、積み立ての解約、出資者を集めた1000万円を資本金として振り込んだ時のことを覚えています。「今からどこへ向かうんだろう、やっていけるのだろうか」という思いは、ノイローゼになり発狂するほどの緊張感でした。技術者が県外へ就職しなくても世界の先端を競える会社を創りたい。“社会が欲する技術商品を企画して世に送り出したい。”世渡りが下手な人間でも一所懸命仕事をすれば、安心して生活の基盤を創り、皆が自慢できる

会社を創ることができる。“ と思うだけで不安定になりそうな精神を支えていました。

私を含め男4人、女性1人のスタートで、最初の仕事は床のペンキ塗り、約300㎡のスレート葺きの工場は夢の工場でした。自慢の工場でしたが、人に見せても目を輝かせてくれないのが不思議でした。今思えば実にオンボロ鉄工所以上のものではありませんでした。

幸い、仕事は中央理研という会社から半分、残りをオムロン、京セラ、松本商店などから請けて、先ずは順調な滑り出しでした。仕事が完工したら皆で街に出かけ打ち上げしたりで一体感のある楽しい時代でした。

創業3年後、大不況となり稼いだ金も底をつき、初めて借金を経験することとなり、以後借金に追われながらの経営から脱することはできないで今日に至っています。しかし、その2年後、新たな事業展開で業績を回復させ、1994年12月現本社社屋を竣工させ、忘れもしない1995年1月18日（関西淡路大震災翌日）お披露目の宴を開き、新たな地で20名の社員で業務を開始しました。その頃を中心装置は病院内外の調剤薬局の自動設備で、リフターやコンベア、それに開発仕分装置でした。今

思えばかなりコスト管理が甘くても通用したようで、逆にその後の弊社のコスト管理の甘さに繋がったような気がします。楽な仕事をする则ちの力を弱くしてしまう。逆に厳しいつらい仕事が後の会社の機能の成長になっているというのが20年間経営としての感想です。会社も人も、逆境こそ最大の成長の恩人“ と思うこのごろです。

エピソード

会社を経営していると、思ったようにならない日々の連続と感ずることが殆んどです。それでも20年という長い期間を振り返ると、遅い歩きと成長ではあるけれど、創業の時の、熊本に技術開発型の会社を設立し残す“ という思いは、蛇行はしながらも進んでいつているような気がします。「研究開発部の実務最高責任者として思う存分開発に没頭したい」という私個人の夢はかなえられないかもしれませんが、公の夢、「次世代の技術者が夢の実現を目指すフィールドを熊本に残す」という夢は叶えられると信じています。

プレシードは決して一部の人たちが経営する場に労働者として働く会社造りを目指したことは一度もありません。働く人がプレシードの機能、実績を使って自分の夢の

実現を目指すフィールドとして成長させたいというのが、私の創業者としての夢です。新しいこと、未知のことに挑戦するということは不安と失敗の連続です。それでもそれを怖れず主体者（主人公）として受止め、失敗から学び成長すれば、それこそ人生の最大の収穫物と信じます。

“汝、狭き門より入れ”、困難を通り抜けた時の一瞬の感動は、そこまでの辛かった日々を大切な思い出に変えさせてしまう力があります。楽な道を進んで大きな感動が待っていたことは殆ど思い出せません（失意の日が待っていた思い出があります）。私の人生はそういう意味で感動に満ちていることが何よりの自慢であり救いです。今からも多くの感動が待っていると思っています。その前に立ちはだかる地獄のような苦しみも、その感動に比べれば取るに足らないものと思うことにしています。

感動を求め、自らで感動を創造し、周りにも“感動を創造する”会社であり個人である場が、プレシードとその働く社員であることを願っています。

2009年11月1日

プレシードが食品メーカーに!?

先週、松橋事業所に熊本県宇城保健所より食品製造業の許可が下りた。第二工場内の旧クリーンルームを渡辺主任や永目主任の手伝いアドバイスも得ながら改造し、小規模の設備を揃え立ち入り検査を受け、菓子製造業として添付の許可証のように食品衛生法に適合するとのことお墨付きを得た。

機械製造業が何を始める？と思うかもしれないが、今後の日本国内の産業で何が成長または残るだろうと考える時、超ハイテク製品と日本人の手で、国内で作られたモノ、という要望を想像する。

前者は今後とも我々の顧客とともに追いかけて続けなければならないが、後者も考えればチャンスが無いわけではない。

私の配偶者が昨年高校教頭の激務で健康を損ない早期退職したが、家庭科の教育の傍ら、長年調理の研究と試作を行ってレシピも揃えてきた。その中で保存の効く菓子

を選び、地域食材を生かして商品化することを提案された。

奇しくも6次産業が盛んに新聞などで取り上げられる時代、私が所属する共同組合サニテックも、サツマイモの新加工法の開発テーマを進める事を模索しながらも窮していた。そこでプレシードで菓子の新製品と加工技術の開発を企画した。

機械メーカーが食品メーカーになった事例も多いし、食品メーカーが食品加工装置メーカーになった事例も多い。我社も菓子を市場に提供しながら製造装置の開発に挑戦する。食品製造を行うことにより、装置のニーズと評価する現場に身近に接することとで市場性の高い新たな食品業界向けの装置を送り込むことを狙う。

100万円を超す初期投資となるが、ほぼ半額をサニテックが負担し、給与6万円＋経費2万円で我が配偶者と嘱託研究員契約を結びスタートした。我々はこの業界には全く素人だが、産業技術センターをはじめ、様々な処に支援とアドバイスを求めている。勿論、製造装置となると我社の装置開発ノウハウが大きな強みだ。全員が製品評価に参加できるプロジェクトだ。不安もあるが楽しもうではないか。

5年後、我々は食品工場で働いているか、タイやインドの工場で働いているかもしれない。そのような激変の時代に生きていることは理解して貰いたい。

2013年2月26日

社歴を語る その1

創業前夜

1986年1月20日、大学卒業以来6年弱勤務した平田機工を正式退職。

かねてより高校、大学の2年先輩のA氏と、いつの日か開発業を熊本で起こそうと話していたことが、前年より急速に行動に移そうということになった。私にはその頃すでに3人の子供もいたことから、行動も少し慎重で家族、親族への根回しも必要だった。それでも1985年の夏のボーナス前に辞表を提出した。(賞与を貰って直後が流行であったが、私にとってそれは卑屈な行動に思われたので敢えて前に行った。)当時の上司のM次長は考え直すよう説得し、退職願を押し返した。賞与の減額もなく、高い評価の賞与を貰った。そうこうして悶々とした日々を送る中、A氏は退職して東京より帰郷してきた。「無理しなくても良いよ、一人でやるから」の言葉を貰っても、行動は起こそうと機会を狙った。10月には株式会社アリテックの創業株主メンバーとなつていよいよ行動が近くなった。

1986年12月、ついにM次長の机上に退職願を置いて帰宅した。翌朝「思いとどまってくれていたと思っていた。それだけ思いが強いのなら仕方ない」と受け取ってくれた。三男の育児休暇で休んでいた妻にも電話があったようだが、妻は「本人が好きなようにさせたい」と言っただけという。楽天的な性格の妻に感謝する思いだ。彼女の共働きの生活からの自信かもしれない。双方の両親は言っても聞き入れないだろうと判断したようだ。

退職当日、挨拶に回るといつも遣り合っていた購買部門のU主任より「事業を起こすのにそんなに準備も何もしないで会社を辞めるなんて聞いたことがない、暴挙だ。」と言われ、「私は仕事やりながら次の仕事の準備をするのは卑怯だと思うから、きっぱり止めてから次の仕事を立ち上げます。」と啖呵をきった。ほとんど自信などなかった。思いだけが先走りしていた。今でも燃えているときは、少々の失敗よりもそれを上回る行動が成果を生むものだと思う。それにしても振り返ればやはり暴挙の一言だ。

開発請け負いますと開業したが、どここの馬の骨とも分からない連中に、ましてや熊本で開発など出してくれる会社があるわけもなく、元の本阿弥で設備業界の仕事の手伝いから又この業界に戻ってきた。

プレシード創業

1989年10月31日

肥後銀行川尻支店に資本金として1000万円を振り込む

1989年11月1日創業

株式会社プレシードが熊本県下益城郡松橋町古保山2213の1に正式登記設立。

以下2005年前後の備忘録より

1989年にはアリテックも利益を2年連続計上するようになった。ほとんど私一人で設備業界の仕事を部品加工や設計、或いは装置の設計製作を担当し、設備といえばボール盤とグラインダー、ドリルだけで受注してガレージで外注部品を組み立てたり或いは組立場所も付き合いの工場の片隅を使つて事業を立ち上げていった。

夏過ぎていよいよ電気回路設計開発路線を走るパートナーにも、レコード盤のレーザー読み取りプレイヤーの製作などの仕事舞い込んでいた。私の仕事も数件の仕事がかち合い、一度に合計数千円の仕事を一人でできり切り回すような状態だった。あ

ちらこちらの工場をタダ借りする状況から脱出するべく、いよいよ本格的な対応を準備せねばならないと決意した。経理として創業時に引っ張り込んだ現在の有田取締役、1989年にアルバイトとしてやってきた小松取締役、他に、かつてアメリカに赴任してもらった高野俊彦君、制御盤の外注先にいた福本哲君が、創業メンバーとしてこの年の11月1日株式会社プレシードを創業した。設立前に願を懸ける思いから、好きな煙草を止めた。癌で死の宣告を受けるか、株式上場の初値が付くまで吸わないと誓った。といつてもほとんど株式上場など当時は夢のまた夢の先にあるような荒唐無稽な話で、5、6年はこの誓いは妻にも口にしたことはなく一人胸にしまつていた。話したら恐らく笑い話として広まったかもしれない。

ほとんど素人4人を仲間に、株式会社プレシードが始まった。先ず肝心の会社は福本君が松橋でオンボロ倉庫が道端にあるというので下見し、少し手を入れてもらうことで契約した。福本君には場所を探した手柄として10万円を渡した。資本金一千万円中私が800万円を、子供3人の積み立て保険解約やローンのごまかし転用など出して出来る金ばかり集めた。全てを事業にささげ注ぎ込むつもりではあったが、夜中に考え込んで頭が混乱し跳ね起きて酒で紛らわせようとしたりすることも度々だっ

た。創業以来この頃だけが、会社を創ったことを後悔する気持ちになったりした。それ以来、失敗と危機は数知れないが、創業したことを後悔することはなくなった。

工場はみすぼらしくても我が城、自慢の工場だったが、人を連れてきてもあまり褒めてくれる人はいなかった。今、冷静に振り返ると、天井は低く夏は恐ろしいほどのスレート輻射熱で顔がほてった。生活用水は垂れ流しで節水に努めた。大家に相談すれば「水は高いほうから低い方に流れるのだから隣のことは心配しないでもいい。」など理屈にならない理屈を言うだけ。

工場の床は創業時にセメントの床を皆でペンキ塗りして工場らしくなった。本格的設備投資が天井クレーンだった。知り合いの今は亡き倉岡鉄工社長倉岡さんに頼み込んで全てを180万円でやってもらった。なかなか出来のいい設計施工だった。がらんとした工場はこれからの人生をかけるまさに夢工場だった。

仕事は、少し色々な人脈や取引を持ち始めていたことから比較的順調に立ち上がったが、当初は資本金1000万円が尽きる前に何とか手形でも入金して給与や支払いに支障をきたさないことが最大の課題だった。手形を貰って肥後銀行に割引をしてくれるか検討を依頼した。大企業の手形でありやってくれるとタカをくくっていた

が、いつまでも返事が貰えず、顧問税理士の松田先生の口利きで神水支店が対応してくれることになった。同じ銀行であるが、そのときの神水支店の支店長と、対応を引き伸ばされた松橋支店の担当者の名前は恐らく一生忘れないだろう。同じ銀行であるのが皮肉である。

2015年7月1日

社歴を語る その2

廃品の思い出

私は、時々会社の廃品スクラップ置き場を見る。時として製作に数十万円したようなスクラップにも巡り合う。設計者の苦労は自ら播いた種でもあり、心の痛みがあつて仕方ないが、それを加工した人が数時間或いは数十時間も懸けて作った部品がスクラップとなる時、その関わった人の貴重な人生の時間が捨てられているのだと感じることが多い。私には製作した物は、関わった人たちの人生の時間の塊にも見える。取り返し出来ないのが時間だから、昔自分でそれをしてかして失敗したときは胸が痛んだ。

創業間もないころ、それもプレシード創業前にアリテックという会社を創業した頃は、全く部品カタログ一冊なかったし、スクラップもなかった。加工屋さんに行ったら今の我社の廃材よりもっと価値が低いスクラップや鉄板の切れ端を貰ってきた頃があった。時々、シリンダーやセンサー、余ったボルトやナットも貰ってきた。インシュロックや圧着端子などは、10個程度は頭を下げて貰ったものだ。カタログも欲しくて堪らなかった。古い機械工具商報やメーカーの総合カタログ、業界の雑誌など

古いのを貰って集めた。始めたばかりで実績もない会社では、カタログや業界無料雑誌さえ手に入らなかった。いまは物も情報も社内に溢れている。会社にとってそれが存在するだけでも価値あることを知る人は少ない。有るのが当たり前…、でもその価値を全て活かさねば人も物も勿体ないという思いが常に私にはある。

2016年2月5日

社歴を語る その3

創業のオンボロスレート借工場は私には夢の城という思いだった。プレシード創業前に共同創業したA社時代は、車庫から車を引き出して組立スペースを確保していた。勿論それを超えるサイズの機械は外注先で組み立てていた。色々な顧客と外注先を回って複数の装置やコンベアを作った。とにかく自分の工場で落ち着いて機械を作ったかったし、せめて溶接できるくらいの電気容量も欲しかった。

新装開店前の我が夢工場は先ずは床のペンキ塗りから始まった。社名は採用予定の4名に公募したが、結局自分で名付けた「プレシード」と。この社名は今でこそ抵抗感もないが、創業間もないころ電話で言うときに気恥ずかしく、音も締まりなく聞こえた。一年以上たった時、その頃の社員が県内の出先でプレシードと言ったら、知っていると言われたと嬉しそうに帰って来たのを憶えている。創業とはそんなものだ。ゼロからは社名と社業の認知から始まる。部品を頼んで売ってもらうことから始まる。今の社員諸君には想像できない時代環境だろう。

低いスレート屋根の“夢の工場”は、夏になると恐ろしいくらいの暑さとなった。

右の頬を上向ければ右が熱くなり、左を向ければ左が赤外線で熱くなり、まっすぐ向けば頭の上が熱くなった。トイレは簡易水洗とは言うが、かなり厳しく臭いも強かった、途中から私が徹底的に便器を磨く掃除を始めたのは、理想との違いへの意地があった。いつかこんな環境から抜け出るぞ、と心に呟きながら磨いた。お蔭で、その後18年続けたトイレ掃除は、今でもやれば人に負けないノウハウも持っているつもりだ。

遠く高い理想を諦めないで追いかければ、いつの日か近づいたことを実感する日が来るというのはその頃の体験、その前の体験からの信念だ。いまでも不足するモノも組織運営不具合も多いし不満も多いが、あのころに比べれば何と理想に近づいてきたかと時には思っただけ慰める。

さて、借り受けて当初自分たちで床にペイントを塗ることから始まった工場も、一年もするとそれなりの工場備品や事務機器も揃うようになった。その頃の感慨で覚えていることは、「今、この会社のことは全て自分は知っている。顧客の担当全員の名前を知っているし、仕事の内容から発注先も知っている。この工場の中の何処に何があるかも全て知っている。事務機器も何処にあるかも使い方も全て知っている。いつか会社の事で分らないことが出てくるのだろうか。自分の会社内の事も自分が知ら

ないで運営される日がいつか来るのだろうか。」と。

今は私が知らないことだらけで会社が運営されている。社内にどのような備品が揃っているのかさえ知らない、ましてやそれがどこにあって誰が管理し、運営効果はどの程度なのかなどもどんな解らないことが増えてくる。そこは確かにもう社長が管理したり活用することでもないだろうし、ある意味では知らないで組織が動くというのは快感でもある。しかし、会社では誰が責任もって運営して管理するのは必ず明確になっていないと、非効率や事故をもたらすことは常に知っておかねばならない。そして全ての管理の最終責任者は社長にあるというのも事実である。テレビの前で記者会見して頭を下げてお詫びをするようなことは絶対にしたくないものだ(笑)。

2015年9月13日

社歴を語る その4

1991年6月3日、島原の普賢岳の火砕流で多くの被害者が出た日だが、この日の夕方は、現在の松橋事業所の用地を色々な手続きと交渉を経て売買が成約した祝いとお礼で、熊本市内で小宴を開いたのを憶えている。この日は小雨降る日だったが、宴会に出向く頃夕暮れ前に空が暗くなり、いつもより黒い灰が車に降り注いだのを記憶しているが、その時はその歴史的災害とは知る由もなかった。宴席には土地買収の交渉の間に立って動いてくれた松橋町の町議や私の父など5、6名の席だったような気がする。私の父を始め、関係者やその宴を開いた新市街の料亭も今はない。多くの出来事も時間と共に思い出の彼方に消えていく。

創業2年目にして新たな用地買収をするほど当初の勢いは良かった。この頃、顧問税理士先生に勧められてゴルフの会員権を購入したのも思い出す。勿論、事業というのは持ち金で計画できるものではない。初めて数千万円の借り入れをすることとなったが、返済には何の疑いも持たなかった。好事魔多し、土地を手に入れて一年もすると、バブル崩壊と集中していた取引先からの受注激減で、売り上げは一気に半分以下

となり、第一回目の経営危機となった。

それでも今考えれば、銀行を走り回るほどの危機でもなく、友人から早くギブアップしないと身の破滅となるなどのアドバイスも受けたが、今の私であれば色々な動きを展開しただろうが、当時は社内では遣ることもなく時が数カ月続き、売上とは全く直結しない興味本位の実験や試作開発で当時の10名近くの社員諸君には遊んでもらった。

資金はあつと言う間に底を尽き、この時から銀行借り入れが本格的に始まった。また、この頃初めて、創業メンバーの一人に営業主任という名刺を与え、受注の為の訪問営業を試み始めた。これが我が社の職位の始まりである。

工場用地にしようと手に入れた土地には草が伸び、時折草刈りに出向いた。炎天下に草刈りに出された当時3人いた女性事務員が陰で不平を言い合っていたと聞いた。今思えば無理もない話だが、夢ばかり追いかけている社長の私にはそれは仕事であり言いがかりにしか思えなかった。今もあまり変わりはないが、現実を直視しないで未来ばかり追いかけているベンチャー企業のもろさの典型的事例であり、時々思い出しては今の社内で似たようなことを私が遣っていないかと考える材料としている。その頃の私は確かに自分の夢ばかり語りそして追いかけて、社員の夢や不安に耳を傾けな

い独りよがりの経営者だったかもしれない。ただ、現実問題への恐怖と焦りだけは人一倍だったように思う。会社は一年後に続いているのだろうか、今の顧客がなかったらどうなるだろう、次に仕事落ち込んだら生きて行けるのだろうか等々、今も変わりはしないが、恐怖と共に生きていた。

事業が沈滞している時代に、社内の雰囲気をも何とか転換したいと皆で考えたとき、ある社員が「ラジオ体操の時、一人ずつ『おはようございます』と大声で気合い入れましょう」という提案があった。我が社の朝礼の開始時の独特の全員掛け声挨拶はこの時から始まった。

幸い我社は1992年頃暇だった頃だからこそ、開発遊びで付き合い始めた調剤薬局の機器商社とのビジネスが立ち上がり危機を脱することとなる。暫くは調剤薬局向けのリフターや仕分け装置で事業が安定することとなる。

2015年9月21日

社歴を語る その5

自社工場の土地を購入するに至ったのは、創業のオンボロ工場の家賃が25万円とあまりにも高く、工場建てても借入金が返済できる金額だと聴いたからだだった。単純な動機だ。市場予測もなければ、まともな事業計画もなかった。事業計画の意味も理解していなかったように思う。先のことは誰も分かる筈なのに、計画通り行く訳ないとタカをくくっていた。

バブル崩壊と我が社の不況も、今思えば一致していたが、当時は事業がバブルの上に動いていたなど知る由もなかった。せっかく買った土地も手つかずとなったが、1994年、調剤薬局設備などで事業が復活し始めたのを機に、新工場建設に取り組むこととした。やっと経営が回復したかと思うと、すぐに当時の売り上げの3割以上に相当する設備投資ということだ。当時のメインバンクにいて我が社の現状を聴き知る同級生などは、「えっ新工場建設?」、あきれ顔で私の顔を見たのを憶えている。

それでも建設を決めて一年後には、新工場への引っ越しを終えていて、これより毎年のように工場棟の増築が続くことになる。通年から引っ込んだところではあった

が、1万㎡近い広い敷地を取得していたからこそ思い付きの増築が出来たことだった。とはいっても、本人は有頂天だが、車もすれ違えない道の集落の中にあるハイテック企業の本社は、周りから見れば奇妙な存在だったことだろう。(当時オーム真理教が流行っていたころでもあり、建設続きを自嘲の意味でプレシードサティアンと呼んだりしていた。)あまりにも引っ込んでいたことから、初めて訪れる人がよもやこの先に会社は存在しないだろうと引き返すような出来事が多発することとなる。

1995年1月18日、晴れて竣工お披露目パーティーを開くこととなる。これも妙な巡りあわせで、前日朝の出社前に突然、阪神淡路大震災のニュースがテレビから流れた。17日にはほとんど詳細を報道も掴めずにいたようだ。竣工式当日は、未だ被害全貌も掴めず和やかな交流が出来た。もし、あと一日遅く予定していたら、全国的に大混乱でパーティーは自粛せざるを得なかったかもしれない。経験のないほどの大事件に出会うと、最初は過小評価してしまうという特質が日本人にはあるような教訓を得た。これが後の東北大震災の時の一報をテレビで見て、被害の冷静な被害予測ができたことにつながった。

2015年7月1日

社歴を語る その6

「BBQ大会」

確か竣工式直前だったと記憶するが、早朝7時半ごろ新工場に出社の為に工場用地の角に来ると、女子高生が頭から血を流して目を閉じて倒れていた。近くには乗っていた自転車と若い我が社の社員とその車があった。車から降りてすぐに救急車を呼んだが、正に目の前が真っ暗になって立ちすくんだ。やっと引越した見ず知らずの集落の中で、新工場の運営が始まるときに大きな人身事故が起きたのだ。もしこの隣の家の女の子が死んだら果たしてこの見ず知らずの集落で営業など出来るだろうか…。普段は絶対に神頼みなどしないと誓っていた私だが、この時ばかりは「どうぞこの女の子が無事回復しますように。近所関係が壊れませんように。」と神に密かに祈った。目の前の事実は、とても無事に円滑な運営が始まるような状況には見えなかった。頭が混乱する中で、もしこれが無事に済んだらこれを何とかプラスの教訓としようと考えた。

その後、正に奇跡的に女の子の無事な回復が見届けられ、隣家にも誠意を認められたのを機に、春のBBQ大会の開催を決めた。見ず知らずの地でお互いを平時に知り合っていることで何か起きたときに信じあう基盤からの話し合いが出来るとの考えからだった。

多くの社員にとって殆ど記憶にない事件だろうが、私にとってこの事件が無事収束できたのは奇跡だったし、多くの学びがあった。先ずは起きたことを変えられなくても、何としても結果をプラスに変えて見せるとの覚悟があれば、意外と道が開けるという事。正に天佑であって奇跡のような道が開けたという実感を得た事件だった。

そういう背景があってBBQ大会を始めることとなったが、どうせやるなら社員が主体的にお客様をもてなすという課題に挑戦する行事とし、お客様とは、もっとも我々の存在を温かく見守ってくれるご近所と社員家族だと定義した。取引先だけが我社の大切な人たちではないとの経営スタンスを出したかった。とはいえ、最初の2、3回までは「社員諸君が企画準備しました」と挨拶で言ったが、実情は総務と私が段取りと指揮采配することから始まった。しかし、その後は全く私は口出ししないで会が運営できるようになった。これは我が社の頼もしい組織力ともいえる。人を歓ばせる力こそ、私が経営理念の筆頭に掲げる「感動を創造する」の原点である。今後も自

主運営で、会社利益の為でもない行事を運営し感動を創造できる力を持つ企業であつてもらいたいものだ。

2015年9月21日

社歴を語るその9 アメリカその1

プレシード・AMERICA創設

1999年は創業10年目ということで、私の気持ち次へのステップを模索していた。振り返れば社会人になるときから海外ビジネスに憧れてもいた。私の社会人への入り口が新聞の求人欄にあった「海外市場開拓課要員募集」だった。幼い頃より未知の世界への憧れが強い子供だった。仕事は地元の中で新鮮味もない環境でたくないという思い強かった。

1999年4月初めてアメリカの地を踏んだ。知り合いの会社の工場竣工式にカリフォルニアのサンジェゴに降り立った。初めてのアメリカは新鮮だったし、何もかもが違った。日本のビジネスの源流は殆どアメリカにあるのを思い知った。アメリカを知らなければ世界のビジネスの流れは予想できないという強烈な印象を抱いて、オレゴン州ポートランドへ移動した。この地に熊本の地場企業M社の長男夫妻が住んでいるのを紹介して貰っての訪問だった。当時のポートランド周辺はインテルの主力工場があるのを中心に、NEC、三菱、東芝、富士通、沖電気、エプソン、パナソニッ

ク、コマツ電子、東京エレクトロン等、多くの日系企業が集積していた（その後、あつという間にほとんどの日系半導体企業が撤退して行ったが…）。

空港にMさんが出迎えてくれた。日本で一度あいさつしたことはあったが、奥方は金髪のアメリカ人、弁当はご飯に塩魚という日本語ペラペラであり、夜は自宅にも招待してくれた。さすがにアメリカの家庭は雰囲気は全く違ったが、靴を脱いで入るようになっているのが日本人として気持ちよかったのを憶えている。

翌日からのガイドとして紹介してくれたのが、現在XERESジャパンのN氏だった。人のいい自由人で豪華な家に住んでいて、日本人の夫人Yさんとアメリカらしい豊かな生活を送っていた。アウトドアを楽しみ、広いアメリカを舞台に活動する姿は、ただ羨ましく、当時はアメリカで生活する日本人の孤独は想像しなかった。大自然とハイテクと古いアメリカの存在するポートランドは、私にとっては今でも第二の故郷という思い出の地だ。その後、私の生涯の中で、熊本県と東京以外では最も滞在時間長く過ごした土地にもなる。

すっかりアメリカに魅了されて帰国すると、直ぐにアメリカに会社を創ると言い出した。当時、ポートランドから福岡直行便が就航中であり、11時間でアメリカへ行く

ことが出来た。この便を当てにして6月にはポートランドに会社を設立した。場所はクリーン機器のN社の現地法人で、ポートランドエリアのヒルズボロ市にあった工場の事務所内に賃借して開設した。

こうして無鉄砲にも、世界の標準と規格を支配するアメリカという異国から、デファクトスタンダードの装置を世界に展開していくのを夢見てプレシード・AMERICAの活動が始まった。

2015年11月12日

社歴を語るその10 アメリカその2

西部劇のように開拓地アメリカで新たなビジネスを始める新会社をスタートさせるつもりだった。思えば金も知識も人脈もほとんどない地にいきなり乗り込んだのだ。無謀と言えば無謀かもしれない。今思えば、かつてのアメリカ大陸移民の人達のように、帰る場所も無くそこに骨を埋めるほどの覚悟がなかったようにも思う。

プレシード・アメリカ（以後P A I）設立後、ほぼ毎月のように3年以上渡米した。多くの時間と金を投入して残ったものは、借金と本社の管理の手薄なところだった。しかし、私にはアメリカという世界標準のビジネスを現地で眺めたり体験したことで、世界のビジネスの考え方やルールは体にしみ込んだ。如何に日本が例外的であり、日本がけっして進歩的でも効率的でもないことを思い知った4、5年だった。最近の日本ではよく日本のことを自画自賛するが、それは弱点に目をつぶる事であってはならない。日本の弱点や弱いところが沢山あることを見つめるべきである。

会社は先ず、オレゴン州ポートランド市エリアのヒルズボロー市にある日系企業A社内の工場事務所に設立した。何といっても取引実績さえない異国アメリカである。

日々の動きさえままならない状況で、先ずはアメリカ慣れた日本人が多いところにヤドカリ的に入り込むのを目指した。当時、オレゴン州には進出してあまり業績も芳しくない半導体関連の日系企業は比較的多かった。たまたま知り合ったA社の鹿兒島出身のF君と知り合い、話を東京本社に持っていけるように紹介して貰った。承諾して貰ったときは大変ありがたかったが、後日談では内実は少しでも現地経費削減ということ、渡りに船でもあったようだ。実際、しばらくするとA社はアメリカ撤収ということになり、F君は我が社の現地社員になることになる。

A社内のP A Iに日本からT君を送り込んだ。全く英語などできないが、我が社には当時から怖いもの知らずの文化があった。アメリカ単身赴任を打診すると直ぐに快諾してくれた。そのT君に2ベッドルームの豪華なアパートを借りて提供し、私はほぼ毎月P A Iへ出張し一週間程度そのアパートに滞在するような時代が始まった。

なんとといってもアメリカは新鮮だった。T君も私も同世代で、子供の頃よりアメリカ文化にコンプレックスもって憧れた世代だ。休みの日には海や山にドライブしてビール飲みながら走ったりもした。酔っ払い運転の取締りはないと聴いての事だったが、実のところ飲酒運転で事故を起こすと、日本より厳しく処罰されると後で聴いて

そののちは慎むようになった。

秋にドライブすれば、黄色く色付いた森の中を一日中走るようなドライブもした。ドライブインもレストランもないひたすら大自然、もう当面は紅葉狩りなど行きたくないと思ったくらいだった。

ピストルやライフルもアメリカ在住日本人に連れて行ってもらって射撃を楽しんだ。一時は実弾がアパートに転がっていて、間違つてバググに入っていて日本に帰って帰るようなことさえあった。出逢えばいつも笑顔で挨拶するアメリカ社会は、逆から見ればいつも敵ではないと伝えねばならない移民の国の習慣でもある。知っている者同士がわがままと甘えで生きられる国と、自分のことは自分で守らねば誰も面倒見てくれない社会の違いを感じた。

日本で銃など危険なものを持つ必要がないと簡単に結論出せるが、アメリカで銃は老人でもか弱い女でも、屈強な悪党と対等に渡り合えることを保証し、屈しないで自由に生きられる社会の象徴でもある。銃規制が進まないのはアメリカでは納得できる部分もある。

2016年5月9日

社歴を語るその11 アメリカその3

アメリカはレストランの食事でも美味しかった。日本料理、中国料理、韓国料理、ベトナム料理、タイ料理、アフガニスタン料理、多種多様だ。日本料理は高級で、招待すると喜んでくれて、器用に箸を使う人たちが多く、子供の頃にフォークとナイフの食事に高級感を感じたことを思い出した。今は日本料理が世界ではステイタスなのだと感じ嬉しく思った。

暫くするとNさんの紹介で現地在住の日本人、今思えば古館一郎風の青年を採用した。極めてアメリカ生活に用心深い男であり色々なリスクを語ってくれた。

数カ月すると、広告代理店の面白い営業マンが我社で働きたいと言っているというから会ってくれとT君から要請され、専有面積6畳程度のPAI事務所で面談した。

その男がJ・H、現在のAmazonロジスティックスの社長だ。日本人以上に日本語が巧みで、アメリカ人以上に英語をまくしたてる日系四世アメリカ人だ。日本語の本を平均的日本人より遥かに早く読破する。弱点は殆ど漢字を書けないことで時々馬鹿にしたりしたが、頭の回転の速さは抜群だった。

以後、2年ほどでP A Iの実質責任者として取り仕切るようになった。彼の提案で本格的に事務所付きの賃貸工場に転居することになった。専用個室や会議室がある広い事務所は快適だったが、家賃は大きな負担となった。本格的に勝負しなければならぬという焦りも感じるようになった。ロシア系アメリカ人や根っからの典型的白人アメリカ人など数名の人が入社して営業や据え付け工事などに頑張ってくれた。

仕事の方は日系の半導体関連工場、プリンタ工場、アメリカの装置メーカー、韓国系、台湾系もいた。アメリカは確かに自由でとらわれない国だ、様々な出身の人達がお互いに気を配りながら、権利を主張しながら住んでいる。お互いの常識が違うのが前提だからルールが絶対だ。ルールを守らないアウトローは厳しく罰せられるのが建国以来のルールと言えよう。誰もが銃を持っている国、強いものが我がまま通せる国ではない。自己責任でお互いの自由を侵さないようにして生きるのがアメリカ、自由だが孤独でもあるのがアメリカ。一時はアメリカに永住するのもいいと思ったが、日本的な持ちつもたれつ、我慢もし合い、助け合いもする近所付き合いの日本もまた良しと思うようになった。アメリカに頻繁に行くようになって、同じ顔色して同じ制服着て学校に行くことが一時は異常な光景に見えるようになった。日本の

常識は世界では例外的なことが多いことも気づいたのがアメリカ生活だった。

オレゴン州では進出企業として大きく地元新聞に掲載されたり、日米の経済交流会では進出企業として抱負をスピーチしたりしたこともあった。その頃知り合った当時のヒルズボロー市助役のDavid・Lawrenceは何故か気が合って自宅に食事に招かれたり飲みに行ったりして親友となり、今も時々消息メールを交わす仲となった。彼の計らいでオレゴン州知事が福岡に来日した際は二人で30分ほど面談する機会を作ってくれた。その時は余り感慨も無く、ただセッティングに乗っただけだったが、後から聴けば大変名誉なことだということだった。

行けば楽しいアメリカ生活ではあったが、最初にもくろんでいたIntelのメイン工場がありその周辺に林立する日系半導体関連メーカーなどを相手にする装置ビジネスの展開も急激に雲行きが怪しくなった。日系企業が次々と半導体不況の中に撤退して行った。我が社もIntelに取引口座開設するなどエキサイティングな面もあったが、所詮日系企業無くしては生きていけない。J・Fが取引先に転職したりしたこともあり撤退を決めるに至った。

2016年6月27日

プリウスのリストア

ムダ遣いした!? 先週、初代プリウスが車検とリストアで新車のようにになって帰って来た。1998年1月の納車から20年以上の月日が経ち、その間29万キロをプレシードの激動の歴史の中を走破した車だ。多くの諸君が乗ったことがあるだろうし、深夜の道を走った思い出を持つ者もあれば、この車の中で私のように仮寝した諸君もいる事だろう。

アメリカ西部の開拓で共に苦労した馬のように、この車もプレシードで苦楽を共にした仲間だ。社長車として随分共に走った。その後、乗り替え時に個人で会社から買い取ったが、その後、我が家で不要になりかけたので、また買い戻した。私は自分用で使った車は下取りに出したことがない。最後まで身近に置き看取りたい。

この初代プリウスも流石に痛みが酷く今回の車検ではリタイヤの向きが強かったが、敢て新車と同様にリストアして貰い会社の30周年で歴史に遺すことにした。社長のムダ遣いと言われてもいいが、この車を社内に表示して以下のようなことを社内と来訪者に伝えたい。これは我社の歴史を伝える為でもあるが、開発者にエンジニアと

して敬意を払っての事であることを理解願いたい。

●プリウス発売発表でプレシードが熊本の第一号注文者であること。その後1000万台以上のハイブリッド車普及となる記念的车である。

●プリウスの語源がラテン語の「先駆け」*prae*と*cedere*の語源「precede」と同じ意味に込められた、先駆けることの怖さと誇りと情熱を共有したい。

●技術者として、それまでは「挑戦しないトヨタ」という認識であったが、利益を出している会社が、敢て利益が見込めない技術に挑戦する意気込みを感じさせて呉れた。驕らず敵を作らず未来を創ったのが見事だった。当初、全く売れ行きは不振だったが、世界を席卷したトヨタを支える技術となった。

●技術は常に先駆ける（プレシード）ことに価値があるが、常に後進達の批判には晒される。発売当時、走行性能は勿論不評で、価格はとても高価という車になった。

そして今ではハイブリッドが当たり前になると、いまではこの初代は笑われるような性能であるが、当時として先例のない挑戦の先兵だった。

●技術とは常に後進の批判と踏み台になる事が価値ある事だと理解して貰いたい。エンジニアには進化という厳しさとそれに貢献し残すという喜びがあることも伝えたい。

ムダ遣いとも思ったが30周年の記念行事として投資した。普段乗り回す気はない。

展示し後世に開発者顕彰の意味で残したい。出来れば自社クリーンブースに保管展示し毎月一度は晴れた日に充電とグリス潤滑の為に走らせるようなことをしたい。

2019年3月23日

「30周年キックオフ決起大会」によせて

明日から創業30年目が始まる。会社が30年間存続する確率は0.02%、即ち1000社中の2社だと言われる。その中でよく生き残ったとも言えるが、一方ではその間にAmazonもGoogleもYahooもFacebookも皆Precededを追い抜いて行った。(笑)

正に笑いに過ぎないと思うだろうが、事実でもある。Facebookの創業者マーク・ザッカーバーグは、Precededが創業された時には未だ5歳だった。私は5歳の子供に追い抜かれてしまった。その時に喧嘩すればほとんどの事で勝てただろうが(笑)。変化した企業のみが成長した。

今、A G F A (Apple Google Facebook Amazonの4社)があっという間に成長し、世界を変えつつある。我社の成長率が目標30%程度でも無理だ、欲張り過ぎだと言われている間に、倍々ゲームを繰り返し巨大企業となっても、45%成長では成長が鈍化したと評価が下がる企業達もあるのが世界であるということが事実だという事は知っておきたい。

企業の規模や、利益や、雇用数：など色々と企業価値の評価はあるだろうが、

PrecedがAGFAにも負けない世界一を目指せそうなものはないだろうか……。これが「ビジョナリーカンパニー」を読んで考えさせられるところとなった。世界に一人しかいない人間が100人以上集まるプレシードなら何かある筈だ。

これを確定させるには少し時間がかかるかもしれないが、明日からの行動と判断基準にビジョナリーカンパニーを取り入りたい。「ビジョナリーカンパニー」とは企業を目指す方向を揺らぎないもの、常に共有する価値観であり、航海で言えば北極星だ。いつでも見えて変わらない方向を示すビジョンだ。柱となる基本理念は、勿論「社は」と「経営理念」だと思っている。

そして、日々の行動の道具は「7つの習慣」でもあるし、「京セラ12か条」でも学べるし、古今の経営者や本にも山ほど学び身に付けることも出来る。社内でも鶏口会で自己啓発学習もしているし、技術研修も進める。道具は自分で身に付け磨こう。

方向も道具も揃えば明日から、プレシード社員が入社10年後にも「プレシードに入社して良かった」と全員が言う企業を目指す。

Facebook 2004年2月4日

Google 1998年9月4日

Yahoo 1995年3月2日

Amazon 1994年4月5日

Preced 1989年11月1日

APPLE 1976年4月1日

*サムスン電子は、1993年に今では歴史的な企業変革宣言となったフランクフルト宣言では幹部をドイツに呼び寄せ、イ・ゴンヒ会長自らが「嫁と子供以外はすべて変えよ」という大号令を発した。ここからSONYに遥かに及ばなかった3流企業だったサムスンがあつという間に世界の大企業へと躍進した。

2018年10月31日

平成元年11月1日 プレシードの誕生です。松橋町古保山の飼料倉庫だったところに壁やコンクリートの床を張り、メンバー数名で床を塗装し何とか組立が出来る我々のお城が完成しました。

創業時は半導体業界も今より活況ではあったのですが、それでも景気の山谷は激しく、熊本地場の某製薬の袋詰め装置、近所の食品会社の ” ところてん “ 製造装置なども製作し、本当に仕事が無い時は螺旋階段を作ったりもしました。

その当時を振り返るついでに、松橋の六地藏地区に本社が移転した後に入社した人は知らないかもしれないプレシードの製作事例をちょっと紹介したいと思います。

実は古保山本社時代に東京営業所を開設したのですが、そのきっかけは東京にあった医薬品業界に関連している大手装置メーカー（T社）との協業でした。

連携を深めるに従い、頻繁に情報のやり取りをしなければなくなり、東京と熊

本の距離が問題となり東京への進出となった訳です。

医薬品業界向けの装置製作が始まりました。

最初は私の記憶ではバーチレーター（昇降装置）で千葉県野田市が納入先だったと思います。この装置は北海道に数カ所（函館、札幌、旭川）入れており、そのおかげで北海道出張ついでにうれしい海産物を頂く事も出来ました。

その後、ユニット型の搬送システムや処方箋のデータ情報を基に、各引き出しから必要な薬品をトレイにまとめ払い出す装置を製作、東大病院や山形大学病院に納入しております。

ここで簡単に私(有田)のプレシードにおける歴史をご紹介します。

スタートは古保山での操業開始ですが、

1995年 東京営業所開設に伴い、東京へ赴任。

2002年 PAI（プレシードアメリカへ赴任）

2005年（？） 東京事業所へ赴任（第2回目）

2008年 PSI（プレシード上海）へ赴任

2013年 P T I（プレシードタイ）設立、立上げ

東京赴任の時期は、会議で月一回程度は本社に出張ベースで帰っていましたが、この30年を振り返ると約半分は本社から外で活動していました。従って、本社内の事は私より詳しい方もいますので、本社内で記憶に残る出来事や九州外での活動について振り返ってみたいと思います。

まず、本社内で記憶に残る出来事、プロジェクトNO・1はやはり国分S社様での立上げです。

このプロジェクトは、立上げが遅れていて、S社でNO・2の偉い方から毎日お叱りを受け、結果初めてお客様に対し始末書を出すことになりました。お客様にも申し訳なかったのですが、この工事はプレシード社員や外注協力企業様にも大変な負担を掛けることになってしまいました。朝の8時に入場し、終了して帰るのは次の日の夜中2時という作業の連続で1か月半程休みなしだったと思います。

電気とメカが同時作業していて効率が悪かったので、ある程度装置が動き出して試

運転調整が出来る状況になったところでは、昼夜交代シフトを組んで対応したのですが、メンバーに十分な睡眠を取らせて上げる事は出来ませんでした。

このプロジェクトで特に記憶に残っているのは、当時製造にいた渡辺さんがメカ調整をしながら立ったまま睡魔に襲われ膝がくずれ、頭を装置にぶつけてしまった事や、制御ソフトを作りながら居眠りをしている立山部長。

その時は申し訳ないと思いますが肩をたたき、大丈夫か？と声を掛けて作業を続けさせる事しか出来ませんでした。

この時の苦労は現場にいた人しか判らないかもしれませんが、この時があったからこそ少々の困難には動けないという経験になったのではないかと思っています。また、この頑張りがあったからこそS社様からのリピートオーダーを得ることが出来、その後もお仕事を頂けているのだと勝手に思っています。

この30年で徹夜仕事は何度も経験していますが、今振り返っても大変さではNO・1の工事でした。たしかに大変なプロジェクトではあったのですが、いやな仕事だっ

たという思いは全くなく、大きな達成感を覚えた工事でもあります。

その要因の一つは、お客様と共に様々な問題を共有することが出来、また、目指すゴールに協力しながら立てたという事だったと思います。

長い事この仕事をやっていると、厳しいけど一緒に仕事したいお客様もあれば、個人的にはお金をもらっても二度と一緒に仕事をしたくないというお客様もいらっしゃいました。

そんな思いをしたこともあり、少なくともプレシードの協力企業様からそう思わないようにしなければと自分を戒め、ここタイにおいても外注先様とお付き合いさせて頂いています。

プレシードの30年を振り返ると、どうしても大変だった事が思い起こされるのですが、国内のプロジェクトでは、宮崎県のF社様、長崎県のM社様、広島県のT社様の工事が個人的には苦勞した思い出です。

さて、冒頭にも書きましたが、プレシードにおける私の歴史の半分は県外や海外での活動で、それについても少々振り返ってみたいと思います。

最初の県外は東京営業所設立で、今でこそ蒲田のビルに事務所を構えていますが、その当時は民間の賃貸アパートに入居し、二間の1室を事務所として使用していました。この頃は医薬に関する装置メーカーがお客様でしたが、エンドユーザーは全国の大手病院や病院に併設されている薬局という事で、装置立ち上げでは色々な所に行かせて頂きました。東京の立川や水道橋、東大病院の有る文京区をはじめ島根、福井、愛知、千葉、山形、北海道等々、個人旅行ではなかなか行けないような場所を見て回る事が出来ました。

その後の海外勤務では、

PAI…アメリカオレゴン州でメインのお客様はエプソンアメリカ、このお客様にはプリンターインクカートリッジの生産ラインを日本で製作し、搬入しました。

ご多聞にもれず徹夜仕事もありましたが、この物件のおかげで初めてアメリカの地

に立った社員も多数いました。

残念ながら、アメリカ進出は時期が遅かったのか、進出していた日系大手メーカーが拠点をたたみ始めたタイミングとなり、現在はプレシードの拠点としてはありません。

次の海外勤務先は、

中国・上海でしたが、前任者の時点で業績が振るわず、リーマンショックの影響も重なり、会社としても撤退を検討しましたが、その後現在も続いているD社の仕事で息を吹き返し、今に繋がっています。

最後に・・現在おりますプレシード（タイランド）ですが、松本社長の命を受け、船口部長（現在は常務）と共にジェトロ（日本貿易振興機構）タイランドの貸し事務所にか月入居し、タイでのビジネスの可能性を調査しました。

その結果、タイでは装置製作の為の購入品や材料が手に入るインフラが整っている事、日系車メーカーの早からの進出に伴い、多くの日系企業が進出しており、自動化のビジネスチャンスはまだ今からだという判断を下し、松本社長に進出をご判断頂

いたという経緯です。

最後に、本社を飛び出し、東京、アメリカ、中国、タイと仕事をしております。日本本社の仲間を含め、たくさんの人に助けられながら、失敗もたくさんしてきましたが、何とかここまで来られたというのがこの30年の振り返りです。

技術というのは仕事を成功させる為の大きなファクターですが、それ以上に相手をお願いやり、助け合える仲間がいる事が仕事を成し遂げる大きな要因ではないかと思えます。

50年の振り返りは難しいと思いますが、もうしばらくはやれそうなのでモノづくりを楽しみたいと思っています。

Preceed (Thailand) Co. Ltd. 有田政司

2019年6月20日

経営の こころ

まさに命懸けで30年間経営してきた社長松本修一の経営魂を語る。

経営の面白さ、楽しさ、苦しさ、

孤独感など、経営者ならではの視点と、

社員に向き合うトップの姿勢をさまざまな切り口で語る。

夢を語り、覚悟を語り、理想を求める「経営のこころ」の原点を、

感動を創造するなど四つの「経営理念」、

及び会社の憲法ともいえる「社是」で結ぶ。

小野上 記

一所懸命・命懸けの面白さ

仕事に何を求めるのかは人それぞれ違うかもしれないが、どうせ働くのなら面白くありたいと思う人は多いのではないか。面白い仕事は決して楽な仕事ではない。面白くない仕事は楽な仕事かもしれない。人は楽を求めるか、面白さを求めるか選ぶことは比較的容易かもしれない。しかし、面白くて楽な仕事というのは継続的に存在するだろうか。楽が続けば緊張感が無くなり面白さも色あせる。仕事の面白さは楽なことではなく、緊張感とそれによって達成する充実感ではなからうか。予算や納期、品質などに厳しい要求があつて、達成するのに困難が伴うときに、それらを克服していくことにこそ働き甲斐がある。何の困難も無く行き着いた結果で全てが許されるのなら進化も無く、仕事に誇りを感じることも無いだろう。誰がやっても同じ仕事に誇りを持つのはむずかしい。

人は仕事によって自らを成長させることが出来る。むしろ仕事の目的は日々の糧を得る為の金を稼ぐことではなく、自らを成長させることに在るのかもしれない。仕事を命令されたことをこなす作業と考えると、仕事の中での自分の行動範囲は狭いもの

となり、単調で、自分では変えようも無い不満の多い日々陥る。仕事の目的を理解し、仕事というものを、いかに目的を効率よく達成するかを考え実行する場と考えるとき、行動範囲や行動の選択は飛躍的に拡大する。自らを責任を持つ主体者と考える行動すると、目の前の問題は自分の問題となり悩みも増すが、自分で解決すべき対象となることで問題解決への意欲が湧いてくる。多くの問題は他人のせいにすることで一時的には安らぎが得られるが、いつまでも自分ではどうにも出来ない苦痛が継続する。問題を自分のこととして捉えようと、解決策を考える重圧はあるかもしれないが、問題解決を自分で支配し、解消する快感を感じることが出来る。人は主体者であるとき苦痛以上に充実感を感じる。主体者であることは常に一所懸命・命懸けのことかもしれない。安らぎの中で命懸けになることは難しい。手拔きの無い精一杯の面白さ、それはスポーツにどう取り組むかに似ている。たかがスポーツでも、人は命懸けと言うほど真剣に取り組むことがある。それから得るものは、お金ではなく何物にも代えがたい充実感だ。仕事ではそれにお金もついてくる。同じ時間を費やすなら、どうして一所懸命に成らずに過ぐすメリットがあるだろうか。100%力を出し切る行動派は、80%や60%の人たちと違う迫力を感じさせ、行動そのもので人を共感させ感動さ

せる。手拔きの行動は他人に何の感動も呼び起こさない、不快感はよく与えてくれるが。何にでも手を抜かずに、一所懸命こそが人生や社会生活を豊かにする源ではないだろうか。

2000年8月9日

Interactive 又 相互 言葉 について

Internet が世に普及し始める頃、盛んにインタラクティブという言葉が使われ始めた。双方向から交流出来るという意味だろうが、確かに従来の放送や新聞などのマスメディアと比較すると、リアクション出来る環境は整いつつある。誰でもが一対マルチの双方向の交流が可能となった。しかし、一方で不要不急の情報が氾濫し、その上手い整理法が確立されていないのではないだろうか。これも技術的には可能だし、そのツールも世にあふれているが、実際にうまく活用している人は意外と少ないのではないか。それは使用法を確立するのに多くの時間が必要で、必要な人ほどその時間を持っていないことに起因する。忙しい人の為にこそ有効なシステムであるが、忙しい人ほど活用にはたらないと言うジレンマを持つ。ここに今ひとつ便利なシステムが普及しない原因がある。

また、双方向であることを過信し、一方通行の状態のまま現実が展開していくことがある。情報を送りさえすれば受け取った者が反応しない限り了解したとみなされるという、双方向を前提とした一方通行の判断がまかり通る。社内でも「メールを入れ

ておきました。」ということで了解のないまま事態が先へ展開していくような恐ろしいことが起きることがある。

INTERACTIVEとは、双方向のコミュニケーションのはずなのに、なぜか一方通行がまかり通る。情報というのは同じ内容でも人や状況によって受け取り方はまちまちである。それを双方からやり取りしながら確認しあうことが出来ることに、本当のINTERACTIVEの意味がある。双方向のインフラの上で、一方的な情報の伝達は大きな混乱のもとになる。もっとルールを確認しあいながら運用しなければ、遊びにしか使えない道具に終わってしまう。手段や方法は時代や地域で変わっても、有効なものとして活用するには気配りが必要なのはいうまでもない。ハイテクの上に情を載せてこそ生きたものになる。「情報」には昔から「情」が必要なのだ。

情報伝達には必ずREACTIONがあることを前提に、思いやりを持った活用を心がけよう。

2000年9月16日

忙しさの中で

現在、多くの仕事が動いていて、大変な忙しさの中にいる為か、量に目を奪われてきめ細かく配慮することを忘れている気がする。忙しいときこそ気配りが必要だ。さもないと忙しさの後に何も残らない。

目的を果たしさえすればいいという雰囲気広がらないよう注意して欲しい。常にこれがベストかを考える余裕を心に持って欲しい。たとえどんなに忙しくてもだ。設計者は部品の選定を常に品質とコストの両面から考えて欲しい。目的を達成すればいいのではなく、品質過剰で無駄な出費につながっていないか、加工は作りやすく安上がりな構造となっているか、組立に必要な配管穴や場所は考慮されているか。

現場を見て回ると、加工や組立のことが全く配慮されていない部品と、高価でオーバースペックの購入品で構成されている装置を目にし、胸が痛くなる思いがすることも多い。そこに投入された無駄な時間と無駄なお金は、全て君達の下に残るべき筈だったものだ。君の生活を豊かにするべき筈のものだったのだ。再発しないような行動を起こそうではないか。設計から営業に、購買から設計に、工場から設計や営業

に、今後への財産となる筈の要求をつたえよう。

過去、我々は多くの失敗をしてきた。そして、今後も多くの失敗を繰り返していくだろう。我々は失敗には寛容でなくてはならない（ただし、自分以外の失敗に対して）。失敗により多くのものを学び、進歩してきた。失敗を責めるようなことを求めているのではない。むしろ失敗をしないようなことのみで日々を過ごすことを恐れよう。しかし、コストや作り易さに何の配慮もしない確信犯は見つけ出し教育しなければならぬ。外注設計だったら、今後の関係を考え直さねばならない。誰の考えかを突き詰め、そこに至った説明をさせようではないか。間違いは再発しないように手を打とうではないか。何度も、そしていつまでも同じような無駄を続けるわけにはいかない。特に、目的は達成しても間違いだと思われるものについて議論しよう。

忙しいさなかに会社を離れるのは大きな不安もあるが、もう現場にいて陣頭指揮をする時代を終わりにしようと思っている。遠くにいて情報で管理し、現場は次の人達の出番としたい。これが進まない、いつまでも会社が次のステージを迎えられない。ただ情報を伝える事だけは忘れないのが、次のリーダー達の条件だ。

2000年10月8日

ラジオ体操への思い

プレシードでは創業以来、朝礼の前に全員でラジオ体操が続けている。私個人はサラリーマンとして社会人になった日から続いている。ラジオ体操には思い出と思入れがある。

1980年、私は何年も人に出遅れてやっと5月に地元企業に就職した。出来れば人生の遅れを取り戻し、二度とこの悔しさを味わいたくないという思いを強く持っていた。就職した機械メーカーは、大学の専門からは畑違いであり、何も自分をアピールできる肩書き資格も持ち合わせていなかった。何とか今から自分に力と自信をつけていきたいものだと思底思った。そのとき、「何か簡単なことでも一番になれるものを探そう。」と決意した。その一つが「ラジオ体操だけは社内では一番になることを目指そう。少なくとも誰よりも一所懸命にやることは今日からでも出来るはずだ。」と心に誓った。決して運動が得意な人間ではないが、それ以来20年以上ラジオ体操を手抜きしない姿勢は変わっていない。毎日そうやって続けていくといういろいろなことに氣付くようになる。

まず、健康状態を实によくチェックできるし、よくない部分を戻す力にもなり、腰痛など病気の予防等にもなる。私の体の柔軟度があまり落ちないのも勿論ラジオ体操のおかげである。全ての動きに無駄がなく、全ての筋肉や筋の状態がチェックできるように造られている。実によく考えられていると最近でさえ新たな発見がある。誰よりも上手にラジオ体操が出来るとは言わないが、20年間ずっと進歩しつづけてきた私のラジオ体操である。

しかし、本当のラジオ体操の効能は、肉体に及ぼすことよりも人間の精神的なありさまを映し出すテレビのような力に奥の深さを感じる。新入社員がラジオ体操をするのを見ると、本当に今までの生き方や性格、考え方が見えてくる。協調性、自信の有り無し、正直な人間性かごまかしの人生を送ってきたかなど、不思議なくらい見えてしまう。文章や会話で接してそんな筈はないと思っても、ラジオ体操を通して見る直感が正しいことが多い。どんなに取り繕っても見えてしまうぐらい正直に現れる。ラジオ体操がいい加減になって来たり、音楽のリズムと合わなくなってきた社員がいたりすると、間違いなく社内での存在感が薄くなってきている。辞めてしまう遙か以前に予測されることが多い。心配事が有る者は力が抜けて目がうつろな体操になる。逆

に日頃の行動が変わり、社会人として成長してくると、ラジオ体操も間違いくなくなくなってくる。行動、精神のありようがラジオ体操を変えてしまうのだろうが、逆にラジオ体操に精神や行動を変える力はないのだろうか。そうであれば、ラジオ体操を一生懸命にしていると精神も高まり、人生が開けていくと言えるのだが。少なくとも私の場合には、ラジオ体操が自分を成長させる効能は随分あったように思う。

そういうラジオ体操ではあるが、入社後、ラジオ体操がうまくなつていく人は少ない。入社の頃が一番上手だったような者もいる。暫く下手になりその後はつらつとしたラジオ体操をするようになった者も多い。

とにかく、毎日ラジオ体操をはつらつと出来る人は幸せな人だと言えるのは20年間で得た教訓である。

2002年5月17日

掃除にかける思い

プレシードでは、一部の有志で毎日朝から掃除をやるのが日課となっている。新入社員には朝から30分間掃除をするように指導もしている。水曜日には定時終了後、30分の社内清掃を呼びかけている。決して強制しているわけではないが、一部の社員には圧力と感じて参加している者もいるかもしれない。あるいはそれに反発して参加しないことに小さなダンディズムを感じている者もいるかもしれない。入社以来、朝の掃除に一度も参加しないツワモノ(?)もいる。いろんな社員の思いを背景に社内清掃は続けられている。

私は掃除をすることで多くのことを学び、未熟者なりに成長してきた。掃除を強制はしないが、参加を勧める理由を語ってみたい。

掃除をする社員の中にもいろいろなパターンがある。毎日同じ場所で箒を動かすことを掃除と心得ているものから、汚れ方によって掃除道具を変えるもの、毎日違う場所を掃除するもの様々である。私の掃除は二つのパターンがある。ひとつは私の持ち場所である事務所トイレを磨くこと（掃除とは呼ばない、磨くと呼ぶ）と、工場内で、今

日最も掃除を求めている場所（そう、私を呼ぶ場所）を探して掃除するのがある。以前の工場は、トイレが一箇所しかなかった上に、簡易水洗であまり水を流すことが出来ず苦労した。小さなトイレではあったが、作りも悪く液漏れや詰まりに手をとられることも多かった。それに比べれば今のトイレは実に気持ちよく掃除が出来る。

朝の掃除に参加しない者が言う言い訳によくあるのが、朝はゆっくり家族との会話をしたい、早く出社することは、家族がある中で難しいなどと聞くことが多い。本当に障害が生じ解決ができなかったのだろうか。家族全員が早く朝のスタートを切る生活の豊かさを味わったことがあるのだろうか。遅く来る人が本当に朝から家族との交わりができているのだろうか。朝早く起きて朝食を和やかに取っているのだろうか。早く来る者も色々な思いを抱きながら、理想を追っているのではないか。

あくまでも掃除は自発に任せたい。それが会社の環境を高いレベルに保つ結果になるプレシードでありたい。環境管理も自発で出来なければ、もっとも自発で行うことが要求される開発型企業の看板は下ろさねばならない。

2002年8月9日

乾いた雑巾

私は、資本主義市場の競争原理が支配する中で組織運営に責任を持たねばならない。簡単に言えば「利益を出し続ける仕組みを命がけで創り、そして守らねばならない」利益を出した後で、初めてそれを減らしたり遣ったりすることが許される。

赤字の物件、赤字の経営では、例え社長といえども会社利益に反することは絶対に指示するはずがない。もし、あなたの目の前で利益を減らす行為があるとすれば、社長命令や市場の原理に違反している怠慢行為だ。見逃すあなたは共犯者だ。

私は社内のあらゆる事を知っているわけではない。いや、守備範囲が広いだけ個々の問題は最も知らない人間だろう。諸君が私の代わりに全員で立ち向かって貰いたい問題は、会社から出て行く金を極限まで小さくして貰いたいことだ。必要な金と無駄な金がある。例えうまく行っていることでも「もっと良い方法」、「もっと節約できる改善」を進めたい。ベストはあり得ないと信じよう。目の前には必ず無駄がある。見逃さないで貰いたい、その蓄積が諸君の給与の元となるのを理解願いたい。「乾いた雑巾を更に絞れ」という前に、まず「ずぶ濡れ雑巾が垂れ流す水を絞ろう」という段

階だと思う。改善は自分の事は難しく、他人の批判は簡単かもしれない。だったらお互いに変わることを変わるまで求め続けようではないか。無駄からは何も産まれない。失敗は無駄ではない。失敗が活かされなとき「無駄」になる。

例え社長命令と言われても、今は金が最優先である。社長が金を失うことを指示するはずはない。社長の指示と確認するまで無駄は許すな。設計を変え、営業を変え、購買を変え、製造を変え、そして社長を変える、いや「替える」でも良い。変えねばならない。皆で団結し利益を産み出すことに協力願いたい。

2007年3月13日

感動を創造する その2

人が感動するのは自然の摂理や心理、美しさなどで味わうことも多いが、最も多いのは人の行動による感動ではなからうか。命がけの人命救助や文化勲章をもらうような技もあれば、日々の生活の中で見つける社会を守ったり温かく支える人たちの行動も多い。後者に属することで、私が感動した古いことと新しい些細なことを紹介する。

1989年、プレシード創業前夜と呼べる時期に起きた天安門事件。天安門の群衆に人民解放軍が解散制圧も図って侵入してきたとき、侵入する戦車の前に一人の若者が両手を広げて立ち塞がった。

同じ民族での流血を何とか回避したいとの一念からだっただろう。戦車も同じ人民を轢死させるのを避けるべく進路を曲げると、更にその前に立ちふさがる。その繰り返しで幾度となく行われた。私はこの光景をテレビを見たとき涙するほど感動した。そしてこの青年のことを生涯忘れないでやろうと誓った。

その後の青年の消息を私は知らない。国外へ逃亡したとも聞かしくし、殺されたとも聞いた。しかし、彼は私の人生が続く限り私の心の中で生き続け、私を励ましてくれる。「自分の命より遥かに守る価値が有るものは存在する」と。困難に出会った際、彼が時々私の心に現れて勇気をくれる。「何を恐れる、真に守らねばならないものを考えよ」と。

その後の中国を彼はどこから見守ってくれているのだろうか。

もう一つ些細な？感動。

東京事業所が入っている蒲田のビルのトイレが実にいつも綺麗であることにある時気づいて何人かの人に話したことがある。ある日、朝早く行くと、一階の玄関付近にこやかに掃除している白髪混じりの婦人に出会った。その場では「おはようございます。」と声掛けただけで過ぎてしまったが、後でこの人が掃除の主ではないかと思つて、東京事業所のU氏に確認したらやっぱりそうらしいと分かった。

明るそうなおばさんだが、掃除している風景で感動したのではなく、掃除の結果で感動させてくれるのだからやはり只者ではない。いつか話をする機会でもあれ

ばと思っている。そして訊いてみたい「どうしてトイレ掃除にこだわるのか」と。

私も創業以来約16年間、ほとんど毎日トイレを掃除した。そして後進にその道を譲るときの為にトイレマニユアルを書き遺した（それを今日は添付するが）。

しかし、マニユアルは所詮マニユアルである。マニユアルでは人に本当の感動は与えられない、マニユアルがきっかけで始まって、人に対する思いやりの心にならない限り、本当の感動を創造するには至らないとつくづく思う。デパートや小売業の顧客満足度を推進するとき、マニユアルが先ず取り上げられるが、行き着くところはマニユアルを道具として、思いやりの精神まで昇華できているかが問われることになると思う。

昨日テレビで中国の暴動で破壊された平和堂の復活が伝えられた報道を見た。人をもてなす精神、顧客に喜ばれようとする精神が中国人スタッフに育っているのを見て感動した。破壊する中国人もいれば、お客様満足を喜びとする中国人、それに感動する中国人もいるのだ。感動を創出したり貰ったりする世界には、不易な破壊や避難応

酬はあり得ない。先ずは目の前の相手を感じさせる人でありたい。

確かに難しいことだが…。

私のトイレ掃除への思いと「マニユアル」

創業間もない頃よりトイレ掃除を始めた。創業の地のトイレは簡易水洗であり、施工が悪くオーバーフローや水を多く使えない掃除に悩まされた思い出がある。現在の本社工場へ入居後は、事務所トイレのみ週一回のペースで掃除をしている。私が掃除しているせいか、皆が比較的清潔に保ってくれていることに感謝している。それでも10年以上続けていると、洋式トイレの便座の裏の汚れ方で、何人かの社員の在・不在などが分かるようになった。トイレ掃除にも様々な字びと進化があった。

そもそもトイレ掃除を続けてきた思いをここで改めて書き残しておきたい。トイレ掃除はまさに経営に似ていると思ったからである。掃除しても掃除してもすぐに汚れる。汚れるから掃除しないのであればやがて使えなくなる。経営も会社を継続すると言うことは、まさに当たり前の事を維持していく力があるかに尽きる。また、トイレ掃除というのは、一般には汚くて屈辱的な事である。経営者は最も先頭でスポットラ

イトを浴びると共に、陰では最も悲惨で屈辱的な事にも立ち向かわねばならない。それを自分に暗示するのがトイレ掃除だと思い、十数年前、継続することを決めた。

ならば、その汚いことや嫌なことの象徴に、如何に前向きに取り組むかを考えてみて、以下のような目的意識をもった。

- 1 徹底的に綺麗にする。
 - 2 資源を無駄使いない。
 - 3 手順を研究し最も効率的な手法を確立する。
- トイレ掃除をやり続けると実に奥が深いことを感じるし、今でもいろいろな発見や学ぶ事が多い。もし、これを嫌なことから逃れたいこととして続けていたならば、学びの少ないことであつたかもしれない。

トイレ掃除マニュアル (20分コース)

最近、嘉島事業所出社と出張により本社工場に始業前に出社することが殆ど無くなったのを機に、私にとって企業統治の象徴であるトイレ掃除を高山常務に引き継ぐこととした。この機会に私がやってきたトイレ掃除のマニュアルを書き残す。

注意

- 1 トイレ掃除は始業前に必ず完了すること。
- 2 かつて30分以上かけて行つた同じ内容を、腕を上げて20分に短縮できた。手抜きはあつてはならない。
- 3 洗剤や薬液は最低限の使用にする。

手順

- 1 照明と換気トイレ扇のスイッチを入れる。
- 2 トイレ内の踏み板と掃除道具を廊下へ出す。
- 3 箒とちり取りで一面を掃きゴミをとる。
- 4 ホースを手洗い蛇口に繋ぐ。この際に抜け落ち防止のためU字トラップに掛ける。
- 5 バケツに6分目の水をためる。
- 6 小便器を一度流して表面を濡らした後にスポンジに洗剤を少量つけて磨く。特に目で見えない部分に結晶化する。便器磁器部の内と外を丁寧に磨く。スポンジや2層型が良いが、研磨剤や堅いスポンジは使わない。
- 7 洋便座は蓋の裏側が最も汚れているので、最初にスポンジで拭き取る。便器内は

部屋内に設置している掃除ブラシの清掃もかねて隅々まで磨き、水を流しながらブラシとスポンジを洗う。

8 便器を洗った後、バケツの水を便器内に捨て新しい水に替える。

9 掃除用雑巾を濡らす前に便器の水分を拭き取り磨く。この際に汚れが残らぬように良く磨くこと。

10 洋便座は特に隅々まで拭き残しが無いように注意する。

11 バケツに少量の洗剤2、3mlを加え、雑巾を緩めに絞ってタイルを磨く。特に目地の汚れを拭き取る。トイレ掃除の醍醐味は自らの手で床面に這いつくばって磨くことにあると心得ること。

12 拭き終わったら雑巾を洗い、水を入れ替え、更に雑巾とバケツを洗う。

13 もう一度3分目の水に組み替えてスポンジや雑巾のすぎ洗いをし、用具を定位置に戻し、手袋をはめた手を弱酸性石鹼で洗った後外す。最後にバケツを水ですすいでかたづけける。ホースは手洗いのU字間に巻いておく。

14 乾いた壁拭き用雑巾で、鏡面、便器外側、時間の余裕に合わせて壁を磨く。艶を求める物は濡れ雑巾で拭きつばなしにしないこと。

15 壁ふき雑巾を水で洗って絞り、スノコやドアなどを拭き上げる。使用後、雑巾を良く洗い固く絞って定位置にかける。

16 アルコールを取手など手で触れる部分や便座にスプレーし、暫くして紙タオルで拭き取り磨く。使用する紙タオルは資源保護上一枚。

17 手洗い部分の陶器や蛇口をスポンジで磨く。石けん置きなども含めて石鹼カスの付着を洗い流す。

18 手洗い用弱酸性石鹼で手を綺麗に洗う。通常の石鹼はトイレに配置しないこと。

19 最後に、晴れた日には雑巾やトイレ掃除用具一切を直射日光に曝し干す。

以上が私のトイレ掃除法である。10年以上の経験を集積している。今後、更に進化させる人たちが続くのを信じる。トイレ掃除は、将に会社経営の縮図であることを理解する人が出てくることを期待する。

たかがトイレ掃除でさえ様々な方法があり奥義がある。まして企業を運営する方法など完璧はあり得ない。永遠に未熟が続くと自覚するのが会社を引っ張る者の覚悟だと思ふ。

最後に、経営もトイレ掃除も、考えて悩むのは汗を流して磨きながらでいい。徹底して磨く事から知恵が産まれる。

2006年6月30日

厳しさを楽しむ心のゆとりを

厳しい日々が続いている。経営者として多くのものを失ったとも思うが、冷静に振り返ると、失ったと思うものは金や物など経済的なものがほとんどだ。勿論、一部に経営者として信用を失った面もあるが、逆に支援者や多くの友情を確認できる感動も多い日々だ。

失った金やモノは、金さえ稼げば取り戻せるものが多い。取り返しがつかないものを失わないようにさえすれば、この不況は実に自己修練の機会であり、今まで気づくことがなかった社会や自己内面の発見の連続でもあり、感動が多い豊かな時代でさえある。

厳しさから逃れたい、早く終わりたいとばかり願う気持ちでいると、苦しみは倍増し逃れられない。自分を成長させる最大の自己啓発プログラムの中にいると思えば、この不況も興奮するゲームの味わいもある。私が借金している相手に話せば、実に不埒な人間であろうが、この気持のゆとりは冷静な判断とチャンス遭遇の拡大を産むと思っている。実に人生や社会の本質が見えやすい時代でもある。本気で生きている者

にとって、学びや悟りの多い時代である。この好機を苦しさから逃れることばかり願って生きていると、絶好の人生の妙味を味わうことなく見逃してしまう。

厳しい時代に生きているのは間違いないし、世界的歴史観から言えば、日本が旨いものを先に食べてしまった今、今から旨いものを食べるために努力し始めた途上国に、自分のごちそうを奪われるのは仕方がないことだ。この経済的豊かさの喪失感、日本中で当面続くだろう。しかし、それは相対的な喪失であり、失うことは解放されることでもある。穏やかで質素な生活への移行なら、その喪失途上であつても、楽しめる心の豊かさは失わなくていい。本来に必要なものは、意外と安価なもので容易に守れるものだ。衣、食、住、体を覆う服、活動エネルギーを安全に得られる食、風と寒さをしのぎ家族が暮らせる住というように比較基準さえ変えれば、欲を満たす“欲しいもの”は冷静に考えればそんなに必要なものではない。それを得られないことで気持ちの貧しさを味わうほどのものではない。本質を見つめ豊かな精神生活を守ろうと思う日々である。

「厳しい日々は感動の多い日々でもある
2009年10月5日

ワンマン経営回帰宣言

創業以来、自主、自発を重んじ自由闊達な企業を目指してきた。勿論、ワンマンと思われる部分も多く、それを感じる社員も多いであろうことは認めるが、一方で私個人の想いとしては、経営者としての強引な欲求は抑えて来たつもりではある。創業来23年を振り返れば、思いを通したところ、我慢して妥協してきたところの蓄積が今のプレシードを形作っている。想いを通して上手くいかなかったことが多々あることも認めるが、妥協して諦めたり求めなかったりしたことにより、成長や企業文化の形成を阻害した点も多いと感じるこの頃だ。

ここで敢えてワンマン回帰を考えている。もうそろそろ事業継承を考えて行かねばならない歳にもなってきた。早ければ3年、長くても10年以内に次期社長の時代を到来させたいと思っている。人選もさることながら、どのような人と組織を次世代に引き渡すかは私の大きな責任である。だからその前に組織を私が思う通りにリメイクして操ってみようという気になった。

創業者だから出来る我儘を遣り通して後継者に引き渡したい。次期社長には創業者

以上にワンマンであることは周りが許さないだろう。そうであれば、創業者が思いっきりワンマンで運営した後の後継者は、経営の自由度が高くなるとも想像する。

勿論、ワンマンが目的の組織運営をしたいのではない、あくまで社長判断でスピーディな経営を気兼ねなく行って、トップマネージメントとして最後の遣り残した挑戦課題に向かいたいと思うからだ。

ワンマンのそしりを受けてでも実行したいテーマは主に以下の三点である。

1 5Sの徹底

製造現場ばかりではないが、製造業として「整理」、「整頓」、「清潔」、「清掃」、「躰」があまりに遅れている。使用した道具は放置されているし、机上には私物や飲食の残骸も散乱している。綺麗だった床も物が散乱し、隅にはゴミの吹き溜まりが発生する。

作業始めた時に戻して帰るといふ原則が実行されていれば防げる現象である。理想がない職場と成っていくのを危惧する。常に「あるべき姿」に近づく努力を継続できる会社へ育てねばならない。

2 決議、命令の実行と報告

これは一般企業であれば企業の大小に限らず当たり前のことかもしれないが、我社では命令に対しての実行の放置や、予算や日程など決定された枠を無断逸脱することが多発している。また組織的な決裁がされていない事項が個人の一存で動くこともある。仕事は命令で動き、予算と命令は絶対であるという再教育を行わねばならない。

3 未来への投資

この件はリスクの伴う判断だし、多くの内外見識者の意見を取り入れ考慮するのは当然であるが、この方向を示しトップがスタートを命じなければ進まない。多くの社員や役員にとって、10年後より今年の業績に目が行くのは当然であるが、企業は10年後の責任を指さねばならないと思っている。今年には負担になることのように加減は経営トップのワンマン的判断も必要と考える。

思えば「社長とは我儘なものだ」と言われるのを怖れていたのかもしれないし、能力と躰が身に就いた社員で満たされた会社をイメージしたのかもしれない。自己啓発

に依る「自主」、「自発」を醸し出そうと努めて来た。しかし、現実凡人を非凡な能力を発揮する社員にするには、育てるところから始めなければならないのが一般企業だ。むしろスタートは平均以下であることも覚悟せねばならない。そこにはどうしても強制が必要だと痛感するこの頃だ。たとえ未熟者達にワンマンと言われようと、断行せねばならない躰がある。子供であれば放置しない悪癖は自発を待たずに実行しようと思うに至った。

今後益々、社員数も取引も拡大して決裁事項も増える中に、能力が衰退していくであろう社長の能力拡大を図るのは矛盾していて危機を感じるかもしれないが、社長の加齢による能力低下を組織補完することで能力拡大を図る仕組みを作ることこそ重要だと考える。

具体的には情報企画室の社長補佐機能を高め、取締役やその下位への指示判断を間違わない為の情報収集と見える化を推進することだと思っている。勿論、ワンマン化は目的ではなく、目標達成の為の組織運営手段にすぎない。経営者として遣り残しなく指揮を振るい、事業継承時にはプレシードに成長と安定をもたらすことに挑戦したい。次期経営者には先ずは守りから始めれば大丈夫という事業継承をしたい。勿論、

常に挑戦し続ける企業体質は継承して貰うつもりだ。

残念ながら2012年11月1日の満23年の創業記念日現在、未だこの宣言は社内が発令していない。

2011年8月20日

仕事に感謝

目の前に、やれば生活の糧を得られる仕事があるのは、働く人からすれば時として当たり前に見えるかもしれないが、経営や営業から見れば、あるのが奇跡といえるくらいだ。市場原理の経済社会で、顧客が金を払う対象として我々の商品に価値を見出してくれねばならないし、我々の存在をその前に知ってもらわねばならない。仕事と出会い、我が社の技術や価値を納得して貰い、競争相手よりも何が優れているか、何がメリットかを伝えねば仕事は得られない。これは自由主義経済世界のあらゆる産業に共通のルールだ。

「あかねグラノラ」の事業も始めて1年が過ぎた。多くの人が商品を褒めてくれるしファンもできた。しかし未だ利益事業というには程遠い。多くの人に知ってもらうために、全国の催事に出かけて試食販売をして気に入って買っていた。デパートで一日立ち尽くし、お客様に試食で説明しても、一日の売り上げが数万円というのがほとんどだ。それでやっと出会いができ、毎日数十人の人が買って戴く。その中の一部の人々が、ネットで我が社のサイトから購入してくれる。これを積み上げて事業が

育っていく。有りがたいことだ。本当に購入しやすいようなシステムになっているだろうか、電話での申し込みには他社の通販のような明るい笑顔とわかりやすい説明ができているだろうかと不安になる。

一般消費者を相手にするこの事業を手掛けて、10万円の売り上げの大きさを改めて感じるようになった。今までの生産設備の受注製作事業では、図面1枚を1時間かけて見直したり訂正したりすれば、直ぐに無駄な10万円くらい稼げるし、いい構想であれば数時間で数百万円の価値創造も出来る。しかし、それに慣れてしまつて、無駄を流し続ける体質も生まれているのを危惧する。僅か数時間のエネルギーを注ぎ込むことで、数十万円の無駄を防ぐ努力を怠っていないだろうか。5万円の売り上げを稼ぐというのは、1日売り場に立って足を棒にし、声を張り上げねばならない程のことというのを忘れていないだろうか：不安でならない。1万円の利益を上げることが如何に大変なことなのか、もう一度考えてみたいものだ。それでも「あかねグラノラ」はまだ恵まれている、他との差別化ができて話を聞いてもらえる。あなたは自分の力で何を5万円売れるだろうか。

今日、目の前に仕事があり、それをやれば生活の基盤である収入が得られる、何と「有り難い」ことではないか。そう、これは当たり前ではないのだ。考えてみて貰いたい。自分の労働の対価として収入を得るのに、如何にその仕組み創りと運営に人がかかわっているかを。営業は顧客の要望を見つけ捉えて注文を貰うのに神経をすり減らし、設計は僅かなミスで巨額の金が吹き飛ぶという緊張感の中で図面を書き、購買は納期に間に合わせ且つ予算内に入るかを心配しながら資材を調達し、製造は不具合を発見し、手直しが発生しても納期に間に合わせねばならない。一人の仕事のために、前後に多くの人たちが活動し自分の役割を作ってくれている。だから一つの仕事に集中できる。この仕組みこそ我々が創り上げ守らねばならない財産だ。

自分のやるべき仕事が目の前に揃うのは当たり前のことではない、多くの人たちの支援で生活が成り立っていることに感謝したい。働いて世の中に貢献できる仕事が、自らに与えられている仕組みと仲間に感謝して仕事に向かいたい。家族の衣食住の基盤を支える仕事を与えてくれる顧客や仲間に感謝し、いつの日か社会に恩返しすることを忘れないで仕事に励みたいと思う。

2014年6月23日

仕事は段取り

理想的な仕事をするのがプロの仕事ではない。理想的な仕事に近づけていく仕事こそプロの仕事。理想的な状態になればその仕事はアシスタントレベルの仕事と変わらない。回りには出来ない理由と変えられない理由が溢れている。私にとって人というのは、恐ろしいくらい現状肯定的で変化を模索していないように感じる。一方では思うように行かない現状に不満を吐き、人のせいにして、自分には不可抗力だということにして気持ちの安らぎを作る。自分のせいにして苦悩することを回避し、他人が問題に手をつけるまで、ぼやきながら人生の貴重な時間を食いつぶしている。

人は安らぎを得たいが為に自分の努力の範囲にある達成目標に目をつぶる。

タクシードライバー

この一週間は東京、台北、上海、名古屋と実に動き回った。日本国内では公共交通機関の発達と土地勘があるので出張でタクシーを利用する機会は少ないが、海外では今回もよくお世話になった。日本と違って海外では、乗ったらメーターが上がるのをハラハラするほどでもなく手軽に利用できるのはありがたい。外国からくる人にとって、日本はタクシー料金が高いのは何とも不便ではなからうかと思う。

海外では一般的にタクシードライバーの社会的身分は高くない。世界の多くの大都市では地方や海外からやってきて手軽につける職業でもあるようだ。言葉は通じなくても行先だけどうにか伝われば大きなトラブルもなく連れて行ってくれるのは何ともありがたい。

社会的に身分は決して高くないが、タクシードライバーは雇われてはいても個人経営の原点のように感じる。給与体系は、少ない基本給に出来高上乘せというのが世界中の基本ルールのようなのだ。客をじっと待っていたり、車を止めて寝ていても生活できるほどの給与にはならない。どこへ行けばいい客が拾えるか、時間によったり、天気

によったり、曜日によって待機したり、流す場所を判断しなくてはならない。誰かの指示待ちで動く労働者では生活できないのだ。皆それぞれ一生懸命工夫する、客を乗せれば今度は早く目的地へ到着する道も工夫する。皆、道に詳しいし、ホテル名や地名を実によく知っている。経営者と同じだなあと感心する。

そう、皆自分を経営している。自己責任で生活を守り向上させるために一生懸命に策を練り、道を覚え天候で客の動向を予測する。判断が悪ければすぐに身入りが減るし、対応が悪ければ客から会社に携帯ですぐにクレームが入る。けっして収入も高くないし、常に客を捜し、安全に気配りし、顧客とのコミュニケーションに気を配るという大変な仕事だが、皆さんそれなりに楽しんでいるようにも見える。それは経営の楽しさ、自由の楽しさだと思う。自己責任で動く世界は、人から指示されことをこなすだけの職業とは違った楽しさがあるのだと思う。

私が常日頃口にする「主体者たれ」がここにもあるように思う。決められたルールを守るといふ最低ルールを果たせば、鉄道や路線バスの運転手と違って自己の判断で生計をマネジメントする。収入をかけて良くも悪くも判断した成果を受け入れるという納得できる職業だ。自分だったらどの辺へいつてどのような判断して営業するだろ

うかと考えることがよくある。会社とは本来、タクシー会社のように場を提供しその設備と環境を利用して夫々が工夫し収入を得て人生も収入も拡大させる、そのような存在であるべきだと創業のころより思っている。遣り甲斐も生き甲斐も自分で工夫するところから生まれ、失敗は自己責任とともに会社も支えてくれるのが組織で働くということだと。就業規則でがんじがらめに縛り、それに従うだけで収入を得るような従来型の雇用関係は嫌いだ。人間は責任果たしながら本来自由でありたいものだ。

ちなみに、国内でもドライバー個人やタクシー会社によって運営方針も様々だ。タバコ臭く二度と乗りたくないというタクシーもあれば、今度もこのタクシーに乗りたいたいという車もある。京都のMKタクシーなど、一時サービスの模範として評価を上げたし、やがて客が選んで乗ってくれるようになった。打算だけでやっているのではないだろうが、いいサービスは結局、自分達の収入の拡大と生活の向上にもなる。私が経営理念の一つに謳う「感動を創造する」の手本のようにも思う。

余談ながら、熊本にも熊本交通タクシーというタクシーが走っている。今度、タクシーに乗る機会があったら是非、選んで乗ってみてもらいたい。実に気持ちよく応対して目的地まで運んでくれる。不愉快な気持ちで降りるタクシーと、また乗りたいと

思うタクシーにビジネスの原点を見る思いだ。降りるときに「私はこのタクシーの感動創造に負けてるなあ」と反省と発奮をくれる会社でもある。私も仕事において市場に「感動を創造する」会社でありたいと改めて思う。

2014年10月20日

新たな挑戦の報告と掛ける思い

2015年の1月も今週で最後の週となる。新組織で配置換えとなった諸君も新しい席や職務の受け取りが終わる頃かと思う。

人生は大きな転機もさることながら、常に変化の中にある。季節が常に移り行く中で、変化しない安定を求めるほうが困難と言える。ならば変化を積極的に求め、むしろ人生の醍醐味は変化の中にあると考えたいものだ。

去年と同じ仕事であっても、取り巻く社会も技術も市場も変化している。その中で変化もしない商品と自分を提供することは、果たして市場が求めることだろうかと考えてもらいたい。もし変わるものの中に永遠に変わらない真理を見つけたとすれば、其れこそ人生の宝と言えるだろうが、それ以外には我々も常に変化を求めたいものだ。私はそれが市場から求められる使命だと思っている。

さて、先週の熊日新聞でも報じられたが、今週28日水曜日に、上天草市で日本最初の10kW小型風力発電の系統連系がプレシードによって九州電力の送電線に接続される。

思えばこのプロジェクトは2012年の初夏のオレゴンからの電話で始まった。

「日本国内へ小型風力発電の普及をしたい会社がある。相談に乗って貰えまいか...。」と。

ソーラー発電業界ならある程度の知識を持っていたが、風力発電など全く業界の知識がなかった。ましてや日本に前例のない小型風力発電の系統連系を目指すなど、正直言って全く見通しがなかったが、プレシードが秋から有料コンサルとして調査や交渉代行を東京の数佐取締役と共に行うことから始まった。

昨年からはコンサル契約を辞めて、ビジネスパートナーとして日本国内への普及総代理店として取り組んだ。そうはいっても、先が見えない間は専従員を配置したり、無責任な拡販活動を行う訳にもいかず、唯ひたすら一日も早い系統連系実績を作ることを目標に、東京での数佐氏、熊本での久富部長、澤山社員と共に、電力会社や行政、関係団体、用地探し、工事関係者との交渉を進めた。

設置工事が昨秋終わり、やっと今週、その思いがビジネスのスタート位置に立った。関係者には改めて慰労の意を表すとともに、今後への油断なき準備を願いたい。

未経験の新しい事業を始める時、常に不安と恐怖が付きまとう。ましてや日本に前

例がない事業となると尚更だ。

大麦グラノラも日本に前例がない食品の事業だった。創業間もない頃開発した「殺菌乾燥機能付き靴収納庫『飲靴王』」も前例がなかったし、「簡易クリーンブース『プレハブース』」もそうだった。確か簡易クリーンブースという言葉を日本で最初に使ったのも私かもしれない。

未経験の分野に足を踏み入れるには、真似する物がなくアドバイスも受けられないし、ビジネスとして、或は技術として成り立つかという不安さえのしかかる。それでも既存の市場に、人まねで参入してパイを奪い合ったり、或は下請けとして親会社の指導に従って主体性のないビジネスに参入するより私には魅力的だし興奮がある。人まねや下請けにはある程度の事例見通しや保証があるが、それは将来を保証するものではなく、ともすれば企業の主体性を奪っていくことに私は不安を感じる。

どうせ自社がやったことがないことを始めるのなら、どこの企業も遣ったことがない、前例なきビジネスに挑戦し続けようと思う。プレシードらしさは、未経験のことにヘリスクを読みながらあつさりと挑戦してしまうことでありたいと願う。人まねでな

く自分らしさ、プレシードらしさに拘る集団を何とか成長し利益を産める集団とするのが、私の創業者としての最大の願いである。その最大の願いが今から幾つも動き始めるし、今後もそれを繰り返せるように何とか成功へ導きたいものだ。社会で先駆けする（プレシードするといいたい）ということは、常に不安であるし想定外との出会いの連続でもある。常に人生は不完全の連続であることを肝に銘じながら歩みを進め続けたいものだ。諸君全員の主体者としての企業活動への関わりに期待する。

「古の先行く人の後見れば 踏みゆく道は紅に染む」 〈新渡戸稲造〉

遙か昔、最初にこの歌を知った時は、なんて独りよがりのキザな歌かと思ったが、今は素直に共感する。

最初に歩くということは、新雪深い雪道を歩く順番に似ている。楽な位置は後ろに決まっているが、先を歩く気迫とエネルギーは次の新しい道を作る力の証明でもある。この歌のように、道を血に染めるくらいの覚悟をもって先を歩みたいものだ。

2015年1月26日

「時間がない」とは？

よく社会の付き合いの中で会合出席や仕事を依頼したりすると、忙しいのでという断りを聴くことがある。私は絶対にその言葉を吐かないよう努めている。思わず吐きそうになっても飲み込んでしまうことにしている。この言葉を吐けば、人生は収縮し自らの成長のチャンスを捨ててしまう気がするから。

突然のアクシデントで身動きとれなくなったり、短時間で全ての時間を注ぎ込んでも間に合わない場合など以外は、時間がないのではなく、自分自らが一方の可能性を捨てる選択をしているに過ぎないと、私は思うことにしている。

時間は創りだすものとも思う。余裕がないと思えば時間は生まれない。忙しい人に余裕がないかと周りを振り返れば、忙しいと思える人ほど、趣味も仕事も家族団らんも楽しんでいるように見えないだろうか。逆に傍から見ればヒマと思える人に余裕がなく、「時間がない」と嘆いている人が多い。私の人生経験では、頼み事は忙しい人にすれば素早く手を打って呉れるし、行事にも誘えば何とか忙しい中に時間作って付き合ってくれるというのを数多く経験している。忙しい人ほど時間を創りだすのが上

手いし、時間がないという言葉を吐けば、人生が空しく受け身で生きることを知っている。何とかその達人芸にあやかりたいと思う。

逆を言えば、手紙やメールを送っていつもすぐに返事をくれる人は人生を豊かに送る達人だし、誘い事にも乗ってくれる。目の前の作業を、根詰めて前倒しして時間を作ってくれたりもする。

時間がなかった、忙しいからできなかった、と口から吐くことに惨めさと情けなさを感じる人は、そこに抵抗するし、両立させようと試みるし、何時かそこを脱出し時間を有効に使い時間を創りだすことに成功する。

「時間がない」を言い訳に吐き続ける人には、一生時間は余らないだろうし、寂しい受け身の人生となる。忙しい日々の中に生きていると思って生きているだろうが、忙しい日々だからこそ趣味や勉強や家族団らんの為の時間を創りだせるような生き方をしたいものだ。

段取りを進化させればいい、作業効率を上げればいい、睡眠時間を削ればいい、その困難が進化を創りだす。時間は創りだすものと自分に言い聞かせたい。

2015年2月2日

人を活かす

自分で経営理念に掲げながらも改めて難しい言葉と思う。この言葉を自問するのに二つの局面に接することがある。

一つは人材と呼ばれるように人の能力を伸ばすことだ。更に上をめざし能力と存在価値を高めるといふ、まるつきりプラス思考の場合だ。私の責任は、他の環境だったら更に成長できた人を小さな成長で止めてしまわないこと。プレシードに来たからには、豊かな人生が花開くチャンスを提供したいと心から願う。これは経営者の喜びでもありプレッシャーでもある。

もう一つは、「この人はダメだ、期待を裏切られてばかりだ」という場合だ。私は人を能力で排除しないと宣言してきたから能力不足をいうつもりはない。むしろ能力不足であれば私のプラス思考のテーマであり、活かす場所探しは経営者の手腕の見せ所と捉える。問題なのは仕事を遣る気にならない人、チームに貢献しようとしないう人、更には人の気持ちを裏切りもてあそぶ人だ。ズルや誤魔化しや手抜きを目にしてしまうことがある。

人間は聖人君子ではない、多くの人に少しはズルさもあると思うので、先ずは遠まわしに注意する。そこで反省と今後は行わないと誓い、またズルさを見つけてしまう。何度か繰り返す時、それでもこの人を活かしたいと思う一方で、もうこの辺で見切り付けないと此方の気持ちが耐えられない、悩む時間がもつたいない、他の社員に申し訳ないと思う気持ちが強くなってしまふ。私の気持ちは冷めてしまい、活かすより被害防止の対策になってしまふ。敗北感を重く抱えながら。

人の本質は変わらないものだろうか。人間社会の永遠のテーマだし、人が心入れ替えて大事を成し遂げ、人から尊敬される人となる物語はドラマにも多い。私の周辺でもそのマイナスをプラスにする物語が過去幾つかあった。悪い人ではなく、落ち込んだ気持ちが仕事にいい加減さを持ち込んでいたのだろう。そんな事例に出会うときは実に嬉しいし、経営者冥利につきる、この人は我がプレシードで人生がプラスに展開し始めた。

一方で、私の「人を活かす」は、掲げ続けてその重さに私は耐えられるのだろうかと思うことが多いのも現実である。経営理念を4つ掲げているが、最も重いテ

マであり、絶対に引つ込めたくない永遠の挑戦課題でもある。

油断して過去に犯罪者の排除を遅らせてしまった苦い思いもあるが…。

2015年7月10日

すべてを変えろ

サムスンのイ・ゴンヒ会長が1993年フランクフルトの会議で「妻と子供以外すべて変えろ」と言ったという。

多くの現場で変革をいうときに、現状のできない理由が並ぶのは世界共通だろう。変えて未来を目指すことが必要なら、障害を取り除く方向に向かおうという強い決意のメッセージだと思っている。

できない理由を語ってそこに留まり、現実の不平を受け入れ、進化もなく存続することが証明されるならそれもよしとしよう。今の進化しない現状は、何れ社会から或は顧客からそっぽ向かれてしまう。だからイ・ゴンヒはサムスンの低迷に強い危機感を感じ、未来を躍進の方向に変えたかった。だから叫んだ、「すべてを変えろ」と。

サムスは、その号令一下大躍進を遂げ、日本の家電業界から競争相手にされなかったサムスを、SONYを凌駕する企業に育て上げた。変える現場では色々な問題もあっただろし犠牲者もあったかもしれない。勿論、今もいろいろ問題もある企業だし味方する訳でもないが、間違いなくサムスは世界に知られる企業になったし、多

くの雇用を産み韓国国民に誇りをもたらした。日本企業に勝てないと思っていた社員や国民に自信を持たせ、やればできるという国の自信にもつながった。一企業の経営者が国を変えてしまったようにさえ見える。

イ・ゴンヒ会長が昨年倒れ、ビジネスの前線に指揮官として拘わらなくなったサムスンが今低迷している。偶然かもしれないが、一人の指揮官の叫びの存在は大きいということなのか。

「すべてを変えろ」と私も叫びたい。変えてプレシードに進化の実績を作り、変えれば自分たちの未来も変えられるという自信を持つてもらいたい。未来は自分の手でどうにも変えることが出来ると。

2015年7月12日

文化統治

創業時から機会ある毎に言ってきたこだわりに「企業文化」という言葉がある。

「会社は自由でありたい。服装も出勤時間も本来自由でありたい。しかし、人が増えてくると様々な場面が発生する。気心の知れた同志が働く時代から、やがて考えも常識も異にする人が入ってしまうかもしれない。それを受け入れない認めないために、ルールが次第に増えて窮屈になって行くのは仕方ない。ある程度は仕方ないことだが、出来れば企業文化で運営したい。文化であれば何かの都合で違反しても処罰の対象にならないから」と、ずっと語ってきた。

今、朝から就業規則でもないのに掃除をしてくれる人も多く、本社の床はいつもピカピカというようなことは実に嬉しい企業文化だ。私が掃除しなくなると2年以上過ぎたが、床もトイレも益々ピカピカになってきたのは企業の文化統治と思う。創業以来、掃除は強制ではなく自主参加をずっと呼び掛けてきた。

家庭の事情でどうしても参加できない人もいるだろう。その人はピカピカの床を歩いたびに、感謝の気持ちと他のことで恩返しするという気持ちが生まれるのであれば企業は強いと思っている。多くの企業で朝掃除は行われているだろうが、我が社の掃除は強制ではないのを誇りとしていたい。

先日、ある会合で会った税理士の先生が「トイレと床の隅10センチが綺麗な会社はつぶれない」と言ってくれた。思わず「だったら我が社は潰れない」と喜んだの思いたす。

「就業規則を今後も出来れば増やしたくないが、人が増えると次第に規則は増えていくだろう。今は100人以上の人が働いている会社となってしまったが、「出来れば企業文化で統治したい」と、未だ社員が10人もいない頃から言っていたように記憶する。

一つの組織で他人同士が働く為には勿論ルールが必要だ。しかし、就業規則も法律と同じで、違反したら罰しなければならぬ。決まりは厳正に適用する組織でなければ乱れた組織となり、真面目に生きる人が報われない状況を作り出す。

家族という社会では明文化した規則はないだろうが、お互いが思いやり気づき合うことで家庭という社会が平和に運営できる。

隣の家とは違う家庭の文化統治があり、仲良く暮らせる。それでも全く気配りもせず、一人の家族が文化破壊の行為を繰り返すと、家庭でさえつらい環境となってしまうことだろう。

「文化統治」には全員に少しの我慢と頑張りと気配りがあつてこそ運営できる。「皆が少しの我慢をすることで全員が楽しく働ける職場」が、私が創業以来目指す職場環境だ。

蛇足ながら、もし交通違反者に罰則を適用しないと、あつという間に違反者が増え道路は危険地帯となりトラブルが絶えなくなるだろう。

同じく企業も就業規則と雇用契約で運用するのであれば違反者は処罰されねばならない。それを怠ると組織内部が信用できない効率の悪い職場となり、一所懸命働く人にとっては働き甲斐の無い職場ともなってしまう。守らねばならないのは、真面目に

働いている人であるのは会社も国も同じだ。

企業文化を育て、大きな違反処罰の無い企業運営を目指したい。

2015年7月26日

皿回し

随分長い歲月、経営者を遣らせてもらっているが、早い頃から「経営は皿回しのようだ」と人に言っていたような気がする。会社が100名の組織になっても未だその実感は変わらない。

幾つもの皿を回していると、油断すれば落ちかける皿が出る。それを回すのに走り寄って集中すれば、また他の皿が落ちかける。幾つもの皿に目を移しながら、回転が怪しくなれば飛びよって力を注ぐ。皿も回るが、目も回る日々の連続だ。汗を流して勢いを戻しホッとしていると、幾つもの他の皿が落ちかける。

経営も創業時は営業、技術、購買、経理と社長雑務程度に思っていたことが、財務、人事、法務、広報、技術、開発、加工、組立、等々と様々な皿が増えていく。大きい皿小さい皿どれも落としたら大変だ。各皿を責任もって回す責任者を配置しなければ、これ以上増やすのも難しくなるし、回っている皿さえ落としてしまう。責任もって回してくれる担当責任者が幾つかには配されているが、まだまだ必要だと強く感じる。

業務で言えば、其々のプロジェクトも同じだ。多くの受注物件を並べて皆で管理するという手法は、誰もが注意を怠ったり関わりを避けて目をそらしていた物件が棒の先から落ちかける。皆で慌てて駆け寄り落ちないように必死に回す。放り出された他の皿がまた悲鳴を上げ、また駆け寄る。時には落としてしまつて被害を出す。そのような印象を感じたことはないだろうか。

もし、ひとつの皿を監視する責任を一人決めていれば、少なくとも個人の回す力が弱くても、騒いで周りの人を呼んだりして判断と対策が手遅れになるということは避けられそうに思う。大声で叫んで人を集めるか、「諦めていい」と言われて皿が落ちる道を選ぶまでは騒ぎ続けることが責任だ。諦めるのは組織のトップ判断でなければならぬ。気づくのが手遅れになったり、諦めが個人の判断であつてはならない。なぜならば被害は皆が分かち合うことになるのだから。

今後さらに管理部門も業務部門も更に多くの皿が棒の上にあがる。大皿の上に小皿が回る。夫々の大皿小皿を誰が見つめ回しているのかを明確にしておかないと、ある日突然思いもよらない所の皿が落ちて大きな被害の引き金となる。今、我が社には全ての皿各々を誰が責任もって回しているのか、誰が担当責任者なのかを明確にして運

営する必要性を強く感じる。共同責任、共同運営による運営は無責任にもなる。失敗した後にこそ共同責任で全社を挙げて対処する。

2015年10月18日

ジャズバンド型組織

社員数が15名を超える頃、組織運営の意思の疎通に大きな課題を感じるようになった。小集団では一か所に集まりお互いが必要な情報をいつでも取り交わせ、また求めなくても小耳に挟むという形で飛び込んでくる。

20名を超えると、会議という形や、情報を送り受け取るという形でないと情報は伝わらなくなる。常日頃私が口にする企業文化などは、今日や明日伝えねばならない情報ではないので、組織が拡大して各々が関わり薄い業務もある中では伝えにくくなっていく。

企業文化とは、むしろ考え方や事象の捉え方のベースとなることであり、毎日の環境の中で見え隠れすることではあるが、ここ20年来希薄になる中で私には大変重要なことのように益々強く感じる。

どのような組織運営をしたいかと人に問われるとき、私は「オーケストラ型よりジャズバンド型でありたい」とよく答える。オーケストラ型というのは一人の指揮者の曲

に対する考え方や解釈、挑戦したい表現を多くの楽器の担当者に理解させ、一つの楽器のように乱れず表現するスタイル。全員が指揮者を理解し表現の一部を担う。多くの株式会社はオーケストラ型を目指すべきなのかもしれない。一糸乱れず一つの大きな目標を精密機械のように、調和した動きで成し遂げていくのは組織運営の醍醐味だし大きな成果に到達もできる。

「ジャズバンド型」というのは、ビッグバンドは例外として、多くは4、5人までで其々の違った楽器で自己を表現しながらお互いをサポートしたり競争したりして一つの作品を表現していく。お互いのチームワークと、自由に共通目標到達をサポートし合う。アドリブで思わぬ感動を創造するのも珍しいことではない、いやむしろそれをジャズバンドは目指している。

私が行っている組織統治は「明らかにワンマン経営のオーケストラ型ではないか」と言われそうだが、実のところ目指すところでは全くない。私はお互いの責任を理解しながら、プレイヤーでもあるバンドリーダーのリーダーシップで自由に持つ力を表現するジャズバンドが好きだ。何故なら、自由の中に助け合ってこそ人は最大限の力

を発揮できると思うから。しかし、ジャズバンド型を運営するには3つの要件があるように思う。

一つは、お互いがお互いの能力、生き方、考え方、性格を理解していること。二つ目は、全員の活動が見渡せる小集団であること。最後に仲間を率いて力を出させるリーダーが存在することだと思う。この要件を100名の組織となった今のプレシード運営に当てはめるにはどうすればいいだろうかとよく考える。

例えば、取締役会を4〜8名のバンドと考え、私がリーダーとなり、その取締役一人ひとりが4〜8グループに分けられた各バンドリーダー集団を1バンドとして運営する。更にその各バンドのリーダーが4〜8名のチームを運営するのを考えてみる。それでは「まるで我が社も含む現代の会社組織と同じではないか」と思うだろうが、少なくとも今の我が社とは違う。我が社の現状はバンドのチーム団結も弱く、最高の音楽を奏でる様なリーダーシップはどの階層でも発揮できていないと思っている。能力や経験の不足もあるかもしれないが、小グループが目指すことや義務権限も明確でなく浸透もしていない為、小グループ統治も弱く大組織100名の中の一員となってしまっていないだろうか。

4〜8名のグループで目標を共有し持てる力を最大限発揮できる組織の繰り返しで構成するまるでネズミ講のような構成だが、先ずは直接貢献するグループは4、5名でイメージし動かしやすい組織を考えてみたいのが本音だ。軍隊や警察、消防も4、5の繰り返しで、班、分隊、小隊、中隊、大隊、…と組織拡大する。一人のリーダーが自由に気心通わせて動かせる員数というのは4、5名ということが歴史に学ぶことかもしれない。

来期からのことを真剣に組織構成と編成から考え悩んでいる。どの様な組織になろうと、目の前の4、5名に最高の成果を出させるリーダーシップが必要なのは間違いない。私の目指すのは、能力と責任を持った構成員で自由に最高の音楽表現に挑むジャズバンドなのだが…。

2015年10月26日

ストップウォッチで測るような作業を積み上げよう

仕事という言葉はあえて使わない。仕事には作業もあれば作業が中心ではないものもある。

私の仕事の思い出では、一時間で図面に一本の線も引けないこともあったし、原稿がまったく進まないこともあった。逆にたった数分のアイデアで数百万円の利益を創出したことも数えきれない。仕事とはそういう面もあるし、そこが面白さでもある。

しかし、何をすればいいかがハッキリしている作業は、如何に迅速に行うかで社会に貢献しているのか、損得相半ばか、足を引っ張っているか、に評価が分かれる。また、その正確さと速さを競う工夫をすることに、作業ではない仕事の一面がある。

資本主義の歴史は、正に時間当たり如何程の付加価値を創出するか of 歴史だった。

その為にコンベアを考えだしその速度を速めて生産を競った。人では限界を感じると、自動化が始まり、ロボット化でその一人当たりの生産を高めるのが進み、我が社はその推進事業者ともいえる。

ちなみに、我々はその生産性を極める事業を営みながら、我が社の現場では果たして究極の生産性を追い求めているだろうか。手順は極めつくされようとしているだろうか、我流の集団で人によってやり方も生産性もバラバラということになっていないだろうか。

作業はストップウォッチで測る時間の積み上げに近づかねばならない。作業は創造的ではない正確さと速さだけがその評価基準だ。

その為に作業順番を変え、使う道具を変え、準備段取りを進化させる。機械装置であれば、部品を解体して並べ、それを再組立てする時間に近づくことを目指さねばならない。その進歩には時間と資金が投入されることも必要だが、最も注ぎ込まなければならぬのは思いと智慧だ。そして、そこから産みだされる余剰時間こそ、与えられたものではなく、自らが創り出した余裕でありお金であり真の付加価値だと私は思う。

「社会に新たな価値を創造する」とは、昨日までと違う今日の進歩によって生まれる時間ともいえる。技を磨き自らの将来を豊かにするため、皆で常に考えるべきテーマだと思っている。

*今日の昼時に友と「讃岐丸亀うどん」に行った。多くの人が店の外まで並んでい

た。麵を造っているのは60代に見える男性たった一人だった。

麵を打ち機械で麵を切る作業、次々と時間を測って4つの茹でコンテナに麵を入れ順に麵を上げる作業、茹であがった麵を水の中でもみ込み麵の口当たりを良くする作業、麵を取り出しどんぶり作業者へ渡す。

一人で淡々と実に手際良い、簡単な道具も工夫されていて、ムダも遊びも全くない、達人に見える。

友と「我々だったら3人でするかも、我々だったら1時間は続けられない。これがここの財産だな」など語りながら腰のいいうどんをいただいた。ここにはストップウォッチは要らないだろう(笑)

2016年9月11日

時間を味方に

時間に追われるという言葉を聴くと、「時間は敵なのか?」とか、ふと思ったりする。人生で最も大切にすべきなのが時間だと私は確信しているのだから、時間を敵に回すのではもったいない。時間は最も貴重な宝だし、大切な代えがたい友である筈だ。追われてはならない、準備して時を待つ生き方をしたいものだ。前もって準備し時が来るのを待つこそ時を味方につけていると言える。夜遅くまで時に流されて大切な時を失うより、自ら朝早く時間に向かってこそ時を味方に行っていると考える。

誰にも時は一日24時間だ。その時を生かすも殺すも、時が来るのを準備し味方にするのも自分次第だ。若い頃に一時期、時間を持て余していた。貴重な成長期、仕込みと修行の時期に、せいぜい本や新聞を読みふけり空想の世界を生きていた。現実には実に面白くないと思って、夢と空想の世界に逃げ込んでいたのかもしれない。文学から哲学まで読み漁り、揚句には家電製品や車の取説などもほぼ隅々まで読んでいたし読むのが楽しかった。今は車を買った時でさえ取説は読んでいない。

いまの私は時間が欲しくてたまらない。もともと自分をエネルギーギッシュな人間だと

思っていない。グウタラに生きるが好きだった。今でも休日などボーっとしている時間が好きだが、この時間を創りだす為に、日頃あたふたと走り回っている。自分らしい時間とは、何もしない時間をゆっくり過ごすこと、人と言葉を交わさないで、本や思考や録画鑑賞の世界に浸る事かもしれない。

実に怠惰にも見えるかもしれない宝の時間だ。たまには楽器を取り出して楽しみたいと思いつながらも、取り出して吹くまでには至らない。元々怠惰なのだ。だから日常はその時間を創りだす為に15分の空き時間が無い様なスケジュール管理で動いている。会議から会議へ、社内社外構わず次々とテーマが変わる席についているが、頭に焼き付ける前に次のことが頭を占有するので記憶はるか彼方に消えていく。これも時間を活かし切れていない、味方に付けていないというべきかもしれない。

つい最近、かつてに「時間持ち」という言葉を意図的に使うようになった。使ってみるとこの言葉にあこがれを抱くようになった。明るい表情で悠々と生きている同世代の人と出会ったりする時、「あ、これが『お時間持ち』だ」と思うことがある。最も大切なものである時間を自分の考えで自由に消費できる生活が羨ましい。

若い頃、家族への生活保障の義務があった時代には、例えば時間の切り売りと考えら

れることをしてでも経済優先で生きなければなかったこともあった。僅かばかりの収入の為に膨大な時間という貴重なものを投下した。しかし、それがいま投資になっていた部分が今の自分の経済を支えているのも事実だ。決して目先の収入の為にだけ生きて来たわけではない、将来の為、人の為にも時間を費やしてきた。それがいま、少しは配当金のように戻って来始めた部分もあるかもしれない。勿論、管理が悪くて無駄に費やしてしまった時間が遥かに多いが…。

少なくとも老化の所為で自由に考えたり体を動かせる人生の時間が残り少ないというのが見え始めたこの頃は、無駄に時間を過ごせない、「お時間持ち」となって悠々と生きる余生を目指したいと思っている。その為には少なくとも時間が無いとか、時間に追われるという言葉を使って生きる日々で在りたくはないと心底思う。貴重な時間を費やすことで楽しみと生き甲斐を感じてこそ的人生だと今は思っている。

「人生は一つの事をやり遂げるには十分な時間があるが、無駄なことに付き合っただけで費やすほど時間の余裕はない。何かを成し遂げた男とはそのことを十分に分かっていた者たちだ。」と遥か昔に或るセミナーの講師が言った言葉を最近よく思い出す。

2017年2月19日

最初の12秒

会社の社長室に、この英語表題がついた写真ポスターがある。2000年頃だったか、サンディエゴ航空博物館を訪問したときに買い求めたものだ。この写真は誰でも一度は見たことがあるくらい有名な瞬間を捉えたものだ。

ライト兄弟は、私が子供の頃、エジソンの次に憧れた発明者だったかな。この写真を眺めると、出来なかったことを出来る筈だとの信念を持ってやり遂げることの偉大さと困難さを想像でき勇気をもらえる。遣ったことがないことを始める時、最初は成功への夢とその後の展開への想像から始まるが、多くのことは失敗の連続となる。なぜなら簡単であれば既に実現しているだろうから。初めて遣るということは思う以上に難しい。人の後ろを行くのは、飛行機が間違はなく飛んだという事実だけで十分な成功への安心感がある。私がライト兄弟なら失敗する度に本当に飛べるんだろうかという不安に襲われただろう。冷静な技術の検証と自信が成功をもたらす。それを運が良かったと挑戦経験のない者たちは呼ぶかもしれない。飛行機の実験、最新論文の理解、そして飛行日には立会人を集め写真機をセツトし風速を計測しながら最適環境を

待った。成功には常に冷静な判断と熱い思いがあつて初めて女神がほほ笑む。

ライト兄弟は確か自転車屋だったと記憶している。兄弟は多かつたらしいが、この二人は結婚もせずに家業で生活と資材調達を維持して飛行機に賭けた。12秒の初飛行成功の夜、彼らはどの様な昂揚感で床に就いたのだろうか。生涯で一度は経験したい大成功に胸沸きたぎる経験は羨ましい話ではある。

私は壁を感じたとき、知らずとこの写真を眺めていることがある。ライト兄弟の未知の技術開発への挑戦に比べれば、今の私の壁や挫折は比べるほどでもない。前人未到の世界を拓く覚悟とは、先が見えない砂漠でオアシス目指して足を運び始める以上のことだと想像する。さて、私はその覚悟あるのかと写真眺めて自問する。

日本にも私の知らなかったすごい発明者がいたのを最近知った。小堀保三郎、車のエアバックを世界に先駆け構想し実験で実証までしている人らしい。小学校卒業で丁稚奉公となり、独学で様々な教養を積み経営者としても名を成しその他にも多くの産業機械など考案して地位も得た人だが、晩年は発明を事業化するために会社を起こし行詰まり妻と心中自殺したらしい。その数年後エアバッグは特許切れてドイツ車で搭載されて今世界で常識の装備となったとのこと。

力強く己が営み拓くべし

貧しくともよし

正しくあれば

小堀保三郎氏の思いが伝わり共感する言葉である。発明の裏、事業活動の裏には失敗の山があり、死屍累々の世界が広がっている。凄まじい努力の上に更にもう一つ必要な物があるようだ。運、人徳、天命：私には分からないが。

先人に合掌

2015年3月某日

カローラとクラウン

カローラとクラウン、どちらもトヨタ自動車が誇る世界的名車である。一方は大衆車で世界的なベストセラーであり、一方は日本の代表的高級車である。どちらも同じメーカーがつくっているが、違いは誰が見ても一目瞭然であり、ほとんどの人が欲しがるのはクラウンの方であり、購入するのはカローラである。

本当の価値はどちらにあるか？

多くの人がほしがかるカローラの方にあるかもしれない。

開発コストは？

カローラの方が高いかもしれない。

安く作るとは難しく価値があることなのだ。

金に制限されないものを作るのはそう難しいことではない。厳しい予算制限の枠内で考え、生み出すことが華やかには見えないけれど、すばらしいことなのだと思う。華やかではないが、本当に価値があり世の中に役に立つ技術というのを常に我々は追い求めなければならない。ぎりぎりのコスト、無駄のない機能を生み出してこそ本当

の技術だと思う。カローラにクラウンのエンジンを積んで機能を満たしていると飲んで
いる技術であってはならない。クラウンほど重くもなく、クラウンほど早く走る必
要もないのに、高いエンジンを積み、高い燃費の車に仕上げる技術は素人の技術に過
ぎない。プロは全てを予測しコストパフォーマンスから明確な意志を持って採用する
案を決定しなければならない。

2000年10月7日

戦艦大和

私の手元に「戦艦大和図面集」という本がある。数年前に古本屋で安く手に入れた
ものだが、ポーランドの日本軍艦研究家が図面を複製し発行したものらしい。疲れた
ときに時々この本を開いたりすることがある。私は軍事研究家でもないのに、戦艦の
道具である戦艦大和に興味はないが、当時の技術で設計された内容、知恵の積み上げ
を見る度に「凄い、圧倒的に自分の知恵が負けてる、足元にも及ばない。」という結
論に達し、いつも口惜しさ、我が身の不甲斐なさを確認し、発奮して本を閉じること
になる。

勿論、技術者としての個別能力も私が遥かに及ばない、昔の技術者たちの成果の結
集だろうが、それ以上に設計に対する執念、自分の仕事に対し命を掛けて知恵を絞り
出したような気迫を感じる。

余談だが、日本電産の永守社長は「能力の差は5倍でも気力の差は100倍だ」と
いう。京セラ創業者の稲盛氏は、「仕事と人生の結果は、考え方と熱意と能力の掛け
算だ」という。どちらも熱意や気力の重要性を説いているのをふと思ひ出す。

我が身を振り返れば、能力も去ることながら二人とは気力の差が5倍や10倍あるように常日頃感じている。お二人とも私より年長の経営者だが、せめて気力や熱意がこれ以上の差に開かない方策はないものだろうかと思っ

さて、日頃はそうやって技術的見地から戦艦大和を見ることが多いが、最近ふとあの3000名の乗員が乗り組む全長260mの巨大な船を一人の艦長がどうやって自在に動かせたのかと思うようになった。我が「プレシード丸」はわずか100名だが、組織が私の思うように動かしているのかと考えてしまう。

艦長の意志と命令が巨大なエンジンの出力調整となり、舵を切り、砲弾の発射準備、そして無線送受信の指示になる。「出航」と言えば、機関室や操舵室、係留や揚錨、気象係、無線係が動き、「戦闘用意」と言えば、垂範係から射撃手、無線、レーダー、機関、救護、などが動き出す。今と違ってデジタルのデータ共有も無く、連絡は伝声管や伝令で指示が飛ぶ。一人の艦長へ必要な情報が報告され、それらを元会議や熟考或は即断での艦長の指示が3000名の乗員を一つの意志の方向へ動かす、機能的な連携活動を行う。自動制御もない、無線連絡もない、天気予報もない、コンピュータも無い中で命がけの最高結果を目指す。

戦闘ともなれば、敵があらゆる妨害を試みる中に独断と即決の行動が中心となる。戦死や負傷者が出ても代わりの人員が次々に職務を支える。正に軍艦は最高の組織統治の見本のような気がする。日頃の訓練と徹底した報告と命令の確実性が組織を支えている。艦長の意志とベクトルを合わせない勝手な行動や指示、報告間違いが3000名の命を危機に晒すのだから、ベクトルを合わせる為の報連相は恐ろしいほど徹底していることだろう。

我社も大和の作戦指示書に相当する「製作指示書」が一枚発行されたらそこに書かれたQCDを確実に達成する組織の完成を目指したい。

2016年1月25日

3分間スピーチ復活によせて

創業まもなくから続けていた朝礼での3分間スピーチをしばらく中断していたが、この17日より半年振りに復活した。中断した理由は1分間70円の労務費で35人が3分間消化すると、7350円の付加価値を生み出さねばならない。果たしてそれに見合う効果があるのかを中断し見直そうとのことからだった。毎日7350円の投資効果があると結論が出せた訳ではないが、プレシードの創業時の「社員全員が主体者たれ。」の理念に改めて立ち返りたいという願いを込めて復活することとした。

「全員が主体者」というのは、頭数で生産量が決まり利益が計算されるような量産工場のような企業運営でなく、一人一人が特性を生かし、余人と換え難い存在になることを目指す組織運営を行うという事である。それは、今までの単なる製造業とは根本的に違う組織になるかもしれない。もとより私はプレシードが製造業であることを明言していない。部分的に製造業の要素があり、そのために製造部門が必要であることは認めるが、企業の中核が製造とは思わない。製造もプレシードが持つ一機能にすぎない。いろいろな機能や使命 (mission) を持った者たちの集まりがプレシードとい

う集団であって欲しい。我々が目指すものは、自己責任を大前提に色々なことに挑戦していく者たちの集まりである。自分で企画し、計画を作り、実行し、成功させる責任を持つ。ただし、不幸にして力及ばずとも、回りの仲間がサポートする。そういう企業がプレシードだと考えるとき、その社員たちは「全員が主体者」であり、それぞれ何かのエキスパートを目指して欲しい。常に前向き (positive) な自分の考えを持ち、その考えをまとめ主張できる者たちを育てていくことは、個人の幸福と社会への貢献のいずれにも寄与するものと確信する。

決して弁舌巧みな者たちの集まりにすることを目指すのではない。たとえ語りはぎこちなくも、自分の考えを持ち、人にそれを投げかけてみることに躊躇しない者たちであって欲しい。語って恥かくことより、語らず進歩しないことを恐れよう。大いに自分の意見を述べることにより自分の理解者を増やそう。他人から意見を聞く機会を作ろう。人は黙って自分ひとりでも成長は小さい。

「3分間スピーチ」で自分の存在、考えを発信しお互いを高めあう職場を造ろう。聴く者が感動したとき、話者の存在感は否応なく高まり、聴く者も進歩する。

2000年8月28日

我が社の求人について

プレシードは創業11年と未だ社歴も浅く、各職場に様々な人材を求めています。社内の職種として、一般的な運営機能である総務、財務、企画、営業などを担当する管理職、および実務を担うスタッフや秘書、また、我が社の業務では営業、機械設計、電気設計、ソフト開発、工作機械オペレーター、組立調整、購買など、様々な職種につき管理者、熟練者、若い入門者との出会いを求めています。

創業以来、常に人材を求め続け、有能なスタッフにその能力にふさわしい職務を提供することを人事の基本としてきました。年齢や学歴にとらわれず登用する社風を築いてきました。現状は結果として高学歴な職場となってはいますが、学歴による人事は行なわれておりません。勿論、年功序列でもありません。同族経営等という言葉とも全く無縁な経営を続けています。社長から専門担当員まで、ふさわしいものがその職務を担当するというのが基本です。能力ある者に限りない可能性を提供します。

プレシードは採用を作業増員としての頭数集めでは計画していません。あくまでも個性をもった一人の仲間を求めています。いろいろな人が集まり助け合って、ただ

の寄せ集まりでは出来ない仕事で社会に貢献することを運営方針にしています。一人の社員にとって、プレシードはその人が自己実現に利用するフィールドであって欲しいのです。一人の社員が成長していく中で、周りの仲間と助け合い大きな成長と付加価値を創り出す、そのような組織を理想としています。勿論、会社という組織の中で活動する以上、会社の運営と周りの仲間の活動に貢献することが大前提ですが。

今、プレシードは過去10年余りの歲月の中で培った技術と会社運営の実績を基盤にして大きな飛躍の段階を迎えようとしています。この時期に共感しあう仲間をもつと必要としています。現状の人員だけでは質的にも量的にも不足している部分も多いのです。株式の公開に向けて加速する絶好のチャンスが始まりました。共に苦勞をしながらサクセスストーリーを築きませんか。

2000年11月1日

worker なる player <

長年、プレシードの社員は一人一人が違った個性、特技を持っていて、組織に対する貢献の仕方は人それぞれであっていいと言ってきた。人との交際がうまく営業が得意な者、逆に人と話すのは苦手でじっくり考えて設計するのが好きな者、体を動かしてモノを作るのが好きな者、直接の仕事そのものは不得手でも、周りを和やかにして職場を明るくして生産性を高める者、整理整頓が得意で環境をきれいに保つのが得意な者等々、色々な貢献があっけいと思ってきた。そして、人それぞれに得意な事で、顧客や仲間や社会に感動を創造する力を養おうと言ってきた。

そういう人を一言で表す言葉と出会った。「player」である。誰もが知っているスポーツ選手や演劇、芸能を行う人によく使う。彼らは仕事をしている事が、常に顧客である観客を喜ばせる事に直結している。人を喜ばせる事が出来なくなったとき、マウンドや舞台を降りなくてはならない。そのため、日頃より自己鍛錬をして仕事がなくても練習し、食べ物など健康にも細心の注意を払い、一幕の短い晴れ舞台に備える。常に自己管理が出来、自分を自分の手で成長させる事が出来る人が「player」である。

ある。

工場で働く人は、肉体労働者の意味合いのある「labor」と呼ばれてきた後、「worker」と呼ばれるようになった。過酷な労働を意味するのではなく、単に「働く人」である。「worker」に悲惨な語感はないが、楽しい感じもしない。単に決められ指示されたことをこなす労働者という意味だと思う。そして「worker」達を管理する一部の人が「manager」と呼ばれる。

我々preceedの社員は何であるべきかを一言で伝える言葉は何か。それが「player」だと思う。人から指示されて動く「worker」であってはならないし、指示する「manager」だけでも成り立たない。自分で考え、自分で計画し、目標を立て努力する者たちでありたい。ある時はじっくりと脂汗を流すほど考えを練り、ある時は行動しながら汗を流す。それが「player」だ。

「player」は結果に責任を持たねばならない。スポーツ選手は負けて相手の選手が強かったのをいいわけにしないし、コンクールで敗れた音楽家は相手がうまいのが悪いという言い訳は分けしない。すべて、自分のせいであるとし、また鍛錬を始める。3億円プレーヤーであっても、いや、あればこそ日々の鍛錬を必要とする。そして日

頃の鍛錬が実って期待以上の成果を出したとき拍手喝采を浴びる。

「worker」には拍手喝采の瞬間はない。決められた小さな責任を果たすだけだからである。pioneerの社員は、自分の仕事を如何に成果あるものにするかを考えながら生きている者たちであるはずだ。毎日単調な労働の繰り返しの中で生きている社員は一人もいない。考えるのを怠り、単調な日々に埋没しようとする者には大きなしっぺ返しがある。シーズンオフに練習せずに過ごした野球選手のように、その期間が長いほどそのしっぺ返しは大きい。

自らに課題を与え目標達成に向かって前進し、目標達成という責任を果たし観客を感動させる「player」というのは、プレシードの社員像そのものではないか。

技術の進歩は、物の価値を低くし単純生産の価値はほとんど地に落ちた。

「worker」の価値が日毎に低下し、途上国の「worker」にとって代わる中で、目まぐるしく変わる状況を的確に捉え、問題解決をリードし、周りに感動と安らぎを与える者が社会からも求められている。顧客や仲間に感動を与える「player」は社会から永遠に存在を求められ続ける。

2000年12月29日

新人諸君へ v o l . 1

1 自分を信用するな

プレシード内で機能している組織機能は決して完成されたものではない。常に、他にいる方法を考えよう。常に高いレベルの目標を目指そう。低いレベルに歩調を合わせたら、あなたの人生は実りの少ない道を歩み始めることになる。選択に迷ったら難しい道を選ぶ勇氣を持とう。人は多くの場合、どちらの選択に意義があるかは分かっていることが多い。しかし、行動は自らの気持ちに負けて安易な行動を選択することも少なくない。失敗や低迷はそうやって自ら作り出すものである。

「常に夢を持つこと。志を捨てず難きに就く。」私の好きな言葉を贈る。

2 小を積んで大と為せ

入社時や忙しいときには人の成長の差は殆どつかない。緊張感や外からの力に支配されている時、人は誰しも手を抜くことを忘れ、力を発揮する。環境に慣れたり、仕事に暇になったりしたとき、行動を自らの意志で決める状況が生まれ、一人一人の違

いが現れ始める。ほんの小さな差の蓄積が大きな成果の違いとなり、ついには取り返しのつかない違いとなって見えてくる。選択は一人のパーソナリティを持った社会人である以上、勿論自由である。しかし、必ず結果には責任を負わねばならないことを忘れないように。

他人に出来ない程レベルが高いことが出来ることも重要だが、同じように誰にも出来るようなことを継続する力が重要である。毎日やろうと決意したことを、日が経つにつれ何か理由を探し出し辞めてしまう。掃除、（小学生よりうまい）ラジオ体操、日報報告、終業時の整理整頓、等々誰にでもできることだが、毎日3年続けることが出来る人は少ない。一つでも5年続ける事が出来れば評価に値し、人が認めるところとなる。全てを5年続けることが出来れば、達人の領域に達するだろう。私はまだその実例を知らない。

「初心、忘るべからず。」本当のこの言葉の重みが解る日が早く来ることを祈る。

3 成功体験を重ねよ

簡単なことでもいい、やれなかったことが出来るようになる経験を重ねよう。実

に、気持ちがいいものである。その充実感が継ぎの成功の原動力となり、人や仕事を動かす力となる。仕事を成功させることは何物にも代え難く、気持ちのいいものである。仕事をやらせられるのではなく、自らの意志で積極的に立ち向かおう。そうすれば、仕事の歓びをやがて知るだろう。仕事の歓びとは「人を感動させ、自分も感動することである」。

2001年5月18日

厳しさの中で目指すもの

何度も繰り返し述べてきたが、今、日本は大変な状況になっているが、その中でも利益を出している企業もある。景気や、時代のせいにするのではなく、我々が何を指すのか、社会に何を提供するのかを深刻に考えねばならない時期である。存在することを求められない企業や社員はこのまま存在することは許されない。もう一度、何がい々の存在価値なのか振り返ろう。

経営理念に「人を活かす」ということを詠って来た。いかに不況とはいえ、会社の都合で社員の切捨ては許されない。あくまでも解雇は「人を活かす」ための手段としての最後の選択である。これ以上解雇は考えない。しかし、原資が尽きてくると、賃金が正當に支払えなくなる、何としても回避せねばならない。幸いに、我々は構造不況業種ではない。必ずまた景気が回復する日があるのは明らかである。それまで何としても持ちこたえねばならない。

Precedの財産は組織そのものである。有形の資産台帳にあげられた物ではない。組織力で仕事を創造し、構想をまとめ、必要な部品を調達し、組み立てて、問題を解

決して目的を達成する。この有機的な組織こそがPrecedの財産だと確信している。

この組織の完成度を上げていけば、アジアの追い上げが厳しいほかの産業に比べ、遙かに競争で優位に立てる。競争すべき相手は未完成な我々自身である。もっと組織の機能を研ぎ澄まし、無駄のない組織を構築すれば、今の日本のアイデンティティである技術立国が維持できる。総合力、応用力が我々の命。それを研ぎ澄まさねばならない。無駄からは何も生まれない。しかし、まだまだ無駄が社内にはびこってはいないだろうか。失敗を無駄と呼ぶつもりはない。しかし、学びのない失敗は無駄そのものである。必要以上に用心した考え方も無駄そのものである。

私はPrecedが世の中に必要な会社であり、残すべき会社であることを確信している。なぜなら、創業以来それを目指してきたから。常にリスクを監視しながら、新しい研ぎ澄まされた技術、管理システム、マーケティングに挑戦しよう。停滞は組織の死を意味する。

ビジネス環境は確かに未曾有の厳しい中にあるが、その中にも大きな可能性を秘めたチームもたくさんある。小さいが直に仕事になりそうなチームもいくつもある。皆で協力助け合い、一つ一つを育てれば、その中のいくつかが将来の我々を豊かにする

ものになっていくことを信じよう。

その中の一つのテーマとして、ISO14000に取り組もうとしている。これは全社で取り組むプロジェクトである。多くの労力と少しのお金が必要とする。このことによって収入は直には得られない。しかし、今後2年、3年先に必ず必要になる。今、多くの可処分時間があるときに取り組もうと考えている。その他にもいくつかの開発テーマが動き出そうとしている。我々は必ず生き残る前提で次の時代のことも考えておかねばならない。次世代を担う若者の採用、技術開発、能力向上の為の研修、これらは負担を重く感じる今だからこそ、じっくり取り組まねばならないことだと思う。

2001年8月10日

主体者たれ

「主体者たれ」、この言葉は私にとって全く使い古した言葉に過ぎない。しかし、敢えてこの言葉を今年取り上げるのは、日本が厳しい経済環境に成す術なく震えている中で、我々だけは、この環境から上昇気流に乗りたいから、改めて確認するに他ならない。一人ひとりが自ら判断し、責任を持つて行動するとき、デフレスパイラルの環境から抜け出せると思う。自ら考えることが出来ない指示待ち族や、悪い状況を他人のせい、時代のせい、国のせいに行っているような人間には、ピンチと共にあるチャンスを活かすことは出来ない。是非、この言葉を噛み締めて欲しい。

思えば、創業以来常に主体者を求め、育てたいと思ってきたし、もちろん自らは常に主体者であろうとしてきた。三分間スピーチ、MVP、M委員会、朝礼挨拶、GL制度、強制しない朝掃除、新しくはCM制：等等、多くの主体者育成の仕掛けを運営してきたつもりである。

言われてやることより、自らの考えで行動することに遥かに大きな意味を持つてきた。強制されて掃除する社員を増やそうとは思わない。掃除の必要性を自覚

し、自らの判断で掃除場所、掃除の方法を考える社員こそが、変化する時代の中で、追いかけるテーマや解決すべき問題に立ち向かってくれると信じていることは創業以来変わらない。与えられ、指示されるのを待つ開発者など私のイメージには描けない。顧客から言われた事しか動かない営業や設計で、顧客を歓ばせることが出来るわけが無いし、図面通り組み立てるだけが自分の責任と思う組立て工場で、開発商品がスムーズに出荷できるわけが無い。

「主体者たれ」、「リーダーシップを発揮せよ」、「期待値を上回れ」、「WorkerからPlayerへ」など多くの表現をしてきたが、言葉は違っても、常に語り求めてきたのは「主体者」である。指示された狭い範囲にしか関心を持たないWorkerには、今の日本の高賃金は維持できない。実際多くの国のなかで、労働者賃金は日本はずば抜けて高い。それは世界一質の高い労働者でもあったし、高度成長期には決められたことを、正確に間違いなく責任をこなす労働者が必要でもあった。現在の環境にもそれは必要だし、物造りの現場はそんな人たちが支えている。しかし、その場所は、日本の中から他のアジア諸国に急速に移っている。（そんな中で、日本人はその労働者の勤勉ささえ失っていつている。）今の日本に必要なのは、プレシードでは創業以来語られて

きたこと、自らで問題解決していかうとする「主体者」である。プレシードにとって新しい方向でもなんでもない、創業以来の方向である。だから今の時代は正に我々の時代であると信じている。苦しい時代の中にいるのは間違いないが、我々が今まで作り上げようとしてきた理想の会社像が今の社会に必要なのだ。日本中が何をすべきか分からず彷徨っている中で、問題解決型、市場開拓型を生業としてきたプレシードは幸せであると思う。「全員主体者」である会社を創り上げたとき、世の中に新たな価値を創造しつづけるプレシードが完成する。

2002年11月12日

ジェネラリストの育成と人事交流

プレシードはまだ一般的には小さな会社である。しかし、内部には様々な職種がある。直接部門には、機械設計、電気設計、ソフト設計、MC加工、旋盤加工、フライス加工、機械組立てなど。間接部門には営業、購買、外注管理、経理、総務などである。これを僅か四、五十人の人員で配置すれば、一職種には数人の体制となり、あるときは営業が不足、あるときは機械設計が不足、あるときはソフトが不足、あるときは加工スタッフが、あるときは工場での組立てが不足ということを創業以来繰り返ししてきた。当初は全員がジェネラリストである必要性が明白であったが、最近次第に固定化してきた。固定化は高度な専門性につながるという前提であれば、ある程度容認する必要があるだろうが、現実には業務のアンバランス対応というテーマが残り、最も安易な解決法として外注依存を選択してきた。此処で以下の見地から、もう一度今の運営を再検討してみたい。

1 まず、本当にスペシャリストの育成が進んでいるか、ということである。かつて創業時には営業から設計、購買、組立てと様々なものの一人で対応せざるを得なかった。その頃のの一つ一つの技量は確かに今の技量より高くは無かったかもしれないが、幾つかの職種では大きな違いがあるとは思えない。また、現状の各職種の多くの部分で、2、3年の経験で出来るレベルの仕事で終わっている部分が多くはないか。その見地からも、確かに高いスペシャリストを否定するわけではないが、ジェネラリストの能力（もちろん素人ではない）で業務の大部分が処理できるのではないか。

2 次に、売上が小さい現状の中では、とにかく内部への業務の取り込みを最優先するべきではないかという疑問である。受注最優先であることは大前提ではあるが、受注後の外注依存をジェネラリスト対応で何とか内部へ取り込む方向が模索できないだろうか。もちろん、営業も出来るジェネラリストは受注そのものも拡大貢献できる。

3 ジェネラリストはリスク管理上も重要である。突然の欠員や突発的な出来事による会社の能力を上回る対応が緊急回避できることとなる。企業は理想的な形の仕事があるとは限らない。むしろ、様々な困難を含む事が多い。フレキシブルな対応力がある企業というのは、仕事の可能性が拡大すると言えはしないか。

4 ジェネラリストは対極的な判断が出来る管理者に育つ可能性が大きい。開発業は、営業的、技術的、経営的に様々な要素を検討する機会が多い。将来のリーダーはどうしても対極的見地に立てる人材が重要になってくる。

5 即戦力化。スペシャリストの育成には時間が掛かるし、業務の単調さも否定できず成長が遅い。限られた人材の有効活用はスペシャリストの育成でなかるか。スペシャリストの一つ一つの職種は、1、2年の経験を前提に構築すれば人材の活用も容易である。また、ジェネラリスト育成のため幾つかの職種を経験するうちに、最も適した職種の見直し、発見も期待できる。また、開発業は、スペシャリストの面白さもあるれば、全体が見渡せるジェネラリストの面白さもある。

上記のような観点から、今後積極的な人事異動と一時的な交流を検討したい。
2003年1月5日

命令・報告、提案・許可

組織運営の基本は命令と報告、提案と許可にある。個人完結型の伝統工芸やソフト開発には、そのウェイトは小さいだろうが、それでもゼロではない。まして我々が事業としているプロジェクト型事業は多くの人間が一つの目的達成の為に動く。それを細分すると無数の要素の集まりである。99の要素がうまく達成されても、たった一つの要素でプロジェクトが完成に及ばないことも多い。多くの要素が目的の為に一つの意思で動かされねばならない。頭数と同じ独立した意思があつたら到底目的は到達されない。旧約聖書の「バベルの塔」がそのいい例だろう。

組織は最上部から責任と権限を下部に委譲されるものである。委譲された者には目的を約束した内容で完成させる責任がある。だから下部に命令を下す権限がある。命令を受けるその下部は従う義務を負う。命令を受けたものには、指示された条件の中で完了する責任がある。予算、納期、品質、使っているいい人員など、指示された内容で完了する見通しが立たないときは、速やかに報告する義務がある。勝手にして逸脱しているものではない。

このような当たり前のことが、最近実行できていない事例に遭遇する。「指示工数や予算が無理だから自分で勝手に予算計画を作り実行した」、「間に合いそうにないから独断で顧客に連絡して許可をもらった」、「予算をはみ出しているのは分かっていたが、作る必要があるのでそのまま続けた」など枚挙にいとまがない。当事者は良かれと思って、または仕方ないから、という思いが強いだろうが、すべてに言えることは業務命令違反だということだ。

命令、指示と違うことが発生するのが分かったら、直ちに報告して修正案を出し許可をもらうのが当たり前である。一つの命令の未達成や変更は、他の指示・命令や組織経営の変更を余儀なくされる。事前報告がなく、良かれと思つての勝手な行動は営業展開や経営を危うくする。

もう一度確認しよう。

1 命令・指示を受けたら間違いがないように反復し、その内容を指示または許可された条件の中で目的を成し遂げる。不具合が発生したら直ちに指示した上司へ報告する。

2 命令指揮系統の上部へ報告し、受けた指示内容を実行するために与えられた権限の中で指示・命令を下す。それ以外への情報や報告の伝達は上司の許可を得た範囲で行うこと。特に社外への連絡は上司の許可の下に慎重に行うこと。営業・経営との整合性が必要だ。言うこととやっていることが違う会社も人も傍から見ると良い信用に足らないのは事実だ。

3 指揮命令系以外への連絡を個人判断で行うのは「根回し」と呼ばれ、本来実行力はないものであるが、時として承認されていない根回しや指示が実務を動かしたり、複数の異なった指示で混乱をきたすことがある。根回しは命令・指示とは異なることに注意しよう。

2004年8月4日

人事を考える

会社経営の重要な要素の一つが人事であり、査定と配置がその主な経営判断である。評価査定方法は二転三転、或いは改定を続けているかもしれないが、方針は創業以来一貫している。

人事配置についても悩み続けている。中小企業の社員と大企業の社員の大きな違いの一つに、人事異動に対する服従性があるといわれるし、実際多くの事例を見聞きしてきた。ある地場経営者から「東京転勤を命令したら社員が辞めた」。中国では、「若い社員は誰も来るのを嫌がったので我々年配組みが来た」などを中小企業関係者から聞いた。

一方、大企業の転勤社員からは「事例が出たら2週間後は一家挙げて引越さねばならない」。「まったく来たいとは思わなかったが、辞令が出た以上、考える余地はない。これは会社の通常の出来事、いいことも起こることを信じている」。「東京勤務からやっと故郷へ帰れると思ったら、辞令は中国だった」。などという言葉を平然と聞く。

何が違うか論ずるのは別の機会に譲るとしても、人事異動に個人の希望ばかりを優先させると、会社が展開したい事業が成り立たなくなる。一流企業か二流企業かの判断の一つに、経営が人事を完全に事業戦略の中で運営することにあると思う。

その一つが人事異動である。

今後、我社でも人事異動を活発に行う必要が出てくる。勿論、本人の意向も大切にしたいし、その方が成果も得やすいと思う、また本人への教育効果も配慮する。しかし、事業戦略をそれよりも優先せねばならないことも増えてくるであろう。転勤だったら辞めるというような社員の意志を反映することは出来ないだろう。そのときの為にもう一度企業運営というものを理解し覚悟もしておいて貰いたい。

逆に自己都合を捨てて会社の事業展開の為に敢えて協力してくれる社員は、会社がその後守っていかねばならない社員であるということも経営者としては認識しているし、過去配慮してきたつもりだ。会社の為に自己犠牲をしてくれる社員には、会社は何らかの形で必ず報いることを実行しなければならないだろう。

2005年7月4日

変化せよ、自分を変え、組織を変える

要旨「今、世の中は大きな変化の中にある。世界で言えば中国やインドなど途上国は急成長の変化の中にあり、日本は長い低迷の中で、活路を開き始めた『勝ち組』と、落ちていく『負け組み』に二極化してきた。大きな痛みを伴う変化が至る所にあるから実行され始めている。郵政事業や道路公団の民営化も大きな時代変化の一つの象徴的出来事に過ぎない。他人に変化を求めている間に合わない。先ず自らが変えることから始めなければスピードに追いつけない。自分が変わることは明日からでも出来るし、大きいことからでも小さなことからでもテーマを選べる。しかし、きつい事かも知れない。痛みを伴うこともあるかもしれない。しかし、変わったほうがいいことを続けていけば、人であろうが組織であろうが、やがて成長、進歩に繋がる。人を変えようとしても自分の力では持て余すことも多い。

振り返れば、自分の人生そのものも変化し成長したことで、変化できずに成長できなくなっていることの集合から成り立っている。一つ変わることが出来ればまた一つ進出し成長できる。人を変化させて自分の進歩に繋がったことなどほとんど記憶にない。

だから自分の評価はまさに自分の変化と変化の失敗の総合計だと思う。

人生の前半は成り行き主義で、お世辞にもレベルが高い前向きな人生を歩んでいるとはいえなかった私は、25歳の時から自分を変えていく人生を選択し歩み始めた。確かにきついことは多いが、振り返ると自分がそれなりに変化ができたことには、確かに成長を感じることが出来る。変化をたくさん積み上げたり長く続けると、それなりの成果として人の評価を得たり、自身の能力の拡大に繋がってきているのも感じる。変化こそが人生の醍醐味と思い、私はいろんな事に挑戦を続けている。これからも目の前に色々な問題が現れるだろう。その問題は、私にこれを処理できる人間であればと訴えかけてくる。『成長せよ』と天の声が囁き、それに応えようと挑戦し、挫折と成功を繰り返すだろう。周りの変化に対応する自分の変化と成長が生きていることの実感であり、喜びだと思っていいい日々を生きることになっている。

2005年8月1日

ベクトルを合わせよう

全社員への運営説明会社長メッセージ要旨

・方針が大きく変わることはない。創業以来、社会に貢献できる会社でありその中で努力した者が報われる組織運営を目指す。

・会社運営は外部、内部状況によって時として重きを置く項目が変わる。今回は特に「売り上げ、利益の重視」などに重点を置く運営をすることを説明する。

・とにかく予算計画を確実に実現する組織を創る。誰も責任をとらない予算超過の運営は今後根絶しなければならない。

・利益が出ればすぐにでも社員へ還元できる組織運営をしたい。4半期ごとの利益還元も目指したい。税法の問題や長い間何も投資還元を受けていない3億円を、会社へ投資している株主への還元と共に考えたい。勿論、利益がなければこれ以上株主からの調達や借り入れで賞与を支払える状況ではない。

・社是、経営理念、19年度運営方針に沿った運営とその実現のために方法が変わる。方法は常に今後変更を加えていく。勿論、組織も変わる。

・中小企業は組織図に人を当てはめるというより、人に合わせて組織を作り替えるという事も多い。今後人の成長や外部からの人の導入によって変わる。

・やらされる組織人ではなく積極的に組織運営に参加する社員であってもらいたい。技術や組織への提案や改善に積極的に挑んでもらいたい。自分達で成長させる会社、自分で創っていく人生を選んでもらいたい。

・今後、今回説明した方針に基づく命令も出るし、経過も評価し報告もしていききたい。勿論、修正も行う。

・今回の組織改革と今後の運営に最も必要なのは、「ベクトル合わせ」だと確信する。どんなに良い方針・命令であっても、実行方法が合わなかったら労多くして報われない組織となる。例え少々ベストでない命令であっても、ベクトル合わせが出来ていれば最大効果が発揮できる。

・命令の確実な実行と報告があれば責任は指示者がとる。下位は上位に対して行動責任をとる。上位は組織に対して結果責任をとる。

・今回、U専務に対して勤務時間など大きな自由度を与える。自由度を持つということとは結果責任を持つということ。結果責任を取れるようにするためには命令があり、

その実行を厳しく求めるだろう。目標達成という結果を得るために各持ち場が責任を果たせば強い集団に生まれ変わる。

リーダー達への特別メッセージ

・リーダー達には模範行動を示して貰いたい。後輩達が目指す社員像が「近くにいるリーダー」であってもらいたい。しであることの組織への責任を自覚し次の社員を育ててもらいたい。全員がしになることを目指す会社にしたい。

社は

「我々は技術と情熱をもって、社会に新たな価値を創造する」

社会に価値を提供できる人や会社は、社会で成長を許されると確信する。

最後に

感動を創造し、人を活かしきり、全てに感謝し、常に挑戦課題を持つ、という会社や社員が成長を続け豊かな人生を送れない筈はない。

2007年3月29日

2007年5月度目標「ベクトルを合わせる」

「ベクトルを合わせる」、実に言い慣らされた言葉である。新鮮味のない言葉かもしれないが、今、我が社に最も必要な概念の一つだと感じる。いくら個人個人が自分の立場で良いことを主張し実行しても、全体の方向が揃えられていないと実に労多くして益少ない組織運営となる。たとえて言えば、片方で植木を植えるために穴を掘り、片方では雨が溜まるとぬかるみになるから、掘った穴を知らずに埋め戻して土地を平らにする。穴を掘ることも土地を平らにする事もどちらも重要なことであるが、指揮者が目的と行動を確認して一本化しないと、疲れた挙げ句に残るのは相互不信ということになる。

人が多く集まると必ず機能分担が必要になる。育ちも常識も違う環境で育った人間が、それぞれに良かれと思って勝手に判断し行動しても成果が実らない。情報、報告をいち早く所属する組織へ行い、次の行動の確認を行う。指示された行動は中止、変更の命令が無い限り、個人や一グループの判断で勝手に変更をしてはならない。「中止」、「変更」、「延期」には組織の決定が必要だ。変更は組織全体の中で承認された

もので無ければ、極めて効率が悪い状況を招いてしまう。逆に、例えば少々組織全体が向かう方向が違っていても、同じ方向へ力を合わせれば力強く走り始める。ヨットが帆と舵とバランスが良ければ風上へも走れるのに似ている。

仕事、行動を起こす時、必ず「組織全体の中で承認された事」、「命令された内容」と違ってないかを確認してベクトルを合わせよう。お互いのチームワークが良く生産性の高い職場運営を行うために。

朝令暮改

朝令暮改、朝言った命令を夕方には改めてしまう判断の甘さ頼りなさを戒めた言葉だ。

最近、経営、会社運営について考えることが一段と多くなった。たまには私が尊敬する経営通の人から話を聞く事もある。

そのような状況の中、ある人から「朝令暮改を躊躇するな」と言われた。今の世の中の動きは速い。あつという間に状況が変わる。そんな中で瞬時に判断して決断、指示を下さねばならない。間違うことも多いだろうし、その瞬間に正しい判断も状況が変われば修正が必要だ。過去に指示した内容に拘束されて躊躇してはならない。指示命令はすぐに変わることもあることは社内に示して良いと。

我が社は常にハンティング型ビジネスの中にいる。仕事を見つけて受注するには、市場も顧客も製品さえも一定していない。そんな中でブレが少ない体制を何とか作りたいと思い、自社商品などの開発販売に挑戦してきた。しかし、その周辺さえ調達先、販売先の状況は変わっている。安定した方向を決めるのに私も悩むことが多い。

何とか一番正しい判断をしたいと心より思うが、それ以上に誰かが決めて、ベクトルを合わせて走ることが最も重要だと最近は思う。少々間違っている、一致した方向を向いていれば目的に近づく。ヨットは風上に向かっていても、少々方向が違っていても、途中で何度も方向を変えながら目的に向かっていく。こまめに向きを変えることを恐れたり、面倒がったりすると目標からそれてしまう。決断できない者はリーダーではない。例えば人の考えを聞いてでも判断しなければならぬ。そして自分の判断として責任を持たねばならない。それを恐れて指示が出来ない状況を作ってしまうリーダーは失格である。

諸君、リーダーには何度も答えが出るまで求め続けよう。時間を掛けるより、後で変更することを受け入れよう。また、命令変更の提言さえしよう。「過ちを改めるに憚る事なかれ」ともいう。リーダーに大いに朝令暮改、決断を求めよう。

2007年3月14日

信じよう「継続は力なり」　　ゝ特に新人諸君へゝ

新入社員諸君も入り、新体制も始まった。個人的にも組織としても新しいことが始まると決意も新たになる。ここで新しい歩みが始まった時点で、今の決意、目指す方向を再確認することを勧める。

今までの延長の中で新しいことを始め、暫くすると思っても薄れ元に戻ってしまうことをよく経験する。長い間に身に付いた習慣は、例えば良くないことであっても、今のはしみ込み合っているのだ。だから漫然としていると、殆ど間違いなく元に戻ってしまう。新しいことを始めるのは簡単だが、継続は難しい。やってみて「悪いことが多かった」と言う結論の前に、中途半端な達成の状態で元に戻ってしまう。早起きや早寝でさえも昨日までの習慣が体を支配しているのだ。新しい習慣を体につけるには時間が掛かる。

私は学生時代早起きが最大の苦手だった。大学時代は実に遅刻と欠席の連続の状況になった。何とか立ち直るために、休日も早起きすることで体に習慣を覚え込ませた。今でも早起きは苦手であるが、一年通して5時半に起きるように心がけて努力を続け

ている。「どんなに遅く寝ても5時半には起きる。5時半を心がけていると、失敗しても6時半にはならない。休日は一度起きて食事してから必要なら寝る。起きない言い訳を絶対考えない。」と我が身を仕向けている。挑戦は自分の理想を目指すのだから、苦しいと言うより楽しみたいモノだ。

体にいい習慣を覚え込ませるには、3ヶ月で慣れ始め、3年で習慣となると言われる。会社のマナー、決まり事、風習も3年も続けば伝統となり継承される。皆でいい習慣を創り、中止命令がない限り3年の実行に挑戦したいものだ。

「やったが良いこと」の多くは、先ずキツイという感情から始まる。精神的キツさは一ヶ月もするとピークとなり、2ヶ月目で止める為の言い訳が心の中で正当化され、3ヶ月目に入る前に放棄する。しかし、3ヶ月過ぎるとキツさはなくなり、更に続け、3年過ぎれば逆に遣らなければ不安になる。そういう風になったときその達人となる。

新人諸君、特にいい習慣を身につけてスタートすることを目指そう。いい習慣は一生の宝となる。50歳過ぎて身につけるより、若いときに身につけた方が「使い得」だ。良い習慣は人生を豊かにする。「早起き、挨拶、礼儀、身支度、記録、報告、

…」、身につけて人生を豊かにするものは沢山ある。全て簡単なことの継続から始まる。誰にでも出来ることなのに、多くの人がそのチャンス逃して人生を惨めな繰り返しにしていく。もう一度いい習慣を継続力でモノにすること考えてみよう。

「継続は力なり」 実に簡単な言葉だが、意味が深い言葉だ。

2007年4月5日

熟練に学ぼう

今日からTという60代の新しい人を会社に迎える。4月までくまもとテクノ産業財団の嘱託として東京に勤務し、熊本県内の中小企業の為に働いていた人である。

私が知り合ったのは創業の頃、機械技術系ベンチャー企業の大先輩として熊本で活躍の頃である。経営者として技術者としてまだまだ学ぶもの多い人を我が社に迎え入れようと急遽実現した人事である。

T氏が働くのは給与や生活のためではない。事実、かなり安い給与で働いてもらう事になっている。我々が氏に求めたいのは知恵であって労力ではない。長い年月で手に入れた技術ノウハウ、組織運営ノウハウをプレシードに植え付けたい、若い世代に伝えて貰いたいからだ。技術者生活40年の中では、成功と共に遙かに多い数の失敗経験があるはずだ。私は失敗経験から得た教訓こそ宝だと思っている。それには受け入れる側にも心の受け入れ場所を作ることが必要だ。

氏を含め我が社には60代の人生の先輩諸氏7名がプレシードで働くことになる。

過去何度も伝えてきたように、求めるのは技術経験、管理経験、人生経験から来る見

識だ。彼等に汗や体力を求めてはならない。確かにどの60代もすこぶる元気が良い、今の20代が恐らく50代に近づく頃にはこの元気を失うのではないかとさえ思う。しかし、体力は悲しいかな次第に衰える。学んで貰いたい事は、仕事に懸ける責任、誇り、情熱、判断だ。幾多の困難を乗り越えてきて今ここに存在している力を学んで貰いたい。行動が語るメッセージを読み取って貰いたい。先輩諸氏が40代で学んだことを20代や30代で学び身につけることが出来れば若い諸君の人生はもっと豊かになる。目の前にそれを身につけるチャンスを与える人生の先輩が7名もいるのだ。教えを請うて身につけないのはもったいないと私は思う。

*若い頃暫く仕事をするとな一人前になったと錯覚することがある。(私にも働き始めて暫くすると高慢な時期が訪れたように思う。)私の場合33歳で会社勤めを止めるとき、もう一度自分が未熟で何も知らない気持ちで生きてみようと思って出発した。色々な人に教えを請い、全くのド素人が曲がりなりにも会社を運営して生きてきた。学ぼうと思う心と姿勢には成長のチャンスが訪れるし、未熟の不安を持たない心にチャンスは訪れないというのが私の人生教訓だ。いつも目の前にチャンスがある。

2007年9月

厳しい状況下の運営「夢と覚悟」

当社も業界の例外である筈もなく、今、大変厳しい環境下にある。今回の不況は想像を遙かに超える危機的状況である。過去の経験を頼れば失敗する。我が社は仕事だけは未だ少し動いているが、今後を保証する量には遙かに及ばない。また、今までのPJがコスト管理不足で大きな赤字物件が続き、危篤の病人状態であることは伝えてきた。

今からの運営には、他社にも増して一層の厳しい覚悟が求められる。他社のような好況期の蓄えが在るわけでもないので、縮小して冬眠できる状況でもない。厳しく管理せねばならないのは、先ず垂れ流す無駄だ。消耗品から人間まで不要なコストになっている部分はないか。流用や少しの我慢で対応できるコストがないか見直してもらいたい。

在ったがいい程度のもは要らない物、なかったら利益や受注、売上低下になるものは削れない。もちろん流用で対応できるものもあるだろう。

世間に倣うわけではないが、人減らしも考えねばならない。先ずは派遣会社に所属

する人たち、次がアルバイト、状況次第では社員給与削減、パート従業員解雇、正社員の一部解雇などへの段階をたどることになる。(そういう状況の中でも今後の組織に必要な人を失わない努力はせねばならない。)

勿論、「人切り」はやりたいことではないが、社長がしなければならぬことになるのは覚悟している。しかし、その前に出来ることは遣りつくして進めていきたい。

今、出来ることはまだ在る筈だ。設計の変更、調達価格の見直し、組立の段取りでの工数削減、仕様の削り込み等などを先ず全員参加で取り組まねばならない。これを進めないで待っているのなら個人も会社も市場から見捨てられる。会社も努力が目えない社員を養う余裕はない。この難局を乗り切った会社はおそらく生産性の高い会社になると言われている。逆に今の多くの会社の体質では生き残れないということだ。

付加価値は自分で生み出し、それを分け合って社会は成り立っていることを真に理解してもらいたい。一か月毎に進歩を問われるくらいの環境になる。それに応えることが出来なければビジネスから去らなければならない(人も企業も)。

犠牲者も出したくないが、それ以上に会社を破滅させたくもない、だから現実が示す方向に早く手を打たねば傷は拡大する。現実が示す方向は、真剣に考え見つめれば

誰にでも見えるはずだ。「ムリ、ムラ、ムダ」消滅方向と「チームワーク」進化の方向だ。その阻害要因は人もルールも排除する覚悟で経営に取り組みたい。かつてサムスンが立ち直った時のように、全てを「変える」覚悟で取り組もう。

全ての責任はトップマネージメントである社長にある。その指示と要求で中間管理者や部門長が部下に厳しい要求する局面もでてこなければ存続できない筈だ。その責任は社長が負う。恨まれても断じて行わねばならないことが出てくると思う。プレシード内で生きていくのであれば覚悟して付いてきてもらいたい。

さて、このような中でも常に夢を語る余裕はもちたい。苦しさを救うのはいつか実現させる夢を持つことだ。

プレシードはこの数年の間、金を蓄えるのにはほど遠い状況にあった。多くの赤字工事の実績を作ってしまった。しかし、その状況の中で間違いなく未来へ繋がる実績を残した。予算管理能力こそ低かったが、一億円を超える受注が日常なことと言えるほど対応能力が拡大した。

太陽電池生産ラインでは、業界の拡大期にいち早く実績を築いた。プレハブスなど自社開発商品の売り上げも拡大し、名実ともにメーカーと言える状況になりつつあ

る。これは、すべて偶然ではない。それは強い思いを持って社員諸君がその方向へ進めたからだ。確かにその為に蓄財はできなかったかもしれないが、技術、管理、営業、市場対応などのノウハウが今プレシード内に蓄えられた。いまから、この数字に出ない財産を生かして逆境を生きていくのではないか。この時期に人材と技術を集めて、自らも成長しようではないか。

人員整理などして我慢してやり過ごせる寒さではない。思いっきり動いて、自分の力で暖かさを作り出そうではないか。そういった意味で今はチャンスである。チャンスはその中にある時そのほとんどが苦難に満ちていて、それを乗り越えた時初めてそれがチャンスだったと理解する。今は大ピンチだからこそ正にそのチャンスの時だ。

この危機の中で夢を語ろうではないか。

私は20年前、熊本に殆どない開発型メーカーを創りたいと思ってプレシードを創業した。絶望の闇と嵐に飲まれることも度々あったが、今は方向だけは自信がある。嵐を抜けた時、必ず夢に近づいている筈だ。

逆境に耐えるのに疲れ果てたら自らに夢を語ればいい。たまには息抜きしてもいい。自らが義務と責任を果たす覚悟を持っている者なら戻るべき場所は知っているは

ずだ。下を向いて歩くな、肩を落とすな、きつい時に笑って生きる覚悟を持って生き抜こう。

2009年2月2日

以下、余白活用メッセージ（会社の為ではない、君の為に）

- 1 不況の中に本を読み、知識、理論、先人の知恵と体験を侮るな。無恥を知れ
- 2 役に立つ人間に自分を育てろ。役に立つ人間が要らない世の中はない。
- 3 誰にも負けない努力をする。（京セラ創業者 稲盛和夫氏）
- 4 人間の目標を持って、尊敬する人の足跡を辿れ、行動を模倣せよ。結果だけ欲しがるな。
- 5 活躍しろ、もっともっとだ。満足する結果が出るまで。
- 6 「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」

今年のキーワード Change! 自分が変われば、OUT!

「羨」 ～自分と周りを羨ける～

5Sの最後に「羨」が謳われている。当社では創業当初より会社の大きな運営方針として「自主性」を謳ってきた。他人を矯正するイメージがある「羨」は、敢えて強権的には行ってこなかった。自発的な進化を期待してきたし、私も「羨」という言葉は嫌いだ。しかし、今世界的な経済危機の中、当社も嵐の真ただ中から脱出するため、強力な指導運営が必要になってきたのを痛感している。その嵐の中の組織運営の成否のカギが「羨」と思うようになった。ここで「羨」が5Sに敢えて謳われている意味を考えてみたい。

企業は組織が約束通り機能することが最も重要なことと思う。その為に決められたマニュアル、就業規則、整理整頓などが実行される。しかし、どんなに決めごとが多くても、実行能力に欠けていては絵にかいた餅に過ぎない。また、決めごとに想定していないことが発生したら誰も対応できないでは組織の大きな痛手となる。臨機応変に対応できる能力を日頃から養い維持するのが「羨」と思うようになった。高いモラルを維持してこそ存在を評価され敬意も得られる。

「挨拶が悪い」、「時間を守らない」、「歩くのが遅い」、「服装身なりが乱れている」など直接生産に響く筈はないかと思いますが、生産性が高く利益が大きな職場に前記のような習慣がないのを見れば、高いその効能は大きいと考えねばならない。高いプロ意識を創造するのが「躰」である。部下を躰けるのはもちろん、自らを高いモラルの職業人に躰ける力を蓄えよう。

今、会社は大変な危機の中にある。これは多分社員諸君には理解できない程の大きな危機である。これを生き残るためにはひとりひとりの成長とそれを支える高いモラルが必要と思う。重荷となる人員が存在できる場所は会社になくなっていく。全員が会社を進化させる人財であつてもらわねばならない。それには先ず「躰」が原点であると考ええる。自らを躰けるとともに、部下や仲間、会社の悪い習慣を躰なおしてもらいたい。私も先ずは重箱の隅をつつくような小さなことも気づいたことは先ず声に出し指導したい、生き残る力を持った社員と会社であるために。

＊挨拶、服装、身だしなみ、立ち振る舞いでさえ奥が深いことを考えてみよう
2009年10月

自分の壁を越えよう

以前「バカの壁」という本が流行った。人は自分の理解できることしか受け入れられない。それ以上の存在には挑戦せずに壁を作って拒否してしまうというような内容だった気がする。

さて、「自分の壁」と言うのは、今までの自分が超えられない課題やその存在にさえ気づいていないことだ。今日の自分を10年後に理解することはあるかも知れないが、今日の自己を否定したり、或いは不足している部分を見つけるのは難しいかもしれない。しかし、もっと手前に低い壁がある。それは存在を意識はしていても挑戦を避けている壁だ。だから「バカの壁」ではない、真正正銘の壁だ。そこに挑戦しない真の理由は失敗を恐れるから、或いは遣り通す自信がないから、或いは自分には出来ないのではという妄想に取りつかれているからだ。

「やってみませんで、何が分かる」というのが口癖だった有名な経営者もいる。その人から見れば、我々は失敗を恐れ、恥を恐れ、自らの人生を小さくしていないだろうか。

プレシードは、創業以来常に挑戦を続けてきた。経営理念の一つに「常に挑戦課題を持つ」とも掲げている。挑戦するのは会社の方針だし、社員へ求める経営トップからの課題だし、今後もプレシードは挑戦を続けていく。失敗を処罰する文化は我が社にはない。この職場環境で自らを活かし、豊かな人生を送るためには、自分の壁に挑戦して貰いたい。技術・技能の向上、社会人規範の向上、新分野への挑戦、全く自分の違った世界を拓いていく感動を共有しながら、仕事と人生を進化させる面白さを共有できる仲間を求めている。主体者、リーダーという人に良い影響を与えることが出来る人材だ。

プレシードは、創業以来数えきれない失敗をした。大きな失敗が無かった年などなかったと思う。失敗の山が我が社の歴史ともいえるが、それを埋める成功があったからこそ今存在している。来年もきっと多くの失敗を重ねるだろうと覚悟している。今後もし失敗を咎め処罰することはないだろうが、Q・C・Dの約束は無断で破ってはならないという掟だけは守って貰いたい。約束は破る前に連絡するのが最低の人間社会のルールだ。遅刻する前に電話を掛けるといような簡単な掟だけは守りながら、大いに挑戦し失敗と成功を繰り返してネクストステージに這い登ろう。

次の主人公は、次のネクストステージに這い上がったものに頼まねばならない。その主人公に次の主人公を育てて貰いたいというのが私の夢でもある。

キーワード

「遣りたいか遣りたくないかではなくて、遣ったがいいか遣らないがいいか」

2013年12月28日

IOT

IoT、ビッグデータ、インダストリー4.0、第4次産業革命などの言葉がやたらと目につくようになった。今年の年初に、キーワードはIoTとビッグデータと伝えた気がするが、急激にその変化が加速していくのを感じる。もう誰にも止められないどころか、加速が加速を呼び世の中が急変する。そして人類が火を手に入れ、蒸気機関を手に入れ、電氣を手に入れ、コンピュータを手に入れた、次の変化となるのがIoT、インダストリー4.0なのだろうか。

いま日本は乗り遅れつつあると感じている。これに乗り遅れたら経済大国日本が過去の物語として語られ、やがて表舞台から消えていくことになるような大きな変化だ。本当はもう間に合わないのかもしれない。世の中には急ぐ必要もないことは多いが、日本が今後も出来る限り先進国として世界に存在感を維持し続けたいと思うならば急がねばならないことだと思う。

ドイツやアメリカが次の時代の勝者となる予測は多いが、それでさえ敗者となるかもしれないような変化だ。すぐ次に新たな勝者が現れるような気もする。大英帝国全盛時代にアメリカが世界のリーダーと成る日が来るのを誰が予見しただろうか。もし200年前に「広い豊かな国土だからやがて移民国家アメリカが隆盛を極め覇者となる」と予見できた人がいたとすれば、今の時代を「次は産業インフラを持っている先進国より最大人口を抱える国家である中国やインドがやがてビッグデータ活用時代の覇者となる。」と予言するかもしれない。

20世紀後半になって表れたIBM、マイクロソフト、グーグル、どれも出現したときに次の時代を支配しかねない存在になるとは思わなかった。過去の産業革命の勝者はイギリス、アメリカ、日本と移り、一時はそれぞれ栄華を極めた。次の勝者は果たしてどの国、どの会社、どの産業なのか、いずれにしても基幹産業はビッグデータを操り支配することだろう。

2015年6月13日

もう一度 報・連・相

報（報告）… 予定通りも報告義務。予定外の報告遅れは罪、怠るな！
連（連絡）… 気配り思いやり。知っている情報を独占するな！
相（相談）… 対策を立案し同意を求めよう。独断専行するな！

ビジネスマン常識「報・連・相」を敢てまた掲げる。言い尽くされた言葉だが、実行尽くされていない。現状は報連相を怠った為に多くの無駄を発生させている。

報告されていないことは計画通りでなくてはならない。報告がされていないがために無駄と不要な疲労を発生させている。予定通りの報告と予想される心配ごととも報告するのが組織人の務めだ。報告遅れは組織人として失格だ。誰にでも出来ることを怠ってしまう低レベルなことだから。

「予定通りで問題ありません」が報告できる組織人であろう。

連絡は自分が知っていることを必要とする部署や人へ伝えること。義務や定番のルールではなく、人への思いやりから自然発生する周辺への気配り、優しさの発露だ。

自分の業務を外から眺めて期待される連絡が出来る組織人であろう。

相談は最もビジネスマンらしい行為だ。「どうしましょうか」というより「これでいいでしょうか」と言える組織人であろう。上司に相談もしないでの状況変更判断は組織人として失格だ。

問題対策案を早く提示し相談する組織人であろう。

今さら報・連・相と思うだろうが、事業拠点も増え人員も増える中で一心同体で活動する企業を目指さねばならない。報告遅れや、意志の疎通が悪いと信用失墜とコスト増をもたらす。最低限の組織人の義務が報告だし、連絡が出来る人たちが効率アップをもたらし、相談で組織の成長をもたらす。

今年はISO9001の取得を目指す。先ずは、もう一度「報・連・相」でその潤滑剤として習慣化したい。

2016年2月

毎朝鏡と語ろう

朝出かける前、或は起きて歯磨き後でもいい、鏡を見て自分と語ろう。氣力が充実しているだろうか。鏡の中の自分を他人と見たら、魅力あるだろうか。店で接客される相手だったら優しい柔和な顔に見えるだろうか。社内業務だったら頼もしい上司に見えるだろうか、部下に安心感や目標となる上司や先輩に見えるだろうか。同僚に信頼できる顔に見えるだろうか。そして、顧客が頼りに出来そうな自信と氣迫ある輝いた眼をしているだろうか…。

毎日、鏡の中の人に語りかけて見るといい。髭面や髪ボサボサ、襟元もだらしない服着た人が鏡の中にいたら、貴方はこの人を自分が師と仰げるか、何かアドバイスを期待して重要な相談ができるか、或は自分を助けてくれそうなパートナーと出来ると思ふか、見つめてみよう。

少なくとも貴方が鏡で見る以上に、人はあなたを見ているのは間違いない。それ从前から後ろからも、嬉しい時も落ち込んだ時も、暑い時も寒い時もだ。

頼もしいと思われなければ人は相談に出来ないだろうし、アドバイスをしても信じな

い。命令しても動きが鈍いだろう。何故なら、この人は貴方に失敗させない、貴方の失敗をフォローしてくれる、貴方の苦しみを解消に向けて助けてくれると見えないから。

同情や愚痴に共感してくれる仲間には見えるかもしれない、愚痴が多い人たちが貴方との交流を求めてはくるかもしれない。何故なら愚痴を語り合って癒されるから。

しかし、いずれ去っていくだろう。愚痴やボヤキの相手では成長すればそこに何も価値が無い相手だと気づくから。

何といっても鏡の中の目の前の人は、貴方が信頼し尊敬し相談したい人に見えるだろうか。貴方が間違ったことを相談すれば優しく厳しくアドバイスしてくれそうな信頼感を感じる人が鏡の中にいるだろうか。

時として鏡の中のその人は現実の自分を励ましてくれるものだ。逃げるな！立ち向かえ！お前にできない筈はない！成長するチャンスだ、と。

まさか鏡の中の人は、自分でさえ信頼感を感じない相手ではないと思うが…。困難に立ち向かう勇気をくれる人になって貰おうではないか。(笑)

2017年12月18日

ビジネスカタパルト事業戦略

創業以来、設立の大きな目的の一つである新しい事業を立ち上げるフィールドにプレシードをしたいというのがありました。思いをもって入社する人たちに「プレシードはフィールドだ、そこに自分が思うようなビジネスプランを描き事業を起してもいい」と、事ある毎に言ってきました。

ゼロからの起業は総務、経理、財務、人事、購買など基本的な会社機能を運営するのに多くの時間とエネルギーを費やしてしまいます。企業信用の確率も時間を要します。取引の信用は創業したばかりの起業には大きな壁です。口座開設など意味も分からない言葉に途方に暮れることも多いのです。今まで、採用時に思いある人たちには「すでに設立されたプレシードというフィールドを使って自分の夢の新規事業を始めてもいい。」と伝えてきました。

今まで幾つかのプロジェクトプランと出会い、資金提供だけに終わったものもあれば、事業開始して成果を出せず時間と資金を費やしただけのもの、多額の費用投下後に座礁し、その後の再挑戦で成長期に向かっていているもの、最近スタートして順調に育

ち始めたものの等々様々な形で実績を残しています。

今後もプレシードは既存市場でパイの奪い合いビジネスに参入するより、新たな市場を開拓するビジネスに挑戦する能力を持つ次世代を育てたいと思っています。プレシードの技術力、技術評価力と資材調達能力、人脈、国内外への広域展開力、顧客を裏切らない企業信用力などを用いて、小さなチームが新たなビジネスフィールドでの起業を支援し立上げを加速するという機能を、航空機射出カタパルトにたとえ「ビジネスカタパルト事業」と呼ぶことにします。

モノづくりが日本国内で衰退していく中で、新分野を切り拓く事業立ち上げは今後ますます重要度が増すでしょうが、多くの創業者にとって、創業期は事業テーマ以外の問題が大きな壁として立ちはだかり、その対応に多くの時間と資金を浪費し、ある人は失速失敗し、ある人は想定外の長い期間を費やしてしまうことでしょう。

新規事業の起案提唱者と共に短い期間での立上げに挑戦し、失敗リスクを減少させ、成功すればその得られる利益の一部を更なる新事業に向けるという運営をプレシードの事業として大きな柱に育てることを目指すものです。

今後、日本の製造業の拡大再生産型ビジネスは次第に消滅していくと予測される中

で、ビジネスは常に高品質少量多品種と短命あるいはニッチの新規開発商品で生き残っていないかねばならないし、多くの挑戦者が思いを込めたビジネスで新市場を開拓創造する機会が増えねばならないと考えます。しかもその立上げは高い完成度でかつ迅速であらねばならないことでしょう。そこには多くの直接部門、間接部門の事業運営ノウハウと軽快なフットワークが求められます。創業時より多くの技術開発や新市場挑戦を繰り返してきたプレシードであれば、そこに事業運営経験と人脈、技術リサーチ、評価能力など活用できるフィールドを提供できます。主人公はあくまで覚悟をもったビジネスプランナーであるのは言うまでもなく、プレシードはその夢実現のパートナーでありたいと願っています。

2015年3月14日

過去の事例

○レジストコート事業

S社からの受注でプリント基板への塗布装置として始まった。その後、プラズマディスプレイの大型化共に装置の大型化に挑戦、スケールアップの度に開発赤字を重

ねながら一辺が2mを超えるガラスサイズまで実績を積んだが開発費回収も出来ないうちにプラズマテレビ市場消滅。

その後、一時の受注空白時期を得て液晶用コートーとして復活、S社との連携で過去の実績活用で多くの装置を出荷し利益を得ている。

○船腹清掃ロボット開発

知人の紹介で大型船の船腹を自在に動き回り錆や古い塗料を掻き取るロボット開発者を紹介され連携を依頼された。現地調査や実物の検分後資金不足の為にスタート調査費を開発者に30万円渡した。

その後、資金の更なる要求が強く継続調査をするうちに開発者が去って行った。

○鉛フリーハンダの市場開拓販売

東京の営業担当が前職で行っていたビジネスを立ち上げたいという申し出によりスタートした。電子部品の実装に使用されるハンダの鉛フリー化をめざし、一部上場電機メーカーF社のパテント使用権を得て、ハンダメーカーに試作依頼し国内外での採

用と普及を図った。

その後、米国でプレシードアメリカ Inc. を動かし巨大半導体メーカー I 社へ試験材料としての販売までは実現したが、その後評価には3～5年かかるとの回答もあり、米国法人撤収もあって断念。

○産業用インクジェット装置

インクジェットヘインク供給装置受注で取引始まった家電メーカー P 社に居た技術者が早期退職するのを事業立ち上げ責任者として採用し、主に産業用印刷機を受注し設計製作したが、既存の印刷業界や中国市場での展開が中心で受注物件も少なく赤字続出で起案者も退職。残事業完了と売上回収に多くの費用と時間を要した。

その後、レジストコーター事業を展開していた業界へ特殊塗布装置として事業や特殊対象物への印字として設計製造販売を重ねながら、標準装置を開発し販売を始めた。

○太陽光発電設備普及事業

ソーラーパネル製造装置を長く製造してきたことからソーラー事業への関心と業界

人脈と知識も多かった。ソーラーパネル生産ラインを手掛けたメーカーやヨーロッパのメーカーのパネルを調達し主に中小企業工場の屋根の上への設置中心に総務と技術部連携で新規採用なし、設備投資なしで普及事業を始めた。

その後、幾つもの実績を遺したが、買い取り価格の急速な低下で業界が低迷して現在に至り、専従員なし。

○売電用小型風力発電設備の普及事業

米国法人運営時代の知人より日本国内での認可のアドバイスと支援を要請されたことから始まる。有料アドバイザー活動1年の後、日本国内での総代理店契約締結後日本国内での認可普及を目指す。

その後、熊本県上天草市に2015年1月に日本国内初の小型風力発電全量売電の設備の売電開始。現在さらに個別認証を超えてJET認証得ての普及めざし活動中。

○食品事業

県立高校家庭科教師が長期間の管理職勤務での疲労から早期退職し、個人的趣味と

して開発を行っていた大麦グラノラを2013年に商品化。全く事業として接点のない分野であり販売手法も異なる事業であるが、社是、経営理念に合致するものとして挑戦した。当初、開発者をパート社員として採用し経営企画室、総務を中心の社員による兼務業務で開始。

その後、新規採用したパティシエ、調理師、管理栄養士など女性専従社員の構成チームとなり、未経験だった全国での催事参加などで販売も急速に拡大し、設備と新たな食品開発も徐々に進めながら新事業として会社の柱に育てる方向に向かっている。

○オフナー顕微鏡

社長の10年来の知人である光学系ベンチャーM社が開発パテントを持つ光学システムを世界初のオフナー顕微鏡としてのシステム開発に参加。

その後、販売しながら様々な機能と用途を開発し日本国内での普及を目指す。

何故プレシードを誇れるか

平成とともに生れた株式会社プレシードも令和を迎え愈々満30歳となりました。その間には幾多の危機とも遭遇して来ました。景気など社会環境によるもの、社内環境によるもの、そして経営者としての器量不足によるもの、私の技術者としての能力不足など様々な困難と立ち向かい凌いできました。最も多かったのが経営者の未熟に起因するものだった気がします。その度に多くの時間と資金を投じ、個人としても会社としても痛みと共に成長があったような気がします。

私が無知、無能、経験不足な経営者である為に、無益な労を費やすことになったとの思いを持った人もいるのではないかと思うと、素直に侘びねばならない思いもあります。そうであれば正直にこの間の経験を後進の役に立つように残すのが私に課された最大の責任のような気がしてこれを纏める次第です。

私にとって企業の社会責任とは、正に雇用と納税だと考えてきましたが、納税は時に利あらず、大それたことは出来ませんでした。雇用であれば、国内だけでも200名以上の人財育成と雇用維持で寄与したものと自負しています。

創立当初から覇権を求めず王道を求め歩きことを理念として、人のパイを奪わず、新たなパイを創り出すビジネスを目指してきました。社是に「社会に新たな価値を創造する」を掲げ、技術立国に貢献できる企業として運営してきました。無知と稚拙の遠回りがありましたし、幾つもの失敗の痛みもありました。しかし、全ての局面から逃げずに対処してきました。莫大な費用を投下したことも多々ありました。しかし、振り返って後ろめたく顔合わせできない人が居ない事が我社の誇りです。勿論、随分と迷惑を掛けたこともあるでしょうが、誠心誠意の対応をしてきたことは我社の誇りです。

また、会社を運営していると様々な誘惑もあります。俗に言えば私欲を肥やす不正の誘惑もありますし、嘘で困難な局面を逃れる誘惑もありましたが、弱い自分に頼って会社として経営者として毅然と生きてきました。今思えば正々堂々と生き方を曲げなかったプレシード経営は私の誇りです。

「正しかれ、怖れるな」、怖じ気づきそうになる時にはその言葉で自分を奮い立たせました。30年の中では時として経営危機という恐怖に支配されることもありましたが、正攻法で生き延びたプレシード経営は私の誇りです。

今、100名以上の人が集い、皆が社会で堂々と正しく仕事をして生きていけると、地域でも卑屈にならず堂々と生きていけること、親族友人に仕事で頼み事や迷惑を掛けずに生きていける会社であること、これはプレシードの誇りです。

これを守り通し、後進の者に引き渡すことが私の最期の仕事となるでしょう。

2019年5月7日

リーダーの立つ位置

リーダーが立つべき位置は3カ所ある。チームが走る先頭に立って引っ張る現場指揮官型。チームの真ん中に立って距離感を大切にする調整型。チーム全体が最も見える位置に立って伝令で指示する間接指揮型。いずれも人によりそして組織によりどの型がいいか、判断が難しい。下手に真似ると組織の機能不全の方向へ進む。

創業者は勿論、現場指揮官型が多いが、それでも数万人の組織になっても現場指揮官型に見えるような運営を見事に行う指揮官もいるから敬服の至りだ。世界の成長企業はこのタイプの経営者が引っ張っていることが多い。ソフトバンクの孫正義氏、日本電産の永守重雄氏、ユニクロの柳井正氏、アップルの故スティーブ・ジョブズ氏、サムスンのイ・ゴンヒ氏、…等々名前を上げればきりが無い、という言うよりも多くの急成長企業がこの型を取ってうまくいっている時、企業は急成長を遂げる。決して創業者だけではない、この挙げた事例にも創業者でない人も多いが、権力が集中しているのは共通だ。

しかし、この真似をしようとして失敗し大やけどしたり消滅した企業も多い。地元中小企業などの事例も含め前任者以上の業績を急ごうとの焦りからなのだろうか。過去や市場の状況を未消化のまま他社や最近の成功事例を真似して取り込もうとして失敗するのを見かけるのもこの型かもしれない。

世界の歴史も専制政治で名君と呼ばれるこの型の統治者が出た時に時代は華やかな円熟期を迎えることも多いようだ。時間を掛けて統治者が成長し事業を拡大していくときに成功は生まれることが多く、一足飛びに簡単にまねができるスタイルではないと肝に銘じておかねばならない統治形態だと思う。

調整型はどうだろう…。番頭が社長に成ったり、天下り、経営不調立て直し登用の社長に多いと思うが、急成長というより確実な進化を目指す運営として理想的かもしれない。派手ではなくても若くてエネルギーで労を厭わない経営者であってこそ出来る労多い型だと思う。それでも社会があまりにも変化が多く且つ市場がグローバル化した現代ではこのタイプも困難を極める。特にアジアでのビジネス型や、B to C型のビジネスで流行を捉える必要があるビジネスでは、合議と調整に時間を要するとスピード感や斬新さを欠き、外から見れば「らしさ」が無くて魅力がない企業に見

えてしまう。

大企業ニーズを忠実に履行する企業には最適だろうが、現代のビジネスではそれでは済まないことが多い。いざという時には独断専行が許される環境作りは必要だろう。先ずは2代目社長などの初期段階には最適の型かもしれないのが合議制ではなからうか。手柄を焦るより先ずは承継を安定させ、実務のOJT時代にはこの型で今までの運営を踏襲し、「守」時代をやり過ぎして「破」、そして「離」へ向かうべきと思うのだが…。

私の周りには、「守」も「破」もせず或は中途半端でいきなり「離」を目指し消えて行った経営者も多い。夢を追う夢の中に消えて行った。勿論、そこから復活再起して成功した人も知っているが、周辺は死屍累々を招いてしまう。だから先ずは調整型は理想の一つともいえる。カリスマ経営者であっても人の意見や十分に引き出して運営する松下幸之助や徳川家康のような大経営者もこの型にはいるだろう。

自ら攻撃を仕掛けずに相手を巻き込んだり、周辺を抑え込んで敵の力を削ぐ能力など冷静に見ればスゴイ人たちだ。中国の歴史の中に事例が語られることも多いが、自分で見た訳ではない。その勝者の語る歴史なのかもしれない。大衆受けはしないがプ

ロが認める経営者たちに多い。

間接指揮型は円熟期に入った組織、或は官僚組織のように成功より失敗が許されない組織の成功統治者に多い。一人の名前として一般に賞賛され名を残すことは少ないが、安定な組織を次世代に継承していく。もっと評価されていい経営者たちがこの型に多い。経営とは先ず守り抜いて、欲を言えば成長させて引き継いでこそ評価だ。地味で目立たないが、着実に守りながら地固めしつつ攻めも遣っている熊本の歴史ある企業経営者もいる。必要なのは周りに人財が育っていることなのだろうか。

この型の経営者は組織全体どころか社会全体まで眺める余裕をもって次の時代、次世代を考えながら組織を守り育てていく人だし、それができる形態だ。局所対策ではなく、未来や全関係者、或は社会への影響も考えながら全体最適を図って対策を実施する経営者である。現役中には非難や悪口を言われる人も多く華やかさが無い経営者たちだ。妙案であつても外から見れば無難な策に見えて面白さに欠けることが多い。死後に時間が経って評価されるテクノクラートと呼ばれる政治家なども多い。消費税導入で選挙で大敗した竹下登元首相などはその事例ではなからうか。私ごとには

真つ最中の評価はなかなか出来ないような人たちも多いが、目先のポピュリズムで動かない人たちと言える。見えないが長期的に見れば着実に成功を重ねていること分かる人達だ。勿論、時と人が待って呉れての話だ。

以上、私なりのリーダー論だが、リーダーは常に生きて動いている時代環境の中で判断していることを忘れてはならない。成功も失敗も後の人達がその結果だけを切り取って評価することは多いが、それではまた失敗の事例を積むことにもなりかねない。生きた経営者や政治家を生きた時代で見つめて、自分なりの仮説をしっかりと掲げて経営者や統治者を観察しているつもりだ。そして自らの判断の甘さに気づかされることも多い。

最後に一つ付け加えておきたいことは、経営に運がいいなどということは絶対ないということだ。運が悪いという事は瞬間的な天変地異など含めて有り得るが、幾つもの判断を重ねて結果が出るのが経営だ。運がいいなど連続して起きることなどあり得ない。それでも私は運がいい、と呼ばれるような経営者で在りたいし成れば理想的

だと思う。苦勞話だけが語られ残るような経営者であってはならない。

いま経営者を遠い場所にいる人でも周辺やマスコミで知る人達であってもいいが、自分なりの仮説をもって経営予測を競ってみれば新聞の政治や経済面も面白いだろう。いつかそのあたり外れの経験が時代の判断や人を率いる力となることだろう。

2018年1月8日

「過渡期」という言葉

「過渡期」、この言葉には私は忘れられない思いがある。1984年ごろだったと思うが、当時31歳の私はH社の小さな部署で部門長の下でエンジニアとして設計から製造までの運営を組織内で指示していた。一方では300名程度が所属する労働組合の副委員長を遣っていた。500〜600名規模の会社採用新卒が50名以上の採用が続いていた時期だった。急成長で会社の組織統治が追いついていないような高度成長期で社員数が急拡大し始めた時期だった。

経営のことなど全く無知な社員だったが、従業員代表の組合幹部として当時の社長と労使協議会などに参加し、将来の発展のことや社員の処遇などを話し合ったりしていた。大きな利益を数年出していたようだったが、社内改革が遅れ旧態依然とした幹部による現場指導型運営が続いていた。日々に起きる仕事の問題は汗と根性で乗り越えるというような時期だった。

新しいシステムや手法の導入もほとんど感じなかった時期だったが、社長の話は進

歩的だし挑戦的姿勢はエンジニアとして聴いても夢があった。その頃、当時の社長と一対一になったことがあった時にふと社長に言ったことがある。「私は社長の言われることにはいつも大変共感して、それを実行したいいつも思います。しかし、それを行動に移そうとすれば中々承認が得られないのです。決して皆がやる気がないわけではないのですが」と。その時に帰って来た言葉が「過渡期だから10年我慢しろ。」だった。その頃の私には10年という歳月は余りに途方もない長い歳月に感じた。

この言葉は汗と残業で精いっぱい日々の業務と噴出する問題処理に生きていた私にとって絶望的だった。この極限の生活を10年続けては若さも無くなり体力も気力も萎えてしまう、10年待つのは嫌だと思うようになった。

それからしばらくして辞表を出すことになり、何度も上司に慰留はされたが、会社は一人の社員の意見で変わり始めるはずもなく、一年後にはついに退職を受け入れてもらった。

この件で使われた「過渡期だから」という言葉は私には一生を変えた最も大きな言葉だった。だから私は自分の会社では絶対に「過渡期だから我慢しろ」という事は言わないと誓った。変えたければ説得して上司も会社も変えればいいと言い続けている

る。私も退職するまで、仕事を変えて進化させることはやり続けた。提案や企画は大好きで出し続けた。受け入れられなければ案を再検討したり表現を変えたりもしたし、余り諦めたりはしなかった。提案で変わることも多かった。しかし、10年間孤立の中で過ごすような気分が払しょくできず、自分の未来をどうしても明るく出来なかった。

だから、我社では絶対に「過渡期だから我慢しろ」とは言わない。「過渡期だから早く渡ってしまおう。手伝え」と言いたい。いま我が社も過渡期にあると思うし、社会も大きな過渡期になるような気がする。時代で言えば関ヶ原の決戦や明治維新の変化のような大きな時代変革が始まっているように思う。大きな変化のうねりの中では受け身で流されやすい時代だとは思いますが、変化と進化に挑戦する者には常に機会が与えられる会社でありたいものだ。

2018年4月28日

失敗は無駄か？

経営理念の4本の柱の一つに「全ての事に感謝する」と謳っている。これは私の半生で実体験で感じ取ったこと。私の人生は失敗と無駄の山だったような気がする。その無駄と失敗を重ねた後に気づいたことが、どちらもその後の行動にどう反映するかでは全てがプラスにも使えるという事だった。だから「全てに感謝する」という経営理念を掲げることになった。

私の人生は失敗から学び、それを何とか生かそうとするうちに力が付いていった気がする。例えば大学で私は3年も留年した。普通の人からすればかなり異常だし大きく出遅れた。この大きく出遅れた悔悟の思いが有って工場ではむしろに働いた。その決意がなければ、おそらく途中で辞めてしまったであろう位の過酷で専門外の工場勤務だったが、そのおかげで3年過ぎると次第に仕事の容量も身に付き始め自信もついた。もしこの大学時代の無駄な3年がなかったら平凡な技術者生活か出遅れた公務員で終わっていただろう。若い頃の私は他に選択の道を知らなかったから。

仕事でも過去に1億円を超える赤字を何度か出したことがある。その時は大変厳しい状況となり生活費どころか正に生死を掛けてその対応策に走った。その度に経営者としての教訓を得ながら結果的には会社は大きくなり私も少しは成長した。会社が個人の財産を貯める為ではなく社会に貢献するために存在するものだと思えば、その成長が会社の雇用を増やし地元の仕事の発注も増やしたのでプラスとなったと言える。

逆に今日の成功は本当に将来の幸福につながるのか、という問いについては素直にYESと言えないことが多い。ヒット商品を出すという成功に恵まれた時、その成功に何時までも頼って次の展開が遅れて失敗し、大敗北を喫したという起業事例は枚挙に暇がない。メモリー競争では1メガの勝者は4メガの敗者となり、4メガの勝者は16メガの敗者となるような競争が永遠と続いている。平面ブラウン管で市場制覇したソニーは液晶TVで出遅れ、液晶TVの勝利で増長したシャープ経営陣は予測を誤り市場から追われた。

歴史は単純な事例を永遠と繰り返している。人生は塞翁が馬と言われるように、成功は失敗の始まりだし失敗は成功への道のきっかけとなる。確かに失敗は辛いが意気

消沈するだけのものでもなく、成功も喜ぶだけでなく何かの陰りの出発点にもなっていないかと振り返るべきなのだと思う。

今日も明日も本気で向かっているビジネスに、私はまた失敗の事例を作ることだろう。手抜きや逃避の失敗でなければ前向きに学びとして受け入れよう、ザンネンながら。

2018年7月

仕事は面白い？面白い！

仕事は面白いですかと問われることはないだろうか。子供の頃に勉強は面白いか、何の勉強が好きかと問われ、いつも回答に困ったものだ。

勉強を子供の頃に面白いと思ったことは殆ど記憶にない。勉強をゲームやTVや映画を見ると同じ観点から面白いかと問われれば、面白いと思ったことは確かに一度もないかもしれない。それでは仕事の面白さとは何だろうか。本当に仕事は面白いと言えるのだろうかと自問すれば、最近は自信をもって面白いと言うことが出来る。

それではどこが面白い、何が面白いという問いに答えねばならない。私は仕事をゲームや趣味の面白さと比べて面白いというつもりはない。仕事の面白さとは、遣っている時以上に終えた時の充実感、達成感だし、自己の成長満足ではなからうか。

山登りの面白さに似ている。山登りは登る途中の景色や緊張感、疲れやキツさの中で心の中の自分との対話がある。負けそうな自分と壁を越えようと挑戦心を燃やす自分を感じながら足を進める。そして頂上というゴールに立てば苦しみが大きかった時

ほど更に大きな達成感がある。似たような体験を仕事で何度も体験した。さらに仕事の場合は収入や評価に繋がる人が多い。面白いと言えるのは当然でもある。

”心より我に働く仕事あれ それを仕遂げて死ななと思う”

～石川啄木～

若い頃この短歌に巡り合って心から共感した。しかし、それと裏腹に精一杯、気持ちを注ぎ込める仕事に巡り合いたいと思って遠くばかり見て諦めていた気がする。

実は足元にその面白い仕事はあった。今日する仕事こそ、精いっぱい頑張つて遣り甲斐の在る仕事だった。面白さを遠くで探すとき、足元には不満ばかり感じていたが、同じ仕事なのに気持ちに注ぎ込めば次第に変っていった。仕事が変わったのではなく、先ず自分が変わっていった。

サラリーマンエンジニア時代にやっと人生は面白い、遣り甲斐あると感じ始め深入りして行った思い出がある。学生の頃に気づいていればもっと人生は拡大したのかもしれない。青い鳥は遠くに探しに行くより身の回りに見つけるべきものだった。それ

からの35年間、私の青い鳥は直ぐ近くにいる。そして上手く育てるかの手腕を問われている。

2019年5月8日

我社はビジョナリーカンパニー

もう随分以前だが「ビジョナリーカンパニー」という本がベストセラーになった。当時はその中で紹介された一事例を勉強会の中で取り上げられた記憶があるが、ただの成功事例集と思っていた。そしてビジョナリーカンパニーとは何かを考えもしないで時が流れた。

最近私が尊敬する経営者からこの本を百回以上読んだと聴いて、改めて本を購入し読み始めたところすっかり虜になってしまった。20年前にもっと読んでおくべきだったというのは後の祭りだが、今読んでも経営の根本的なところに大きな自信をくれた。簡単に言えば、企業とは一人のカリスマの経営手腕で成り立つべきではなく、その運営・仕組・方針で運営されるべきである事。それが経営理念などを浸透させトップが変わっても基本理念と進歩の方向が不変であることが必要だという。

元々経営素人のエンジニアだった私の経営は常に不安の連続だった。だから自分がぶれない為に創業して間もなく社是と経営理念を掲げ、これの実行が私の経営だという事にした。しかし、素人の私の掲げた旗が正しいという自信もなかったので、

「トップの私が代わったら社是も経営理念も変えて貰ってもいい。但し、その時はプレシードという私の理想の旗も降ろして社名は変えて貰いたい。」と言っていた。

しかし、この本を読んで自信がついた。いや自信を持ってもっと強く社是・経営理念の実行を叫ぶべきだ、これが永遠に持続発展するビジョナリーカンパニーなのだと思えるようになった。この本でも言うように、誰にとってもいい会社ではないかもしれないが、共感する人にとってはいい会社であるのがビジョナリーカンパニーだ。共感しチーム貢献する人、会社貢献する人、それを通して社会に貢献する人が居心地よく報われる会社であらねばならない。結果としてビジョナリーに共感して働く人の全てを幸福に導ける企業となる。

楽な会社にすることを目的にしようとは思わないし出来るはずもないが、楽しい会社であることは永遠の目標とする。決して高度で難しいことを実行することではなく、同じ思いで仕事に向かい苦楽を共にしながら企業と人が育つ会社こそがビジョナリーカンパニーだ。会社の共通目標とか理念とかは決して難しい事ではなくシンプルな事なのだ。だが書中に曰く「単純さは容易さを意味することではない」とある。共通の理念を持つてやり続けることこそが最も重要な事なのだと。

書中にもいい会社が偉大な企業になるより、そうでない会社の方が危機を恐れず多くの事に挑戦し進歩への意欲が高いから偉大な企業になれるという。正に多くの問題に取り組み成長する我が社ではないか（笑）

我社のビジョナリーである社是と経営理念をいま更にじっくりと噛みしめ考えを深め始めている。

2018年7月28日

「松下村塾はビジョナリーカンパニー」

先日、経営勉強会の親睦旅行で萩の松下村塾を訪ねる機会があった。今回の訪問で少年の頃の訪問も含めて3回目という事になるが、勿論、訪問の度に考えることは違う。同じものを見ても心の有り様で見えるものは全く違うという良い事例かもしれない。

若い頃は明治維新の偉人達が学んだところという視点で見えていたが、今回は松下村塾が他の私塾や藩校と比べて何が特筆すべきことだったのかという視点で考えてみた。

塾長吉田松陰の際立った特徴は陽明学で学んだ知行合一、すなわち天命には命を投げ捨ててでも行動に移すという事だったのかと思う。そしてその純粋な考えに妥協せず、集まる若者にその道を説いた。

塾に通ったものは数百名に登るらしいが、松陰に学び明治維新に積極的に加わったのが、高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔磨、伊藤博文、山縣有朋、山田顕義、前原一誠、品川弥次郎…など名を残す人が数十名いる。直接教えを受けた期間は長い者でもわずか2、3年だし中には山県有朋など僅か一カ月程度だったらしい。影響とか理解

共感とは時間の長さにも比例しないようだ。

この集団が日本を変えるほどのエネルギーとなったのは松陰の純粋な「国の為に命懸けで行動する」という「ビジョン」と強烈なリーダーシップ運営を行う塾に残り、行動について行った集団だったからだ。勿論、松陰の思想について行けなくて、松陰のもとを去った者も多いと聴く。

「ビジョナリーカンパニー」で言えば、ビジョンのバスに乗った人たちが理念を共有し日本を動かした。松陰が描いていた新日本像などは当時はなかったのだが、「国の為に命を懸けて行動する」という理念の旗に集まった者たちが切磋琢磨して語り合い明治新政府を創り、総理大臣始めとする明治時代の各界重鎮を輩出した。近代化に遅れた日本を世界に伍する大日本帝国に育てあげた。

お互いを尊敬し信じあえる集団であれば、行先の決定さえ後回しでもいいという「ビジョナリーカンパニー」に酷似する。目的を共有する以上に理念やマインドを共有することが、信じあい自由度の在る集団を作りお互いと組織を育てていくのだろう。松下村塾こそビジョナリーカンパニーの事例のような気がするし、プレシードも

そうありたいと思う。私は勿論、吉田松陰でもないし暗殺を指示したりもしない（笑）。受け継がれるビジョンを残したいただの創業者で十分だ。

2018年10月4日

クリティカルワークとルーティンワーク

日頃の業務は大きく分けると、前例やパターンに依存しない挑戦的テーマが中心となるクリティカルワークと、日々を守り同じパターンを間違いないく繰り返すルーティンワークに分けられる。

我社は開発型であるので、クリティカルワークが一般企業より多くを占め重要であろうが、それでもクリティカルワークを小さな作業単位に分類すればその中は多くのルーティンワークが占めているのが現実だ。開発的業務で未経験というクリティカルワークの中にも、どの位ルーティンワークを拾い出して安定した作業としてビギナーや外注に展開できるかが企業やPM（プロジェクトマネージャー）の手腕と言える。

またルーティンワーク業務は絶対に間違いがない事、次にいかに早く行うかということが課題となる。ルーティンワークの中にも改善というクリティカルワークが存在する。事務・管理部門が10年前と同じやり方では企業は大きく後退してしまうだろう。

日頃ルーティンワークの中に居ると、クリティカルワークとして向き合える部分が、IT化のように外部の進化で提案を受けてからの発生になってしまいやすい。決

められた内容を守るという業務が、変化に弱い体質となって守るべきものも守れなくなり、環境の変化の中で価値を創造するまでに至らない。ともすると変化を見逃し、所謂ユダエル現象となってしまう。だからルーティンワークに如何にクリティカルな緊張感を維持できるかは重要な課題であろう。

クリティカルワークもルーティンワークも、其々にクリティカルをルーティンに大胆な挑戦で、または仕事の仕分けで進めることが重要だ。我社の強みはクリティカルワークだろうが、そのみの仕事でもない筈だし、勿論ルーティンワークだけの業務も我が社には存在しない。たとえ管理部門であつても。

人にもルーティンワーク型、クリティカルワーク型があるようだ。共に組織には重要だし、特性を活かせば組織貢献は大きいし、逆の特性配置にしまえば失敗が多い。変化がないということが、進化が無いという行動となつては組織にとってマイナス効果となる。

クリティカル型リーダーをルーティン型人財が支える、またはルーティン型リー

ダーの変革プロジェクトをクリティカル型人財が起案し行動する。どちらのパターンも適材適所で人は活かせる。「人を活かし切る」の原点なのではなからうか。

2019年6月10日

心は常在工場

事業というのは常に動いている。武士が常在戦場、“心は常に戦場にあり”との気構えで常に闘いに備えて生きたというのと同様に、製造業はトップから新人まで常に工場に立てる気概を維持せねばならない、と思つて運営してきた。

私自身は朝7時半に出社し、9時前の外出がない限り上下服とも作業制服に着替えることを義務としてきた。服には名刺、筆記具2本以上、ポケットには名刺と手帳と関数電卓、メガヤー、腕にはストップウォッチ付き時計を身に着けた。最近では私のポケットから電卓とメガヤーが消えて行つた。安全上から女性社員にも爪を伸ばすこと、長髪をなびかせる事を禁じた。常に制服とメモと名刺くらいの着用は全社員に期待している。仕事モードであればいつでも即座に対応できることを自他に求めて来た。

この鉄則も30年目にして体力が落ち始め、仕事内容は増え次第に常在工場が重荷となつて来た。出社時間は何とかキープしても、朝の清掃を諦め退社時間を早くするところでカラ元気を維持してきた。毎日が夜10時以降の退社だったのが、今では夜8時まで会社に残ることも少なくなつた。以前であれば体調不調でも残つていたような時間

だ。今の時代に人に求めることではないのだろうが、トップとしては後ろめたさと不安がある。これが我社のトップが示す企業文化となつては、維持成長できるのかと自問し悩むことも多くなつた。

もう社長率先で企業文化を育てていくことを諦めねばならないのなら、社長の座を明け渡すのを急がねばならない。社長に甘い企業文化は私には似つかわしくないと思うから。

社長の経営スタイルは色々あつていいが、心は常に工場というビジネスの最前線にある緊張感を持つて仕事と向き合ねば、小さな独立型製造業はあつという間に嵐に飲み込まれる。老化が進むトップではあつてはならない。適任が確認できればいつでも喜んで受け入れたいと思ひながらも既に10年近くが過ぎ去つた。放置ではいけない優先事項として取り組まねばと思う日々だ。

2019年7月9日

経営理念

経営理念は、現社長である私の運営方針を示すものです。常にこれに照らし合わせて経営をするよう努めるものですが、社長が交替、或いは時代や状況の変化により変わることもあり得ます。現在の代表取締役である私の運営方針と考えてください。

一、感動を創造する

あらゆる職業について言えることだと思いますが、顧客や社会、家族、上司、仲間
に感動を与えることが出来て初めてその存在を認められ、また、求められるのではない
でしょうか。品質で、コストで、スピードで、はたまた笑顔の応対で等、様々な手
段はあっても、要は感動させる力があってこそ我々は認められるのです。決して物を
造る技術がすべてとは考えません。それぞれの特性に応じた感動創造があつてこそ、
組織で共に協力しあう価値があるのです。

たとえ家族であつても、いつも迷惑しか持つてこない者は、いつか皆が 遠ざかっ
ていくのです。私はプレシードを顧客や社会に感動を創造することで存在を期待され

る企業にしたいし、そこで働く仲間はそれぞれの能力で周りの仲間を感動させ、一緒
に仕事をしたいとお互いが思い合える集団にしたいのです。貴方はどんな感動を人に
与えることが出来ますか？

一、人を活かす

組織というのはスーパーマンだけの集まりではありえない。むしろ、凡人をいかに
非凡な存在にならしめるかが指揮者の能力といえます。様々の人間の能力や個性を適
材適所に活かしてこそ組織だと思ふのです。能力を問う前に、我が社の運営方針に共
感してくれる人こそ我々は尊重し活かしていきたいと思つています。そして人から活
かされるのを待つのではなく、自らの意思と行動で自分を活かしていくのにこの職場
を利用していく者達であつて欲しいものです。そういう人達こそ、他の周りの者達を
も活かしてくれるものと思います。人を活かすために組織があるのではありません
が、自らを一生懸命活かそうとする人を本当に活かす組織作りを進めていこうと
思っています。

一、すべてに感謝する

これは方針というより気持ちの持ち方、生き方といえるかもしれませんが。創業時より幾多の困難に出会って来ました。そして、助けて戴いた人や、うまくいったことがあると感謝を忘れないようにと思ってきましたが、振り返ってみると、決してうまくいったことのみが我々を成長させてくれた訳ではないのです。むしろ、予想外のトラブルや、手に負えないほどの壁が行く手をさえぎり、何とかそれらを切り抜けた時が感動も成長も大きかったような気がします。楽にうまくいったことに感謝することも勿論必要ですが、困難に立ち向かう場を得られることにも感謝する気概を持って生きて行きたいものです。そうすれば道はおのずと開けるのではないのでしょうか。

一、常に挑戦課題をもつ

これは私の個人的性格に由来するところでもあります。何事も問題も 変化も無い日々は次第に私の活力を奪い精彩を欠いて来るのです。私の生き方は、常に何かワクワクすることを求めることなのです。無論、それに対しての苦労やリスク、個人的な何かの犠牲が伴うことも覚悟しています。何かを得る為に何も失わない、何の我慢

も必要としないものなど大して価値のあるものとは思えません。貴重な人生の時間、資金、労力という代償が必要なことを覚悟してでも、何かに挑戦しながら生きて行くことが、自らの力を最大限に引っ張り出すことになり充実した人生になると信じています。何もしないで外的変化に怯えながら生きるより、自ら挑戦課題を造り立ち向かう方が感動との出会いが遙かに多くなります。生き甲斐を感じます。

勿論これは他人に押し付けるつもりはありませんが、感動を追い求めてこそその人生と思いませんか？

2000年10月14日

社是

「我々は技術と情熱をもって社会に新たな価値を創造する。」

経営は色々な局面に際して判断、行動に思い悩むことが多い。自らの人生観から社会への関わり方まで自分を直視することを求められることも多い。そのようなとき、プレシードという企業の存在意義を創業の気持ちから素直に表すと、世の中の役に立つ企業であり、存在を飲ばれる人間の集まりでありたいというのが原点であった。その「方法」が、働く者たちがひたむきにそそぎ込む情熱と技術力であり、「手段」は我々が作り出すオリジナル性にあふれた装置やソフトである。そして「目的」が付加価値を作り出すことである。

世の中に付加価値を作り出すことによって得られる報酬は誰からも飲ばれることが出来る。我々は市場に覇権を求めてはならない。あくまでも我々が参画することによって生み出す付加価値、それによって得られる代償としての報酬であらねばならない。他人の仕事を付加価値の劣る成果で侵してはならない。あくまでも我々はより存在価値の高い企業、存在を求められる企業であらねばならない。

企業は生き続けねばならない。生き続けるために、ともすれば理想とかけ離れた仕

事をせねばならぬ事もあるだろう。しかし、あくまでも成果は世の中に役に立つものでなければならぬ。もし、我々が世の中の役に立たないような仕事に一時的にせよ加担すれば、会社の歴史に残す汚点は悔やみ切れぬものになり、生涯の重い荷物となる。色々な壁に直面もするだろう。一時的には絶望の闇がすべてを覆ってしまったかに見えることもあるだろう。しかし、理論に反せず、正義に反しない限り、いつか闇を照らす一条の光に出会うだろう。技術と情熱をいつも高く維持し続ける事を誓う限り、良心に反した行動やいかがわしい人間関係は無縁となる。正々堂々とした人生を送ることが出来る。

プレシードは付加価値に執着せねばならない。一時的にどんなに苦しくても、情熱と技術研鑽で付加価値を生み出し続ければ、プレシードの存在を求める人たちが次第に増えていくことを信じよう。世の中の役に立ち続けている企業である限り発展し続けることが出来ることを信念としよう。我々の産み出す付加価値が家族や社会の繁栄と幸福をもたらすことを信じよう。

「情熱」、「技術」をプレシードの拠り所としたい。

2001年3月7日

生 き 方

「経営のこころ」と隣り合わせで、
社長松本修一の「生き方」を語る。
多忙を極めながらも、
禅寺への参禅や熊本城マラソンへの挑戦などを体験し、
人生の生き方についての哲学を語る。

小野上記

「フェア（公平）」と「うん」と

アメリカ人はフェアプレーが好きだし、フェアじゃないといわれることには大変抵抗するといわれる。私もフェアプレーが好きだ。全てを公平に扱いたいし、先入観なく実態を見極めたい。しかし、「公平とは何か」に悩むことは多い。会社でも誰にでも同じように接することがフェアなのか、それとも貢献度低い人より高い人を厚遇すべきかと悩むことも多い。

組織運営では、選ばれたエリート集団であれば、ある程度の寛容さと自由度を最初から与えられた組織が強みを発揮できると思うが、我々が集う凡人の集団であれば、組織統治にはある程度の厳しさが必要だと思う。

機械装置を予算も納期も性能も製作指示書を回しただけで決めたとおりの内容で出来上がるのはなかなか難しい。時には叱責し、チームで叩かれなさいという結果は出せないのが我々庶民、凡人だ。そういう組織の運営は時として厳しくあるのは仕方ないが、フェアではありたいと思う。是是非非、いいことはいい悪いことは悪い。悪いことには罰則があるのも仕方ないが、今までプレシードでは少なくとも挑戦の失敗で処

罰したことはない。ただ、手抜きや過失の失敗は責められて当然だが、そこも強く責めない甘い組織だったように思う。

責められるべき結果は、それが過失か、手抜きか、故意かでも違うし、人のレベルによっても違う罰則となる。新人には許されても管理職には許されない失敗もある。だから処罰は必ずしも同じであることがフェアとも思っていない。

また私にはフェアでないと思っても、処断せねばならないと思う処罰もある。それは故意の裏切り、私欲により組織へ傷を負わせること。これだけは私は寛容ではられない。どうしても許せない気持ち先が先に立ってしまう。勿論、故意であるか、過失や能力不足であるかの判断は間違ってはならない。しかし、組織への背信行為は絶対許さない、私欲による裏切りは許さないということについては、フェアである必要はないと思っている。なぜならそれは悪だから。

私は悪に対して寛容である気持ちにはなれない未熟な人間であるが、人は弱いものであり、誘惑に耳を傾け間違いを犯すことはある。強い反省と謝罪の気持があれば許し、更生の機会を与えるのは言うまでもない。

フェアプレーというのがスポーツでも最近少なくなってきたように思う。かつてのスポーツはフェアプレーが最大の要件だったように思う。勝ち負けよりフェアに勝負することがアマチュアスポーツの原点だった（伝説となったテニスの清水善造の話など知るや?）。いま勝利至上主義、拝金主義が世界を覆い始めたような気がする。資本主義、市場原理ではあっても、もっとあらゆるところにフェアプレーの精神があつていいと思うのは甘いノスタルジーなのか。卑怯者と悪が負けるのは映画の世界だけなのか、寂しいかぎりだ。

勝てばいい、ズルしても勝てばいいというのは私の経営理念、人生観、道徳観には反する。見えない所で故意に反則を犯すようなスポーツ中継を見ることがある。私は大嫌いだしそれに慣れたくない。ゴルフなど自己を厳しく律することを問うからこそ面白いプロスポーツも未だあるのが僅かな救いだ。そんな私は甘い人間なのだろうか時々思う。

小さなことでも良心に目をつぶった思い出は、どこか心に古傷として残り何時か痛み出す。それが例えやむを得ぬ貧しさや緊急避難的理由からであってもそうだ。ましてや私欲に従っただけなら痛みは大きい。やましさを後ろめたさと共に生きないでよ

いのが、フェアに生きる最大の功績なのかもしれない。

「堂々とした人生」は金ではない、フェアな生き方のことだと私は思う。最後に私が弱い自分に言い聞かせる言葉「正しかれ恐れるな」。

2015年4月

50歳によせて

ついに満50歳となる。若い頃より到達しないと思っていた年齢だ。つい4、5ヶ月前までも確信が無かった。一昨年来の落ち込みは昨年末になっても回復の兆しを見せず、50歳を前に破局を迎える不安が頭をよぎった。「なんとかなる！」の言葉を信じて頼って明るく行動しつづけた。やっと、2月、3月になって受注が急拡大した。決して行動の成果とは思えないが、信じればなるものなのか。

49歳。古来、織田信長、上杉謙信、松尾芭蕉、西郷隆盛など、この歳で果てた人は多い。私も若い頃から漠然とした予感があり、50を前に保険金での穴埋めの引責自殺に追い込まれるのかという妄想が一時とりついた。それゆえ今年の桜を見たのは特に感慨ひとしおである。毎年、「来年ももう一度桜を見たい。」と思いながら毎年桜を眺めるようになって早15年以上になる。さすがに危機には慣れてはきたが、事業は安定していくどころか常に自分の成長とともに危機のスケールも拡大してきた気がする。影響は増大し、難易度も向上した。解決能力に見合った危機が訪れるというか。しかし、疲労感が体に残るようになったのも事実だ。もう若くはない。つくづくそう思

う。この一年は会社にも私の体にも大きな痛みと後遺症を残した。肉体の完全復調は歳のせいでは無理ではあるが、わが身の分身である会社の後遺症の回復は短期間に行わねばならない。受注の拡大と利益の確保はなんとしても妥協できないテーマである。

50歳で考えるようになったのは、実にゴールを眺めながら力を落としていく人生である。早く遣り残しに手をつけないと、ただ景色も眺めないで走った人生で終わってしまいそうな気がする。子供たちもやっと一人で行動ができるようになり、それなりの進学も実現したが、子供の将来を楽しみにするような人生にはなりたくない。今から更に違った目標に向かって生きてみたいが、残された時間は少なくなってきたし、体力知力は加速的に落ちていくだろう。しかし、やってみたい、今の事業とは違うことを。

身勝手に正義を行使すること

事業から引退するのを早くしてそれなりの金が手元に入ったら、社会で思うことを思いつきり行動に移してみたい。独り善がりでかまわないし、妨害があってもいい。自分なりの社会正義を行動に移してみたい。政治に考えをぶついたり有能な人材を支

援したりもしたい。貧しい子供たちに力を与える手助けもしたい。不正や不公平に對しての抗議行動もしたい。世の中に正義を問うてみたい。成果は元から當てにしないが、もし社会や人の心に何がしかの余韻を残してこの世を去れば本望だろう。

隱者の生活

まさに最後の体力の時期を人知れず世の中と接触を断つて暮らしてみたい。今日の日付に何の意味も無く、晴耕雨読、天氣と春夏秋冬の季節の移りを眺めながら、たまに訪れる人と歓談しながら飲食する。次第にボケて自分の存在や生死に関心もなくなつていき朽ち果てる。願わくば最後の瞬間だけは正氣に戻る氣力と体力が維持できるならこれ以上何も求めない。

以上を書き残し、もし10年後も健在であれば60までの10年を振り返つて読んでみたい。まさに老後に入ろうとする頃かもしれない。

2003年3月28日

なぜ働くのか　　く働く意義を考えてみようく

働くということの意義は個人によつても時代によつても、民族、宗教によつても違う。勿論、生活を支える根本になることが多いのは一致しているが、同じように行う労働であつても心の持ち方で行き着く結果も違うだろう。

西洋では神が与えた罰則として考えられることも多いが、日本では働くことは神聖であり、働くことそのものに意義や目的があると説く方が多い。資産を持つて働いていない人は評価が低いのが日本社会である。物を手に入れる為だけではなく、崇高な精神や自分を高める手段としての意味も考えてみたら如何だろうか。

以下に本社の朝礼で引用した「3人のレンガ職人」の話の詳細を提供する。

イソップ寓話「三人のレンガ職人」の話です。

ここは中世のヨーロッパ。大きな修道院を建築していました。この修道院は完成までに100年掛かるといわれています。そこに、3人のレンガを積んでいる職人がいました。

一人目の職人に、何をしているのか尋ねると「見ればわかるでしょうレンガを積んでいるんですよ。こんな仕事はもうこりごりだ。」と怒った口調で答えました。

次の職人に同じことを尋ねると「レンガを積んで壁を作っています。この仕事は大変ですが、賃金が良いのでここで働いています。」と答えました。

三人目の職人にも同じことを尋ねると、彼はこう答えました。「私は修道院を造るためにレンガを積んでいます。この修道院は多くの信者の心のよりどころとなるでしょう。私はこの仕事に就けて幸せです。」

それから10年後

最初の職人は、以前と同じように愚痴をこぼしながらレンガを積んでいました。二人目の職人は、「もつと条件のいい仕事があった」と言つて、賃金は良いが、危険な修道院の高い屋根の上で働いていました。三人目の職人は、色々な知識や技術を覚えただけ、現場監督として施工を任されるようになりました。そして多くの職人を育てました。その後、この修道院に彼の名前を付けられたそうです。

さて、貴方はどのレンガ職人の生き方に共感するか、または目指すか。

2012年10月1日

なぜ働くのか2

働く目標がない時ほど寂しいことはない。私は学生時代に生きて行く目標を見失っていた時期があった。実に外から見れば怠惰であり楽な生き方のように見えたかもしれないが、心の中は氷河期にあった。

人より随分遅れて就職したとき、「3年間は何が何でも批判しないがむしやらの汗を流して働いてみよう。」と誓った。その誓いがなければ一年で放り出してしまふほど環境は激変で厳しかった。4年後には、3か月で体重が10kg以上も激減するようなことも体験した（後に病気ということだった）。しかし、その時は働くということに抵抗はなかった。迷いなく働くことで堂々と世間を大手を振って生きていけることに嬉しさで感謝があった。まだ当時は何のためにというような積極的な関わりを求める段階ではなかったが。三年間がむしやらに、求められることには自分として最高の答えを出そうとだけ考えながら生きていた。

仕事に迷いなど生じている時代は、大きな目標など一朝一夕には出会えないかもしれないが、仕事をする中で自らがやった仕事に手ごたえを感じることを先ず求めてみ

よう。自分の努力や汗で仲間や社会に何らかの貢献できていることを感じたら、その手応えを最大にするために自分の遣れることは何がまだあるか探し、更に自らの貢献を高める。（これは人のためではなく間違いなく自分の生き甲斐との出会いを求めてだ。）

暫くすると周りの期待が高まってくることに気づくだろう。それは確かに負担が高まることにつながるが、それも続けるうちに自分の力が高まり、人への発信力、影響力の高まりを実感するだろう。

人の期待というのは確かに重いものだが、それに応えようと努力する自分には言葉にできない満足感を感じるものだ。そうすると本当の「何のために働くのか」という答えと出会えるだろう。

2012年10月8日

なぜ働くのか3

2004年6月の「社長かわら版」に掲載した以下の記事を紹介する。

『我に心より働く仕事あれ、それをし遂げて死なんと思ふ』

私の好きな石川啄木の歌の一つ。若い頃人生に目標を失っていた時代があった。其の頃出会って心はずっと突き刺さっている。

今、自分の仕事に100%満足しているわけではないし、他にもしたい仕事沢山ある。しかし、あの何の目標も見出せず、生きることさえ価値を見出せなかった頃に比べれば幸せだと感じる日々がもう四半世紀続いている。だから時々あの頃の私のような若者に出会うとお節介をやきたくなる「先ず考えないで動いて汗をかいてみる」と。

あの学生の頃の心情は今でも思い出す。苦しい仕事を遣っているときでさえ、目標を見失って生きていたところに比べればまだ生きている実感がある、と思ったりする。

仕事は生活を支える為というのが第一義となることが多いだろう。しかし、収入だけで仕事を選んでも多くはない。内容に拘るのは世間体や楽しみたいというだけで

もなく、多くの人は遣り甲斐と喜びを求めているのだと思う。

仕事をしなくても生きていけるといえるのは決して幸福をもたらさない。人を悦ばせてそれによって自分が生きている実感を味わうのには、私は仕事が一番いいし、生き甲斐を感じることもできる。

ボランティアは確かに重要だが、自分がそれによって生かされているという実感と感謝が薄くなる分、私には感動も減じる。

仕事で周りのスタッフ、取引先に喜びを創造し、納税によつての社会貢献というのは最大の働き甲斐。勿論、仕事である以上、それだけが目的ではないが一番の収穫になる。動物と違うところがそこにあるのではないかな。

啄木のこの句は20代前半より私の心に突き刺さって離れない。脱サラも、創業も、会社の方向も…、決めるときに常に心にあって、これを求めて生きてきた。

蛇足として啄木の句をもう一つ

「高きより飛びおりるとき心もてこの一生を終る術なきか」 そうありたいと思う。

2012年10月15日

なぜ働くのか4

「……私たちはもつと労働について語らねばならない。労働の持つ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないしは消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。」

昭和13年雑誌「新潮」に掲載された、熊本が生んだ或る作家の小説の最後尾の文章である。

“働くということは、単に生活の糧を得る為の手段だけではなく、働くことは自分の成長を促したり人生を豊かにしたりすることで、恋愛や哲学や物を手に入れる喜び以上に価値があり社会を豊かにする。決して仕方なく働くという狭量な考えでなく、人生をより深く広くする意味合いも考えてみよ“ということを作品で伝えているように思う。残念ながらこの作家は一つの代表的な作品以外はほとんど知られていないが、その作品以上に幾つかの短編が私を感動させる。

さてこの作家と代表的作品とは？

私は学生の頃、一時期この作家の一部の小説に傾倒した。この作家はプロレタリア

作家として有名であり、一部には共感しない作品もあるが、自らの貧しい生い立ちから生まれた作品には素朴に働くこと、生活することへの厳しさと温かさがある。

昭和初期の厳しい生活環境の中でさえ、貧しさの中で働くということは、卑屈なことではなく崇高で気高く生きることだと伝えている。

2012年10月22日

なぜ働くのか5

今日は働くということを実践する場としての会社をどの様に運用することを目指しているかを述べてみたい。

私はプレシードを製造業というジャンルで考えるのは好きではない。確かに装置という物を造って納品してその代償として金を貰っているのだから製造業というのは間違いないが、我々が売っているのは目的を達成するために考えて造った装置その物ではなく、其れを考えた経験とアイデアが我社の商品だと思っている。アイデア、主張を形にしたのが装置であって、販売したのは我が社の考えと主張の筈だ。部品代と労務費の合計が我々の製造原価ではない、過去の失敗や成功の経験が最も大きな商品の原価であると思っている。

我社では働くということは、収入を得る為に我慢して労役に耐えることではなく、働いているその瞬間その現場に感動とか手ごたえを感じる生き甲斐を感じるものであって貰いたいと創業以来願っている。仕事は時として大変きついことではあるが、自らの成長やその場での感動と出会えるものであってほしい。

数年前、我社のアルミプロファイル切断現場に若い女性3名が働いていた。その3名の仕事は、切断後のアルミプロファイルを綺麗に清掃して並べるといふことの繰り返しだった。作業そのものは多少のコツはあるにせよ数時間もすれば殆ど問題なく出来る仕事だ。この仕事を春夏秋冬我社で遣つて貰ふことには経営者として後ろめたさと抵抗を感じていた。それまで仕事は自己成長と感動を生み出すものであるべきであり、我社はその仕事の間を提供する場であると自負していた。確かに生活の糧を得る場を提供しているし、他社に比べてその仕事が労働環境劣悪という訳でもないが、只、経営者として働くという場をもつと生活の糧を得る以上の場にしたいという観点からは実に忸怩たる思いであった。何とかその仕事の現場に働く喜びを提供できないかという思いの日々だった。解決できないままに、その専従の作業はなくなり、気持ちの痛みも薄らいでいるが、社会の多くの製造現場ではその作業のような仕事でまだ溢れている。経営者として或いは製造現場を変える装置の開発者として、何とか働く喜びが伴うモノづくりに製造業を変えていきたいと思うのは、力不足の我が身の創業以来の密かな願いである。

会社で8時間働くのは、我慢して対価を得る為ではなく、自己成長と感動を創出しながら生活の糧も得られる場が私の働くという原点だ。苦しい作業や難しい作業であっても、その喜びを得られるような工夫や啓蒙するのが経営者の責務なのだろう。たとえ達成できなくても永遠に次世代に継承してもらいたいテーマである。

2012年10月29日

参禅記 その1

禅堂に涼風わたり虫の声

朝方も未だ蒸し暑さが残っている禅堂での座禅中に禅師が窓を開けてくれた。一瞬外のささやかな風が吹き込むとともに虫の声も届いてきた。暑い日々とはいえ、そろそろ秋の気配が忍び込んできた。

4月より火曜と土曜で行ける日に近くの大慈禅寺に参禅するようになった。朝4時半までに禅堂に入り、静かに結跏し40分間座禅を組む。只管打坐、唯只管壁に向う。無念無想というが、考えまいと思うこと自体が邪念、考えても考えなくてもどうでもいいと思って壁に向っている。40分終了後、その場でお経や参偈文を唱えた後、本堂で読経、その他2か所でお経を唱える。中心が般若心経で、つごう3回から4回唱えることになる。信仰心など仏教含め全く帰依するものはないが、なぜか学生の頃より般若心経は馴染みがあるので抵抗なく気持ちよく読める。

その後、住職の書斎でお香を焚き、お茶菓子を戴きながら雑談で6時半散会となる。

今日の住職の話

「永平寺でさえ毎日読経や堂めぐり焼香献灯、掃除など同じお勤めの繰り返しに、つまらないと出て行ってしまう修行者も多い。単調な同じ繰り返しにこそ深い意味があり最も重要なことなのだが」と。

何処の世界にも門を入れて少しかじって、止める口実をさがして初心を放り出してしまふ者は多いようだ。まさか禅の修行にさえもあるとすれば、私の周辺に見かけるのは無理もないと思った次第だ。

さて、座禅しながら邪念を楽しみ無想を楽しみ夢想も楽しむ参禅の時を暫く楽しみ参禅記を今後も書いてみようと思っている。それにしても結跏打座、40分後に足を解くと足首は痛く、足は痺れ立つことさえ暫くままならない。

何故、そこへ行くのか？

私の潜在意識が何かを求め飢えているとした今は自分にも答えられない

2013年8月20日

参禅記 その2

心こそ心まどわす心なり、心に心許すな

ある日禅を組んで壁に向っていると、住職が突然上記の詩を唱えた。語呂合わせの駄洒落でもあろうが、意味深いと心に留め置いた。

自分の心が自分を最も惑わし騙す元凶だという体験は、私も若いころ数多く体験した。「私は自分を最も信用しない。振り返れば自分が最も自分を騙した。」と折につけ語ることがある。理想や本来の生きるべき方向よりも、「楽をしたい」とか、「近道をさがした」ときに弱い自分を呼び起こし、墓穴を掘ってしまった経験はないだろうか。私は今でも時々その手に乗ってしまいそうになる。

今、熊本マラソンに挑戦することに決めた。恥かくこと挫折することも一つの人生の貴重な経験になるとの思いからだ。今年は見送って5年後にやってみたいと思っても叶わないことになっているかもしれない。だから「今でしょ！」だと思っている。

「人は自らの理想に従って勝ち欲望に従って敗れる」という。私にも時々悪魔がささやく、「そんなことしたって何になる。もっと楽な方を選んだ方が今日は楽しいぞ」と。

楽すれば楽が楽して楽ならず、楽せぬ楽が遙か楽々。と一方の私の本性が声を掛け、踏みとどまらせる。

2013年9月8日

参禅記 その3

座禅仲間というほどの関係ではないが、何人か座禅で会う人たちがいる。フルメンバーで多分6、7人だが、通常は広い禅堂でその日来れた人2、3人で壁に向い座禅を組む。経営者、退職者、新聞記者など様々、女性も一人いる。学生風の人もいる。余りお互いを語る機会もないし関心もない。只管打坐（シカンタザ）禅語でひたすら座禅するという意味）だ。

共通するのは、座禅を仕事にしている人はいないし、強制されて来ている人もいないということ。勿論、座禅で金を得ているわけでもない、皆何かを求めて自分の意思で来ている。その何かは皆違うかもしれないし、同じようなことかもしれない。私のようになぜ座禅するのか明確に答えられない人もいると思う。ただ好き好んで4時前に起きて我家を出てくる人たちだ。比較的強い意志または思いを持つてのことだと思う。

人は時々自分でも自分の事が分からなくなることが多い。何の為に生きているのか？何をしたいのか？何処へ向かっているのか？今の方向は自分の意思で歩んでいるのか？…。考えてみると、惰性や義理や決心がつかずに生きていることはなからう

か。いや、それこそ多くの人の人生かも知れない。迷っているから、或いは迷いたくないから只管打坐。禅堂でひたすら自分と向き合う。目の前の禅堂の壁は正に自分そのもののものだ。

2013年9月24日

参禅記 その4

9月になり涼しくなった禅堂で座禅組んでいるとふと以下の心境になった。

「不自由を悦び 苦痛も悦ぶ 生きている喜び」。アメリカ海兵隊では、苦しみもがく負傷者に言うという「喜べ、生きている証拠だ!」と。何か似ている心境か。

暑さもなく座禅していると、遠くの車の走る音が聴こえたり、堂の外の幾種類かの虫の音が聴こえたりする。幾つもの音が聴こえるが、ふと気づくと、自分の頭の中に届くのは常に一つ。トラツクの音を聴くと虫の音は聴こえず、鈴虫を聴こうとすれば他の虫の声は聴こえない。人間は多くの事を聴いてるような気がしても、瞬間は一つだけしか聴けない。オーケストラの音は、纏めた一つの音楽としては聴けても、フルートとバイオリンは私には同時に聴けない。初めて気づいた人間の特性だ。雑音も聴くから雑音、聴かなければ聴こえないのだろう。雑音が聴こえるのは心が雑音を聴こうとするからか。心がそこに動くから、それは自分の心の中に存在する。心がそこに動かなければそれは存在しない。「心頭滅却すれば火もまた自ずから涼し」といっ

て、笑って火の中に立ち入った高僧がいう処かもしれない。

色即是空、空即是色というのもこんなものかとふと思った。言っても伝わらないかもしれないが、不思議な体験だった。

座禅40分は普段は長いが、今日は「なぜ早く終わるのだろうか?」と思ったくらいに短かく感じた。どこかに少しは無念無想の境地があったのだろうか(笑)。

2013年9月3日

参禅記 その5

午前4時半前の空は、気づけば真っ暗の季節となった。今まで春夏秋冬の移ろいにも気づかず、花鳥風月を愛でることも忘れ走ってきたのは何のためだったのかとふと思うこともある。

彼岸の23日は奇しくも母の三回忌、「親孝行したいときに親はなし」最近よく思う。決して親不孝ばかりしたとは思わないが、親に心配はかけたし、親からの愛情は無償であり、一方的で何の見返りも期待しないものだったとつくづく思う。親は子の立身出世や名誉より健康で幸せに生きてくれることを願うものだ。私と母との関係は、幼い時代には我が家は分家後の生活苦との戦いの中にあり、母との接触時間は極めて少なく、祖母に育てて貰っていたと言っている。母は決して離れていなかったわけでは無かったろうに、雨が降って農作業が外で出来ないような日でない限り、家で明るいうちに話す時間はなかったように記憶している。その分、年老いての母は私とのコミュニケーションを大切に楽しみにしていたように思うが、今思えばそれに応えていなかったのが心に痛い。

創業間もないある時、私が一人いると母が近くにそっとやってきて「事業に失敗はつきものたい。破産しても死なんちゃよかけんね」と笑顔で声掛けられたことがあった。私は経営で行き詰っても、決して家では語らないし素振りも見せたつもりはないが、余り顔を合わせて話をしないでも、母はじつと我が子を見ているのだと思った。母の精一杯のゆがんだ笑顔に胸が熱くなった。座禅しながら今朝はそんな雑念もよぎった。せめてもの母への供養とお詫びに、今朝は寺に金一封のお供えをさせて貰った。

今日は大慈禅寺の開山記念日という5く6人の僧に囲まれての座禅や読経、朝の務めとなり、厳かな雰囲気にも包まれた。流石その道のプロはプロだ(笑)。

母三回忌、禅堂の空に十六夜の月

2013年9月21日

参禅記 その6

いつもの場所に勝手に席をもらい坐禅を組む。いつもの場所という壁には見慣れた壁板の節目がある。この節目が妙に愛おしい。毎回座禅ではこの節を見つめることにしている。40分の間に私の場合視線が左に移ろうとするのは、姿勢がずれていくのだろうか、その姿勢を節目を正面に見ることで修正している。

爽やかな季節で座禅組んでいると、近くの国道を走るトラックの車輪の音が聴こえる。また、別の音を聴こうと耳を澄ますと幾つもの虫の声が聞こえる。一つ一つの音の発生源には運転手がいて、鈴虫がいて、コオロギがいる。しかし、私はその音源と絶対に会合うことはないし、その音源の人なり虫が私の心に響き影響を与えているなど、発生源の人も虫も知る由もないだろう。一期一会の出会いであろうが、ここではついには一会の機会さえなく過ぎていく。人の社会でも対峙して影響し合うことも多いが、もっと多いと思うのは影響を与えたことさえ気づかず相互に影響を与えているということ。一期一会というのはその出会いさえ思わねばならないとふと思った。

相変わらず雑念ばかりの私の坐禅だが、振り返ると次第に日常雑念からは遠ざかっ

て爽やかで気持ちいい時間となりつつはある。

2013年10月13日

参禅記 その7

十方三世一切佛 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若波羅密

じーほーさーしーいーしーふー、しーそんぶーさーもーこーさー、もーこーほー
じゃーはーらーみー、と読む。

座禅終了後、本堂に移って般若心経など唱えたりする間に何回か唱える偈文というものだ。過去、現在、未来に亘る全ての仏とその智慧に對しての感謝の意を表す言葉だろう。あまり意味は深く知らないが、両手を合わせて唱えるときに自らの存在を感じ感謝するタイミングと思っている。日頃、現代人は手を合わせて拝むというのをしない。私もめったに仏神に手を合わせるということはないが、朝礼時に手を合わせて経営理念を唱え我が身を省み実践を誓うという所作はここ20年近く続けている。手を合わせるという所作は気恥ずかしさもあるだろうが、我が身の存在を超えた何かに手を合わせ誓うというのは、人間の傲慢さから一瞬でも遠ざかって見るということで貴重な瞬間だ。

昔から宗教に関わる本を読んだこともあるが、神の存在を実感しない私には深入りは出来ない。禅宗では自らと對峙し自らの中に仏とは言わないまでも何かを求めるようなところが私に馴染んでいる。とはいえ宗教である。お経を唱えたり儀式や所作には従わねば先がないし、従ってみると今まで気づかなかったことに気づく。

元々何かを学び取ったり生き方を整えたりするための所作であろう。意味も分らないで評価するより、今はただそれにしがたって身に着けてみよう。数百年も伝わって研ぎ澄まされてきた禅宗の所作には意味がある筈だ。仏の前では全てが裸の一人の人間、世間の物差しはないし隣人との比較もない。ただひたすら自分と對峙するときに、時として仏を感じることもあるような気もする。けさも40分の坐禅と一時間の朝の務めを爽やかに体験できた。

禅堂に座る度に季節の移ろいを感じる。私が進化しようとして停滞しようとして、精進しようとして、怠けようと、時は一刻としてとどまらない、来るたびに時間が流れ去っているのを感じる。夜明け、木の葉の色、虫の声、来るたびに変わっている。焦るために来ているわけではない。むしろ落ち着くために来ているのだが、焦りも感じたり、無常観を感じたりもする。その先には解脱でもあるのか(笑)。

2013年11月4日

参禅記 その8

今朝は禅堂に入ると賑やかだった。タウン誌の記者らの体験取材とかで、10人以上が禅堂に並んだ。私から見れば若い女性が5、6名いた。好奇心だけなのかどうか知らないが、ヨガ教室先生と体験者もいた。自らと向き合うということは、現在の変化が激しい中で、自分を確たる見据える目を持って生きることとしては有益なことかもしれない。とはいえ、いつもと違った雰囲気は、修行を終えた僧でさえ心弾んでいるような気がしたのは私の先入観かな。

座禅中に汗が噴き出たような季節から、次第に涼しさが本格的に進んでいく季節となった。騒がしかった虫の声も単調な小さな虫の声のみになってきたようだ。季節は私の意思や思いが有ろうがなかりうが移っていく。何万年以上も前から、そして今後私がこの世からいなくなっても続く。日が明け日が沈み、季節は春夏秋冬を回っていく無常なる自然の中に生きているのを、このひと時位思い出さねば生きているのもったいない。今日禅堂で聴いた虫の声も、前回の坐禅で聴こえた虫とは恐らく違う虫だろう。前回、聴いた虫は既に息絶えたかもしれないが、誰もそこに関心を示さな

いし知りもしない。何のために生まれ死んでいった虫なのか私には分からないが、せめて生を子孫に繋いだのであれば、それも意味あることか。悠久の自然の中では私も一匹の虫に過ぎない。生まれて生を終えるのが数カ月と数十年は宇宙の中では殆ど同じ、十日前に声を聴いて今日は居ない生を終えた先輩の虫に生きた意味を聴いてみたものだ。

今日が始まり今日が終わるといふ繰り返しがいつか私にとっては終わるが、それでも次の夜が明けるといふ時が来る。その時まで何を生き、何を感じるのだろうか。そのことに意味を求める必要もないのかもしれないが、生きてる限り少しでも見知らぬ扉を開いて先へ行ってみようと思うのは私だけの生来の好奇心か。

時は流れる、合掌。

2013年11月4日

参禅記 その9

今日は殆ど苦痛なく40分の坐禅を終えた。4月から始めて半年、春から真夏を過ぎ
禅堂も冷気が忍び寄るような季節となった。当初は一念發起して始めたものではあつ
たが、早起きと40分間の坐禅、その後の各御堂での一時間に亘る正座読経などは、先
ずは苦痛に耐えるだけだった。子供の頃、剣道の道場へ練習に向かう気持ちを思い出
した。行くときは苦痛でも、帰る時は気持ちいい筈だからと自分に言い聞かせて家を
出たものだ。しかし、最近やっと坐禅に向う気分が弾むような気分になってきた。継
続は力なりともいうが、先ずは只管のめり込んでみることだと思う。今まで色々なこ
とに会いいろいろな事を始めたが、本質を見極めもしないで途中で止めてしまった
ことも随分多い。その中には、恐らく私の人生を変えるような内容を持つものもあつ
たことだろう。せめて坐禅はもう少し続けて何かを見つめ続けてみたい。壁に向かう
時間が次第に貴重な時間になってきている気はする。

時は流れる、合掌。

2013年11月18日

参禅記 その10

今朝はヨガの先生と生徒らしい二人の女性も座って久々に5人となった。季節も涼
しくなり、座禅中にふと前回まで聴こえていた秋の虫の声が全く聴こえないことにき
づいた。もう虫たちは生命を終えて死骸さえ残していないことだろう。ある虫は無事
に卵にその生きた証を残し、ある虫は他の昆虫や鳥の餌となって一生を終えたのだろ
う。卵から孵って半年もない短い命だが、我身を考えると同じような身の上だ。虫よ
り長いと言っても、僅かに百年を生きることもないのに一喜一憂するのが人間の人生
だ。宇宙の歴史の中で虫の一生の長さとはどれ程の違いが有ろう。せめて長さではなく
生き方で語るモノなればと思う。

アンパンマンマーチではないが、「何の為に生まれて、何のために生きるのか。分
からないなんてそんなのイヤだ。」という思いの為に、坐禅も本もマラソンも同じ手
段なのだ。勿論、答えは外から来るのではなく中から出てくるのだろうか。

この秋も多くの虫たちが生まれて来た目的を果たして死んでいった。合掌

2013年11月18日

参禅記 その11

めっきり寒くなって軽めの冬着が必要な季節となった。今朝は先週までの出張などでおよそ2週間ぶりの坐禅だ。いつものように結跏したが、はいていたズボンのせいか足が崩れやすくて気持ちが悪れた。いつもなら40分の結跏坐禅だが、今日は住職が「流されるな、時間を追うなかれ。もつと向上しようと思うことが流されている」などと言った。もつといいもの創ろうなどは終わりがいい、それが迷いであり個人としては流されていることなのかもしれない、今日のままでいいのだと。

社長業は個人の自己実現に時としては相反することもある。ありたい自分の像を持ちながらも、目先の遣らねばならない自分の意に沿わないことに時間と精力を注ぎ日時が経過する。自分の気持ちに執着しないで、これを統合できた時に社長業の本当の悟りの境地なのか。有るがままに受け入れてそこに自分らしさを見失わず流れの中で自分らしく生きる。融通無碍、形に捉われず自分の心の動きに掉さしもしないが流されもしないであるがまま。体が自由に動く間にこの境地を得たいものだ。(笑)

2013年11月某日

参禅記 その12

前回といい今回といい、いよいよ寒さが厳しい坐禅が続いている。禅堂で座禅組んでいる5時前後は未だしも、本堂に移って正座して6時ころの読経は寒さが骨身にしみる。

今日は住職が座禅中に「人生は映画のようでそれぞれが主人公だし、もうそろそろ映画の終わりが近づいてきた時期となった。常に主体的に生きることを心がけて残りの人生を生きたいものだ」と言うようなことを述べた。6時過ぎに居室でお茶を戴きながらそれぞれの生活の中で捉われるものと自分らしくありたい気持ちとのギャップなどで話が盛り上がった。

団体ツアーや人間ドックなどに参加して、人から言われるがままに動くときの気持ちの緊張感のなさにも皆共感していた。遊ぶときよりもっと気分がリラックスしているのは自己判断をしなくていい時間だからだと。住職も隣にいた食品加工業の社長も常に何かを抱えているという緊張感を持って生きているようだ。それが人らしいのか人らしくないのかは別として、少なくとも忙中閑あり、人間ドックも団体ツアーもい

いものだという共感を得た。それとは逆に、常日頃主体者として生きている充実感と自覚があるからこそ、そのひと時の受け身の時間に安らぎを感じるのと言うまでもない。

2014年1月11日

参禅記 その13

昨年4月に還暦を迎えた機会に始めた座禅も何とか一年を迎えた。出張で数週間行けないこともあったし、マラソン挑戦できつい時期もあった。寒さで背骨が凍え、手がかじかむ日もあった。勿論、悟りなどはるか遠くそれを求めているわけでもない。ただ、ひたすら壁に向かい自分と向き合う。無念無想もほど遠く邪念ばかりが付きまとう。しかし、朝4時に起きて家を出て禅堂に向かう。終わって朝の空気を吸いながら寺を去るという時間は全く今までの生活にない別世界だ。

人はすべて人生を自分で選択して切り拓いた世界で生きているわけではない。むしろ偶然や周りの人や出来事に会って流されて、たまたま今ここにこの生き方を生きているというのが現実ではないだろうか。私にもどこかで禅僧として生きる選択もあったのかもしれないが、今は経済原理で日夜会社が生き延び成長することに知恵を絞る経営者だ。はるか遠くかけ離れた世界であるような気もするが、時として同じような世界であるような気もする。思うのは何処にいても自分が主人公なら世界は自分のステージだということ。寺であれ会社であれ。随所に主となれば立つ処皆真なり。

参禅をいつまで続けるか分らないが、もうこうあらねばならないという生き方は減らしたい。「融通無碍」、仕事以外はあるがままを受け入れて、なるようになる生き方も味わおうと思っている。世界は今私に開き始めたのかもしれない。

合掌

2014年4月6日

参禅記 その14

やっと坐禅も虫の声聴く涼しい季節となった。久しぶりに参禅レポートを書いてみたくなった。坐禅に通い始めてそろそろ一年半となる。最近は出張も多く、体力の陰りも甚だしくて、月に3、4回程度の参禅となっている。終えた後の足の痛みがひどい時もあつて少々敬遠気味でもあったが、今日10日程度回復を待って行ってみると気持ちよく終えてホッとした。

参禅者が普段でもサボりがちな私も含め2、3名のことが多いが、なんと今日は私だけだった。坐禅や本堂での読経など約100分の務めを終えて、お茶と菓子を戴きながら住職らと世間話20分が定番コース、今日は孤独な修行だった。聴くところによれば、常連の二人が入院とお遍路に行つて暫く欠席となるらしい。次回からは私が行かなければ参禅者なしで、住職と禅僧と二人の朝のお勤めとなる可能性大なので、あまり休めなくなった。誰か坐禅に興味ある人いればぜひ参加あれ。

さて、常連者は私程度の不良出席率も含めても5名程度。一人は大柄の謎の20代若者だが、他は何れも年配の経営者、女性もいる。皆、自分を見つめ何かを見つけた

い、違った境地を体験したいということだろうか、ほとんどお互いのことを語ることもない。私も何故参禅するのか、貴重な時間を費やし足の痛みに耐えながら……。悟りとは程遠いが、まだ体験していない未知の境地や自分と出会いたいというところか。

経営者が多いのも分かるような気がする。日頃、自分を殺して走り回っていて自分を振り返った時、自分を確かめてみたくなるのがきっかけのような気がする。経営者をしていると、時々本当の自分は一体どれなのか分からなくなつて、自分を見失うことも多い。優しい自分と厳しい自分、無口な自分と多弁な自分、行動的な自分とボーっと佇むのが好きな自分、今の自分と子供のころの自分が違う人間のような気がするのは、さて私だけだろうか。だから皆、自分が何者なのか、自分の人生はどうあるべきか、真剣に壁に対峙して探しているのだと思う。

禅の言葉に不立文字という言葉がある。真実は文字では表現できない、文字で書いたものは所詮真実を投影した陰でしかない。実態は体験して感じるしかない、バーチャルの戦争ゲームで戦争を体験できたと思うことがあり得ないように、実態は本や話では伝えられない、だから只管坐禅して自分と向き合わなければ、入り口まで導くことは出来ても教えて得られるものではないということのようだ。人は言葉や文字を

覚えたが、言葉や文字で真実を伝えることが出来るというのが大きな錯覚だし、伝えることが出来たという思いから誤解や対立が生まれる。

イスラム圏とキリスト教との確執も、相手に自分たちを伝えているのに理解しないのは、相手が間違っていると思うことから始まるが、真実は伝わっていないのだ。どちらも十億人以上の人間が長い歴史の中で守ってきた戒律と教えだ。一方の立場を出ずして理解できるはずはない。話を聴き文字を読んで理解したというより、想像は出来ても理解できていないと思うべきだ。人間社会は理解していると思う驕りから誤解と対立が生まれる。信じあうことは出来ても、理解しあうことは難しいという前提から理解が始まる。世界平和も理解できない部分があっても、信じあうことは出来るということから始まる。我々の仕事の世界や身近にも伝えても伝わっていないと感じ、それを相手のせいにすることは多くないだろうか。

「知らずを知る（知不知）」とはそういう事のような気がする。坐禅しながら邪念でふとそんなことも思った。

2014年9月27日

参禅記 その15

この冬は出張も多く、極寒の早朝坐禅をあまり経験することなく春を迎えた。あつという間に桜も散り、季節は移り寺の境内も新緑が濃く、早朝の鳥の声も盛んになってきた。

最近では坐禅を無理して結跏しないでも半跏すなわち胡坐かくようにして座っている。勿論それでも足は痺れるし姿勢取り続けるのも辛い。特に姿勢を保つのがつらいのは歳のせいだと思うと、老化は駆け足のように忍び寄っている。遣りたいことを急がねば悔いを残しそうな年齢となってきた。

壁に向かっていて最近気づいたことだが、気持ちに悩みや重いものがあるときは坐禅がさほど苦にならず、悩み事少なく楽しく生きているときは妙に坐禅には痛みと苦しさを感じる。勿論、坐禅が違うのでは無く、気持ちのありようで痛みも相対的なものだということに気づいた。

ちなみに四苦八苦は、生労病死の四苦と愛別離苦（愛する者と別離すること）、怨憎会苦（怨み憎んでいる者に会うこと）、求不得苦（求める物が得られないこと）、五

蘊盛苦（人間の肉体と精神が思うがままにならないこと）を八苦として四苦八苦というらしい。

仏教がいう人の力でどうにもならない苦しみを、それがあるがままに受け入れ、気持ちの持ちようでは減ずることも出来るということの片鱗をも感じた。（笑）

さて、今度の坐禅は痛み多い坐禅だろうか、痛み少ない坐禅となるだろうか。

2015年4月27日

参禅記 その16

久しぶりに参禅記を書く。坐禅には一番心地いい季節となった。虫の声を聴きながら暫し日常の自分を離れるのは坐禅の醍醐味かもしれない。ビジネスの修羅場に生きる私には「無」の居地などまだまだ程遠い。

日頃、出張や疲労残で欠席も多い。朝四時半の坐禅に向かうのは少々辛い、誰に強制されるわけでもない。出向かないと何故か自分の不甲斐なさとは対峙してしまう。予定日の前日などに寺から中止の電話が入ったりすると、何故か心のどこかで残念以上にホッとしてしまうのは、学校の頃のクラブ活動中止の日の心境と同じだ。成長しない自分を感じてしまう。

そうは言っても、「忙中閑有り」行けばさすがすがすがしい気持ちで帰れる。これもクラブ活動と同じだ。これから寒くなると背筋が凍るような坐禅と正座になっていく。先ずは今のゆく秋を楽しみたい。

人生には来年また秋を味わうことがない時がいずれやってくる。今年の秋、今年の坐禅を今年の虫たちの声を聴きながら味わいたい。この秋に鳴く虫たちは間違いなく

来年またこの秋を迎え鳴くことも無い。それを知っていて力の限りに秋を生き切って鳴いているように聴こえないだろうか。

私には心のどこかに来年もまたきつとこの秋を味わうという心の緩みがある。今日鳴いている虫たちの刹那を生き切って鳴き切るような緊張感も充実感もない。漫然と流れる時の中で秋を見送ることになりそうだ。来年は何が起きた後でどの様に生きているかの保証もないのに維持継続を信じてしまう。来年に今年と同じ健康でこの秋を迎え、今年以上の業績で会社を運営出来ている確率はそう高いものでもない筈だ。今年の秋を最後の秋と思って、緊張と感謝をもって味わい生きる様な日々を過ごせないかと思う。来年どこかの病院のベッドに居ることもありえる。「生は奇なり、死は婦なり」、生きていること、存続していることこそ、「有り難い」ことなのだ。

合掌 感謝

2015年9月

参禅記 その17

久々の参禅記。未だ月に数回程度の参禅は続いている。一年で最も厳しい季節となった。4時半に始まり、しんしんと冷え込む中で壁に向かい自己に向き合う。壁に向かっていると、忙しさにかまけて、普段は正に忘我の境地に居ることを思いださせる。普段は自分でない自分を生きているのを感じる。いや、現実の自分と理想の自分のギャップというだけかもしれないが、自分らしい生き方と胸張っては言えない自分が生きている。

45分程度の坐禅を終え、本堂に移動し正座読経となる。勿論、暖房もない午前6時前の冬の本堂は時として背骨が凍るかと思うこともあり、足の指は紫色になるが、生きている充実感もある。死は苦しみも痛みさえ奪うのだから、まずは幸せを感じようと思うことにしている。

壁に向かって何をするのかと問われると、何もしないとしか言いようがない。何故坐禅に行くのかと問われれば、自分と向き合う僅かなひと時を得るためにということか。

私には毎日が単調な生活を感じる時、無性に生きている充実感を感じないことがある。

るし、逆に毎日走り回っているほど忙しい時に、ふと自分を見失って流されて生きているように感じることもある。

壁に向かって坐禅している時に、無の心境を得ているかと問われれば、殆ど雑念ばかりだともいえる。しかし、その雑念も、普段自分を忘れるほど走り回っている時の合間の雑念とは違い、もっと遠くから生き方や考え方を眺める様な時間を得ることが多い。

似たようなことで、全く同じような境地を運動で感じることもある。同じ早朝時間帯に時速6・5kmで歩くことがある。ひたすら速足で歩く中で考えることは坐禅と同じ、速足スピードでひたすら歩く時にむしろ坐禅より無の境地になる。動に精神の静寂在り、坐禅の静中に精神の動揺在り。どちらでもいいが非日常の精神状態は心地いいものだ。

追記

昨日は熊本城マラソンが行われたことと思う。所用で東京に出かけ見物の機会も逸したが、ひたすら走りぬく中の気持ちの静寂さに禅に似たものを感じる。今回はエン

トリーに落選したが、次回はもうエントリーする体力氣力をそこへ集中することができないかもしれない。

2016年2月22日

参禅記 その18

朝4時に目覚まし起床。4時半前に大慈禅寺に到着。地震で大きく破壊されて、早朝座禅の再開はほぼ諦めていた。地震後一度訪問し、その被害に驚いたが、その後何も手伝うことなく我が身の所用にかまけていた。10日ほど前、18日より再開するとの電話を受け、ホッとしたのと何の復興支援もしないで放っておいた後ろめたさを感じながら18日を待った。

当日は目覚めもよく、少しのお見舞金をもって久しぶりの参禅となった。定番の坐禅堂での45分坐禅後、本堂での読経までは今まで通りできたが、他のお堂は壊れたままの為に1時間半弱で終了した。

久しぶりに坐禅堂で面壁しての坐禅は新鮮だった。季節も変わっていた。「春は花、夏ホトトギス、秋は月、冬寒月冴えて雪しんしん」と道元禅師は言った。私も改めて季節が巡るのを味わえる有り難さを感じた。当たり前の季節の移ろいの中に、今からどこまで居続けることが出来るのだろうか。永くても30年はないのだ。いつまでも長生きしたいとは思わないが、一つ一つ移ろいのはかなさと変化に感謝を感じなが

ら生きていきたいものだ。盛者必滅会者常離、永遠なる物など全くないのに、日頃は今の環境が永遠であるかのように何も感じないで生きている。私は流されて生きているような気がする

今回の熊本地震を体験したほとんどの人が、「有り難い」という言葉、すなわち当たり前に有ることが如何に当たり前ではないことかを感じたはずだ。私も電気が来ている有り難さ、コンビニで食べ物を買える有り難さ、水が来ない辛さ、道路を心配しないで走れる有り難さ…僅か2カ月前には当たり前の事への感謝で一杯だった。

しかし、たった2カ月でまた忘れ始めている自分を坐禅しながら感じた。いつの日か、坐禅が座れる有り難さを体調崩してから感じるのでは寂しい話だ。

足腰に苦痛も感じながらひたすら壁に向かって座れる今日現在の有り難さに感謝だ。失くして分かる有り難さであってはならない、震災後感じた気持ち忘れずに生きていければ、熊本地震は私にとって大きな財産となるだろう。何とか財産にしたいものだと思いつつ寺を後にした。

2016年6月18日

参禅記 その19

2017年1月7日土曜午前4時30分、今年初めて坐禅堂に座った。最近殆ど出向いていなかったが、今日から今年の早朝坐禅が始まるとの事で、会社の運営会議日で頭は考え事に使いたいと思いつつも出向いてみた。

ここ3、4年通っている3名が参禅した。この3年で何人もの人が参禅した。私より遥かに出席率高い人も居たが、暫くすると居なくなった。今回も昨年殆ど毎回、自転車を通ってきていた女性が来なくなったことが話題になった。聴けばご主人の徘徊で目が離せなくなったということらしい。

色々な人が環境と人生を背負って生きて、その合間に参禅している。今まで来なくなった人も、決して根気が続かないだけでなく、色々な思いを持ってやって来て、そして知らない事情あって去って行ったのだらうと改めて思い、根性さえあれば続けられる我が身の境遇に改めて感謝する思いだ。

久しぶりの坐禅は雑念で一杯、それを否定しないで考え事から始まったが、ふと氣

づけばあつという間に40分が過ぎ、その間は遠く車の走る音さえほとんど聴こえてこなかった。無であるうとすれば雑念が湧き、雑念に浸る覚悟で座れば無の境地の時が過ぎた。人は我が身のコントロールこそ難しいものだと思う。

気持ちいい坐禅で今年が始まった。その後の寒い本堂での正座読経の45分は久々に痛い思いと厳しさを味わえた。これも健康で生きていてこそのこと、感謝だ。

今から3月まで最も修行と言えるような坐禅が体験できる季節が流れる。背骨が凍るような厳しさを何度か味わうだろうが、生きている自信のような清々しさも味わえる真冬の坐禅だ。さて今年も逃げないでまた出向けるだろうか…。

2017年1月7日

参禅記 その20

冬の寒い時期に博士号論文に生活ペースを崩され、暫く坐禅から遠のいた時期があった。勿論、言い訳に過ぎない易きに就いただけだ。4月になってまた、週一回程度の参禅が復活した。

暫く禅堂に座らないと姿勢も崩れ背骨や腰骨が痛む。時間を気にすると汗が吹き出し、気持ちも乱れる。坐禅仲間に週3回、ほぼ欠かさないで座り続けているT氏がいる。軽やかな老人だが、最近では次第に達人に見えてきた。侘び、寂びの次は「軽さ」と聴いたことがある。守破離で言えば「離」の境地だ。この人は離の世界に生きているのかもしれない。坐禅を終わって茶菓子を戴きながら毎回10分程度のくつろぎ時間に話す程度で、坐禅について話したこともほとんどない。いつも殆ど二人、私が居なければT氏一人と住職の朝坐禅が今後も続くのか。

足を痛めて以来、この1年は結跏を止めて半跏の姿勢で座っている。これも易きに就いたのだが、姿勢を取るのには難しくなったが痛みからは解放された。

何のために参禅するのか、ずっと自分への課題だが、壁に向かうことに私の見えな

いものが見えるのではないかという期待かもしれない。何かから救われたいという欲望かもしれない。最近ふと、この坐禅の時間だけが私が社長でもない親でもない夫でもない友人でもない、ただの私である時間であるような気がすることがある。

以前から、「死ぬ前には自分に戻って死にたい」と言ってきた。普段は社会や家族の中での存在で生きているが、少なくとも禅寺の2時間は唯の老いが始まった一人の人間であるのが楽しい。相変わらず悟りや無の境地とは程遠いが、違う世界にいる時間ではあるような気になってきた。無であろうとすれば無ならず、ただ座るだけ考えでもよし忘我もよし。

坐禅をしない朝、最近は週2、3回は1時間の6kmウォーキングを楽しんでいる。1時間ひたすら早足で歩くこの時間に、体は動だが気持ちは静、或は無我の境地にもなる。交通も気にしない暗い早朝に、考え事と忘我を繰り返す1時間は爽快だ。帰宅しての朝風呂までが今の私のささやかな人間らしい楽しみだ。6時過ぎればまた今日も雑念の支配の世界が始まる。

2017年6月4日

参禅記 その21

真冬の早朝坐禅は背筋も凍るような思いをするが、真夏の閉め切った坐禅堂は蒸し暑く汗が噴き出る。「安禅必ずしも山水を用いず、心頭滅却すれば火もおのずから涼しい」と古来禅師は言うが、未熟な私には涼しい境地には死ぬまで到達できないだろう。それでも気持ちが静かな時には汗が気にならないし、出る汗の量も少ないが、気持ち少し乱れると汗が噴き出してしまうという体験をする。苦しいとか、まだ終わらないのかと思ってしまうと、吹き出る汗が目流れ込みそうになる。

坐禅の瞑想とは目を閉じることではない。常に半目で一点を見ることはなく、見つめること。目を閉じれば妄想の世界に入り、居眠りの世界に入ってしまう。坐禅はあくまで何も考えない状態を作る事だが、これが難しい。考えまいと思うと考え事が頭に沸く。人間は自分さえコントロールできない生き物だどつくづく壁を眺めて思うことが多い。ならば逆に多くの事に気を向けてやろうと、虫の音を聴けば、遠くを走るトラックの音は聴こえず、トラックの音を聴けば虫の音は聴こえないという体験をする。ましてや考え事をすれば虫の音もトラックの音も聞こえない。

午前5時を過ぎるとセミの声が始まり、今日の命を繋ぐ活動が始まったと気持ちがそこに向いてしまう。4時半からの坐禅で、この時間になると気持ちが乱れ、姿勢を保つ苦しさに襲われる。尻に敷いた座布団の位置が僅か数センチでも塩梅が悪いと、背骨が痛みを感じたり腰に痛みを感じたりして気持ち乱れ汗が噴き出る。

日頃、ソファーに寝転んだり、自由な姿勢で空調の効いた部屋に居てテレビを見たり新聞を開いているが、その数センチの自由度にある幸せに気づきもしない。今日も立って歩いて食べて寝ることが出来る大きなその幸せの中に生きている。たまには気づかねばもったいない。

禅堂で姿勢をそのまま保ちながらも、経本をもって読経が始まると苦しさから解放される。般若心経は少々学んだこともあったが、「参同契」、「宝鏡三昧」など意味も分からず唱えるうちに四年が経った。敢て学ぶ機会を求めないで過ごした不埒な私にも、次第に内容もおぼろげに見え始める。ナルホド、深い、学ばねばとその場では思う。

坐禅を終えて回廊を歩く時、その動きで首筋の汗が乾き一瞬の涼しさをもたらす。この小さな些細な幸福感を感じる時、人生の幸不幸は外にあるのではなく、自分の心

の内の何処にでもあるのだと感じる。一服の茶を飲むことに深い喜びも感じる事が出来る日々となれば、死中活あり苦中楽あり忙中閑ありの瞬間を楽しむ人生を満喫できそうだが、まだまだ道遠だ。

その後、寺より電話があつて、8月中の早朝坐禅は中止する旨の電話があつた。どこかでその知らせを喜んでしまう自分がある。子供の頃、剣道部の練習中止に喜んでいたあの頃と何ら進化しない自分がある。思わず一人苦笑いだ。

2017年8月2日

参禅記 その22

禅では「面壁三年」の故事がある。開祖達磨大師が壁に向かって3年間坐禅をし、ついには歩くことさえ出来なくなったが悟りを開いたことに由来する。曹洞宗ではとにかく理屈ではない只管打坐だ、先ず坐禅せよ、との教えが原点にある。私の早朝坐禅会も全く勉強会の形はとらない。坐禅と読経の90分だ。その内の45分間は、坐禅堂に着いたら黙って畳に上がり壁に向かって半目で座る。雑念を取り払おうとすれば雑念ばかりだし、座り方が悪いと姿勢保つことと痛みに気持ちが奪われ、終わるのを待つという心の揺らぎに支配されるが、時にはあつという間に時間が過ぎる。

そもそも壁に向かって何を見つめるかも難しいが、最近壁の向こうに何があるのかと思うことがあった。時々ではあるが、参禅し壁に向かい始めて4年、本当の壁の意味を感じ始めた。私が壁の向こうに気持ちを持っていったいない、壁の手前に居て社会や人を見つめているのではないかと気づいた。正に知っているつもりの世界だ。

世の中を見るのに、自らはそこに踏み入らず、分かったつもりで判断し、関わりあるものであれば指示さえしている。果たして壁の向こうへ行って相手の話の理解を深

めているだろうか。人は相手を理解したつもりで、相手が自分を理解しないことを嘆くが、自分が相手を理解していない事を嘆く人は極めて稀である。半分は居てもよさそうだが…。「理解してから理解される」「7つの習慣」でも述べてある。

壁の向こうに解（答）があるし、永遠の安らぎでもある真理があるのだろうか、多くの場合、壁の向こうに思いもしない世界があるとは思わない。今見えている世界と理解している世界がすべてだと思い、判断を下し結論と為す。私もそうだ。悲しいかな、壁の向こうに自由で何事にもとらわれないで、あるがままを捉え理解できる世界が広がっているのだろうか、多くは忙しさや面倒さから先に踏み入らない。自分にとって価値があると思っていないのかもしれない。

必要であれば相手が踏み込んでくるべきだと勝手に思い込んで、理解し合う機会を放棄している。壁の向こうはきつと自分に気づきの多い世界なのだろうか…。

世界はこの程度の課題に満ちている。身の回りも、政治も宗教も国際問題も、こちらから眺め判断する。それでは金正恩を理解できるはずもないし、対立の構図は終わらない。常に相手が悪い、という対立の構図が続く。

2017年10月3日

熊本城マラソンへの道 その1

先月末に熊本城マラソン参加の抽選で選ばれた。来年2月16日の熊本城マラソン参加の責任は全て私の手に移った。さっそくウォーキングやジョギングを本格開始したが、トレーニング7、8回目で膝を痛めて病院へ行くことになってしまった。昨年、半月板の手術をしたこともあってドクターストップを心配したが、どうにか参加OKを得た。

60歳にしてマラソン初参加、それも小学校から高校まで常に持久走では後ろから5番目以上であったことがない、加えて膝の故障持ちが敢えて挑戦するのは何故…。自分でも明白に説明できないが、難しい、不得手だから挑戦するのに価値があるように感じるから、唯それだけのような気もする。例えば42キロ完走（完歩？）したとして得られるものは何かと語るものもない。ただ、人生に遣り残しを遺すより失敗の体験を得るほうがまだいいと思うから。生涯最大の不得意？への挑戦、先ずは2月16日に体調を参加できるまでに整えることが出来るか大きな課題だ。体重を減らし、膝を調整し持久力もアップせねばならない。恥をかって終わるかも知れないが、遣らない自分

より挑戦する自分を認めたいと思う。今日現在まだ歩くのに痛みがある膝の状態だが、今週には復活するだろう。諸君、今後の中間報告をお楽しみに。

宣言…「2013年2月16日、私は体重を77キロ以下に減らして42キロを7時間以内で完走する。」

2013年10月13日

熊本城マラソンへの道 その2

その後の報告

週に3回、8キロ程度の早足ウォーキングを遣ったら膝を痛め、歩くことさえ厳しい状況となった。昨年、ひざの手術をした病院へ行ったところ、湿布薬を貰った程度でマラソン参加は大丈夫と言われた。痛みからすればそれでも不安があったが、病院の指示通り膝のリハビリを自己管理で行い、やっと再開したウォーキング前の準備運動をするようになったことで今は殆ど痛みがなくなった。

足の故障で得た教訓は、準備運動と整理運動をするという実に簡単で当たり前のことだった。自己流ではなく自分の見識が浅い分野への挑戦は、先ずは先人の経験を模倣することだと思ひ知った。私はあらゆる運動をする時に、これを全く意味ないおまじない程度に軽く考えていた。今回の病院のアドバイスで運動前は必ず準備体操と、終つての整理運動を重視することとした。運動前後のたつた5分が重要だったのだ。

ともあれマラソンへの道も残り100日を切った。次第に不安も募る。今までの実績は時速6km以上で2時間歩いたことと、時速8.3kmのジョギング30分までまだま

だ道は遠い。

もつとも嫌いだつた長距離走への挑戦だから価値がある。不得意なこと、逃げたいことに挑戦するための気概を創り維持することに意義を見出そうと自分に言いかけせるが、まだゴールは遙か彼方だ。出発点にさえたどり着けるのかも見えないが、二宮尊徳と同じ農耕民族の末裔だ、“今日の務めの田草を摘む”のみ、その他は考えまい。(笑)

今朝の記録

ウォーキング 2.31km 20:20' ジョギング 4.30km 30:32' 整理 1.70km 14:30'

今朝やっと走れたジョギングの速度で10倍走ればちょうどマラソン5時間ペース。遙か彼方の届かぬゴールだ。

2013年11月10日

熊本城マラソンへの道 その3

残りも2カ月余りとなってしまったが、トレーニングはなかなか進まない。11月19日から3日間は早朝のバンコクでジョギングを行った。といっても日本の道路に比べれば歩道は穴あり、起伏あり、障害物ありと、とても落ち着いて軽やかなジョグが楽しめるような状況ではなかった。しかし、異国の早朝ジョグの経験は韓国大邱に次いで二度目だが、日本との違いにワクワクする。真っ暗な現地午前4時台にトラックも乗用車も騒音けたたましく走り抜ける。やはり成長期の国は朝に元氣がある。朝早いうちに渋滞地帯を走り抜けようという現実的な目論見があるにせよ成長期の国というのは活氣がある。かつての日本ももっと朝に活氣がったように思う。東京の午前5時は未だ静かな夜が続いている。失った昔の高度成長期の日本がここバンコクにある。疲れを語る以上に、成長と豊かさを得ていく生活が、苦しみより楽しみと幸福感を与えてくれるのが成長社会、懐かしい早朝の喧騒だ。

そうはいっても、ジョグするには危険もいっぱい。真っ暗な歩道で朝の屋台の料理の仕込みの鍋に足でもひっかけたら大やけどだし、穴に足突っ込んだら骨折、犬の糞に乗って滑りこけたら打撲傷だ。(笑)

12月1日、家の周りを20分歩いたのちにジョギング40分が何とか走れた。平均速度は歩きが6・6 km/h、ジョグが8・3 km/hで殆ど歩きも走りも大差ないが、今日は連続40分のジョグが出来たことを良しとしよう。

2013年12月1日

熊本城マラソンへの道 その4

残り60日を切った。体重は一向に減らないが、足のふくらはぎなど筋肉がついたように感じる。今週は日、月、木と週3回の早朝ジョギングを行った。いずれも4時半過ぎのスタートだが、日曜は一周7・75キロのコースをウォーキングとジョギングの繰り返しで2週2時間以上かけて行った。木曜日には速度が7・98 km/hと目標の8 km/hで一時間以上というペースに近くなった。来週には達成したいものだ。

速度は別にしても、ジョギングを一時間走り続けるなどやったことが無かったが、還暦にして初めて経験する。そして一度できたことは2度目には比較的苦痛なく出来るようになるものと実感する。今まで生きてきた中でも似たような経験は多い。

苦しいことを経験すると、それより低いレベルの障害は余り苦痛なく乗り越えられる。経験した仕事の思い出でも、4、5日間冬の現場で2時間くらい仮眠するくらいの休憩だけで過ごした経験がある。風呂はおろか食事もパンやよくてカップラーメン、弁当という経験もした。最近の私にはそれと比べるような現場の苦労は久しくないから快適に過ごしている。

経営の苦労では、個人の全ての金と財産を吐きだし、銀行に一日に2、3行かけ摺り回り、ついにはその月の給与も払えない可能性にも直面したし、3日後の手形不渡りの可能性にも直面した。全て何とかしのいだが、今はその時の緊張感に比べれば生ぬるい自分に逆に不安を感じる。

マラソンの話題に戻ると、確かに未だ走ることにはいくらかの苦痛を伴うが、今まで味わった苦痛に比べれば楽だし、日常に大きな苦痛もなく生きている我が身には刺激や苦痛が必要だと思っただけの挑戦でもある。未経験のフルマラソンを7時間内で走りぬく自信は未だないが、失敗して失うのはそう大きなものではないだろうし、成功して得られる自分への自信は大きいものと思うから挑戦する。

熊本城マラソンへの道 その5

12月の連休、個人的に東京虎の門に宿泊する機会があった。5時過ぎに起きてホテルから皇居一周ジョギングを試みた。

事前のwebでの下調べでは、ホテルから9km余りの道のりだった。初めての土地だし所要時間よりも楽しんで完走することを目指し、且つ途中ショートカットして7km強の道のりにするつもりで出発した。

皇居へたどり着き未だ暗い中で走る人も少なく、快適に皇居の内堀を眺めながら走ることが出来た。一周の8割がた終えたところでホテルへの帰路に就いたが、途中道に迷い、折しも天皇誕生日の催事前で警備の警官が多かったので何度も立ち止まって道を尋ねた。やっと帰り着くと何と距離は11キロを超えていた。

遠回りでキツかったかといえば道を聴いて走る出すたびに体が軽くむしろ気持ちよく走れた。勿論、相変わらず時速8km弱の速度ではあるが、ひよっとしたらこの調子ではマラソン7時間も可能性があるのではという初めての体感を得た。全く私には無謀な未経験マラソンへの挑戦がやっと手が届くかもしれないという実感を得た皇居一

周だった。

経験したこと

- ・ 皇居ジョギングは暗いうちに走り始めれば人の存在が気になるほど多くはない。
- ・ 早い人も多いが、遅い人もいる。恥じ入ることはない。
- ・ 都内のジョギングは土地感覚をつかむにはもってこい。日頃、車と電車で動いている場所と距離感がつかめる。

・ 東京の早朝はこの都市でもいえることだが実に清々しい。

2013年12月24日

熊本城マラソンへの道 その6

いよいよマラソンが一週間後となった。最初、ジョギングは2kmもやっとだったのが、どうにか10km以上は出来るようになった。1月末には氷が張り始めた諏訪湖の早朝一周18kmジョギングを行った。残念ながら連続して18kmジョギングは出来なかったが、一周は成し遂げた。

この5カ月、熊本以外でも出張先の韓国、上海、バンコク、東京、諏訪湖と、色々なところで走った。見知らぬ土地の真つ暗な時間のジョギングは多少の不安もあるが、冒険気分が高揚して面白かった。お蔭で何とか10kmのジョギングも出来るようになったが、勿論42kmは未だ遙か彼方。制限時間7時間で果たして無事帰って来れるかは何とも心もとない。足の筋肉が耐えきれるか、膝はもつか、エネルギーは切れないか、メンタルは維持できるか等々、心配は多い。

今日は初めて昼間に走った。今までどこで走っても早朝だったので感覚が違ったし、体感温度も大きく違った。準備に考慮する要素が一つ増えた。(笑)

60歳にして人生初めて10km以上の完走ジョギングが出来たのは我ながら大きな収穫

だ。勿論、若い頃のようなスピードではないが、出来ないことも手順を重ねれば実現するのを改めて体験した。自信を得ることもできた。出来ないことも遣り続けられいつか花開く。若い頃、持久走能力は絶対に平均より大きく劣っていた私でさえ、やれば此処まで出来るというのは喜びだった。

残念ながら体重は減るどころか微増になったかもしれない。ふくらはぎや太ももが大きくなってしまった。この歳でも筋肉は太くなる、というのも面白い体験だった。

この5カ月の体験で学んだことは多い。レース終了後改めて総括報告したい。

2014年2月9日

熊本城マラソンへの道 総括

約4か月に亘ってマラソンへの挑戦準備を行った。昨日その当日を迎えた。結果から報告しておくと、中間地点の閉門に手前200mで終わってバス回収となった。時間に間に合っていたら最後まで行けたのかとの問いには恐らくノーだろう。17km過ぎから足の裏が強烈に痛み出し、途中靴ひもの調整や靴下を変えたりして見たがあまり効果なく歩くのがやっとだった。

バスでゴール地点に戻り、介護所で医師に診て貰い休憩し、やっと少しは歩ける程度となった。強い圧迫を繰り返して受けているから、酷ければ疲労骨折だが、両足だから骨折ではなかうとのこと。帰ってマッサージを受けて言われたのは「足先で走っているのと、靴底が薄いのでは」と。80キロ超の体重を支えるには、それなりの分析と対策が必要だと感じた。ここに自分の大きな怠慢があった。冷静な自己分析と対策実行を怠った。

89歳の老人が参加していたと聞いた。挑戦するには30代の人とは比べ物にならない努力と冷静な科学的分析が必要だと思う。根性だけでは成らないし、道具や知識だけでもならない。冷静な準備があれば無理そうなことも可能となると改めて思った。

さて、この4か月の準備期間に色々な体験をした。以下に終了直後の感想を書く。完走していないのが何とも残念ではあるのだが。

・やればできるもんだ。子供の頃より最も不得意な長距離走。10kmもノンストップで走ったことなどなかったが、今では自信持って10kmは走れると言える。途中リタイアで偉そうに言えないが、4kmコースに挑戦していたら、今日はまだ10km走る自信はなかったに違いない。フルマラソンを目指したからこそ、10kmは入り口としてクリアする。もし、100kmマラソンに挑戦という目標を掲げていたら、昨日の42kmは完走していたかもしれない。勿論、準備期間には会社業務を放り出すほどの努力をせねばならなかっただろうが。

・今までマラソンは苦しみとの闘いで最もストイックなスポーツに見えていた。しかし、挑戦してみると苦痛以上にそれを乗り越える達成感には恍惚感さえある。走れば

走るほど快感度が大きくなる。努力には我慢の先に達成感、充実感というような快感も付いてくる。

・マラソンはよく人生レースに例えられる。苦しさとの戦い、自己との闘いが人生に似ているからだろうが、もつと似ているところを体感した。苦しいことは何時までも続かない、続けることは苦しさを低減し、習慣化したことはやがてやることに快感さえ感じるということ。苦しそうに見える努力の姿は決して見ているほど苦しいだけのものではない。

・いつからか「楽、苦、耐 躍」と唱えながらリズムを取ったりして走ったりもしたが、正に楽しく、苦しく、耐えれば次へ躍動し、楽しくなりまた苦しくもなる、の繰り返し。実に奥が深いスポーツの入り口を覗いて4か月を終えた。

総括として、今後この経験を継続するかどうか決めかねている。マラソンへの挑戦を続けるかということは他の何かが出来ない又は削るということでもあるのだが、実

にいい体験をさせてくれたことに感謝している。一生を走る楽しさなど感じないで終わるところだった。

遣れば出来るもんだ。昨日20kmしか走れなかった者が大きなこと言う気はないが、目標を立てて追いかければ出来そうにないものが可能となる。今回の私は科学的な分析や根性もなく、練習不足で達成したとはとても言い難いが、何も失うものはないので敗北感より充実感を大切にしたい。

プロスキーヤーの三浦雄一郎氏が70歳過ぎてのエベレストへの挑戦を企てたとき、無謀さと周りへの迷惑を感じたが、達成した姿は高齢者だからこそ多くの人に感動を与えた。30歳の登山家だったら勿論あれほどのサポーターは必要ないだろうが、支えられての成功というより科学的計算と予測による登山だった。挑戦は無謀であってはいらない、目指すゴールを明確にすればその責め方はあるものだ。久住山には久住山の登り方があるし、富士山には富士山の挑戦の仕方がある。エベレストに登るのに久住山の準備と努力で挑戦すれば大きな失敗となるのは見えている。

日頃、様々な達成目標を掲げるが、準備と心がけでそれを達成するのは嬉しいものだ。富士山に登るには、エベレストに上る位の覚悟と準備でやれば誰にでも登れるだ

ろう。

さて今日からはエベレストでも目指すか(笑)。

2014年2月17日

60歳のクラス会

11月末に高校のミニクラス会を行った。地元中心に東京からも集まった。同級生だから当然還暦を勤務先企業で定年を迎える者たちが多い。定年がないのは私と坊主やっている友くらいだった。それなりの企業や公務員、病院、大学などに勤務していた連中だが、最近は何故か輝きを感じないのは白髪頭だけで気のせいかな。しかし、まさに老後を語る集まりになってきた。退職後は某大企業で副社長から慰留されるのを振り切って、趣味で新しい仕事を立ち上げるといふ強者もいれば、天下りもいれば再雇用もいる。皆、若き日や家族を語りはしても、未来や夢を語ることが少なかった。

大企業、中堅企業に勤務しているだけあって、再雇用を希望すれば可能な連中が殆どで、一見羨ましい立場だと思ったが、具体的に内容を訊いてみると、給与は6割が最高額で、半額、4割、最も低かったのはいま課長なのが時給840円のアルバイト職員になるといふものもいた。現実には厳しいものだ。再雇用制度が機能しているとは言っても、かつての部下や後輩たちの下で働き、給与は半分にも満たないのでは士気を維持しろというのも気の毒だ。それでも彼らは現実を知っているのか、働く場所が

あるだけ有難いというものが殆んどだった。

定年というのは外部から自動的に年齢で決められることに寂しさと抵抗を感じる。自らで能力低下を判定できて、減給や去るべき時期判定できないかと思う。逆に私のような立場は、外から決められることはない代わりに、引くべき時期を誤って老害を垂れ流すことが無いように、常に自分の引き際を考えて行かねばならないと創業のころから考えていた。経営者には定年がない代わりにそれ以上に厳しく我が身を律する必要がある。自らを解任するような覚悟と気迫が無ければ経営者はそれを続けるべきではないと思ってきた。その時期も近いのかもしれない。

若いころ見た光景、老社長が共に老化した社屋の壁が黄ばんだ社長室で昔話をして、いる風景がいくつも目に焼き付いている。その後は社長達は亡くなったか会社が亡くなったかということは多かったが、成長して引き継いだという事例は殆ど覚えがない。我社にもこのよくある事例が起きないようにしたいものだ。

以下に中畝地さんが好きなサミュエル・ウルマンの詩「青春」の一節を記す。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老いる。

人は自信と共に若く 失望と共に老いる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

若者は若さについて語らない、語るのが老人の始まりと昔は思っていたが…(笑)。

2013年12月8日

手を合わせる

色々な手の合わせ方があるが、世界中で手を合わせるといふ行為は祈ったり気持ちを含めたりする自然発生的な行為のような気がする。日本では主に祈ったり拝んだり頼み事したりするときに手のひらを合わせる。

私は毎朝会社での朝礼の時に手を合わせる。私の場合は、心の中で社是と共に経営理念である「感動を創造する、人を活かしきる、すべてに感謝する、常に挑戦課題を持つ」を唱える。この言葉に従って行動しているか、反することをやっていないかを心の中で問う。社員数が非正規の方まで含めると100名を超えた。

「人を活かしきる」といふ言葉によく引く掛かりを覚える。「本当に人を活かしてないのでは? ○○君の視線が落ちているのは希望を与えられていないからでは…」などなどの思いで乱れることもある。新しいテーマに取り組んでいるとき、「常に挑戦課題を持つ」と気持ちが言い切れるときは決意で力が入る。

ときどき手を合わせるといふ行為は大切な行為と実感することがある。神社や寺で手を合わせて拝むことも多いが、私は決して神頼みはしない。神や仏に向かって誓い

をする、或は感謝を述べるに留めている。神頼みすると気持ち弱くなるから、今からの行動や生き方を宣言する。行動は自分で決められるが、大願成就は自分を越えた神のみぞ知る。だから神様には頼まない、成就しなかったら神様に申し訳ない。(笑)

神社や寺、家庭で神棚や仏壇などに手を合わせることも多いだろう。手を合わせるという行為は、自分より上の存在を感じ、その前で素直になるといふ行為でもある気がする。専制君主やワンマン社長でも手を合わせたときは、自分より上の存在に素直に向かっている。心には安らぎが生まれ謙虚さもあるだろうし、感謝もある。

私は20年前親友が突然死んだ時から、朝礼の時に手を合わせるようになった。最初は友の冥福を祈って、その後は今日も健康で生きていることに感謝して、今は誓いと宣言の気持ちで。

手を合わせればきつと今より張りがある一日が始まると思う。諸君、朝起きて本格的に活動を始める前、仏壇に或は写真に、或は鏡に映った自分に向かって或は朝日に手を合わせて自分を顧みる機会を持つてみてはいいかだろうか。自分を越えた存在に元気に生かされている感謝と前向きに生きる誓いをしてみてはいかがだろうか。

2014年4月20日

誰にも負けぬ努力をする

京セラ創業者稲盛和夫氏の言葉だ、事あるたびに思い出す言葉の一つだ。そして人に言いたくなる言葉だ。

多くの人は手に入れたい物や欲しい幸せを語るが、そこに到達するための努力を見せてくれる人は少ない。たまにその努力を見せてくれる人がいれば、負けてる私に心地いい鞭を入れてくれる。

「負けてるなあ〜」、この思いを人生で何度も感じる度にグウタラな自分が少し走った。走ってはまた歩き、また負けては走るのが人生だったような気がする。

しかし、多くの人は手に入れたい地位や給与や物や幸せを語るが、その努力を見せたくないのに寂しく感じることも多い。「血の小便も出さずして成功を望むなら、それは傲慢だ。」と松下幸之助は言った。私も未だ幸之助に言わせれば傲慢なのかもしれない。

少年時代は「努力と根性」が大嫌いだった。何時も手抜きとごまかしや近道を捜し、棚ボタをいつも夢見て、最低限の仕業で生きるグウタラだった。だから今は人の手抜きもごまかしも共感できるしよく見える。

言い訳など聴いていると思わず笑いたくなるほど先が読める。そんな私が努力を語り始めたのは、人生の面白さがここにあるからだ。私の努力は稲盛氏や幸之助のような天性ではない、グウタラ人間が手に入れたもの。イチロー選手など見ていると、只々感服だがまねることは出来ない、すごすぎるから。

「誰にも負けぬ努力をする」。いつも私の弱い心に語りかけ歩く私を少し走らせてくれる言葉だが、いつも負けている。しかし、少なくとも努力をしないで成功を手に入れたと思うほどの傲慢な人間ではないのが私の小さな誇りだ。

2015年1月12日

人は理想に従って勝ち、欲望にしたがって敗れる

入社するとき面接すると、多くの人達は「この会社で自分が役に立ち、自分の夢も追いたい。その為には一生懸命頑張る」というようなことを、目を輝かせながら語ってくれる人がほとんどだ。新卒であれ中途採用であれ、心機一転新しい世界を広げたいとの思いに嘘はないのだと思う。しかし、一年或は2年経つと、多くの人の目の輝きが失せ歩調も遅くなり服装も崩れ色あせていく。

「理想を追え」と25周年後の次のネクストステージへの心構えとして掲げた。覚えてくれているだろうか。今からの未来では、会社も社員諸君一人一人も色々な壁に出くわすだろう。

困難なことに出会ったり、日々に小さな欲望であったときに、「そこまで頑張らなくていいのでないか」、「誰も見てないからズルしたらどうだ」、「他の人間も手抜きしてるぞ」等々と、心の中で悪魔の囁きが聴こえてきたことないだろうか。

だらしなく生きて来た私の人生もこの欲望との戦いだった。「もうこの位にしておう」、「人並みくらいはやった」、「誰にも分かりはしない」、「悪いというほどの事

じゃない」と悪魔が囁く。その度に、「正しかれ、生き方曲げるな、恐れるな」と自分に言い聞かせる日常だった。夜更かしや翌日の朝寝坊もしたかったし、趣味や遊びに深入りもしたかった。私は生まれながらに強い信念や正義感が溢れた人間ではない。しかし、正しく生きたいと思い、理想にあこがれ弱い自分に悩む。子供の頃、「宿題早くしなきゃ」、「試験勉強やらなければ」と思いながら、流され何もしない自分がいた。スツキリしないで生きる日々があった。もうそこには戻りたくないと思いつながら生きて来た。

理想や良心は多くの人が持っている。しかし、毎日、食べないほうがいい甘いものを食べて太り、仕事を誤魔化しですり抜けようとしたり、今日の仕事を明日に伸ばし、朝早く家を出たほうがいいのに遅い出勤者になってしまふ、整理整頓して帰ったほうがいいのに放置して帰る自分がいる。

今日も理想に目をそらし欲望に従った選択をして輝きを失っていく貴方は居ないだろうか。本当はもっと輝いてもいい自分を曇らせて、家族や周りの期待を失っていく自分はいないだろうか。

勿論、自らの不甲斐なさは人も知っていることだろうが、誤魔化して生きるのを本

当に知っているのは自分の筈だ。鏡を見て自分を一分間でもいい、見つめて見よう、何かが変わり始める。

2015年2月28日

生は奇なり 死は歸なり

私の頭の中に常にある言葉で、今までも機会ある度に皆の前でも使ってきた。創業間もなく出会った言葉であり、上杉謙信の言葉かと思っていたが、今となっては分からない（知っている人あれば教えてもらいたい）。

生きていること、会社だったら存続していることは、決して当たり前ではなく、寧ろ死ぬこと、無くなることが元の状態へ戻ることだし、それが当たり前のことだという。重病になって死を間近にして、初めて健康の大切さに気づく人も多いのだろう。それが当たり前のことに戻ることも言われても納得はできないだろうが…。

大切なことだが、当たり前のことが如何に強い意志をもって守らねばならないことかを改めて考えて見てもらいたい。偶然成り立っている健康、偶然成り立っている利益では失ってしまうのが当たり前なのだ。

必要なものは強い意志をもって実行し、守らねばならないことなのだ。痛みや苦痛を伴ってでも守らねばならないことが誰にでも幾つかあることは考えてみていいことだ。

家族、健康、信頼、…等々人それぞれあるだろう。私にはプレシードはかなり優先度が高い守り通すべきものだ。その為には、自分の痛みや、他人の痛みも時として無視することもあるかもしれない。

日本人は「水と安全はタダ」と思っているときよく言われる。必要なものだからあるのが当たり前という甘い考えを指摘された言葉だ。

地下水が汚染されたら生活用水確保に莫大な金が必要だし、社内でも盗難や犯罪や事故が起きてからでは、存亡にも関わることもあるのなら強い意志で守らねばならない。失くしてから、起きてから事の重大さに気づくのでは手遅れとなることは、意志をもって事前対策せねばならない。

ビジネスはもつと厳しいものだ。偶然では絶対に利益は出ないし存続はできない、諸君の給与も、支払われるためには組織運営に対して守り抜く強い意志が必要なのだ。計画されたことを守り通すことが組織の最大の掟なのだ。

その為に、計画未達に対して励ましがいいのか処罰がいいのか…、私は今までほとんど責任を問い処罰するより叱責と励ましでことを済ましてきた。しかし、プロジェクト運営で赤字を出すということは会社を病氣へ導くことでもあり、投薬で間に合わなければ、痛み伴う手術を選択せねばならない。手術をためらうことは病をさらに酷くすることにもなるから。

年初より私を含め取締役を昨年の目標未達成で減俸処分した。この手法を末端まで浸透させるのは本意ではないのは理解願いたい、経営が計画実行責任を問うという宣言であることも理解願いたい。成功を賞賛し合う組織でありたいものだ。

2015年3月9日

守 破 離

守破離、最近、よく聴くようになったし、知り合いと話す機会もあった。私は随分昔に禅の入門解説本でこの言葉と出会ったように思うが、柔道、剣道、茶道など「道を究める修行の心得として伝えられる言葉だ。今から何かに挑戦し始めるときに考えてみていい言葉だと思う。

「守」、まずは型から入れ、真似よという。次にその身についた型を他の方法で変えてみて、ついにはそこと全く違うレベルを身につけよということか。

私の個人的思いでその言葉にあえて逆らって試したことが幾つかある。先ずゴルフだ。ゴルフこそまさに人や教本、場合によってはレッスンスクールに行ってフォームを固めたがいいと言われるものの典型かもしれない。それを知っていてあえて我流で遣ることに挑戦してみることにした。35歳のころだ。どうせプロやトーナメントに出るなどの欲望はない、だからあえて我流で。ただし、遣るときは絶対に一生懸命真面目に遣るという決意で始めた。30代から40代に掛けて、多い時は月に一回程度は出か

け、打ちっぱなしにも同じくらい行った時期もあったように思う。十年以上ゴルフをやって最高が101、ついに100を切ることはなかった。

同じような経験がフルートだ。金はないが暇はあると思っていた大学時代に、フルートと教本を買って、時々だったが10年以上我流で遊んだ。せいぜい音が出てポプスが吹ける程度にはなったが、納得できる状況では無く忘れ去っていた。40歳随分過ぎて少し本気で吹いてみたくなり先生に就いた。月に2回20分レッスンを受けはじめた。つくづく実感したのは、我流でありそれを修正するには初心者より大変な部分もあるということだった。

どちらも仕事や他人に迷惑かけることではないから我流を楽しむのもあっていいが、少しでも早く上手くなりたいのであれば、先生の指導を受け先ずは先人の型を学ぶことだと実感する。型を身につけてこそ「破」であるアドリブも楽しめるし、臨機応変、変幻自在の「離」の領域がある。

もし、仕事や趣味で高い領域に到達するのを目指すなら、先ずは我流を排し、自らを「守」型に入れることだ。先輩、師匠の指導を受け、身につけることだ。身近に師

匠がいなければ、教本や成功者の本から学ぶことだ。

仮に身近に尊敬する師匠に恵まれれば、其れは人生の宝だから先ずは真似をして、そして指導を受けることだ。道に近道はないというが、我流が遠回りであることは、間違いないというのは、私のゴルフやフルートや水泳が証拠だ。勿論、我流を楽しむ人生があってもいいと思うし、今後色々和我流を楽しむつもり、というのは負け犬の何とやらか。

そういえば、私の会社経営も我流だった。営業、購買、総務も遣ったことなかったし、ましてや経済学や経営学を体系的に学んだこともなかった。経営しながら随分と書物も読んだし、周りの社長の行動観察からも学んだが、所詮ツギハギ知識だった。随分と失敗し痛い目にもあった。体系的に経営学を学べば失敗しないで済んだであろうことが多かった気もするし、今後も未だ未体験な失敗に出会うかもしれない。私は、守も破も離も同時にやっているような落ち着きのない社長業がまだ続きそうだ。

2015年4月6日

通勤電車の中で

都市部に出張すると、時々朝8時前後の通勤電車に乗り合わせることがある。最近ふと気づいたことだが、周りを見回すと私より年配の人間が殆どいないということだ。客観的に考えれば当たり前のこと、還暦過ぎた勤め人は毎日通勤するとしても、嘱託や顧問、非常勤など肩書もはずれた人が多く、始業時からの会議に参加する人の割合は少ないのだろう。

朝早くから重い鞆を肩から下げて満員電車に立っている我が身が寂しく覚えた。肩書を外れて日々働くということは、荷物軽く楽しいことなのかもしれない。知らないうちにもう老害と呼ばれるような年になってしまった。

次世代は育っているか、いや育てねばならない。育つのを待つ時間はない。今年は「育てる」を掲げた。今その育てる能力を組織と私が問われている。

若い世代に求めているのは、自分が未熟だということ、未だ見えてないことに気づいてないという気構えを持つてもらいたいということ。私は常に見えていない。知らない恐怖と共に30年生きて来たし、今日も我が身の無知と未熟を相手に戦っている。

しかし、無知を知らない者たちより無知ではないとの自信はある。過信と驕りは成長を閉ざす。知不知（知らずを知る）。

2016年2月25日

上原良司陸軍大尉

この連休で家族と知覧特攻平和会館を訪れた。特攻で散った二十歳前後の若者と私と同世代だった頃、時代は極端に左傾化していて特攻など語ることは憚られた。しかし、私にはずっとどのような思いで若者が死んでいったのか見届けてあげねばと氣になっていた。やっとその心の重荷が下ろせた気持ちだ。

訪問当日は連休で列に並んで入館する有り様で、館内はジックリと多くの遺書を読んだりする環境ではとてもなかった。並べられた遺品と遺書、遺影はその数に一つ一つの命の無念さを感じた。ある人は自分を騙し昂揚感を作り、ある人は静々と冷静に時代と環境を見つめながらこの世を去って行ったのが窺い知れた。

先を急ぎ知覧を車で去り始めたとき、ふと特攻隊員たちの最後の人間らしい交流の場になったという、特攻の母、鳥浜トメが経営していた「富家食堂」のことが氣になり、引き返した。今は「ホテル館」という名で当時のままに再建されていた。ここには、冷静に遺品遺書が並べられた特攻平和会館と違って、小規模だが鳥浜トメと死に臨んだ若者の交流の記録が残されていて、多くの生々しい生き様、死に様に接するこ

とが出来た。

17歳で逝った子犬好きの若者、朝鮮出身で食堂でアリランと一緒に歌い最後は朝鮮語で涙流して歌った若者。死んだらホテルになって帰ってくるという去り、約束通りホテルが帰ってきたというホテル館の名の由来の若者。同じ島に不時着した重傷の戦友パイロットを救う為に、島の人達の制止も聞かず命がけで70kmの海を島の若者と二人小船で九州本土に戻り、そのまま飛行機に薬を積んで特攻に向かい、途上で薬を小落下傘で島に落としていった若者もいた。

「走れメロス」を思いだした。メロスは救われ友情に涙したが、このパイロットは友の命を救うために死んだ。しかし、この救われたパイロットは生き残り、戦後何度も知覧と島を訪れたという。

思わず涙せずには読めない若者の最期の話の数々の中に、一人異色の学徒動員出身の士官、上原良司少尉（死後に大尉）のエピソードに気持ちを奪われた。私は強く心惹かれ、この大尉の名前をせめて供養と思ってフルネームで覚えて帰ることにした。帰って調べると「きけわだつみの声」などで名前は有名な特攻隊員らしい。

自らを自由主義者といい、ファシズムもナチズムも負けたように、自由主義が勝利

し日本は負けると書き残し、「愛する祖国日本をして、かつての大英帝国のごとき大帝国たらしめんとする私の野望はついに空しくなりました。……愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的には死んでおりました。

天国に待ちある人、天国において彼女と会えると思うと、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。

明日は出撃です。過激にわたり、もちろん発表すべき事ではありませんでしたが、偽らぬ心境は以上述べたごとくです。

：明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。言いたい事を言いたただけ言いました。無礼をお許し下さい。ではこの辺で」と、陸軍報道班員に「所感」を求められるがまま書き残して、堂々と自分の生きざまを主張し自由主義者として空に消えていった。

上原大尉には心に秘めた恋人がいて、そのころ既に他の人と結婚し結核で亡くなっていたという。彼の実家にひそかに遺された自由主義者、羽仁五郎の著作の本文に丸囲いの文字があった。それを並べると

「きょうこちゃん、さやうなら。僕は きみが すきだつた しかし そのときすでに きみは こんやくの人であつた わたしは くるしんだ。そして きみの こうフクを かんがえたとき あいのことばをささやくことを だんネンした しかし わたしは いつもきみを あいしている」と読めるという。

今日5月11日は奇しくも上原良司大尉の70回忌。1945年の今日、上原良司という、「死んだら靖国神社にはいかない天国に行く」と言つていた22歳の若者が沖縄嘉手納沖の米国機動部隊目がけて知覧を飛び立つていった。

もし、時間あるときあれば「上原良司」をネットでひき、調べて見てもらいたい。70年前の軍国主義と呼ばれる暗い時代に、今の若者より遥かに柔軟な思想をもって自由に憧れながら自由と独立の為に死ぬといい、死んでいった軍人がいたことを知ることは価値あることだと思う。

彼の死は無駄だったのか……。私には分からないが、私一人でも彼の名前を憶えていてあげたいと思う。合掌

2015年5月11日

残り時間

現在62歳という歳になる。「歳を重ねてしまった」というと、多くの人はまだまだ若いと言ってくれるが、「未だ若い」という形容詞を付けられること自体が老人なのだと思つている。

実際に色々な会合に出れば、社長などの役員や公務員特別職でなければ皆年下だ。かつて県の部長課長職等と言えば、はるか年長の迫力ある人たちに見えたが、今は皆年下でなんとなくかわいくさえ見えるときがある。同級生の集まりに出ると、ごく一部の経営者以外は、表情もすっかり好々爺で孫や健康や趣味の話で盛り上がり、昔日の引き締まった表情もなく政治経済の話も空論で終わる。これは実害のある話でもなく、ビジネスのゴールを切ったランナーの憩いの語らいだから良しとしても、冷静に自分の残り人生を考えると焦りを感じることも多くなった。テレビで70歳代の年齢表示が出れば、あと10年での姿になるのかと我が身と比べる自分がいるのを感じる。確かに90歳でフル馬拉ソンを走る人もいるが、60歳で100mを10秒台で走れる人はいない。個人差はあつても生きてる限り必ず老域に入る。戻れない道を歩いている。

今ここで何か遣り残しはないかと考えねばならない個人的時期と感ずる。

今までの人生で「今は金がないから我慢しよう」、「今はヒマがないから何時か時間出来たら挑戦しよう」などと先送りしてきたことが、もう先送りする残り時間が無くなってきたのを感じる。今持っているテーマと今から出会うテーマに対して「今からやるのか」、または「もう人生でこれは手を付けないのか」の結論を出していかねばならないと思うようになってきた。買いたいものがあつたら、買うか諦めるか、行きたいところがあれば、行くか諦めるか、挑戦したい行動テーマなどあれば、すぐ始めるか自分の人生から除外するか、今までの人生と違った判断をせねばならない気がする。

今、新しいスポーツや趣味を始めても、年々間違はなく人間の能力は落ちていく。もし高みを目指すのであれば、すぐにでも始めねばならない。買いたい車があれば、人生最後の車と思って派手な車を買ってもいいだろうし、アルプスに登りたければ、1年以内に実行する位の準備を今始めねばならないと思う。

もう残り時間は少ない。会社や家族や社会の為に生きる人生であつてもいいが、今やらなくて本当の晩年になってやらなかったことを後悔しそうなことがもつとありそ

うな気もする。

仕事で言えば、妥協しないで通すか、もう自分が達成するのは諦めるという選択をするかという判断が多くなるだろう。自分の力での達成は諦めても、会社の成長過程として必要なことは他の人の力を借りても達成することを目指すねばならない。会社の成長に停滞は許されない。停滞はあつという間に凋落に変わるから。

「いつかやれるだろう」という安易な先送りはしない生き方をもう一度見直したい。もうカウントダウンの日々を生きていることを自覚しながら日々を充実させていきたいものだと思つづく感ずる。

追記

本当は全ての人間が生まれたときからカウントダウンが始まっている。若い頃はそれに気づかず、いつまでも維持または成長できると誤解しているが、少なくとも40歳過ぎて体力も知力も成長はあり得ない。努力して回復と維持と低下を遅らせることだけが出来ることだ。

但し、「経験と学習」が失つたものを補つたり、それ以上の成績を出せることもあ

るので、これから先が人によってその力と生き方や行動の差が出る。60歳も過ぎれば「経験と学習」は、補てんであっても能力の拡大には及ばなくなってきたのも感じる。体力の衰えに知力の衰えも自覚すべきだろう。今からは人の力を使って自分の力を発揮できる時間がもう少し残されている。これが本当の私の残り時間か。

少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んず可からず

池塘春草の夢未だ覚めず、階前の梧葉已に秋声

*一寸の光陰どころか惰眠を貪りながら生きてきて、人生に秋声を実感する

以下はアメリカの詩人の詩だが何故か日本人とくに中高年に人気の詩

この詩を知らなければ、共感しなければ未だ若者なのか、もう手遅れ老人なのか

青 春

くサミュエル・ウルマン作

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てゐる冒險心、こう言う様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけでは人は老いない。

理想を失う時に初めて老いがくる。歲月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精氣ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

曰く、驚異への愛慕心か、空にきらめく星辰か、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰か、事に處する剛毅な挑戦心か、小児の如く求めて止まぬ探究心か、人生へ

の歓喜と興味か。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる
人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる
希望ある限り若く 失望と共に朽ちる

大地より、神より、人より、美と喜悅、勇氣と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われない。

これらの靈感が絶え、悲歎の白雲が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至れば、この時にこそ人は全くに老いて神の憐みを乞うる他はなくなる。

信念と共に若く…希望ある限り若く、と斃れるまで前に向かって行きたいものだ。

2015年6月13日

貧乏、病弱、無学歴

最近ある講演会でのこと。「松下幸之助が成功の秘訣は何かと尋ねられたとき、『貧乏だったこと、病弱だったこと、無学歴だったこと』と幸之助が答えた」と聴いた。なるほど流石に大事を成し遂げる人は違うものだと思うとともに、マイナスをプラスに考えるというのでは大変共感した。

貧乏だったから豊かさに憧れ苦労も苦痛にならない、病弱だから暴飲暴食も控え喫煙もしないで長生きできた。無学歴だったから識者の声に素直に耳を傾けた。松下幸之助が金持ちに生まれ健康優良児で大学まで行かせてもらっていたら、松下電器は生まれなかっただろうというのに私も同感だ。

ゴルフの岡本綾子が似たようなことを言ったのを記憶している。「私は左利きで腰痛持ちだったのがラッキーだった」と。明らかにゴルフアーとして不利なことだが、その克服があったから成功したという。ひょっとしたらあなたも成功の為のラッキーを持っているのではあるまいか。

2015年7月19日

常識を疑う

常識とは初めから人と同じものではなく、確認しながら作っていくもの。朝からの身なりも所持品も人によって常識が違おうし、顧客への対応や製品に対する考えも違おうが、組織の常識はゼロから育てねばならない。

組織の常識レベルが低いと、生産性も社会の評価も低い会社となり、結果的には出来の悪い社員が出来る悪い製品を出荷する会社となり、利益が得られなくて存在できない会社となってしまう。

今、世界で日本の常識が評価され始めている。世界の品質は日本が創ってきたといえる。それをアジア諸国が追いかけて追いついてきた。最近はおもてなしの世界で日本へ憧れる観光客が増え、日本食のこだわりや接客のマナーで世界の注目が強い。

最近、日韓でビジネス展開するロッテが、後継者でもめているのが話題になっているという。このロッテは、日本で創業した在日韓国人重光氏が、日本型の食品の品質管理、ホテルのおもてなしを韓国国内へ展開したことで巨大な財閥に成長した。

この日本常識型成長モデルが世界中に広まって、世界の食品やサービスの品質が向上すれば日本人として誇らしい思いだ。

一方、日本国内ではさり気なく当たり前であった顧客サービスや品質へのこだわりが崩れ始めている部分を感じるようになった。常識の崩壊が始まっているのではと危惧する。高い品質やサービスを運営するのに、厳しい規則や罰則を適用するのではなく私は文化、常識で運営することを願う。

規則通りに運営されるファーストフードの接客より、古い料理屋さんで当たり前のように気配りしてお茶おしぼりや皿をさりげなく交換してくれる接客が私には心地いい。何故か…、それはその人の職業人としての誇りと気配りから発しているから。

しかし、一方でマニュアルに書いてない常識は崩れ去りやすいのも事実だ。誇りをもつてそれを育てる働く人たちがいなければ、マニュアルだらけの組織となってしまう。

最初は常識も何もないところから始まる組織だが、長い歴史の中でそれが成長し、

顧客や製品へプラス効果を積み上げる常識が育っていけば、企業は成長し働く人たちも豊かになる。逆に高い常識が育たないと組織は消滅していく。

昨日までの常識は常に変わっていく運命にある。自分が20代の時の常識と30代の常識は違う。時代が変わる以上に人が成長していくから。

今日の常識は明日変わるという前提で日々成長したいものだ。

2015年8月10日

五省

「五省」という教訓を添付する。昔、海軍兵学校に掲げられたというものだが、終戦後進駐したアメリカ軍が感服しアメリカの兵学校に掲げたとも聴く。

一つ一つ真剣に自分に向かえば後ろめたいことも多い。ある社員に読ませたくて社長室入口に1日だけ貼ったことがある。入室してきたので「入口の張り紙よんだ？」と問うてみた。「ハイ読みました」と答えてくれた。その人はもう我が社に居なくなってしまった…。

いい言葉は時に弱い自分を奮い立たせてくれる。だから私は言葉集めが好きだ。

「言行に恥づるなかりしか」、これだけでも十分私には重い。

五省

一 至誠に悖（もと）るなかりしか

「誠実さや真心、人の道に背くところはなかったか」

二 言行に恥づるなかりしか

〔発言や行動に、過ちや反省するところはなかったか〕

三 氣力に欠くるなかりしか

〔物事を成し遂げようとする精神力は、十分であったか〕

四 努力に憾（うら）みなかりしか

〔目的を達成するために、惜しみなく努力したか〕

五 不精に亘（わた）るなかりしか

〔怠けたり、面倒くさがったりしたことはなかったか〕

2015年8月10日

習慣力

先週、ある会社の講演で初めて耳にした「習慣力」という言葉が新鮮に響いた。

通常は「継続力」という言葉を使うのだろうが、「継続力」と言えば、我慢して耐えてつづけるニュアンスを感じる。「習慣力」と言えば、自然に身に着け消化していく力みの無い自然さを感じた。

私も極めて習慣化することに弱い。新しいことを考えて始めても、辞めるといふ明確な結論もなく忘れ去ってしまったり、忙しさに中断後復活しないことも多い。

身体が身に着け当たり前にしてしまう習慣にしてしまえば効率も上がり苦痛も軽くなるが、多くのことが継続しようという努力と苦痛が必要な時期に消滅する。体が身に着け、さりげなく実行する「習慣力」にしてしまえば一生の財産になる。

会社では伝統となり企業の力となる。我社の朝のラジオ体操のように習慣になってしまえば、苦痛もなく習慣として実践できる。清掃は苦痛を伴う人もいれば、すでに習慣化して消化できた人もいるだろう。

「習慣力」は企業にとっても個人にとっても大きな力の源にさえ感じる。イチロー

は「私の最大の能力は努力できる力です」と言った。一年365日、小学校の頃から毎日バットを振るという。その結果はバットが1グラム重さが変わればすぐに分かるし、日米の100年以上の野球歴史で安打記録の頂点に立とうという結果に向かっている。まさに苦痛を感じない「習慣力」のなせることかもしれない。

私もこの月曜トップメッセージを書くことは当初かなりの苦痛を伴ったが、2年も過ぎれば今は随分習慣化した。この先は書くことが楽しみになり続けるか、または次の事への時間投資に移るべきか、有限の時間の使い方を考える時期でもある。有難味も効果もない習慣は、次へのステップへ力を向けることも必要だと思う。ただし、それが撤退の言い訳となってはならないので、次の目指す高みが見えるまで迷惑な「月曜トップメッセージ」も「習慣力」で続けて見たい。

2015年8月24日

人生指数

2002年に「自分の人生設計を成長率で考えたらどうなるか」とふと思いついて、本紙末尾の様なカードを当時作って人生指数関数 (Life exponential function) と名付け計算してみた。そして予想以上に小さな差が大きくなっている人生は進むことを知ってもらいたくて社内中心に人にも配った懐かしいカードだ。

平均的な人が平均的な努力をして、平均的な人生を35年送るのを1として、自分が努力したら自分の人生は35年後に平均と比べてどの様なところに行き着くか、という数値シュミレーションをした。元々「押しつけがましい『努力』とか『根性』という言葉が大嫌いだ」と公言して青春時代生きていた私が、変われば変わるものだと思いつながらのことだった。

カード中にEx.として当時の私のシュミレーションを書いてみた。当時の能力を前年比1.25倍の努力で拡大し結果を積み、その後は少し息切れして1.2倍の努力拡大を8年すると誓い実行したら今の10.45倍になるということを表している。

さて、それから正に12年経過した今現在を検証したらどうだろうか。1.2倍くらいの努力はしたつもりだったが、前年比で前年比1.2倍を繰り返せたかは疑問だ。結果として今日に至ったが、とても当時の自分の10倍の人間に成長しているとは言いがたい。

ちなみに我が社のこの期間の成長を検証すれば、社員数は2.1倍、売上2.5倍（借金は増えた）、というところが結果ではある。会社としての平均成長は1.06倍／年というところで中国の経済成長率に大きく負けている、寂しい限りだ。

表にもあるように成長率マイナス5%の35年は0.166倍の悲惨なシュリンク人生となり、逆に5%努力の上積みを経年35年続けられれば5.52倍の人生が拓けるといふ人生関数。

昔、熊本の蒲島県知事が東大教授の頃に聴いた講演で言った、「Be Above the Expectation」（期待値を上回れ！）という言葉と通じるものを感じる。成長率5%、せめてこの位は期待値を上回り続ける人生関数の連続に挑戦したいと思わないか？
2015年9月27日

Jan. 15.2002

Consider !

About 35 years
Life exponential function
 $L = N \cdot E^Y$

0.95^{35}	=	0.166
1.00^{35}	=	1.000
1.05^{35}	=	5.52
1.10^{35}	=	28.10
$1.3^5 \times 1.05^{30}$	=	16.05

Which life will you choose?

Ex. $N_{\text{ow}} \times 1.25^4 \times 1.20^6 = 10.45 N$

[Make Yours !!]

cf. $1.15^5 = 2.01$, $1.20^5 = 2.49$, $1.3^5 = 3.71$, $1.5^5 = 7.59$, $2.0^5 = 32$

$1.15^{25} = 133.2$, $1.2^{25} = 590.7$, $1.3^{25} = 9727.9$

PRECEED

盛和塾世界大会に参加して

先週、横浜の国立大ホールで盛和塾第24回世界大会に参加した。参加4773名の向上心旺盛な経営者の集まりで、会場は紳士的でかつ熱気があった。食事と懇親会は展示会場でもある隣のパシフィコ横浜に移動したが、10名テーブルが360席セットされた景観は圧巻だった。

「盛和塾」とは、稲盛和夫の名前に由来している経営者の経営研究会だ。熊本地区でも20年以上前から開催されているようで、私も創業間もない頃に誘われた事もある。

当時、私は京セラとの取引が始まっており、「アメンバー経営」など京セラに関する本を読んで心底稲盛和夫の経営に共感していた。しかし、集団に属することでそれに頼る気持ちが生まれるのを恐れて、加入を見送っていた。世の中に数多い若い経営者の研究会で、威勢ばかりいい若手後継者の集まりと同様に見ていた点もある。それでも盛和塾には所属してこいかなかったが、その後ずっと稲盛氏の経営者としての挙動には関心を持っていた。社内でも社員諸君に本を自費で買って配ったり、勉強会の材料にしたり、事業別採算管理を目指したりして大きな影響を受けている。我が社の

経営危機の時も「正しかれ恐れるな」、「動機善なりや私心なかりしか」と稲盛氏から学んだ言葉を心に唱え従った。

盛和塾では、海外も含めて経営者が売上や利益の急拡大の成功事例を40分づつ5000名の前で発表する。聴いていると触発されること、経営のヒントとなる事も多かった。発表会に参加して思ったのは、どの成功事例も、そのほとんどの企業が、京セラの経営理念を自社内の理念や指導に実践し反映しているのが多かった。すなわち、「全従業員の物心両面の幸福を追求すると同時に、人類、社会の進歩発展に貢献すること」が京セラ経営理念だ。

そして何よりも、会社が向かう方向を信じて、徹底して勉強会や実践経営を行っていることだった。稲盛氏が著書内でも口癖のように言う「ベクトルを合わせる」ことに大きな力を注いでいることだった。語るだけではなく、実行を徹底していることだった。

多くの盛和塾会員の企業が、数年の内で劇的な成長を遂げている事例がその実践経

営者から発表された。多くの企業が、先ずは抵抗勢力との戦いや、負け体験の固定観念もつ社内との戦いがあったことが語られた。そして、少しづつ賛同する仲間が増えていって、成果が見え始めると会社勝ちモードとなる。やり続ける力が人生も経営も成功の秘訣と改めて感じた。

難しい言葉ではない。ありふれた言葉かもしれないが、言うだけで終わるのと実践するのでは天と地の開きがある。我が社も経営理念、社是、中期経営計画を語り、説明し尽し、そして疑わずひたすらに実行することが社員を幸福に導くことになると確信した。

京セラの創業者稲盛和夫氏は30年間私が最も親近感を感じる経営者として見つめてきた。そして以下のように勝手に私との共通点を感じている

- 1 地元の田舎国立大学工学部で工業化学を学んだ
- 2 経営者に憧れるというよりも技術の世界に魅入られて脱サラ創業した。
- 3 経営に利益以上に企業が存在価値を重視した
- 4 アメーバー組織の様な事業運営組織を育てたい
- 5 還暦で仏道に知己を求めた。同じ禪宗であり臨済宗と曹洞宗

等々、本を読めば極めて発想の原点に共通性を感じる。

京セラ経営理念も私の表現では、「人を活かし切り、社会に新たな価値を創造する」となり、我が社も同じと思っている。

しかし、最近「人を活かし切る」という私の経営理念は、「会社に都合よく人を活用するのを極める」というように解釈される恐れを感じたことがある。私にとって「人を活かし切る」とは、「社員の一人一人の強みを活かし延ばすことと、未開発な弱点を開拓し社会で活躍の場所と能力を拡大すること」なのだ。語り尽し実行を繰り返さねば理解され浸透したとは言えない。

単純な言葉だから、もっと繰り返し全社員に浸透させるべきだと思う。

因みに以下が京セラ創業者の稲盛氏の有名な経営12か条である。

- 1 事業の目的・意義を明確にする
- 2 具体的な目標を立てる
- 3 強烈的な願望を心に抱く

- 4 誰にも負けない努力をする
- 5 売り上げを最大限に伸ばし、経費を最小限に抑える
- 6 値決めは経営
- 7 経営は強い意志で決まる
- 8 燃える闘魂
- 9 勇気をもって事にあたる
- 10 常に創造的な仕事をする
- 11 思いやりの心で誠実に
- 12 常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で経営する

私には以上の中で、「誰にも負けない努力をする」という言葉が最も胸に突き刺さる。この30年、この言葉が心に現れては私に問いかける。「誰にも負けないほど努力しているのか」と。

2015年7月15日

金持ち、時間持ち、健康持ち

先日、新年会の場所としていた温泉センターに着いた時、駐車場には車が一杯並んでいた。こういう憩いの時間を持てる人たちは多いのだなあと、ふと羨ましく思った。その時の同乗者に「お金持ちとは言うけれど、お時間持ちとは言わないよなあ。けれどホントに豊かなのは時間持ちの方だと思うなあ。」とふと口に出た。

「お時間持ちとはちよつと嫌味にも聞こえるかもしれないね」とは同乗者の弁。そう、羨ましさに少々の嫌味を込めて、「お時間持ち」という言葉を「お金持ち」に對比させて使おうと思った。お時間持ちのお金無しには国の支援があっても、お金持ちの時間なしには何の支援もないのだから、時間持ちには優位性があると思うのだが……。ずっと言い続けていることがある。「お金は一瞬にして取り戻すことも出来るが、消費してしまった時間だけは絶対に取り戻せない。だから最も価値あるモノは時間だ」と。指揮が悪いと何の進歩もない仕事にさんざん引き摺り回され、時間もお金も失うが、その時先ず言いたいのは「失った人生の時間を返してくれ」だ。

改めてお金以上に価値あることが時間であると最近認識する日々の中で、退職して

軽い責任と少ない時間を社会に提供しながら自由に生きている同世代の仲間が羨ましく感じるがよくある。

「そうだ、妬みと嫌味を少し込めて『お時間持ち』を流行らせよう。」そして私もお時間持ちを目指したい。

ギャグではない「お時間持ち」、最も贅沢の究極を捉えているのに多くの人が気づいていない。早く気付いた人たちは人生の時間を有効に使っているし、多くの人は残念ながら死の床で気づく。

浄土真宗の葬儀で必ず出てくる蓮如上人の白骨の御文に曰く「誰か百年の形体を保つべきや…」なのに減っていく時間に気づかず、私も怠惰な時間を生きている。せめて自由な時間をお金で買い戻せれば、その為にお金も貯める価値がさらに大きいのだが…。

「労働とは時間を払って金と交換することだ。」と若い頃勝手にうそぶいていた時代もあった。最近は意外と的を射た言葉だったようにも思う。時間で金は買えても、金で時間を買えないのであれば、時間の方が価値が大きいことになる。ならば金で時間を買える妙案ないか…、特急料金払って電車に乗るとするのはさみしいが、その事例

かもしれない。

先日も病院で待っていて次の予定時間が迫って、諦めてキャンセルした時にもふと思った。何度もこういうことは在るから、他の人もきつとある事だろう。割り込み料金を払って時間短縮し、今日の次の予定などない人にそれを払う仕組みが出来ないか。これを考え出せばビジネスになるかもしれない。驕りではなく迷惑でもない、等しい価値の交換として考えることが出来ればと思う。探す時間、並んで待つ時間、移動する時間…、何とかこれを減らしたり或は活かす術ないか。

余談だが、時間とお金があれば、ある程度手に入れ易いのが健康かもしれない。沢山寝る時間や休憩の時間をもって、予防医療と早期治療に金を掛ければ多く持てそうなのが健康だ。健康持ちは人生最大の財産かもしれない。金も時間もあっても健康を失えば価値が色あせる。何かだけあるとして最も価値あるものを考えれば健康かもしれない。金だけ、時間だけでは人生何も開けないが、健康だけで人生はバラ色にもなれるかもしれない。

2017年1月29日

早起きのススメ

座禅を始めて週に2回の早起きが始まった。火曜と土曜で、4と9が含まれない日の4時半からということになっている。その中で、出張と重ならなければ出来るだけ坐禅に出かけることにしている。夜明けの早い夏場の4時起床も慣れないと少々辛い。日が短くなるとどうなることかと思っていた。そうこうするうちに、9月に熊本城マラソンにエントリーしてしまったこともあって、これも朝トレでも朝4時起床に加えた。週に2回更に4時起きるのが増えた。

週に4回早起するくらいなら、いつそ毎日4時起きにした方が目覚まし時計のセットを変えるのが面倒無くていいということで、今は毎日部屋の照明が3時50分から明るくなり始め、4時に1個目の目覚ましが鳴り、2個目の目覚ましが4時10分になるようにセットしている。その間に何とかベッドから抜け出すのを目指している。勿論、2個の目覚ましとも起き上がるまではスヌーズは切らないことにしているが、それでも休日の日はつい切ってしまうこともある。すると3個の目覚ましが元々の目標起床時間の5時半になりだす。シマッタ！月に2回6時半からの朝食会を持って

いるため、この数年は5時半起床を目標としていた。それもそれ以前は週に2回だけ5時半起床と設定を変更していたのを面倒で毎日5時半にベルが鳴る、そして、日によつては2台目の目覚ましが6時に鳴り出す間で起床するという日々だった。

愚かな人間も経験から進歩できる。私が学んだのは早く起きる日を決めるより、毎日早く起きるほうが体験的に楽だということだ。学生時代からサラリーマン時代まで、平日は早起きで疲れ、休日に思いつき遅くまで寝る生活に明け暮れ、幾つになっても早起きが苦手だった。学生時代は早起きが出来なくて留年までしてしまった私が得た貴重な教訓だ。たったこれだけのことに気づくのには私は何と50年以上かけてしまったようだ。

ちなみに現在は週2回の坐禅、2〜3回のウォーキングとジョギング、週一回のトップメセージ、残りは仕事や新聞読んで朝飯食って寝たりしている。休日一度はつきりと起きて行動して寝る二度寝も気持ちいいものだ。たまの6時半からの朝食会を以前は早いということで少々負担だったが、今では遅くて出かける時間調整を持て余すようになった。

今から冬に向けて、我が社でも多くの諸君が折角夏まで出来ていた早起きの習慣を失っていく。実にもったいない現象だし私も幾度となく味わった。そのうちの何割かの諸君は、春になってもそのいい習慣を復活できないで、早起き早出勤ができる魅力ある社会人という評価を失っていく。勿体ない話だ。やがて「自分は夜型だから」という言い訳をするようになる。

20代前半までそのような言い訳を行ってきた私が今は確信を持って言う、夜型というのは情性で生きているだけだ。早起きには絶対に意思が伴う。何時に寝ようが、起きる時間は自ら決めているという人の人生は拡大する。今でも目覚まし3個使いながらもそれを実践している私が言うのだから、真実と思って考えてみて貰いたい。目覚まし一個2000円の自己投資だ、実践すれば必ず百倍以上になつて帰ってくる。

知っているだろうが、日本よりうんと冬が厳しいサムスンは、始業時間を7時に変更したのが成長の一つの要素ともいわれる。
その意味するところは

- ・朝早く仕事に取り掛かり、早く帰って勉強や家族の時間を作れたこと。
- ・朝早くも来れなかった社員は変わったか居なくなり、自己管理能力が高い社員だけで運営されている。

ということのようだ。

以下は余談だがある記事より

「**もし自分にとって最良の師は誰だったかと人に訊かれたら、楽させてくれた人をあげるでしょうか?」「一番厳しかった人」の名を答えるのではないでしうか?

一番きつい要求をし、絶えず向上していくことを求めた人、怠けさせてくれなかった人の名を挙げるのではないでしうか?

「情け容赦ない」とは、残酷だったり意地悪だったりすることとは違います。自分の下にいる人間とビジネスをどこへ連れて行くのか、利益を最大化することがいかに大切かを、しっかり分かっているということなのです。**」

2013年11月吉日

「誠」について

私は誠という言葉が好きだ。「誠」といえば、新撰組の旗印だしその礼賛者と思われるかねないので日常はあまり使わないが、時々「あの人には誠を感じる」とか、「あの男には誠がない。思いを同じくする器でない」とか言うことがある。

あまり多くはいないが、私は誠を感じた人を、その後はその人の目先の言動で判断せずにただ信用する。人の行動は時として奇妙に見えることがあるが、何時もいちいち理由を聞いたです訳にはいかない。その時、相手によっては疑いを増すし、またある人に対しては何か理由がある筈と最初から信用する見方で始まることは誰にもあるだろう。

家族であれば後者だし、嫌いな人間であれば前者だろう。人間生活の中で全ての人に対して等しく接するというのは至難の業だし、友を作れないことにもなる。太宰治の「走れメロス」が謳うように、友情とは相手を疑わないことから始まるのかもしれない。真の友人とは誠を感じる人なのかもしれない。こういう人は困っても頼みごとを持ってこない。だから困ったような様子が見えたら此方から支援に行動する。あう

んの呼吸でお互いを支えあうような関係は人生の掛け替えのない財産だ。

損得の外でつき合える人との交流は楽しいものだ。ただ、友情や愛情は、時としては排他的であり特定の人間以外には決して寛容ではない。私が言う誠の人というのは、友情や愛情を超えたさらに高い位置で社会的に善であり、不正や卑怯な振る舞いを受け入れず、是は是、非は非とするような人だ。人生60年生きて来た中でそういう人に何人も出逢ってきたし、私の財産だ。仕事で出会うと仕事に感謝したくさえる。人との出会いは人生の最大の重要事項だし、誠の人との出会いは人生最大の感動であり財産でもある。それが社内など近くに居れば共に仕事することが生き甲斐となる。

日頃ただ仕事をしてその成果を求めているだけでなく、本当に求めているのはそういう人との出会いと交流ではなからうか。むしろそのような出会いと感動を求めて仕事をしているのかもしれない。

2014年9月15日

この秋は雨か嵐かしらねども、今日のつとめに田草取るなり

二宮尊徳の歌だと言われている。真偽は知らないが尊徳らしい歌だと思う。二宮尊徳は体が大きく強い強靱な肉体にも恵まれていたらしいが、ひたすら目の前の努力でできることを余すことなく遣りつくすというのが真骨頂だとおもう。勿論、一方では綿密な計画があり、その実行の時が上記の詩だろう。がむしろに働くだけではゴールに行き着くかさえ分らないが、人為を遣りつくしてその後は只管結果が出るまでは迷わず計画の行動を続けるのみということだろう。私のこの歌との最初の出会いは、サラリーマン生活を終わりにする挨拶の為に訪れた当時勤務していた日社社長室だ。机の横に掛け軸表装で掛けられていた。誰の歌か知らないので覚えこんで帰った。インターネットもない時代にはそれが誰の歌か知るには大変努力が必要だし、そのまま歌を覚えておいただけで時間が過ぎ、二宮尊徳の歌と分かったのは何年も後に偶然本の中で見つけたときだった。さすが二宮尊徳と改めて感じ、それ以来私の教訓の一つになっている。

狩猟民族であれば獲物が居そうところを探して次々に狩場を移る。農耕民族は田畑を移れないから只管生産を上げる努力に汗を注ぎ込む。狩猟民族は獲物の習性を知り予測し準備してそちらへ動きを誘い込む。行動が常に目の前の動きによって変わるから、どう動くかを常に緊張して読まねばならない。それはそれですごいストレスの筈だ。獲物が見つからなければ飢え死にするか、犯罪者になって略奪かの恐怖が常につきまとうから。

典型的農耕民族である日本人は、計画をスタートさせたら生産効率アップと無駄の削ぎ落とし只管生産性向上を図る。脇見をしないで唯ひたすらに、正に爪に火を灯すくらいの努力を惜しまない。キツイことだが、収穫の方向は疑わないで目の前の行動テーマだけに力を注ぎ込めばいい。まさに二宮尊徳だ。

さて、我社プレシードはどちらだろうか。狩猟民族に求められる市場を読んで準備して流れをそちらに向ける努力、時として餓死するのも覚悟せねばならない戦略立案をやっているだろうか。または今日の生産より更に1%の無駄をそぎ、効率を上げる精進を現場で遣っているのだろうか。

獲物が向こうから跳びこんでくるのを待つ都合主義の狩猟民族では、一時期に獲物が偶然来なかったら餓死してしまうし、種を卷いたら去年と同じ収穫を当たり前と期

待していたら、日照りが害虫が作物を襲う。雑草もはびこる。早めに対策をしなければ遅れると大きな痛手を負ってしまう。

チャンスに出来る領域を広げ、偶然だろうが努力であろうが出会いを活かす。技を磨いてチャンスに備えて、出会えば最高の効率を発揮する、というのが日本人の私がかじ取るプレシードの進む道かと思っている。

2013年11月4日

リーダー論 その1

はじめに

先日、選抜高校野球熊本代表の秀岳館がベスト4で惜敗した。余り関心はなかったが、鍛冶舎巧という監督が率いて連続3大会ベスト4という快挙らしい。専門外でもあるし、あえてこの監督の事を調べることはしないが、かなり強烈な人でもあるようだ。しかし、何といっても3年連続の快挙は偶然ではない。人集めも人育成もただものではないのだろう。同じように高校野球チームを預かる監督は全国に数千人いるのだから、何が違うから結果がこうも違うのだろうか、強い好奇心を感じるところだ。

組織は誰が率いるかによって全く結果が違ってくる。この組織とリーダーシップというテーマは、私がずっと考え続ける永遠の課題だ。我が社を日本電産の永守信夫氏が経営していたらもっと巨大化していただろうし、私がソフトバンクを創業していたら数百名の会社になるのが精いっぱいであつただろうし、ともすれば破たんしていたかもしれない。歴史にモシモはないが、組織はたった一人のリーダーの考え方と行動で、創業してあつという間に破たんもするし、考え方ではオウム真理教も生まれれば

京セラにもなる。私は今後どこへ皆を引き連れて行けるのだろうかといつも考えるとこ
ろだ。

リーダーと言えば古いTV映画を思いだす。小学校低学年の頃「幌馬車隊」という
アメリカ番組があった。西部劇としては地味な番組だった記憶がある。多くの家族が
乗る幌馬車を連ねて、アメリカの東海岸から西海岸のオレゴンまで安全に辿りつかせ
るという使命を持ったアダマスという隊長が主役だった。今思えば、拳銃の撃ち合い
が上手な隊長でもなく、皆とよく話をしていた地味な隊長の印象が記憶に残る。今思
えば、勝つことではなく負けないことを遣り続けなければならないリーダーだったよ
うだ。

色々なリーダーが様々なところで多くの人達の人生に影響を及ぼし、悩みながら決
断し、人を率いて今日も活躍している。毎日活動する中で、目の前で起きることをど
の様に考え判断し処理していくかは千差万別だが、すべてのリーダーが重荷を負って
そのミッションを果たそうと生きている姿を外から見えていて、私自身も多くの学びと
成長を手にすることが出来る。今話題は、産業界では東芝、鴻海…、政治では韓国大
統領、トランプ大統領と多くの人も関心持つてウォッチしていることだろう。私に

とってリーダー論を纏めるのは終わりのないライフワークになるかもしれない。今後
ずっと機会あるときに書き重ねて行きたいと思う。

事例 元谷芙美子氏 1947年7月8日生 福井市出身

先日アパホテルに泊まった。アパグループ株式会社が経営するホテルであり、その
指揮を執っているのが、帽子が派手なおばさん社長の元谷芙美子だ。その夫である元
谷外志雄代表が総帥としてグループを束ねている。かなり右傾化した経営者としても
有名だ。

海外でも多くのホテルがあり、「ホテル数は建築中も合わせると413ホテル、6
6,950室となっている(2016年9月現在)」という事らしい。

初めてアパホテルに泊まったのはもうずいぶん昔の事。安くて小奇麗なビジネスホ
テルという印象だったが、最近では安いというより気遣いが行き届いているホテルと
いう印象をずっと持っている。アメニティグッズから備品に至るまで、金を掛けると
いうより気を掛けているのが好きだ。ホテル経営というのは事業の転売や廃業が頻繁

に聞こえてくる難しい事業だが、創業後わずかな期間で創業者が現役の間に世界で6万室以上も運営しているというのは凄い。

それにしても何が違うと結果がこうまで違ってくるのだろうか。貧乏で大学進学を断念した女性が巨大ホテルグループを立上げ、今もリーダーとして運営している。リーダーが問題に直面して「知らない」、「分からない」を口に出して逃げる人ならば、恐らく一店のホテルの経営も出来なかったであろう。持てる力を目の前の課題に注ぎ込み、マイナスもプラスに変えていった。最近起きた客室置きの本で中国韓国から大きな反感と予約キャンセルが来たが、これも知名度上げるプラスにしようと考えた。時には社長が美人でないことさえも逆に利用して知名度を上げて行ったし、帽子を利用して巨額な宣伝費も効果を高めていった。マスコミの話題になれば、その美人でもない派手ないでたちが話題を誘い印象に残った。宿泊してみれば、ただ有名になった社長のホテルというだけでなく、私にとって何かが違うホテルなのは間違いない。歯ブラシ一本、タオル、スリッパなど、決して高価な物ではないが、気遣いを見せてくれるホテルでもある。

人間というのは、たった一人が多くの人々の幸福も不幸も産みだすことが生き物だと思ってしまう。私も先人に学びながら知恵と力を出し切り、少しでも多く人の幸せを残しながら生きて行ければと願うばかりだ。

A person's life is determined by how they think.

～人間どう考えるかで人生は決まる～

アパホテルに置いてあったアメニティグッズの包装袋に印刷されていた言葉だ。

2017年3月31日

リーダー論 その2

事例 柳井正 1948年2月7日生まれ。柳井氏の名前は知らなくても、株式会社ユニクロの名前を知らない人は居ない筈だ。ユニクロなどを経営するファーストリテイリングの社長兼会長である。

父親が山口市で創業した紳士服小売りを継承し、今では売上8000億円、店舗数は世界で1500点を超える大企業である。高校時代のあだ名が山川だったらしい。人が「山」と言えば「川」という。人と同じことを言わない、しない人だったらしい。決してバリバリのやり手ではなく、やる気も夢もない学生気分のみまでサラリーマンとして親のついででジャスコに入社し、9カ月で辞めて山口に戻り、親の紳士服販売会社に渋々入社したところが原点らしい。

その後は他の紳士服店と同じではダメだというニックネーム山川の思想で斬新な発想を連発して、株式会社ユニクロを育てていったようだ。

仕入れて売る紳士服ではなくて、製造から企画するべきだと持論を展開していっ

た。私にとってユニクロは暖かくて安くて品質がいいフリースの冬着が出会いだった。高品質で当初からこの会社は何か違うぞ、という観察を始めたのを憶えている。初期の頃品質はいいが、あまりにも流行し同じデザインとカラーで安物のイメージが定着しかけた。私も部屋着としては毎日お世話になったが、外出では余り着なかった。しかし、ファンで在り続けた。この会社は安物の会社では終わらないと思っていた。その後、ヒートテックや逆のAIRismなど高機能繊維を活用した繊維を共同開発し、新しいジャンルを開いていった。

最近ではCMにプロテニス錦織圭を使うなど、イメージアップで高級化路線が垣間見える。安物ブランドで終わる気など全くないようだ。価値あるものはその価値に匹敵する値段で売れる筈、いいもの作れば高く売れるという信念を感じる。

私が今朝ウォーキングしたときの服装は、靴以外は靴下下着から全てユニクロ製品だという事に気づきこれを書く気になった。新聞を開いたら6月はユニクロ創業33周年という記念セールのチラシもあった。

一時はブラック企業だとして名前が広がったユニクロであったが、伸び盛りの会社

の中間層の人財不足で、過重労働という汗で付加価値不足を埋めようとする浅はかさから来たことのようなだ。やがて人も仕事の遣り方も淘汰され、企業が進化していくのは何処にもある事例だ。柳井氏の「世界同一賃金」などの発言には私も共感する。日本人だからベトナム人より給与が高いのが当たり前と思うような日本人の人生の末路は暗いと私も日頃から確信する。世界が一つになりつつある現在、良い物いい人財を求めて世界はあつという間に状況が変わる。そういった中で発想と行動を見守り観察させてもらいたい経営者の一人だ。

以下に柳井正名言録を拾った。この中の一つでも心に止めて行動が変われば人生が変わるような言葉の集まりだ。

柳井正 名言録

- ・自分より相手のことを考えている人は、これからの時代、必ず活躍できる。
- ・僕は常日頃から会社というのは、何も努力せず、何の施策も打たず、危機感を持たずに放っておいたらつぶれる、と考えている。

- ・単純労働から知識労働に変わらない限り、付加価値を上げられない。

- ・世の中はもう危機だらけで、危機を楽しみながら、どうやって世界を変えていくかを考えないといけない。

- ・チャレンジしない人生は、意味がない。チャレンジしない企業も、意味がない。

- ・自分から変わろうと思わないといけない。評論家や傍観者ではダメだ

- ・経営で一番大切なのは顧客の要望に応えることである。顧客の要望に応え、顧客を創造しない限り、商売は出来ない。

- ・会社を沸騰させて飛び上がるほど熱くしないと、普通のサラリーマン体質の人には危機感が伝わらない。

・個人でも、企業でも、国でも同じ。安心感を持った途端に終わりなんです。「これで達成した」と思った途端に終わり。

・仕事は自ら創り出すもの。仕事を見つけないで発明するものです。
2017年5月28日

自分らしくあり続けるためのコスト

人は少なくとも、若い頃は自分はどういう生き方をしたいとか、ああいう人になりたいと思う。また、年をとつてくると、肉体や知力のこういう能力だけはずっと維持したいかと思ったりする。人は思いと現実の狭間で思い悩んだり、諦めて無視しようとする。自分には不可能だということにすり替えようとして現実から目をそらす。人が自分の思う人間像である為にはコストが必要である。一人前の技術者として認められるには、日頃から新しい知識を身に付けるために本を読んだり、雑誌から資料を取り寄せたりなどの行為が必要である。体を健康に若く保つ為には、朝早起したり、暴飲暴食を控えたり、体を動かすことが必要である。人脈を増やすには、人存在価値のある人間になることである。手紙を書いたり、役に立つことを教えたり、困ったことを解決する手助けをしたりする人とは、誰でも人間関係を維持したいと思う。仕事で認められる為には、今日までの仕事を、明日催促されるまで終わらないことではなく、一日早く昨日終わってしまったことを告げる努力が必要である。他人が一ヶ月掛かる所を一日残して終わる、この繰り返しを人が感動させ自分を認めさせる

ことになる。自分が自分らしく生きていく為には、最低で済ますのではなく、やる義務はないところに自分を奮い立たせ行動を起こすことが必要である。これが自分らしくあり続けるコストだと思う。そのコストから得られるものは人生の充実という掛け替えのないものだと思う。そのコストを惜しむと、人生は思うように行かない多くの壁に囲まれたものとなる。ましてや最低条件である約束や義務さえ果たさない人間は、何れ人生の荒野を彷徨いながら一生を終わるだろう。すべてを運や他人のせいにながら。

BE ABOVE THE EXPECTATION!

結果だけを願って叶えられる夢や望み等があれば、事前に実現しているはずであるから本人に価値などわかるはずもない。毎日が健康であることや家族に恵まれたり収入の道があることなど、失ったときにあり難さと望みになってくる。だから、簡単に手に入らないことこそ夢であり価値があることなのだ。人それぞれに夢が違うのは、手に入らないものが違うからでもある。年収5千万の人に年収5千5百万円は夢にはな

らない。年収が5百万に満たない人にとって年収5千万円は十分夢になり得る。夢とは簡単に手に入らないから夢として存在しうる。歩くことが夢の人であれば、100メートルを10秒で走ることが夢の人もある。どちらもその人にとって努力なくして簡単に手に入らないだから夢として存在する。結婚することが夢の人であれば、離婚するものが夢の人もあるかもしれない。夢は見るものでもなく、諦めるものでもなく、追いかけて実現する為に存在する。夢を実現していく歓びを味わう人生にしよう。

2000年11月14日

人物を語る 徳永健太郎氏

これはパソコン内のファイル整理中に、2007年6月のトップメッセージ8が目について改めて伝えたくなったこと。機械設計の嘱託契約で図面チェックなどを流している徳永健太郎氏について書いたものだ。

この徳永氏を迎えた頃は、プレシード最大の経営危機が始まろうとしている頃だった。一方で賞与出しながら、一方では自分の給与を殆ど手取りが無いような位まで減額した時期が来つつあった。

その正に真最中となった時期だからこそ、何とか社内のモチベーションを維持しようとして借金し賞与を捻出したことがあった。そして徳永さんにも賞与代わりに慰労金20万円を出したところ、支給式の後に私の部屋にやってきて10万円を差し出して、「俺も経営者だったから無理しているのは分かる。黙って受け取りなっせ、小遣いもいりどもん」と言われた。「いや、要らない大丈夫です」と固辞したが、頑として引き取ってくれなかった。涙が出るほど嬉しかった。いや、お金は正直どうでもよかった。その気持ちが何よりも私の傷んだ気持ちを癒してくれた。

これは生涯の中で出会った感動として死ぬまで忘れない出来事の一つだ。この出来事が起きる前に書いた、下記のトップメッセージにも「徳永さんが働くのは給与や生活の為ではない。」と綺麗ごとのように書いているが、見事にその後、この予言を現実で見せて戴いた。

正直、窮していたが10万円の金に困ってまでは居なかったが、この出来事は私を大いに力づけてくれた。こういう出来事と出会える仕事人生は素晴らしい、私にはお金に換えがたい感動がある。こういう素晴らしい仲間たちの為になら命がけで働けるという思いと、生涯に残る感動には今でも感謝している。戴いた感動を忘れず、私も社会に感動を残したいものだと思ふ。

このトップメッセージは先輩技術者に学ぼう、まだまだ知らない事、未体験のことが沢山ある事を自覚し食欲に学ぼうという趣旨で当時書いたもの。

私もとうに60代になった。教えておきたいことと、もっと学びたい無知の私の双方の事情を持つ世代を私は生きている。体はその学ぶ力を次第に落としつつあるのを感じ

じながらも未だ学びたいことは多すぎる。

今後私は人生で伝える物を持った人たちから学びたいと思っている。先日
のイブニングセミナー講師や社内で共に働く存在として受け入れてくつもりだ。

2017年6月1日

梅の花の時期の想いで、ここより我に働く仕事あれ……

この梅の花が散り始める頃になると毎年思い出すことがある。若い頃、道に迷っていた時期があった。いや大学で留年を続け人生に迷っていたと言うべきかもしれない。大学を辞めて就職を決意し入社式に向かったのがちょうど今頃だった気がする。思いが碎かれ失意のうちに帰ってきた。幸いにも大学に退学届を提出していなかった。もう一度何も考えないで出直そうと心に誓った。

昼間に街を歩けば、家業の魚屋を継いで頑張っている友に出会ったし、自動車修理工場で働いている友もいた。その頃の私にはその友達が輝いて見え眩しかった。明るい表情で毎日働ける身分が羨ましかった。そんな時にいつも頭の中にこの啄木の歌が聴こえてきた。

「こころよく我に働く仕事あれ、それを成し遂げて死なんと思ふ」

自分に自信もなかったが、この歌の境地を求めて心が彷徨っていた。二年後、職にも就かず卒業し、目に留まった新聞の求人広告で、私の専門外と言える今のこの業界への入口となった企業の門をたたいた。自分に向いているかはわからないが、少なく

ともガムシヤラにどんなにきつくても3年間は働いてみようと思決した。その間は乗り換えや近道を探すまい、まっすぐ走ってみようと思決した。

今思えばその決意がなければ、そしてこの歌が無ければ辞めていたと思う程、専門外だったし、心も体もきつかった。溶接や穴あけ、組立などの工場現場労働助手に夢は見いだせなかった。健康も害して3カ月で10kg痩せて倒れたこともあったが、それでも道を探す思いは続いた。

3年も経つと周りの評価も上がり、色々なことで期待されるようになった。しかし、そうなった頃には私の心は独り歩きを始めていた。この延長で「こころより働く」の仕事になるのだろうかと思ふと疑問が始め、5年過ぎた頃には変化しない環境で時間だけが過ぎていくのに焦りを感じ始めた。上司に何度も退職を願ったが聴き入れられず、半年後ついに辞表を上司の机上に置いて帰り意思表示した。今思えば上司に申し訳ない気持ちも一杯だ。

何の準備もない脱サラと創業だった。家には出産直後で休職中の妻と子供3人がいた。恐怖との戦いが始まった。またガムシヤラが始まったが、今度は金を稼ぐという経済活動の悲惨な戦いも始まった。それでも心は燃えていた。

何の設備もない、工具もない、買う金もないスタートだったが、気持ちは燃えていた。33歳、若かったからだろうか疲れなかった。今思えば羨ましいほど燃えたと興奮もあった時代が始まった。勿論、とんでもない障害とも出会った。その後、何度かは「もうこれ以上無理だ、人生も終わりだ。」という状況にも出逢った。昨年の地震でも一瞬そう思ったが、今までの障害に比べればずっと軽いとすぐに思えるようになった。命までなくする被害じゃない、人生を失う程の事じゃないと思えたし、実際動き始めればすぐに動き始めた小さな壁であった。

日常生活でさえ今日の仕事でさえ、常に変わり続けている。古代の人も「万物は流転する」と言ったように、変わらないものはない。それなのに変わらない自分を感じた時に今も焦りを感じる。

別の故人も「常に定まりたるためしなし」という。変わる事こそ生き続けることだし、その中に心より働く仕事との出会いがあったと思うのが実感だ。私は今の仕事为天職とか、私に最適の仕事と思つたことは一度も無い。もっと適した仕事をやっていれば、もっと大きな成果を残せたかもしれないと思うこともあるが、それでも現在

の職は「こころより働く仕事」ではあったとは思っている。

結局、「こころより働く仕事」とは、自分の心の中身の問題だったと今なら言える。迷っていた時代には「心より働く仕事」に出会うことなど運が悪い自分には回ってこないと思っていたが、幸せの青い鳥は何と自分のすぐ足元に居たのだと、ずっと後になって分かった。サラリーマンを辞めなくても青い鳥はきっと見つけられたのかもしれない。

仕事を替わった経験者としては、その後は仕事自体を時代と社会の変化の中で変えた。時としては市場を替えそして自分を変えた。しかしまだまだ自分の変え方が足らなかったと思う。成功者として未だゴールに達していないから。

仕事は替えることも変えることも出来る。しかし「自分」を変えることは出来ても替えることは出来ない、他人にはなれないのだから。そうであればこそ更に自分を変えなくてはならないと今も思うのだが…。

＊探してみたらHPの「社長の部屋」にもこんなことを昔書いている。

「私の好きな石川啄木の歌の一つ。若い頃人生に目標を失っていた時代があった。其

の頃出会って心はずっと突き刺さっている。今、自分の仕事に100%満足している訳ではないし、他にもしたい仕事沢山ある。しかし、あの何の目標も見出せず、生きることにさえ価値を見出せなかった頃に比べれば幸せだと感じる日々がもう四半世紀続いている。だから時々、あの頃の私のような若者に会えうとお節介をやきたくなる。」

2017年2月20日

自らの存在意義を問え

今まで何度も言ってきた事であり、いまさら新鮮さもないだろうが、もう一度問う。「自分の存在意義は何なのか。」

それは、所属する組織、社会で違うかもしれない。家族の中で、地域社会の中で、友人仲間の中で、諸君は何を求められ期待されているのかを改めて考えてみたことはあるだろうか。会社の中では貴方は何を期待され求められているのだろうか。

もしそこに自分の思いと違いがあれば、いったい何を貴方は仲間や社員に提供しようとするのか。まさか、自らは他人から受け取るのみで仲間を支えることなど考えていないという訳ではあるまい。

決して隣に居る仲間と同じである必要はない。然し、もし隣に居る仲間にかで劣っているのなら、別のことで勝ったものを提供できなければ、同じく肩を並べることは出来ないのではないか。この「別のこと」が存在意義 (identity) なのだ。人は幸か不幸か、一人一人外見も肉体的能力も知的能力も異なる。だから一つの尺度で人の能力を測ると、序列が出来ることは理解できる。然し、世の中に必要なことは無数

にある。ひとつのことでは最後尾であるものも、別のあることでは高い存在価値を示す能力を持つことが出来る。たとえ一番でなくとも、幾つか複数のことで人より高い存在価値を示せば総合的に高い価値を示せる。そのような者もなくてはならない存在意義のある人となる。一つのことで能力が十分でなければ他のことで埋め合せが出来る世の中のシステムはありがたいところかも知れない。

もしひとつのことですべての中で勝負して誰にも負けない能力があれば、他のことで手を抜いても存在価値があるかもしれない。然し、ごく一部のスーパーマンを除いて幾つかのことで努力をしないと貴方の存在価値を人は認めてくれないだろう。ケネディが言ったように、「組織から何をしてもらいたいと言う前に、諸君が何を組織や仲間提供できるかを考えよ」である。

もう一度言う「貴方は自分の何を組織や仲間が認める存在意義とするのか。」何をもって組織や仲間を感動させ、喜ばせようとしているのか。隣の仲間や組織にとって貴方はなくてはならぬ存在になっているだろうか。なくてはならぬ人を世の中は決して見捨てたり冷遇したりしないだろう。

2000年8月30日

私の壁

今月の3分間スピーチのテーマが上記になったらしい。私は振り返れば意識しないで壁に挑戦し続けてきたように思う。子供の頃、人前に出ると顔を真っ赤にして恥ずかしがって小さな声で一言しか喋らなかった。通信簿が2だった音楽と体育は大の苦手と家族や親せきが勝手にレッテル貼って、それが自分だと思って諦めていた。

高学年になる頃、活発に発言し動き回る仲間を眺めながら自分もそうありたいと思い始め少しづつ変えていった。中学になって音楽の本を買って勉強してみた。理論があって面白そうだと思った。テストも歌だけでなく楽器と筆記試験も加わって通信簿が5になった。体育もボール運動が中心の時に頑張ってプレーしていたら通信簿5をもらった。これは嬉しかった。ただし一度だけだった。

思えば幼少年期も壁を越えた経験はあったのだと振り返ってみて思い出した。

夏の水泳は得意、冬の持久走は大の苦手だった。いつもクラスの後ろから2、3番目だった。だから2年前、人生の最大の苦手克服の為、熊本城マラソンに挑戦した。

結果は20kmでリタイアとなったが、還暦にして人生で最長の長距離走った記録となった。壁を越えたとか一般人に自慢できることではないが、敗北感よりすがすがしい気分が勝った。

私は壁に挑戦するのが好きだ。弱い自分だとも思っている。だから振り返れば失敗や挫折の山だ。しかし、弱いからこそ、その弱さを認めて引っ込んで生きていきたい。夢を持ち、追いかける自由も権利もあるはずだ。

幼少の頃、我が家は落ちぶれて貧乏だったと思う。分家として追い出され粗末な家に住んで、みすばらしい服を着て、家の手伝い農作業して愚痴や泣き言を言ったら、殴られたり戸外に放り出されたりした。怒られて泣けば涙を止めると殴られ、泣く権利さえ認められなかった。今でも涙を止めることが如何に難しいかを憶えている。

困窮していても育ちがいい親父は気位だけは高く、且つ短気だった。食べ物に一切不満を言わず残さず食べるという教育を押し付けられた。おねだりや人の持ち物を羨ましがることご法度、殴られた。子供ながらにもう、その環境からは出れそうには思えない壁だった。

しかし、そういう中で叶えられないとは思いますが夢はあった。いや、現実が厳しいからこそ逃避として夢ばかり見ていたかもしれない。

いま壁は面白いとも思うようになった。壁というのは難しいから存在する。総理大臣には総理の壁があるだろうし、私には私にとって難しい私の壁がある。

さて今の私の壁は営業日の週一日に会社へ出社しないことを実現することだろうか。夢でもあるが、会社運営を計画通り運営しながら、というのが条件だ。生きて越えられそうにない高い壁だろうか(笑)。

2015年11月1日

自己投資

青雲の志を持ってスタートを切った社会人生活も時として思い描いた人生とは思えないと感じることに何度も出逢うのではなからうか。もっと言えば既に学校時代にその様な心境になった人も居るのではなからうか。実は私も学生時代に思い描いたような人生に向かっていないことに絶望しかかっていた。活躍し感動するような人生が待っていると思っていたのに、現実には平凡で変化に乏しい生活が続くのには生き甲斐を見いだせなくなっていた。何の努力もしないで倦んでいた。

ある時から、そこから抜け出る為にゴールである山の頂を考えずに、まずは精一杯歩いてみようと思いついた。これが私の最初の自己投資かもしれない。ゴールのことは考えず近道も探さず、ただ周りよりは必ず一生懸命さでは負けないような生き方しようとした。まずはサボってばかりいた大学に毎日行つて学ぼう、学費稼ぐアルバイトはしよう、成績は良くなくても単位数では負けない数を目指そう…、などなど錆び付いて動かなかった負けず嫌いが徐々にゆつくりと動きを加速し始めた。理想からも人からも遥かに遅れてしまった焦りをもって。

その頃は人から見れば努力しているように見えることはなかったろうが、私にとっては人生で最も努力が必要な時代だった。最も自己投資した時代と言えば人が笑うだろうが、堕ちていた自分にとっては人並に向かつて大きな変化が始まる為の氣力の投資だった。

やがて出遅れて会社に入ると色々なことに一番の努力をした。ラジオ体操では一番になろう、掃除では一番になろう、本を読む量では一番になろう、現場で働く汗の量では一番になろう……十名足らずの部署だったので幾つも一番になれた。がむしやらに汗をかきやがて15キロ痩せて病氣にもなったが、燃えていた時代だった。読んで、調べて、書いて、汗流して、交渉して、その頃の思いと行動は私のその後の大きな財産となった。今思えば私にも京セラ稲盛名誉会長がいう「誰にも負けぬ努力をする」という時代がそういえば確かにあったのだという事を思いだした。

投資とは未来の為に今の資産を投入すること。多くの場合はもちろん金である。大切なモノをそこに投げ入れるからこそ、何とか元を取り戻さねばならないし、それ以上の価値を産みださせねばならないのが投資した者の心境だろう。だからその努力が始

まるし、時間を費やし汗かくことも惜しまない。ビジネスの感度も高まるし、色々な不具合や効果が見え始める。

しかし、最も投資効果があるし無駄にもしてはならないものが時間だと思う。サラリーマンが貰う給与も時間を投資した代償とも言える。自己投資とは義務や約束で行う業務以上に、更に自らの成果を大きくするために貴重な時間や金や気持ちを投げ入れることだ。技に磨きを掛ければ更に強くなる。オリンピックは自己投資の結果を競うイベントともいえる。時間をかけ、肉体の苦痛を味わい、快楽や逃避の誘惑を絶ち、練習や道具に金もかけた者こそ成果を手に入れる。

誰にもオリンピックがあつていい。仕事で勤務時間働いて帰るといふ人より、本を買って読んで知識を身に付け、セミナーや通信教育に時間と金を割き、欲しいもの遣りたいことを我慢して自己投資した者にはメダルを得るチャンスが必ず訪れる。

多くの偉人たちや経営や技術や研究で名を馳せた有名人たちは運が良かったわけではない、能力に恵まれたからではない、自己投資したからだ。そのような人たちの本を読むとき、私はいつも「俺は負けてるなあ」と素直に敗北感を味わう。そして何と

か近づけないかと何かを真似してみようなど思ってしまう。

若い頃、と言っても会社を創業後だが、或るセミナーで「人生は一つのことを極めるには十分な時間とチャンスがあるが、手を抜いて近道探したりする時間はない。」と聞いた思い出がある。その言葉以後、近道を探すより汗と努力の正面突破を心掛けるようになった。

ラグビーで言えばただ一言「前へ」と言い続けた明治大学の故北島監督を思いだす。どんなに苦しくても前へ、汗と苦しみを吸い込みながらゴールを目指すのは人生もスポーツも事業も同じだ。自己投資して前へ。

株などの相場での投資はただ金を投げ込み他力本願で増えることを願う。本来のリスクを取って努力をする部分がない以上、失敗したら資産喪失という大きな痛手を負うが、人生の努力という投資はほとんど失うものはない。勿論時間を費やすが、それによって得る自己成長は補って余ることが多い。近道と手抜きに勝者はいないし、大きな感動にも巡り合わないだろう。運の所為や人の所為や環境の所為にして愚痴と酒飲んで寂しいゴールに至る。

2016年9月1日

同景異見

同床異夢という言葉があるのは知っているだろうが、「同景異見」は私がそれに似せて作った私の造語だ。時々、同じ景色を見ていて人は全く違った物を見ていると感じることが増えてきた。ずっと以前から机上にある同じものを見ても見る位置が違えば見えている画が違うように、あらゆるものは見る人が違うなら見え方が違うということ念頭に置いて人は交流せねばならないと言ってきた。同じものを見ている筈と思うことが誤解の原点だ。実は目で見ていると思つて錯覚しているが、本当は心に映つたものを見ている。

例えば一枚の車の写真をいま見たとしよう。車を買いたい人は幾らだろうと思うし、ある人はこの車の出力は何馬力だろう、ある人は何処のメーカーのタイヤを装着しているだろう、ある人はどうしてこの色を選んだのか、ある人はこのカーブに金型技術の進化を見て取るし、ある人はこの写真の背景は何処だろう…、色々な見方があるのは想像できるが、通常は自分と同じ見方をしていないと思つていないだろうか。

一枚の写真でさえ違った物を見ているなら、日々の生活で街を歩いたり、会社を訪

問したりした時、人は違うものを見ていると想像すると、その人から自分が持っていない見方を手に入れることは人生を拡大することに繋がると思わないだろうか。それを常に人から聴きとる努力も重要だが、他人の見方、視点を手に入れることはさらに重要だ。これが俗にいう視野拡大かもしれない。

ではどうすれば視野拡大が出来るのだろうか……。永遠の課題ではあるがまずは本を読み、人の話を聴くことだろう。簡単だが難しい。見識は器が無ければ容易に心に受け入れることが難しい。だからまずは知識で良い、無批判に本を読み、無批判に人の話を聴くことだ。多くの知識や人の見識と出会っているうちに心にその置き場所が出来始める。そうすれば見識を求める乾きが出てくると、見識が心の中に座り始める。器が出来た状態ともいえる。

求める心が出来ると、学びと進化が始まる。学びと進化がない日々は不幸だ、人生浪費の日々だ。若い頃にそれを体験した私だから言えるつもりだが、それさえ信じられない人も多いだろう。

ただ、周りに自分の見識や判断を求める人がどのくらいいるか見回してみてもはどうだろうか。貴方の意見を求める人が多いか少ないか、その数が自分の見識の深さと価

値を語っていると客観的に思ってみたらどうだろう。私には自分の子供も近所の人も、総理大臣も県知事も相談には来ないのだから、その見識の浅さをまずは自ら知るべしだ(笑)。

2017年2月26日

人は自分に解ける問題しか出せない

人生を長く生きていると歳を重ねて気づくことも多い。「人間は自分に解ける問題しか人にも自分にも出せない。だから自分へ付ける点数は眞實を意識するでもなく、当たり前前にいい点を付けてしまう」とは、会社を創った頃から自分への自己評価の仮説としてよく言っていたことだ。だから自分が頑張っているとか能力があるとは思わないようにして生きて来たつもりだ。

最近、次世代を育てようと思う時によくこの問題に直面し、人にも課題に感じるようになった。どうやって自分に解けない問題と出会い、解決しようと立ち向かうのか…。難しいがこれが一人前への入門ともいえる。自分の劣る能力や性格を冷静に見据えてこそ成長も出来るのだろうが…。

私を含め、人間とは他を非難したり評価したりする目は持っていない、驚くほど自分を映す鏡はもっていないものだ。自分を見つめることを避けて生きていると、他人を見る目も掘り下げが浅く一面的だし一元的である。何故なら自分の持っている定規で測るからだ。

誰でも自分が画家の若冲やピカソのような目の前にない物を見る目を持っていないのは認めるだろう。ニュートンが持つような、数学が操る自然界を見る目も持たないのは認めるだろう。

我々は景色でさえ自分のひ弱な目でしかとらえていないのだ。ましてや自分の姿を客観的に捉えるなど至難の業だ。自分が持っていない能力の物差しで自分を測れる人は達人だ。

他人がたとえ自分が見えない深い思慮と経験で行動していたとしても、残念なことに自分の経験と知識で判断して批判してしまう。特に上は総理大臣から下は町村行政や企業管理職まで、人は見えない行動規範で動いていることも多い。凝視して彼ら達人たちをジックリ観察してみよう。学ぶところは多い筈、もし自らに見る力があれば。見る目が無くても後日、或は何年かたってその意味が分かることもある。

私の経営者としての人生は、自分で判断し実行し失敗する連続だったのかもしれない。だからそんな事を人生で少しでも減らしたいと思い、先輩経営者に出かけて話を聴き、足跡を残した先人や古書に私も学んでもきた。が、所詮器が出来ていない私にとっては字面ばかりであることも多かった気もする。

しかし、字面だけでも読んで頭の片隅に未消化のまま引っかかっていると、ある時目の前にその教訓となる現象と出くわし、失敗しかかって或は失敗してしまつてすぐにその教訓が頭の中で大きく浮かび上がり体に染みついて筋肉となったこともあった気がする。

自分を客観視して空の上から眺めることが出来る人、今まで私が出会つたそういう部類であると思う人は得てして自ら多くを語らない人が多い、自慢話をしない。けつして社会的に地位が高い人ばかりでもない。外から見ていて時々、「この人は出来る！」と思つて、機会を求めて話を伺つてみたりすると凄い体験をしていたり、知らない本や哲学、生き方を語ってくれたりする人である事が多い。一つ一つは忘れたことも多いが、どこかで血肉となつているものと思つている。そういう時に今日の自分に未だ見えていない問題を、自分への問題として出すことが出来て来たような気がする。例えばその時に解けはしなくても、知る機会となる。これも人生の得難い喜びであるし、ましてや時を移して解を得ることが出来れば人生の無上の喜びとなる。

若い頃は外と先の事ばかり考えて生きていた気がする。本を読んでも他人の事だし、今後の為に読んでいた。歳を重ねる毎に自分を見つめ見極めたいと思い始めると、逆にいらだちも募る。たつた一人の自分さえも分からずして、人のことを語る資格はないと思うが、立場上語らねばならぬことは増えてきた。悩ましい所だ。

最近遊びで「思索の旅人 松本修一」という名刺を作つた。余り配つたりはしないが、作つてみてなかなか気に入っている。私を表すとすれば思索し続けて人生を旅する彷徨い人かもしれない。どこかで何時か人生の道端で野垂れ死にするときに、前向きに倒れてやろうというのが私の最後の意地だ、とずっと今まで語つてきた。

「人とは……」、私には難しい永遠の生きる課題でもある

教訓…見えない鏡に自分を映し、鏡の中の自分と語ろう

*まず朝30秒、現実に見える鏡の中の自分を他人を見る目で見つめてみよう。

そこに居る人物はどの様な魅力に溢れているだろうか。

顧客の目から見て安心感を得る人物がそこに居るだろうか、上司から見て高い評価を与えたい社員だろうか。

子供から見ても、配偶者から見ても、尊敬したい親であり配偶者であるだろうか。じつと目を見つめて、社長から見たら幾らの年俸に値すると思う人間がそこに見えるだろうか(笑)。

2017年6月25日

負けず嫌いの負け好き

私は自分の性格を表現するに「負けず嫌いの負け好き」と表現することがある。勿論、喧嘩して負けるのが好きなわけではないが、いろいろな人や技術、工夫等をみて「アツすごい、負けた」ということに会おうときに素直な敗北感を味わって、「クソ、負けた。もっと頑張らねば」と、負けず嫌いの闘争心が沸々と湧き上がるときの気持ちの昂揚感は好きだ。確かに負けるというのは辛いですが、自分の小ささ非力さを認め、何時かそこに追いつき追い越したいという欲望が私の原動力かもしれない。

思えば小さな子供の頃はずっと負け続けていた。親から叱られ叩かれ、反抗は徹底的に抑えられ許されなかった。だから幼少時に刷り込まれた負ける習慣は挑戦し乗り越えようという気力が全く芽生えなかった。

「どうせ許されない、どうせ怒られる」から始まって「出来るはずがない。如何に目立たなく生きるかというのが習性だった。そういう環境では声さえ小さくしか出さなかった。子供の頃はよく蚊の鳴くような声と言われたし、小学校の一年生で音楽のテストは歌だったが、顔を真っ赤にして下を向いて立っていた。いま声が大きいのは

はその頃声帯を大切にしていたからかもしれない(笑)。

小学校入学当時、音楽の通信簿は2だった。体育の時間の徒競走、何人で走っても不思議なくらい後ろから2番目だった。前に追いつくと追い抜こうという気概はなかったし、最下位は嫌だった。声が小さく授業中に手を上げるのも目立たないように頭の後ろに低く上げると、家庭訪問で担任が母に伝えた。兎に角目立つのを極力避けて生きていた。

今でも本当はその片鱗が私にはあるのだが人は気づかない。自分で変えてきた今の自分を人は本性とみてくれている。余談だが高校の頃、太宰治の「人間失格」を読んだとき、まるで自分を表現してくれているようで感動し、太宰文学にのめりこんだ思いもある。勿論、その頃の私は裏腹に元氣いっぱい青春の私であったが…。

私は気弱で恥ずかしがり屋だったが、最下位は目立つからこれも絶対に嫌いだった。直ぐトップと最下位は話題にされる。だから最下位は負けず嫌い性格では絶対に避けねばならなかった。今でもトップは上に目標がない居心地悪さで好きではないが、あらゆることで最下位というのも惨めな自分が許せない。二人だったら最下位でなくトップでなくてはならないが、あくまで負けている相手に挑戦する立場が好き

だ。負けるほど負けず嫌いが燃え上がり、仕事では挑戦は疲労感なく我を忘れるような心境になり求めた成果を出してしまった経験は多い。周りには負けず嫌いは迷惑な性格に思えることも多いだろうが、この「負けず嫌いの負け好き」が自分の今を支えている気がする。周りには改めて今後も変わらないであろうこの迷惑を謝罪したい。

2017年7月17日

「努力と根性…」？

週末、古い友人夫妻と我が家で会食した。学生時代に私の部屋に掲げてあった木製の壁飾りに【努力、人生とは重荷を背負いて、遠き道を行くが如し】と書いてあったのを見て、「『根性』とか『努力』」とかい言葉は押しつけがましくて大嫌いだ。」と言って、お互い大いに共感し合った仲間だ。

当時は時代が高度成長期直後で、「巨人の星」を始めとするスポーツの根性モノや田中角栄の立身出世や小説「どてらいヤツ」などの根性モノが全盛時代だった。その壁飾りも親せきが旅行のお土産で呉れた有難迷惑なものだった。

その昔の二人のエピソードを話題にしたら相手のT氏もよく覚えていて、「そうそう、憶えているどころか、数日前にその思い出を我が家で話したところだった」と大笑いとなった。

あれから50年近い月日が流れた。そういう生き方の二人だったから当然、当時は人生に前向きな努力をしてはいなかったし、その後はお互いが回り道をしたことは否定

できない。しかしその後二人とも思いを改め真面目に生き抜いて今は晩年近くなったが、人から非難されるような人生でなかったとは断言できる。悪い事、卑怯な事、いかかわしいことはして来なかった二人というのは共通の密かな誇りかもしれない。「粗にして野だが、卑ではない」という言葉が合うかもしれない。

その当時の二人から今の自分らをとても想像できなかったが、時間だけは50年の歳月が流れた。決して「努力」や「根性」という言葉を好きになった訳でもなく口にして来きたわけでもない。只、振り返れば二人ともあまり平均的ではない其々の道で、結果として一生懸命に努力はして来た。決して苦痛ではなく、むしろ生き甲斐の仕事を育てて来た。それが「努力」という言葉になってしまいうのであればそれもいいだろうとお互い納得した。

その後、世の中は「モーレツからビューティフルへ」と言われるような安定と平均志向となっていたが、我々は時代錯誤で「24時間闘えますか」というようなキャッチコピーが似合う生き方だったのかもしれない(笑)。

50年前のぐうたら生活の思い出を語り、大いに腹を抱え笑いあったが、人生に「もし」があったら果たしてどうなっていただろうか。「もし、あの頃、グウタラでなく、高校、大学と勤勉な時代を送っていたら：」、逆に「もし、あの頃のままだグウタラ生活をあのまま10年以上続けていたら：」、どちらも今の私ではなく、勿論想像は難しい。

もし前者であれば私は大学や公設研究機関で真面目な研究者となっていたらどうか。私は子供の頃はそれが憧れだった。それとも、もっと成長著しい会社を創業していたのだろうか。

そしてもし後者であれば、世の中を非難ばかりして出遅れた人生を心で呪いながらも、口では自分の生き方を肯定的に独りよがり語っていたらどうか：。それとも逆に遅れた10年を取り戻そうとして、今まで生きて来た人生より更に激しく走って、いまより安定した成功への道のゴール間近となっていたらどうか。

人生に「もし：」はないというが、二人は酒で盛り上がりながら昔を語り合ったひと時だった。今ではこの二人が努力こそ人生の醍醐味というような事を、我が身を振

り返りながら、心から思うようになった。

私が外から見て努力という言葉に合うであろう生き方を始めた時は既に26歳になっていた。もし、これが高校入学後、そのまま勤勉な人生に入っていたのであれば果たして私の人生はどの様なものになっていただろうか：、今でも時々思うことがある。決して後悔や否定ではないが、違った生き方であったのは間違いない。

蛇足…いまは穏やかな時代となった。働き過ぎないように、休みをシッカリと取るように、と政府が奨励している。しかし、途上国などにはガムシヤラに働いて豊かになりたいという若者が溢れている。彼らと同じ市場で出逢う時代となった。互角に渡り合える自信を今の主力世代は持ち合わせていると言えるだろうか、他人事だろうかふと不安に思ってしまう。

2019年4月14日

空き家と唐様で書く三代目

江戸時代の川柳らしい。中学の歴史で出逢ったのを憶えているが、最近この意味を日本で実感することが多い。苦勞知らずの3代目が家や会社を破たんさせる。という意味だが、国家と国民の事として実感することが多い。

最近ミャンマーを訪問した。そこで出会った国民や学生は生活や国を豊かにすることに夢を見て懸命に努力している。それは20年以上前に中国でも見かけた光景だ。貧しい国を豊かにする為には多くの献身的努力を惜しまない、というのは多くの国の興隆期に見られる。

日本では明治維新、そして第二次大戦後の国家再建設から急発展を遂げる時に国民が一致団結して力を出して成功を成し遂げたと聴く。しかし、成功を収めたのち、その努力の国民性はそのまま継承され成長カーブを維持されるかというと、多くの国が安定期そして衰退期を迎える。今の日本は未だ高度成長期の神話が語られ、ジャパンアズナンバーワンの日本人は勤勉で働き過ぎとさえ云う人さえいる。

世界中で色々な国民と出会ってきた。成長期の国は国民が輝き貧しくても目が輝いている。成長の為の苦勞を厭わないという人たちがいる。その人たちは少々汚く品がなくも見えるが、美しく綺麗な格好している日本人がこの人たちより勝っているとは私には思えない。むしろ貧しさハングリーさ、豊かさへの憧憬が、汚れた格好の中にあるので私には魅力だ。

3Kと呼んでキツイ、汚い、危険と呼ばれる現業を馬鹿にしている日本人は汚れて汗にまみえることを避けるようになった。

「空き家と唐様で書く三代目」(没落して手放す商売の店を若い頃から手習い遊びで覚えた上手い筆使いで書いている、の意)、日本国内自体が風流で綺麗な服恰好やグルメには強いが、仕事で汚れてガムシヤラに働く文化を喪失した。働く前からストレスを訴える若者もいる。しかし、それでも日本人は働き過ぎと勘違いしている国民も多い。

私は20年近く前にアメリカによく行き来した。そこでアメリカ人が効率よく実にアグレッシブに働く姿を見て来た。彼らの行動力や発想に日本人は競争できるのかと思っていた。やがて日本は世界の豊かさトップから堕ちて行ったが、国民は未だ目覚めていない。一瞬だった「ジャパン・アズ・ナンバー1」の地位を永遠に獲得したものと勘違いしている。

私にはもう個人として世界に通用する力を持つ日本人はあたりを見回しても少ないように見える。商売も3代目になると初代の苦勞を全く見ていない。豊かさが当たり前と勘違いして没落を招くという正に三代目の時代を、戦後3代目の日本は迎えている。国も貧しい時代を知らない国民の時代になると、今の日本のように贅沢と唐様（風流）が社会を支配する。

「空き家と唐様で書く三代目」、いま日本の至る所でこれが見える気がしてならない。

2019年6月24日 於PTI

欲望

人の欲望はきりが無い。外に向ければ不満と不幸が積もるが、内に向ければ成長につながる。満たされないものを外にすれば、卑しい生き方にもなる。それは外から見ても共感も得られない。昔、何処かで出逢った言葉に「求める心は寂しく、与える心は豊かである」というのがあった。決してお金やモノを言っているのではない。どのような状況にあっても与えることは出来る。人にはそれがあるものだ。逆に豊かそうであっても何一つ与えることが出来ない貧しい人もいる。

欲望を内に向ければ正に自己啓発となる。もっと出来る人になりたいという素朴な欲望から自己研鑽が始まり日々の生活が変わる。「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる。」というならば、正に自分に不足するものを見つけ求めて身に付けることこそ人生の醍醐味と感ずることも多くなった。何が自分に不足しているのか、私の不満が自分に起因しどんな自分であれば穏やかな明るい生活となるのか、こんなことを面白いテーマと感ずるようになった。他人が喜ぶとか、世に役にた

つからというのではなく、自分がそのような人間になる事が何よりもエキサイティングだ。

マズローが言う欲求五段階説によれば、4段階目は尊厳の欲求で在り社会的名誉を求める欲求であり、其の上の5段階目が自己実現の欲求だ。自己実現とは地位と名誉を得た先になるのと思っていたが、意外と身近に自己実現の欲求はあると思うようになった。地位も名誉も手に入れていない私でも、自分がどこまで成長できるか、何が出来るようになるかを追い求めるのは人生の最高のゲームのようなものなのかもしれない。

私はよく「天と将棋を指すような境地で経営している気持ちになる」と言ってきたが、まさにこれが私にとっての自己実現ゲームとして夢中になる所だ。ビジネスの中で将棋は決して楽ではなく苦しみが多くことが多いが、自己実現のゲームだと思えば自分を客観視できて岡目八目という視点からの解が見つかるものだ。

渦中の人となり逃げだしたいと焦った心境ではなかなか解答は見いだせない。ゲームを遣っているように客観してみると、岡目八目で見えていなかった次の新しい一手

が浮かび上がることがあるのを何度も経験した。問題から逃げずに難しいパズルを解いて見せようと思う時、天が私に味方する。天網の隙さえつくことが出来ると感じている。

まだまだ自己実現の境地にあるというつもりはないが、決して身の程知らずの挑戦などとも思わない。この道はゴールではなく過程こそ楽しい道だから救いがあるし、自分の価値観で生きる道だ。

2017年6月17日

生きていく美学

人にはそれぞれ美学があるように思う。どうしてもこだわる習慣や外観、交流などはあなたにもあるだろう。行動の美学もある、礼儀作法もあれば所作もある。ある人は人のそれを見て気づくし、ある人は気づかない。美学を持つ人にとってそれを侵す人は蔑視し、腹立たしくさえ思う。

食事作法の美学であれば共に食卓に着くのが不快に感じたりする人もいる。しかし、人の美学を侵している人はそのことに気づかない。人の集まりが社会であり、同じ美学を持つ人たちが集まりやすい。民族には民族の美学があり、小さな未開の民族と侮れば極めて高い誇りを持った美学を持って生きている人たちも多い。暴走族には暴走族の美学があり、僧侶には僧侶の美学がある。お互い相手の領域に踏み込まないで済む日常は平穏な日々だが、一旦相手の領域を侵してしまうと軋轢が激しい。

我々は日常、家族や趣味で美学を共有する人たちの中で生きることにならざるを得るが、余り美学など意識もせずに選んでしまっていることはないだろうか。特に日本人は村社会であり同じ作法や風習などで美学を共有する人が多いが、一度海外の社会に足を踏み入れると様々な風習の違いと接して戸惑ってしまう。常識も美学も国、民族、宗教で実に様々だ。そこに常識が違ふなどという日本人は浮き上がってしまう。

帰属する会社にも会社の美学がある。その最も象徴的で表現しているのが会社の社是や経営理念ではなからうか。企業はこの領域で経営者が表現する自社の美学で行動している筈である。相性が合うという企業文化もあれば、ドライなビジネス関係以上に長く付き合っても深化しない企業関係もある。これは企業文化と呼ばれる企業美学の違いに由来する。特に日本のビジネスは一般的に個人社会と同様に人間関係が重要だ。お互いの違う美学で礼を尽くしても理解されず、相手の美学に気張りを欠けば非礼となる。

個人のネット社会ともなるとこの少しの非礼が許されず、いや誇張され非難され、限定社会や限定時間に限らず広く付きまとい人を追い込む。

人にはそれぞれの生き方美学がある。お互いが同じ村社会のみで生きていた時代は相互理解も深く寛容さもあったが、ネット社会ともなると、交流が広がって浅い一方

で、美学の違いが見えてしまい拗れてしまうと、執拗に逃げ場もない所に追い込む社会になる。

生きていくには、人は美学なくして人間らしく生きることとはできないと思うのだが、それは相手の美学を尊重し認め合うことでもある。ますます拡大し難しさも感じるネット社会だ。

2019年3月9日

器 量

もともと器量とは読んで字のごとく器(容器)に入る量の事だろうが、人を表現するのに使うことが多い。通常は容貌がよいのを器量がいいということもあるが、此処では人間の器を語りたい。

社長という職業は社外で多くの人と接することが多い立場であり、その事には感謝している。様々な器量の方々と出会い話を聴いたり議論したりもする。

器量が大きい人は人の話を受けとめ消化し理解するのが早い。反論よりも先ずは素直に真剣に聴いてくれる。質問しながら更に理解を深めているように見えるが、時としてその質問が話す側の理解を更に深くしたり、気づいていなかったことに気づかせてくれる。

器量が小さい人物は持論の展開は早い、質問に身構え自己への否定や非難として受け取る人も多い。せっかくの自論を深める機会なのにそのチャンスを失い、人からの評価も小さい人物となってしまう。振り返れば自分にもそのような挙動は多いように感じ、自分の器量の小ささを後に感じ反省することも多い。

器量の大きい人物の代表格が西郷隆盛かもしれない。私利私欲を一切排し、金も名誉も名も要らぬという人間の代表格と言われる。坂本龍馬は西郷を「大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響くような人物」とその器量を評した。あまりにその器が大きいので、凡人如きが接してもその器が量れないような偉人だったのだろう。だから敵対する長州とも手を組めたし、勝海舟を相手に江戸の無血開城も成し遂げた。勝海舟も自分が信じられないような人間相手に城を明け渡すはずもないので、その西郷の器を量れた勝海舟も器量の大きな人物だったのだろう。

西郷の残した有名な言葉に「子孫の為に美田を買わず。」という言葉がある。実際、西郷は逆賊として戦死し何も残さなかったが、その人物を知る維新の偉人達が逆賊を明治維新の最高貢献者として顕彰した。これも器の大きな人たちだったのが想像できる。

大久保利通は薩摩で共に青年期を過ごした親友だったが、西郷と敵対してしまふことになったが、その死を悼んで大いに泣き、そして顕彰した。その大久保も暗殺され非業の死を遂げることになるが、その死後には借金しか残らなかったという。まさに二人は美田を買わずという共通の人生哲学を持っていた。その大久保の死後も残っ

た友人たちが資金を集め借金返済を行ったという。

器量の大きな人物には器量の大きな人物が分かる、というのが古今の定説のようだ。そうであれば我々も自分の器を大きくするような生き方をしたいものだと思う。幸か不幸かビジネスは正に自分の器が見えることが多い。自分の器量の小ささに赤面することも多いが、それでも浅学非才の我が身ながら次第に器を大きくしてくれるのがビジネスのようにも感じる。たとえ子孫の為に美田は残せなくても、自分を大きく育てながらこの一生を生きることが出来ればそればそれで素晴らしい一生ではなからうか。これが負け犬の遠吠えに聴こえないように最期はありたいものだ。

2019年7月21日

熊本地震

平成28年（2016年）4月、2度にわたる大地震は、
本人の生活や風景を一変させた。

内で被害が最も大きかった

業団地に立地するプレシードにおいても、被害は凄まじく、
長松本修一は一瞬立ちすくんだと語る。

かし、立て直しのための迅速な行動が怒涛のように続いた。
録「熊本地震」では、その生々しい様子を語る。

のような大地震が再び起きないことを願うと同時に、
の経験を将来に生かすことができるような糧にしていきたい。

小野上 記

実録「熊本地震」

普段から絶対に困ったときの神頼みはしないと公言してきた私だが、それでも神様どうかこれ以上の被害をもたらしなさい、と言いたいくらいの状況が遣つて来た。

生々しい現状の中で今後への記録として記憶が新しい内に書き残す。（2016年4月19日）

熊本地震、熊本では全く地震と無縁と思って生きて来た中で突然やってきた。最初の地震は4月14日21時26分突然訪れた。市街中心部で駐車場に向かっていた私は、車に辿りつくと自宅と会社と電話を入れたが通じない。会社へ向かうべきか自宅へ向かうべきか迷いながら車を走らせていると、会社から「社員にケガもなく、物の散乱は酷いが出火も無いのでブレーカを切って帰る」と本社より第一報の電話が入る。自宅へ戻ると棚から多くの物が飛び出し散乱している。

各本部長からメールや携帯電話の報告が次々届く。海外含め各地の知人から電話や

メールが相次ぐ。

4月15日午前0時46分地震メール第一報

「社員各位

熊本県本社隣接の益城町で大きな地震が発生し、未だ余震が続いている。

現状では人的被害は下田課長の帰宅途上でのバイク転倒負傷以外は届いていない。但し、工場の被害は停電中でもあり被害は不明。確認を明日急ぎたい。

サーバー等の被害や出荷前の製品装置、工作機械などの生産設備、事務機などの被害の掌握を急がねばならない。

家庭の被害が軽微であれば先ずは会社の被害掌握と復旧に力を合わせ協力願いたい。対外的な約束事への影響等含め、今後への影響を一刻も早く掌握し対策せねばならない。

各本部長中心に各部門の対応宜しく 社長」

生まれて初めての強烈な体験だった。それでも14日夜は一過性の地震と思い、小さ

な余震に揺れながら自宅の落下物を収納したりして朝を迎えた。

パソコンを開くと、全国、世界各地から安否確認や激励メールが届いている。嬉しい限りだ。

4月15日金曜日、早めに本社へ出勤すると、3階の窓の落下物の後片付けを遣っていた。嘉島南事業所、松橋事業所とも工場内の落下転倒など被害は大きい報告。

4月15日8時25分社内に社外連絡用文章として以下配信する。

「社員各位

以下を連絡必要なところあればコピー連絡されたし

関係各位

もうすでにご承知のことと存じますが、昨夜熊本市周辺で巨大地震が発生しました。現在も余震が多発する中、社員一同復旧を開始しました。各地よりご心配のメールや電話を戴き心より御礼申し上げます。

現状掌握した状況は以下の通りです。

- ・ 本社および嘉島南事業所は電気復旧、断水中
 - ・ 松橋事業所は電気使用可、断水中
 - ・ 組立中及び出荷前装置の転倒は無し、部品再作と再調整多発予測、掌握中
 - ・ サーバー、DATA被害は不明
 - ・ 本社および嘉島事業所内の機材転倒散乱多発
 - ・ 周辺道路は通行可能、但し信号停電中
 - ・ コンビニなど食料品など調達不能
- 以上取り急ぎご報告申し上げます。」

私も各地へ一斉配信した。

15日夕方には何とか一部の機能を残し復旧でき、週明け月曜からは通常の業務が出来ることを確認し家路についた。

18時過ぎ帰宅すると直ぐに、3月まで監査役を務めて戴いた入田氏の訃報が御子息

より携帯電話に入る。正に取る物も取り敢えず直ぐに益城町近くの斎場へ向かう。途中、益城町を横断、渋滞と被災家屋も見るが、今思えば未だ本震の数時間前であり、道路の大きな破断などは無く渋滞だけで通過した。混乱のさ中の通夜は弔問者も少なくひっそりとした雰囲気で行われ、9時過ぎには帰宅し雑談と後かたづけで午前0時過ぎに眠りについた。

本震発生

4月16日午前1時25分26秒、疲れて眠りについた頃にそれは突然やってきた。全てを破壊するようなエネルギーの凄まじさに熟睡からたたき起こされた。大きな振動音と揺れに一瞬判断力を失った。2階の部屋から階下へ降りると家人も騒いでいる。暫くし落ち着くと家の外に出てみた。地面は何度も揺れ続け地面が波打ち動くのが見える。家の前の道で水の流れる音が聞こえ始めた。水道管が破裂したらしい。近所の人たちが我が家の門の前で青ざめている。私と地震に駆けつけていた息子たちは人生初めての凄まじい経験にどちらかと言えば興奮して感動しているように見えたかもしれない。

4月16日午前2時45分、自宅より第一回目の全社一斉メール配信
「消息を確認したい。各本部長で掌握を進めて貰いたい。生活や安全に優先するものではない。今後の情報交換と助け合いの為にもよろしく。」

4月16日第2報午前2時58分社内一斉配信メール
「我家は建屋内は足の踏み場もないほど、外は水道管破裂、地割れ発生、家族は無事、交通遮断が多発するかもしれない。特に橋は今後交通遮断増えるだろう、各自の無事を祈る。」

4月16日第3報午前3時15分社内一斉配信メール
「今後の情報掌握の為に余裕あれば各自の無事の返信待つ。我家ではテレビは見えている。各地停電断水は多いようだ。我家も水が止まった」

4月16日午前7時19分
停電もあつて携帯電話よりの一斉配信テスト

「おはよう。携帯より一斉送信テスト

現状では社内人員に怪我など情報なし。本社と嘉島南に向かって見ようと思う。気がかりあったら返信連絡こう」

本社のある南工業団地へ出向くと、土曜日ではあったがこちらの工場で点検見回りや跡片付けが始まっていた。

本社のカギを開けて中に入ると事務所の棚は殆ど転倒している。さらに社長室を開ければ書棚は倒れ、飾り棚の内容物は殆ど床へ飛び出している。正に足の踏み場もない惨状だった。飾り物やアンティーク、カメラのコレクションなどは全て床に無残な状態で散らばっていた。しかし、何故か口惜しさも勿体ないという気持ちも失せて冷静に眺めることが出来た。復旧も頭に浮かばず他人事のように見て回った。人間、いざという時には不思議と冷静なものだ。ジタバタしても始まらない。

16日8時13分携帯よりメール

「会社に着いた。被害は昨日を遥かに上回りそうだ。詳細後ほど。」

嘉島南事業所の工場壁剥落に対する緊急雨対策など一部幹部と電話協議。

16日9時44分携帯より一斉配信メール

「地震連絡4

以下を各部門の責任で進めて貰いたい。勿論、安全優先出し被害の拡大防止が優先だが。

総務は建物とライフラインの被害掌握と復旧予定確認食事段取り。経営企画はサーバーなど社内システム復旧。設計はCAD使用環境復旧、場合によっては場所の仮移転して業務復活。製造は装置と環境の復旧と再発防止対策。加工センターは機器点検と生産復活。営業は納期変更など顧客対応を。

工業団地内は活動始まった。被害も対応もマチマチだが動き始めた。まずは我が社も被害掌握と被害拡大防止を急ぎたい。風雨への仮対応が先ずは急務だ。インフラ復旧は時間要するかもしれない。被害地域が広く深刻だ。急がないと人や機材が入手不能となる。」

自宅へ戻り暫くして幹部へメール

4月16日午前10時49分

「先ずは今後の対策会議を開きたい。松橋や関西の活用なども含め、余震が長期化する場合も想定して考えねばならないと思う。関西中川所長にも関西での採用・外注でも設計者の確保を打診した。

先ずは明日、朝から本社で8時より本部長会議を開きたい。一般社員は昼食を取った後11時出社ということでスタンバイさせておこうかと思うが意見聴きたい。勿論、家庭の事情で参加できない社員もいるだろう。週明けたら様々な活動が始まり機材や人員の争奪戦にもなる。遅れないように作戦会議を遣りたい。

8時から10時までに出社などの方針も決めようと思う。工場の壁や棚の被害も酷い。整備後、電気水道などインフラ整備整うまで一時帰休もあり得ると思う。先ずは本部長は明日8時目指しての出社としたい。出席の可、不可を返信連絡こう。総務も誰か参加させたい。本田課長代理が筋だろうが、南主任か北村係長がいいのかもしれない。定村本部長、検討あれ。社長」

4月16日16時44分社内一斉送信

「社員各位

今夜暴風雨が予測されているらしい。先ずは無事に遣りすぎしたいものだ。

これ以上の悪化要素なければ、本部長各位には明日朝8時に本社に集合し今後の対策方針を検討したい。

社員諸氏には出来る人は11時に食事済まして集まる準備を願いたい。今のところ食事を提供できる見通しがないので。勿論、出来る範囲で構わない。最終的には明日朝10時までに方針を決めて発信する予定。人によって困難度は違うと思うので各人の思いは尊重したい。会社としては復旧への見通しを作り、人や機材の調達のめどを立てないと入手困難の壁に出会い遅れてしまう。

プレシードするというのは先に準備を整えるということ。思いをふるい起し再起に向かおう。未だ先が見えないのが残念だ。だんだん暗くなり風が強くなる。工場の破れた壁も気になるが、各位には先ずは今夜は家族と周辺を守って貰いたい、無事と健闘を祈る。取り急ぎ連絡。社長」

明日の出勤まで各地からの安否確認メールや電話への対応しながら、自宅の生活空間確保作業。まさに足の踏み場もない状況だ。昨日の地震後整理したのが傷を大きくした。2回目の地震で全ての物が棚から放り出された。割れた酒瓶の高級焼酎の香りが漂う。思い出の品やアンティークが無残な姿をさらしているが、感傷に浸る暇もない。まずは倒れた棚を起し床の整理を目指す、あまりにも量が多く長期戦になると決め、まずは手伝いに駆けつけた息子たちと妻と一階のリビング、台所、寝室、風呂場などから始める。私が他に手を取られている間に随分進んだ。割れた飾り物、茶碗、グラスも数知れず。

4月17日日曜午前8時本社研修室で幹部緊急会議

各自の状況、社員の安否の報告。朝4時に起きて駆けつけた役員もいた。あちらこちらの道路状況などの情報交換しながらも、全員と連絡を取れ家族共に無事を確認。被害の全容は掴めないが、全員が無事であることと社内の電気が回復したことは明らに兆しであった。断水の回復は欲張りと思え、壁は落ち全ての物が転倒し或は

棚から飛び出し、社内は酷いありさだった。

被害を見て回って火事や漏電に用心しながら被害を掌握、まずは歩ける工場と事務所への復旧を目指そうと全社員に以下の出社要請メール

4月17日8時55分立山本部長より代理発信

「社員各位

本日8時より本部長以上にて会議し、本日の復旧対応について以下の様に定まりました。

- ・集合 11時までに集合（本社、嘉島南社員は本社集合。松橋社員は松橋集合）
- ・終了目標終了時間15時（ただし、人数による）
- ・作業 各本部長より指示するが、主に通路の確保、棚の立て直し、PC起動確認など
- ・勤務 本日の作業は日報へ入力の事
- ・トイレ 近隣の嘉島町役場や小中学校の仮設トイレを利用可能（本社、嘉島南は貯め置き水で利用を目指す）。松橋も貯水槽の水使用可
- ・食事 11時までに食事を済ませて集合（11時以降は食事の時間は取らない）

- ・飲み物 本社、嘉島南、松橋とも自販機は稼働中
- ・電気 本社、嘉島南、松橋とも電気は通常通りきている
- ・LAN 現時点で社内ネットワークは利用できない（本日復旧を試みる）
- ・電話 本社、嘉島南とも電話は利用不可（本日復旧を試みる）以上」

18日午前7時11分毎週月曜恒例の「月曜トップメッセージ」配信

「月曜トップメッセージ20160418」

14日木曜夜に始まった熊本地震が続いている。昨日は休日の招集に多くの社員諸君が駆けつけてくれて涙が出るほど嬉しかった。

今後の見通しは地震学者でさえわからないが、被害がこれ以上拡大するのは我々の知恵と汗で何とか最小限食い留めたいとの思いから皆に声をかけた。ほとんどすべての人が家庭の復旧という課題ある中で、ひょっとしたら家族ともめ事にもなったかもしれない。家が壊れたり、手伝いどころか主体者でなくてはならない人が出ることに家庭不和にさえなったのではと恐れる。おかげで随分と整理できたし復旧の課題も掌握できた。心より感謝する。

私にも国内外から様々な励ましや同情のメールや電話が届いている。アメリカ、中国、台湾、ドイツの友人たちは励ましを呉れ、日本各地の取引先からは手伝えることや不足するものがあつたら遠慮しないで言ってくれと多くの支援の中にいるのを感じた。

地震の今後の成り行きが私には予想がつかないが、それでも我々は企業活動を維持し皆の生活の糧を満たさねばならない。建物はじめ壊れた物も多い、修理や買い替えをしながら企業活動をしなければならぬが、私の生き方はピンチをチャンスにだ。この地震をきっかけに危機管理能力を高めることは当然ながら、組織運営そのものを見直し、効率が良く間違いが少ない企業へ再構築を進めたい。

これを機会に会社の体質を変えていくことは地震からの教訓として取引先も社会も認め評価するだろう。変化を加速するチャンスとしたものだ。

とはいえ、今日から建物や設備の修理をしながらの再開となる。当たり前の水さえ未だ確保されていない。いかに当たり前のことが維持することが大変なのかは日本に居ると気づかない。あるのが当たり前のものなどほとんどない。諸君一人一人の活躍で維持し進化していることを見直しながら、張り切ってチャンスを活かそう。個人の家など含め、皆が大きな被害を抱えてのスタートになる。

助け合い、励まし合おう！

本当は今日は先週地震の僅か2時間後に亡くなった故入田監査役の話を書くつもりだった。現在のプレシードは故入田氏をはじめ今まで多くの人に支えられ成長してきたことをどこかに頭に遺しておいてもらいたい。地震のさ中にひっそりとした入田監査役らしい通夜に参列した。りっぱなご子息二人としばらく話をしてきた。「偉大な親父だったんだよ、私の戦友であり師匠だった」、と。合掌」

4月18日8時45分社内一斉配信

「復興へ」1

各位

昨日は悲惨な状況の中で駆けつけて呉れて感謝に絶えない。食事何もできない中で来てくれた諸君、正規社員でもないのに最後まで手伝ってくれた人、感謝で一杯だ。

さて、今日からは会社が社員を守らねばならない。長期的には勿論、仕事と雇用だ

が、緊急は諸君の生活である。

困難に正規社員も非正規社員もない。会社に貢献してくれる人を守れての会社である。

食事に困ったり寝るところに困った人があれば申し出てもらいたい。住むところは

私のアパートの空き部屋がある。先月空いたばかりで掃除もされている部屋もある。

食べ物緊急は確保したし、米はある。少なくとも玄米は(笑)。

とにかく本部長に遠慮なく申し出てもらいたい。

洗濯や風呂などは私も出来ないので提供できないが、未だ死活的問題ではない。私の服だったら提供できるが。皆で我慢し助け合おう。

以上を全員に伝えてもらいたい。 社長」

4月18日月曜8時、仕事が始まると多くの地元調達先の状況確認開始。加工依頼先の転出先探し、普及見通し、県外からの調達品の予定納期確認。交通状況確認を急ぐ。受け入れ事業所を被災地指定された嘉島から松橋事業所に変更連絡。生活物資の

調査、社員配布準備など同時進行。

社内も改めて人と会社施設状況掌握を総務に指示、旧知の建築関係者に被害調査と見積要請。社長室の後片付けが最も遅れていて机使用確保まで。

4月19日12時24分社内一斉配信

「ご心配頂いている皆様へ

弊社、4月14日、16日と2回の大きな地震に見舞われました。各地より多くの心配と励ましの声を戴き大きな励みとなりました。心より御礼申し上げます。

幸い、社員及びその家族に直接の傷害を負うようなことも無く不幸中の幸いと安堵した次第です。社員一同、二度の復旧活動を行うことになりましたが、4月18日月曜日には何とか通常業務の復旧に至りました。

未だ断水や一部の壁材落下や窓の破損のままの業務再開ではありませんが、外部との部材調達などのサプライチェーンもほぼ確認を終了いたしました。加工や表面処理など暫くは一部には変更を余儀なくされるものも有りますが、通常の業務に支障少なく

ホッと致しております

多少の不便さと収束しつつあると感じる余震の中ではありますが、数日の混乱で何とか通常業務に復帰いたしました。

まだ、予断を許さない部分もあるかと存じます。今後ともご支援ご指導宜しくお願い申し上げます。

取り急ぎ復旧の報告まで

株式会社プレシード

代表取締役社長 松本修一

4月20日16時06分社内一斉配信

「トップメッセージ復活20160420
各位

多くの人達、機関の支援を受け次第にプレシードは復活しつつある。直ぐには出来ない被害対策もあるし、当面は応急対策でしのがねばならない点も多いだろう。

この地震では例外なく個人も被害を受けていると思う。そして全員の生活を守るのが会社であり社長の務めであると思う。

社員を守る会社の機能が何とか復旧した現在、個人の生活の復旧支援を急がねばならない。特に衣食住で困窮している諸君は早く遠慮なく、所属本部長に申し出て戴きたい。

安心して働ける個人環境の整備を会社は支援をする。物の移動や調達、家族の世話なども内部で調整支援したい。

体調不良や生活苦も伝えてもらいたい。住居、金、食品、健康、家族、精神不安、…なんでもいい。

諸君は会社を復旧させて守ってくれた、会社は諸君を守る。

会社も個人も今から長い復活の闘いが始まる、助け合うことが一番だ。失ったもの

は大きいが、今から得るモノは大きい感動でありたいものだ。

最も困っている人を最も篤く助けたい。それでもし余力がふり絞れば、社会を助けることが出来る存在になろうではないか。 社長」

4月21日8時42分社内一斉配信

「トップメッセージ復活20160421

各位

社長独断で会社関係者が日常業務にあたり困っていることを会社で手助けするPJを立ち上げる。

業務改革部の三浦本部長、補佐に経営企画室の中西主任を任命する期間を定めない短期PJとする。

先ず、生活に困っていることの詳細は各部門長に伝えてもらいたい、物品での困りごとは三浦本部長に直接メールで依頼して貰いたい。女性用品などは中西主任へ連絡取られたし。

毛布、布団、家事用品、家電品など新品か中古かの要望あれば中古であれば社員諸君の自宅の服、靴などから調達できるかもしれない。

余っているものの譲り合いも会社で探す。新品要望であれば昼間に代理買い出しに。

- ・食べ物が入らない
 - ・住む場所がない人の仮住まい
 - ・役所手続きに昼間に行けない代理
 - ・一人でできない家具の移動や持出し
 - ・洗濯できない、着替えがないなど
 - ・夕方に行ったら手に入らない買い物
- e t c.

どこまで出来るか分からないが、先ずは会社の機能で個人の問題を極力解決し、全員が安心して働ける環境を復活したい。

以上、本部長は全員に伝わる責任を果たしてもらいたい。 社長」

熊本地震への対応

2016年4月18日～5月10日現在まで

1 4月14、16日の地震の影響、工場の損傷、復旧の状況

・今回の地震での直接的被害はなし。地震直後にバイクで帰宅中に災害破損物にて転倒し全治3カ月の重傷者発生

・プレシードの嘉島町2箇所、宇城市1箇所の工場機能そのものはほぼ回復したと思っている。

・壁や天井の修理は未だ予算化できていないが、元通りの復元は莫大になるので仮修理で済ませながら業務優先。

・事務支援用品の破損や建物壁天井の調達や修復は大部分今からである。

・幸いなことにCADや調達、総務などの基幹システムは無事だった。

・夏までに空調設備と壁、窓など最低限の回復だけでも莫大である。2千万円超か？総額では5000万円超だろうが現在算出できていない。

2 「なぜ早期に生産再開できたのか」との質問に対して

・土曜日に連絡と経営陣の見回り、地震翌日朝幹部集合、11時指定で出社可能社員の招集をかけた。家庭が悲惨な状況の中で約30名が駆けつけてくれた。初めての休日総員招集だったが決して強制ではない、チーム貢献の思いは強い。何人も感動的行動をしてくれた、社員諸君には感謝で一杯だ。絶対に彼らの生活を守る。

・日頃から連絡網は本部長単位で常にとれるようにしている。今となっては台風対策が訓練だったか。全員にトップメッセージを毎週送信しているので比較的トップダウンも伝わる。

- ・1回目の金曜日の復旧は出勤日でもあり、まだ軽微だった。それを終えた翌日の地震では杳然となりながら土曜朝に見回り、日曜朝幹部招集、昼前に出社可能な社員招集での復旧を全社員への予告準備を配信した

- ・BCPについては始めようと社内でもまだ検討段階、どこまでリスク対応コストを考えるかが企業の経営判断。想定外を想定し対応する企業体質へ。

3 現状の課題や、今後の災害への対策など、生かしたい教訓、経験など

- ・工業団地復旧

工業団地組合の共有インフラ回復が大きい課題。各社自社修復と共有部分の回復負担は大きい。断水復旧も当然ながら組合で手配から負担まで行った。

工業団地内道路、組合事務所、擁壁などの補修費用は莫大だが、個々の企業は各社工場敷地以外への共同負担となり足並みが乱れそうだ

- ・社内の今後への課題

先ず最優先が会社の復旧だったが、社員の状況にも細かく個々に掌握に努めている。体力的精神的に消耗もしているのでサポートしていく。引越しや修復の課題抱えている社員を孤立させない。

災害時の電話不通を前提として連絡網構築が必要。発信だけでなく応答ルールがあいまいだった。多くの社員は社内メールを携帯電話への転送で受け取っているが、改めて携帯メールとSNS等活用した緊急連絡網の確認が必要。

工場内や敷地のひび割れの被害が徐々に拡大しつつある。いつから修理に手を付けるかどこまで遣るかの判断が自信が収束しなければ、応急処置以上の工事が出来ない。

4 行政や外部機関への要望

- ・支援金以上に発注支援を

製造業は全国の市場の中で存在している。熊本地震の景況は極めて限定的であり、他社や他地域への発注へシフトされるのを最も地元企業は警戒している。一過性の

物資支援以上に全国に呼びかけたいのは仕事の発注継続と拡大である。熊本地震からの復興の長期化を懸念して熊本県以外からの調達シフトが進むのを懸念する。

決して安価でというわけではない。営業活動も鈍る現在、他社や他地域と同じ価格での発注の支援でいい、少なくとも企業が完全復活する2年間は復活に軸足を置けるような発注支援の呼びかけを願いたい。被災地発注支援策

・政府系金融の金利と制度見直し

これは弊社固有の事情かもしれないが、リーマンショック時代に劣後ローンで立て直し支援を戴いた。正に恩人であるが、その後、急速に業績は回復し毎年、営業利益を計上している為6%以上の金利を連続して支払ってきた。借り換えも金利見直しも出来ない制度であるため、今後復興に大きな資金を投入せねばならなくなった状況で黒字回復すれば地震復興費と利息1500万円の支払いは企業復活に大きな重荷となる。超低金利の現在、劣後ローンの返済や金利見直しが検討されれば有り難い。

・工業団地復活活性化支援

高度成長期に地方への産業シフトを支える為に全国に産業高度化の工業団地が展開されたが、始まって50年の今、全国的に疲弊が目立つ。多くの工業団地内で破たんや廃業、縮小が目立つ。工業団地内に新陳代謝を進めるには、共益部分の負担が大きな壁となり、新規転入を躊躇せざるを得ない状況にある。そういった中で自己資金による復旧は、インフラ復旧と維持の負担による共益金の増加は既存企業の復活にも新規転入や創業にも壁となる。

弊社は2004年に団地内工場跡地を買収し、更に2010年に現本社社屋を購入移転し本格的事業拠点としたが、抱える課題は大きいことが分かってきた。

現行の工業団地にも一カ所に企業集積するメリットと新たに土地開発をしないでいいメリットはあるが、かつての高度化支援策もほとんどない現在は工業団地内への転入はマイナス面が大きい。

工業団地内も個々の企業が個々の経営のみに責任を果たせばいいという環境が出来れば、産業再生への起点にもなり得る場所である。当地の熊本南工業団地に限らず、全国の工業団地再生のモデルを作ることは、中小企業政策の重要な柱ともなり

得る。↓工業団地での起業、転入促進支援。場合によっては団地組合解体し単なる集積地へ

・復興の為に経営支援の専門家派遣

中小企業経営者は実務復旧を急ぐし、その判断や実務復旧指揮は出来るが、行政支援策とのマッチングや金融機関との交渉や資料製作など不慣れな企業が多い。また専門家の契約費用も負担となるので、中小企業診断士、社労士などの施策理解者派遣事業、出来れば自社を良く知る有資格者を選べる自由度も得たい。↓組合団地内企業への支援必要と組合で人探しの方向

・熊本地震復旧を地方浮上のチャンスに

起きたことは変えられない以上、悲惨イメージの復旧だけでなく何かプラスに出来ないかと考える。

熊本県の産業構造を、大企業下請け型から中小企業とベンチャーの連携で新時代の変化をレスポンスよく対応する企業集団への構図見直し、益城の臨空テクノポリス跡

地(?)での大都市と地方企業の連携支援↓熊本県の「創造的復活」と歩調合せで
きないか

・人への投資支援を

復旧に多くの支援予算が組まれるのは期待するが、インフラや設備・建物で終わるのを危惧する。

地震復旧は過去を大胆にリデザインするチャンスである。その為には人財採用や育成への投資が出来る支援を期待するし、行政にも人財投入を期待する。

大企業、行政機関で埋もれかけた人財を中小企業へ転籍を可能にする仕組みを作れば、基本教育が高い幹部人材として10年後の産業変革に大きな変化を期待できる。
↓行政は3年の有期出向からでもいい。一人の人財は10人を活かす効果があると信じている。↓「牛尾より鶏頭の道へ！」

・グループ補助金の検討

東日本大震災で運用されたという制度。被災企業とグループに対してグループを

窓口として個々の企業への費用の半額補助という制度と聴いている。

↓組合団地への復興支援は？

・熊本進出企業の復旧状況不明

アイシン九州、ホンダ、東京エレクトロン、ソニーセミコンダクタ、ルネサステクノロジー：etc. 進出企業の今後の動向注目。熊本への依存度低下は地元企業の復活の壁。被害状況の拡大した流布は地元からの仕事流出になる。

↓ソニーセミコンダクタのiphone 部品よりの撤退で装置の今後の需要が不透明になる。暫く発注は期待できない（5／25）

・復旧支援策求める資料作成経験知識と人財の不足

周辺企業の事例で見ると、中小企業の多くは復旧に忙しいこともあり、金融政策や行政の復旧支援に対して行動を起せない企業も多い。公的機関職員や中小企業診断士の派遣などで細かな実態掌握した資料作成支援が必要。

2016年5月10日

熊本県の一中小企業経営者の復興構想私案メモ

趣旨

熊本県で未曾有の大地震を体験した直後より、多くの人命を失った上に莫大な時間と資金を投入して震災後への回復だけでは余りにも夢の無いプロジェクトになります。災害復旧をチャンスと捉え目指す姿をリデザインし次の飛躍に繋がる復興計画を遂行して行かねばならないと考えてきました。

以下、稚拙ながら思いつくままに一個人として私案を書き述べます。何かの参考にもなれば幸いです

○工業団地と企業の復活

今回の地震で熊本県の幾つもの工業団地が被害を受け、その復興に取り組んでいます。古い工業団地は50年前に創設された所もあり、弊社が立地する熊本南工業団地も既に設立40年を経過し、様々な点で設立の時と内外の状況が変わり疲弊しています。即ち高度成長期の大規模工場の方進出を受けての下請け企業集積型から、現在は系

列も消滅しグローバルに工業製品を企画し出荷できる中小企業への転換が必要となっていると考えます。弊社も工業団地内に拠点を得たのを契機に様々な現実と関わってきました。

今回の地震によって日頃は希薄な工業団地内の交流も毎週の対策連絡会議で問題意識の共有化が進みつつあります。この機会を工業団地活性化促進の好機と捉え、工業団地を“激変するモノづくり環境をリードできる集団“への「創造的復興」を図りたいと考えます。更には全国にある数百の疲弊した工業団地の復活モデルを実現できればと考え以下を構想するものです。（順不同）

”工業団地をベンチャー企業などが創業または転入し、モノづくり開発交流ができ、単独あるいは連携してグローバル展開できる活性化した環境へ“

・工業団地への転入出の活性化

転出転入の障壁を低くするために、インフラ維持管理費用負担削減。

↓共有地、組合会館の公共化、地域産業プラザ化、地域の開かれたモノづくりと

ミニ開発拠点へ

・団地内外との企業交流活性化で「モノづくりノウハウ」の集約

周辺地域製造業が団地内企業と同様に交流できる容易な環境をつくる。その為にインフラを解放し公共化が必要。

・組合工業団地復活グループ助成金負担3／4に感謝

しかし残りを特別交付金または各企業のグループ支援金での負担の道を。

*個々の企業は自社復旧も厳しい会社も多い。共益部復旧負担は大きな足かせとなる。負担を極小にする為に共益施設やインフラ維持管理を公共化へ

・組合事務局機能拡大活性化

現状の維持管理型団地組合事務局を活性化し、工業団地内外企業との交流を促進し経営支援する身近な交流センター&インキュベーションセンターへ。

- ・地域モノづくりの中核の場合

2回の震度の震源地に最も近いと思われる熊本南工業団地を、地域モノづくりと開発の中核となる存在へリデザインし、全国の工業団地再生復活の先駆とする

- ・工業団地の個々の企業敷地内以外は公共施設に

団地内の事務局と会館を地域企業の研究会、開発会議、商談会、技術相談会などの目的に自由に使える交流の場に開放する。ただし地域製造業の会員制とし運営協賛金と施設使用費は徴収する。現状は団地内組合企業の占有施設で使用頻度も少なくプラザ化していない。↓製造業特化したミニ商工会

- ・個別企業経営に専念できる環境へ

工業団地内も個々の企業が個々の会社経営のみに責任を果たせばいいという環境が整えば、工業団地の一カ所に企業集積するメリットや新たに土地開発や環境調査などをしないで素早く事業立ち上げ計画ができるメリットなど産業再生への起点にもなり得る場所である。現在は道路や敷地、会館など共益共同負担コストが壁と

なっている。

- ・周辺の住宅地開発が進む中で職住接近の工業団地へ

多くの工業は地域との密着度低い隣接地に進む住宅地開発はパートやフレックスタイムなど女性人材活用の場にもなる

- ・疲弊した工業団地再生の成功モデルへ

当地の熊本南工業団地に限らず、全国の工業団地再生のモデルを作るとは中小企業政策の重要な柱ともなり得る。↓工業団地での用地売買、起業、転入促進支援を団地組合ではなく企業集積地機能拡大の政策へ。

- ・組合事務局を中央会直轄運営で連携強化

組合事務局を中小企業団体中央会の出先として全国の団地組合との交流を促進し、打って出る団地組合へ変身を図る。インフラ管理も中央会管理とする。事務局運営費用は会費徴収。

・ 共益負担金積み立てを非課税に

現在工業団地内組合事務局で集める共益負担金は組合利益となる為、保全費用が積立て困難で道路改修など将来への蓄積が出来ない↓補修引当金へ。

・ インフラの公共施設化

熊本南工業組合では共有施設である道路、水道、擁壁の痛みが顕著であり、個々の企業にとって、自社復活以外に共同組合の施設復旧費負担及びその後の維持管理はほぼ困難と判断する。

・ 熊本地区の工業団地を特区化

少なくとも被災した工業団地を特別区とし、団地組合相互の取引利益を免税とし組合整備と共同事業の活性化モデルに。利益を組合事業に蓄積しグローバル化など共同事業拡大や組合員事業支援へ。

・ 人財獲得支援を

復旧に多くの支援予算が組まれるのは大変歓迎すべきことだが、インフラや設備・建物で終わるのを危惧する。

地震復旧は過去を大胆にリデザインするチャンスである。その為には人財採用や育成への投資が出来る支援を期待するし、行政にも人財投入を期待する。

復旧の為に行政には多くの人財採用が予想されるが、一方では余剰となってくるであろう人財を中小企業への転籍奨励する仕組みを作れば、基本教育が高い幹部人材として10年後の産業変革に大きな変化を期待できる。

↓行政から先ずは3年の有期出向からでもいい。一人の有用な人財は10人のチームを活かす効果があると信じているし、存在価値を実感する組合団地や企業への転籍を希望する人財は出てくると信じる。↓「牛尾より鶏頭の道へ！」

○ 金融と助成金

企業としては経験のない助成金だが、使い勝手も良さそうで有り難い。ただ単年度予算で今後の長期復興計画が見通せない。

- ・単年度助成金の持ち越し運営出来ないか。
↓年度越えは、計画続行を条件に一時預かり機関設定するなど

- ・組合の修繕費積立を損金引き当てできないか。今は利益計上し課税される。

- ・劣後ローンの一括返済や分割返済や低金利化↓現状6%金利返済継続している。

*弊社も2004年に熊本南工業団地内に古い工場を購入し転入したのを契機に団地内へ活動本拠地をシフトしてきました。その後、組合団地の抱える問題は大きいことも分かってきました。高度成長期に創設された仕組みと運用のまま疲弊しつつあるのを感じます。

しかし、狭いエリアに集積した製造業集団というメリットは、活用次第では大きな潜在能力を感じます。必要に応じて連携し合う仕組みや、個々の中小企業が持つ悩みに経営アドバイス支援など運用できれば、個々の中小企業が本来持つ一芸の強みはま

だまだ捨て難いものがあると感じます。

思い付き列挙に近い構想メモですが、ご一考願えれば幸いです。

「10年で熊本城は元通りに！ 企業と町は3年で元以上に！」

*以上纏まりなく列挙したものは全く個人的発想と責任で記したものであり起案者以外一切の責任を負うものではありません。

以下は門外漢ながら

○熊本の観光復活について

熊本に生まれ熊本を拠点に世界展開を目指してきた私にとって、熊本城など観光の基盤が崩れてしまったのが大きな悲しみです。熊本城復旧には10年以上の歳月を必要とするにしても、何とか新しい構想で熊本を活性化できないかと思案し思いつきの提言を以下に列挙します。

「MINAMATA」と「MASHIKI」を復興の世界ブランドに

“震度7の震源地として全国に知れ亘った「益城町」に災害研究センターを創設する。↓「MASHIKI」を自然災害復旧の世界の象徴に、MINAMATAが公害からの復活の象徴となったように。

・熊本空港の隣接地の熊本県テクノパーク周辺、又は被災地周辺に、地震、火山、水害、台風など熊本県が実際に直面してきた災害に対する被害をテーマに世界規模の被害やその先端的対策を展示する。モデル避難所、シュミレーションでの体験学習・訓練センター、防災用品展示、などを行う全国規模の見学型防災研究センターを開設する。↓観光と防災啓蒙施設へ

・実験施設や備蓄基地とその展示などの併設もあれば、熊本市内と阿蘇をつなぐ観光経路でもあり啓蒙活動になる。

・熊本県を九州の災害対策拠点にする計画とも合致する。自衛隊西部方面総監も近接

し、益城インターは交通の要でもある。

・断層や被害家屋など被災地の一部を保存し見学できるコースを作る。

”熊本城復旧過程を見せる見学コース設定し築城技術見学と復興を見せる“

・遠巻きでヘルメット着用の見学コース設定し、来るたびに变化する文化財修復体験。

・毎年城の復旧現場を見学に来るような常連見学支援者を産みだす仕組みを作る。

*復興していく石積みは個々に寄付を募り復興完成写真に標すなど。

・熊本中心街に復旧中継とモデルで再現するエリアを設け観光コースに。

・熊本城の広大な敷地は魅力でもあるが、観光客には長く歩くのが不評でもある。復興の際に、駐車場から城内へのシャトルバス運行経路や動く歩道や地下駐車場からエレベーターなどのアクセス工夫できないか。

2016年6月13日

未来へ

30年間の歴史の中で培ったさまざまな経験の先に、
プレシードの未来がどうあるべきかを語る。

社長松本修一は、技術、経営、

精神面での進化が全てだと語るが、

そこには30年間の経営者としての魂、哲学が宿っている。

小野上記

背伸びをし続ける会社

地元の経営者の人たちと会合などで出会うと、「プレシードさんは凄く忙しそうで羨ましい。」とよく言われる。まさにいつも忙しい会社といえるかもしれない。しかし、我社が決して順調に生産と利益を上げているとは少なくとも社員諸君は思っていないだろう。何処の会社も、我々のように新しいことに挑戦し続けられ、少なくとも忙しくはなると思うのだが……。多くの会社は安定した歴史を持つ事が災いし、新しいことに挑戦する前にその恐怖感で行動を止めてしまっているのではないか。

私がやることはいつも無鉄砲に見えるかもしれない。度胸のいい経営者と見えるかもしれないが、心のうちはいつも不安でいっぱいなのが実情だ。自信家と多くの人が見ているだろうが、私ほど自分に自信がなく内気な経営者は少ないと思うのだが。

少し他の経営者と違うところがあるとすれば、行動せずに失敗するより精一杯挑戦して失敗する方を選ぶということかもしれない。学生の頃まで、いつも行動しないで失敗したり自分の世界を小さくしていた。行動しての失敗はほとんど取り返せることが多い。挑戦しない人生はどんどん世界を小さくしていく。いつも知り尽くした世

界にいることは大きな不安もなく、昨日と同じような安全が保障されているように見える。獣が住む森に踏み込むより、安全な柵のうちに家畜を相手にしている方を選びたいのは人情かもしれないが、昨日と同じ安全が続いているかに見えることが、昨日より僅かに食料が減ってきているのに気づいていない。いつか柵を越えて森の中へ踏み入れなければならなくなるのだ。

私は会社を興した頃よりいつも未経験の連続だった。挑戦する緊張感でいつも歯をかみ締めている日々の中を生きてきたので、人相まで変わったような気がする。安心とか安全とか言う言葉とは遠いところで生きてきたのかもしれない。しかし、現在の社会情勢はすべての人を大変革の中に巻き込むとしている。柵の外に出て森の中で狩をして生きていくことは、多くの日本人にとって大変怖いことかもしれない。獲物を得られずに野垂れ死にするかもしれないし、自分より強い獣と出会い痛手を負うかもしれない。どこにも安全を保障されていない中で生きていくことは不安で胸がいつぱいになるが、毎日これを繰り返しながら生きているうちに、人は危険の回避もうまくなり、色々と出来なかったことを物にする能力もついてくる。

我プレシードの歴史はまさに未経験への挑戦の歴史そのものだった。半年前には全

くやったこともなかったことが、今は過去の実績のひとつになっていく繰り返しだった。それも同じようなレベルでは決してなく、技術的に資金的にいつも過去を上回ることへの挑戦の連続だった。振り返ってみると、多くの実績により個人と会社の成長を造ってきた。周りを見回すと地域では珍しい存在になってしまった。まだ、無鉄砲な変わった会社と思われている部分が多く、今後への成長も半信半疑といったところかもしれない。只、過去に周りにある企業に比べてはるかに多い挑戦をし、試練を乗り越えてきたのは自信を持つていえる。今、我社にあるのは常に挑戦し続けてく社風が唯一の財産だと思う。いつも、背が届かないぐらい上に向かって背伸びをし続けていた。振り返ると確かに去年より高いところに手が届くようになっていくという繰り返しだったような気がする。

元々、新しいことを追い駆け続けたくて創ったプレシードである。いつも背伸びをし続けていくのは当たり前だし、これが我々の存在意義なのだ。これからはもっと広くこの社風に共感する仲間を求めていきたい。会社に長く居るだけで、又は歳を重ねていくだけで安住の場所は得られない企業であり続けたい。守りや止まる事を望むようになつたら後進に道を譲ろうではないか。我がプレシードにふさわしくないのだから。

ら。背伸びし続けることが生き続ける道でもあり、人生を充実させる方法でもあると信じる。毎日が同じ日々が続くようになったら、5年もすれば存在意義は完全に失われているだろうし、会社も個人も存在することを望まれない存在になっているだろう。諸君、失敗を繰り返しながら背伸びし続けようではないか。

2000年11月20日

語り遺す技術と経営

表題のタイトルで月に一回程度の社長主催の勉強会を始めていたと思っている。私もプレシード代表取締役社長の肩書を貰って25年となる。創業の瞬間から技術の問題、経営の問題、社会との関わり、人間関係等々多くの体験をしてきた。そして25年の年齢を重ねてしまった。このことは、思っている以上に重要な問題なのだと最近思うようになった。私の動物としての能力は、今後年々どころか月ごとに低下していく。25年間に蓄積した経験は今後まだまだ積み重ねられるだろうが、それを活用する能力は失われていくし、何と言っても多くの汗と労力と巨額の金をはたいて経験した失敗と成功の蓄積は、何とか次世代に語り継がねばならないと思ってきた。それを始めるにはもう遅すぎるくらいの時期とを感じるようになった。社長業を70歳過ぎてやっている人も多いし、日本の社長の平均年齢は59歳と聞いたこともある。まだ平均を過ぎたばかりと自分や周辺を納得させることもできるが、実践指揮能力や集中力は明らかに劣化を自覚するようになった。次世代の幹部の育成は私の大きな責任の一つだと思う。

創業から15年は毎日10時過ぎまで残業していたし、真冬の現場で背骨が凍るような徹夜を繰り返したこともあった。創業当初は設計構想も見積も全て自分で行った。休日など年間30日もあったろうか。会社に居ることに安らぎを感じるような時代でもあった。

今は到底その体力も気力さえも、ひよつとすれば知力さえもない。リーダーというのは、最も厳しい局面の先頭に立つ気力と体力がなければ続けるべきものではないと思ってきた。今は体力の低下を何とか経験と積み上げた人脈と判断力で維持している状況に入ってきた。自らイメージする社長の行動力を、若い世代の手本にできるようなものがなくなりつつあるのに不安を感じている。社長の老化と共に企業文化も衰えていくようであってはならない、常に新陳代謝がある不老不死の企業を目指さねばならない。建物の老朽化のように企業精神が老化してはならない。この頃日々感じることである。

まだ何とか語り遺せる気力と知力があると思う今後数年の間に、25年の間に経験して身に着けたことを何とか次世代に遺したいと思い、この勉強会を企画した。自分で経験したこと、本から学んだこと、新しい動きの捉え方、知っている事例など、技術と経営の考え方を伝えられればと思う。あえて「語り継ぐ」としなかったのは、語る

ことは私にできても受け継ぐことは私がすることではなく参加者がすることだからだ。多くの企業で「語り継がれても受け継がれない企業スピリット」と聴く。時代が変わるから行動は同じではないが、経営の判断のノウハウや時代予測、創業のマインドや企業にかけた思いなどを伝えられたらと思う。もちろん、私もまだ共に学び成長したいの言うまでもない。

運営内容

自己啓発には投資も必要だ。自分の貴重な時間と共に一回2000円の参加費を敢えて徴収したい。少数精鋭でもいい。次世代にリーダーシップを発揮できる人事を育てたいと思っている。

参加は自由だし、全ての人に考え学ぶ参加機会を与えたい。あくまでも私の個人主催の塾であり全ての人に参加資格を認めるが、欠席が連続三回になるときは上司の理由証明と推薦状がなければ参加を認めない。気ままに参加を考えると迷惑だから。

志有る者は、プレシードと関わりある者であれば社員に限らず事前申請で出席を認

めたい。共に磨き成長する仲間を育てたい。

2014年6月15日

想像力を発揮せよ

仕事の上で最も重要な能力は想像力だと思う。想像力には四つある。

第一が、未来を想像する力である。今のことを考える力の個人差は小さいが、未来をどう読むかの個人差は大きい。占いや勘に頼るのではなく、冷静な分析と思考の積み重ねで、未来を自分の心の中に築く能力はリーダーに最も必要な能力かもしれない。この能力は確かに天性によるところのものも大きいですが、日頃の訓練によって磨かれる。常に先のことを考え、自分の中で未来を明確にし、実際に展開していく。現実と照らし合わせ予測の違いを反省していく。この繰り返しを人が先の読める人間に育てていく。失敗から学ぶ者が成長していく。予想や計画を明確に持たなかった者は失敗に気づかずそれによって成長することも無く取り残されていく。

第二が、空間を越えた場所を想像する力。自分のいる場所や目の前のことでなく、視界を遠く隔てた所で起きていることを予測し対応する力は重要な能力である。自分が指示したことが、見えないところで間違はなく実行され進んでいるか、任せっきりでなくチェックし思い通りに遠隔操作する能力は管理者にとって必須といえる。

第三が、ミクロ・マクロを想像する力。これは技術者にとって最も重要なかもしれない。身の回りで常日頃起きている様々な物理現象から自然の法則を体につけ、肉眼では見えない場所や変化を想像し捉える。その実証のために測定器や実験がある（予測の無い測定や実験は事故を誘発することはあっても実りは小さい）。重いものは動かしにくく止まりにくい、細いものは曲がりやすく折れにくい、熱いものは膨らみやすく柔らかくなるなど、身近のあたりまえのことが、簡潔に物理の法則としてまとめられているに過ぎない。然し、法則に反したことは起こらない。我々が気づかず無視したときに手痛いしっぺ返しを受けるだけだ。物事を冷静に論理的に考え構築していけば、天は我々に味方する。やってみなければ分からないなどと早い段階で口にしないことだ。

第四が、人の心の中を想像する力。これはあらゆる世界において重要なことである。人間が社会の中で生きているのならば。人はそれぞれ自分の心をもっている。他人の心を安易に自分の気持ちと同様に考えていると、時として信じがたいほどのずれに出会うことがある。異なった視点、異なった生い立ちを持って異なった社会に毎日生きている人間が、自分と同じ発想や考え価値観を持っているなど期待してはいけな

い。話し合い、理解しあう努力を根気よく続けてこそ理解し合える。遠くの違った社会に在る人は、自分と全く違うのをお互いに前提としているから、かえって相互の努力があつて理解し合える。近くの存在は「分り合っている筈」の前提が大きな誤解のもとになる。人の心を思いやる能力が人を動かす能力そのもの。人を動かすのは力ではなく、理解することから始まる。

これら四つの想像する力は人間特有の力であり、そして学業成績に直接現れるものでもない。また、人と動物の大きな違いでもある。目の前の事象に対する現実的対応力は、時として素晴らしい能力を発揮することがある動物も、全く五感を超えた事象への対応能力は無い。想像力こそが最も人間らしい能力だと思う。

人が人間らしく豊かな気持ちで人生を送るに最も必要なものかもしれない。仕事の業績を伸ばす力となり、問題を回避したり発生を防ぐ力でもある。恋愛を生み成就する力でもあるし、家族、友人との絆を強くする力でもある。毎日の仕事を情性に流されず常に計画予測し、実行の後振り返り反省と修正を繰り返す。この繰り返しで人の能力と人格を高め、尊敬され存在を求められる人間をつくる。

2000年8月7日

備えよ常に

随分前にK部長より朝礼で座右の銘として聴いた言葉だ。彼が少年の頃に所属していたボーイスカウトで学んだ言葉だという。私もそれを聴いて以来好きな言葉の一つになっている。彼をよく見ていると、出張先で或は会議で或は現場で、彼にはその場に必要なる物を期待できる。ポケットの中やカバンの中に色々なものが隠されている。

準備は外からは見えないものだが、いざという時にその發揮される効果は圧倒的に差が見える。家に火がついたときに、消火器がある家と無い家では結末が全く違うことになるのは誰にでもわかる。物を、金を、知識を：備える為にはエネルギーと根気強さが必要だ。今日は使うことは殆ど可能性がないものであつても備えるべきものは多い。それを何処まで備えるかは、その人の仕事観、人生観によって違うだろうが、備えた人が瞬間訪れるチャンスを活かし「運がいい人」と呼ばれる成功者となる。

「運がいい人」と呼ばれたものだ。

私のカバンの中にも実に様々なものに溢れている。通常、3、4個のカバンを身の回りで動かしている、その中には、一年に一度も使わない物も多い。しかも実に整理さ

れていないので、必要な時にすぐに取り出せなかったり、探して無いと諦めて、後にカバンのポケットから見つかるなんて言うことも多い。備えるというのは整理されているとセットであって欲しいものだ。K部長はカバンやポケットの何処に入れるか定位置を決めているという。定位置化するまでの努力が私には欠けているのを反省する。

万一への備えが出来ているか、時々自問する。我が社は津波や大地震への備えは残念ながら出来ていない。津波はないだろうが、千年に一度の地震が来たら運を天に任せることになる。何処まで備えるかが人や企業の器量と能力になる。備えるには時間や金も必要だ。正に投資であるし、それが役に立つ機会がないことも多い。災害への備えなどは役に立たないに越したことはないが、起きたときに致命傷とならぬような備えは必要だろう。

さて、ビジネスの場での備えはどうあるべきか、新人諸君によく言うのは社会人、技術者でありたいなら、手帳、名刺入れ、ストップウォッチ機能付時計、電卓、メジャーは最低限身につけよと言っている。チャンスは突然やつてくる。西洋では、チャンスは馬で駆け寄る魔女の前髪を掴む勇気が必要と例えられるが、準備無くてはそのチャンスは掴めないし、幸運の女神に掴む後ろ髪はないという。チャンスに気づ

かない人も多いが、気づいた人も道具がなくては逃してしまう。周りの失望と自らの後悔が過ぎ去ったところに残る。「運が悪かった」と呟く人には一生チャンスは訪れない。

また、人災にも備えねばならない、犯罪やミス、事故によって会社は存続を問われるような目に陥ることも多い。リコールや不良製品を出して会社が消滅することさえある。何処まで予測し対策を講じているかが正にリスクマネージメント。今、我が社はリスクマネージメントに力を入れ始めた。企業は運よくで存続するわけにはいかない。事故、犯罪、ミスを未然に予測し発生を防ぐ。不幸にして発生した場合に、被害を最小限度に終わらせるように備えねばならない。その為に、会社はある程度の費用と自由さを失うことを覚悟せねばならない。無防備で自由気ままな運営には、瞬間で組織が崩壊するような事件や事故が襲う。備えあればその発生さえ押さえることが出来る。これを世間の人は「運がいい」と呼ぶ。

事故や取引トラブル、機密管理、人員管理など、常にうまくいって当たり前だと思えば、実に私の経営は今まで際どいところで生きてきた、いや天に活かされているというべきかもしれないくらい運がいい所で生き延びてきたと思う。経営者であれば、

「運がいい」を何時までもあてにするわけにもいかない。金も時間もエネルギーも注ぎ込んで備えるべきことを備えた後に、一生「運がいい」と呼ばれる経営者でありたいものだ。

2014年5月7日

変化することにこだわろう

先週土曜日に1月報告の運営会議が開かれた。世界も国も我が社も常に変化の中にいる。年初に予想しなかったことや計画されていたことが目の前や周辺で起きた。周りは常に変化の中にあるが、諸君自身はどの位変化あっただろうか。

勿論、トラブルがあって出張したり、顧客や上流から求められて資料作ったり物作ったりしただろうが、その中で以前と違う何かを自らの発案で発信できているだろうか…。

今までと同じ、上位から言われたからという中で自分らしさを提案したり、昨日までの作業手順や生活パターンを理想に向かってどの位変えたか、あるいは挑戦したかを語ることが出来るだろうか。

受け身で生きるということは楽なようだが、状況打開策が他人にあるという辛さと一体だ。自らの手で何かを変えてみようと思うとき、未来を自分の手で拓く面白さが始まる。

年初より組織も変えた、人事配置も変えた、会議のあり方も変えた……というなかで、変わらない自分があるとすれば、遅れ取り残される不安を感じてもらいたい。間違いない外は変わっているのだ。人類が経験したことのない速さで社会が変化しているという不安を個人的には感じるが、そうであれば、せめて半歩でも先を歩めればそれを楽しめるのではと思って生きている。ついていく辛さは今までよりも厳しい時代だから。

何度も言ってきたダーウィンの言葉、「強いものが生き残るのではない。変化する者だけが生き残る。」正にそうだと思う。厳しいようだが、夢と救いがある言葉だと思う。巨大企業も変化できなければ破たんするし、中小企業や能力低い我が身でも変化を捉え対応すれば生き残るし、先駆け出来れば次世代の覇者ともなれると聴けばいい。

世界はそう言った意味で平等だ。天地創造の神に感謝したいし、いまそれが出来る平和な日本に生きていることを感謝したいが、変化に気づかない甘いユデカエル社会に居ることには不安を感じてもらいたい。

全諸君に伝わっていると思うが、先月の28日にプレシードが上天草市に10kwの小型風力発電機を九州電力送電線に55円/kwで接続した。数佐取締役や久富部長、澤山社員の努力と社外の多くの協力、支援者の力によって完成した。

この課題と全く初めて出逢ってから2年半かかったが、ビジネスはやっと今から始まる。挑戦には常と夢と不安が混在する。まだ不安はいっぱいだが、成功すれば会社にも社会にも貢献できることであれば背伸びしてみようと思っている。

プレシードが遣らなくても他の会社が出来ること、ライバルの失敗を喜ぶような生き方ではなく、他社が困難さや面倒さで避けるテーマであっても、遣れば価値あり貢献できることに組みみたいと思っている。勿論、日々コストを削り納期を短縮し、品質性能を向上させる事業は柱だし、企業成長の根本であるのは今後も変わらない。

初めてのことへの挑戦は人マネができないことのもあるが、実は同じような事例は常に山ほどあるものだ。似た先例に学べばいいし、局所には詳しい人のアドバイスを求めればいい。

その時に必要なのが会社の生き方、個人の生き様だと思う。誰もいかがわしい会社や人の支援アドバイスはしてくれない。生き様、生き方こそが次の時代を拓く鍵ではなからうか。

プレシードは絶対に人を裏切らない、利己と利他の両立を考えている、技術の調査や読みは出来る、世界への展開能力、新たな業界・新規事業への参入能力ある等々が積み重ねられて信用となり力となる。常に変化しそれを先行しようとしているプレシードの中で、社員諸君に求めることも変化と成長だ。自分を「育てる」に取り組もう。あなたの周りが変わっていくのだから。

2015年2月9日

見果てぬ夢

創業時に秘めていて人に語れなかった夢がある。技術を志す者が自由にビジネスとして技術の中で生きていける会社を創りたいと思う夢。家族に育てられた若者が、家族と共に、友と共に、生まれた故郷で世界のトップレベルの開発を競い、市場を創り感動させる技術を産み出し育てるような会社となることを目指した。

思えば子供の頃、技術のかけらなど何一つなかった環境に育った。家の中の電気製品といえば照明以外はラジオしかない時代に人生が始まった。おもちゃ等ほとんど買わずに与えられる家庭でもなく、いつも空想だけが未来へつなぐものだった。家の中で手に入る石鹸の空き箱、線香の空き箱、キャラメルの空き箱、隣のおばさんから貰う牛乳瓶のフタ、ミシン糸の巻芯、かまぼこ板、輪ゴム等々を集めては何を作ろうかと夢を描き、ハサミ、小刀、キリや接着剤を使って自動車や船を作ったのが私のモノづくりの原点だ。空き箱が出るのをひたすら待った、ミシンの糸が減るのを待った、たまにカマボコを親が買おうと食べる以上に嬉しかった。輪ゴムは柱に釘打ってそこに掛けて溜めてあった。

それでも小学校の高学年になると、夏休みはゴム動力の潜水艦や乾電池モーターで動くプロペラ双胴船、磁石で開く金庫などに挑戦し、失敗を繰り返しながら創り上げた。切れない小刀や重すぎるハンマーで指を切ったり叩いたりしながら作ることに夢中になった。見かけは人に見せるほどではなかったが、初期目標を達成した作品を完成させたところにはエクスタシーと反省があった。

出来の悪いプラモデルも私の小学校1年生頃から始まった。派手な箱の絵と出来上がりがあまりにも違うことに打ちのめされながらも、何度も小遣い溜めて夢を買った。その夢が破れるたびに、いつか夢以上のプラモデルを作るような会社に入りたいと思った。そういう中で、出来の悪い部品を手直しして使いこなすことも覚え、やがて自分では買えないが、友達のパラモデルを作ってやるという腕前にもなりモノづくりを楽しめた。失敗や困難には副産物があるものだ。機械の故障や不具合対策が得意になったのもこの頃の口惜しさと対応のお蔭かもしれない。

大人になったらピカピカの工作道具が揃った研究室を持つのが子供心の夢だった。大人になったらラジコンを手に入れるのも夢だった。当時のラジコン飛行機はサライーマンの初任給の3倍くらいしたような気がする。今、それをやるかにしのぐド

ローンが1万円で手に入る。全て夢に描いたものは手に入る環境が揃った。そういう意味でもモノづくりは素晴らしいと思う。子供の頃の夢は今はいつも手中にあり、もう夢ではなくなった。

今、追いかける夢は何か。幼いころ夢見た物は手に入ったら小遣いでいつでも手に入る。今追いかける物は、勿論今の私に簡単に手に入らないものだ。と改めて気づく。

夢は追いかけている時こそ生き甲斐となり夢である。現実には目の前で揃うときそれは色あせて夢でなくなり次の夢を追う。

創業の頃の思いから永遠に繰り返す続くものは、未だ誰も出逢えていないような技術の壁の向こうにあるものかもしれない。それは技術やモノそのものに夢があるのではなく、いまずぐに手に入らないから実現することが夢であり生き甲斐となるのだ。私の夢はそれら壁の先にあるものを追いかけるながら生計立てて生きられる環境づくりなのかもしれない。プレシードという25年育ってきた会社を、夢をもって集う諸君が夢を追い続けられる会社にする。まだまだ道半ばだし、死ぬまで見果てぬ夢であるだろう。

2015年5月7日

変化して進化

「変化」と「進化」と今回あえて二つ並べたのは、進化したいのは人間の願いではあるが、進化ばかり繰り返せるほど人間は利口じゃない。むしろ失敗の連続が人生ではなかろうか。たまに成功して進化となる。だからこそ、その進化に意味も価値もある。進化だけしか繰り返さない変化は、人が生まれて大人になって行くような自然界の変化以外にはないのではなかろうか。

だから「変化」を求める時、「進化」ばかり求めると動けなくなる。敢て火中の栗を拾うようなリスクを負うとき、進化は約束されたものではない。成功裏に終わってみて初めて進化を語ることが出来る。

世の中では進化に拘りすぎると動けなくなるような選択肢が多い。勿論、失敗は極力回避せねばならないが、私はまずは変化を求めることに価値を感じる。結果が直接の進化につながらなくても、変化に挑戦することは進化を求めたそのこと自体に価値がある。失敗の痛みさえ長い歳月を超えると進化の原動力になっている。

生物の進化は、無数の変化があつて夥しい失敗の中から大きな失敗は滅亡し、小さな痛みを伴う変化を繰り返した末裔が進化を遂げた。シーラカンスは4億年進化せずほぼ絶滅に近い結果となった。人類は数千万年の間にネズミの仲間からサルへ、そして数百万年の間にサルから人類へ劇的に進化した。しかし、進化の途上でネアンデルタール人のように優秀でありながら滅んだ人類もあつたし、伝染病や災害で絶えた種もあつただろう。

例え変化しても、生き残る進化に繋がるとは限らないが、それでも変化しなかったものは死に絶え、ほぼ化石として残るのみ。

変化し進化するDNAを持つ人類の末裔である我々が行なう仕事も、進化しないで生き残れるはずもない。ましてや変化さえしないで10年も同じ業務や場所で生き残れるはずもない。何故なら周りは進化続けている。市場は絶えず結果としての進化を求めている。

そういう環境で我々が出来たことは、先ず変化を続けることではないだろうか。

2015年8月3日

理想を追え

理想を持つ者のみが世の中を進化させてきた。偶然の産物で進化するものは自然界以外に一つもない。進化のきっかけは偶然に見えても、それを進歩に活かせるのは思いを持った人間たちだ。

目の前にある全ての物やシステムは、顔も知らない人たちが悩み考えた理想と現実との妥協の産物なのだ。理想の前には時としては大きな妥協も必要かもしれない。しかし、妥協は胃が痛くなる程の口惜しさと涙と共にあることで、次へのスタートともなる。逆に漫然と妥協を積み重ねれば、行き着くところは空しい荒涼たる墓場のようなゴールとなるだろう。妥協だけを共に生きる人生は、期待と共に自らの人生を捨てていくことになる。

私も一社会人として或は経営者として多くの理想を追う人たちと出会い、そしてその人たちが夢破れて市場去っていくのも見届けてきた。理想ばかりに執着し、現実の運営維持と遅々として進まない現実から目をそらして破たんし消えていった人たちも目が輝いていた人たちであつたことを思い出す。

決して理想だけを語り追いかけるだけでは存続できないことも身に沁みている。それでも理想を忘れてはならないし、理想は捨ててはならないのだ。

生き続けねばならないという現実を、直視し背負いながらも理想を追うということは、一見すれば決してスマートではない。時として傲慢にも臆病にも見えたりもするし、逆に現実主義者の誹りを受けることさえあるかもしれない。本当に理想を追うということは孤独に耐える覚悟が必要なことかもしれない。それでも私はこの後に続く人たちには理想を追ってもらいたい。

現実妥協し、現実を情性で生きることとは楽であり、時として安全でもあるかもしれないが、世の中が劇的に変化する中で、自社のみ挑戦を避け安全に生き続ける30年など或るはずもない。挑戦と成長にはリスクを選択することもあるが、理想を追わない受け身の運営は、外部に持続存続を依存し迷走し何れ消滅もする。理想を追わないことが目の前のリスク回避だとしても、その繰り返しはいずれ停滞から後退、そして破たんへと繋がることを確信する。何よりも、成長する欲びのない人生や職場となることに存在意義があるのだろうか。

理想を追うということは実に楽しいものだ。苦しみさえも後ではいい思い出となるし、小さな成功のたびに歓びを分かち合える。小さな成功を達成し仲間の笑顔に囲まれるとき、全ての苦勞が吹き飛ぶ至福の時が得られる。理想を追うということは感動多き人生となることだと私は思うし、その体験もしてきた。感動を多くの人から与えられると共に、技術や生き方で周りを感動させることも出来る。そこが我々の生きる道ではなかるうか。

創業時、プレシードの社名由来を *Precede*（先んじる）に求め、日本語の魁（さきがけ）とし技術開発で常に先んじることを願った。まだ道遠しと思わねばならないが、少なくとも後退はしていない。一步一步遙か彼方の頂上へ向かっている。顧客や技術市場を常にリードし新しい提案が出来る会社として育てたいと思っている。その為には「プレシードは理想を追う」という旗印を今一度高く掲げ、そこに集う者たちが厳しくとも感動ある道を共に助け、あるいは叱咤し合いながら進んで行ってもらいたいと思う。

心に理想あれば暗闇でもがき苦しむ時はその胸の痛みを和らげてくれる一方で、目の前の問題に安易に妥協したり、小さな成功で満足しようとする時には弱い心に喝を入れてくれる。

社内で日々様々の事象を見るとときに、先ずは先人が言うように「これは最高なのか、そうではないのか。」と自問することから始めてもらいたい。最高など世の中にあり得ないし、あったにしても今日の最高だけ。ましてや我が社に最高など絶対存在しない。

「古の先行く人の 後見れば、 踏みゆく道は 紅に染む」 新渡戸稲造

*感動は踏みあとを行く人より先行く人が遥かに多いと私は信じる。苦しい現実の中で今後への理想を持って今日これを記す

2014年11月吉日

常に理想を求めて

少し前にベンツのTVコマーシャルの中でドイツ語で「Das ist beste oder nicht?（これは最高なのか、それともそうではないのか）」というタイムラーベンツの真髄を伝える言葉が流れていた。私の大好きな言葉だ。今は最高ではないということを意識しながら、常に最高を求め続ける言葉として私を勇気づける。

私は逆に「これしかない」という言葉が大嫌いだ。この言葉を吐いたときに、人間の脳は悩むことを放棄し安楽の思考放棄を選ぶ。しかし、その時もっとも人間らしい行為である悩み考え抜くということも放棄しているのに気付いていない。人の素晴らしさは、問題解決の為にてもてる知恵を振り絞って考えぬくことにあると思っている。昔「悩むだけならサルにもできる」という言葉が流行った。だとすれば、サル以下だということになる。

今日、我が社が造る装置は決して最高ではない。もっと言えば最高より遥かに遠いはずだ。その最高ではない装置をお客様に売りつける悔しさを共有する仲間が欲しい。ベンツがエンジンで自動車を走らせたときに時速200km/hを超えて走ること

は誰も求めなかっただろう。しかし、目の前のものは最高ではない!「もっと良く出来る筈だ」を繰り返して今日に至った。勿論、今日乗る車をベンツの末裔エンジンリアたちは誰も最高とは思っていないだろう。今日、最高は見えなくても最高ではないことを肝に銘じなくてはならない。「これでいい」を言った人間は次の世代についていけない人間となるのだ。

今日の調達価格は最低価格ではない、品質は最高ではない、組立手順は最高ではない、取引は最高ではない、ましてや設計が最高であろうはずがない、そして自分の知恵・行動・判断が最も最高ではない。そういう中に生きていて「これでいい」とか、「これしかない」とかいう言葉をたやすく吐かない仲間であって貰いたい。今日の現実には常には最高ではない。理想的ではないという意識を強く持つことが明日の成長の源だと思っている。

すべてが最高であることなどあり得ないが、全てに最高を目指していくことは、生き方、姿勢の問題だから誰にでもできること。遣るかやらないかだけ。

最高の挨拶か、最高の笑顔か、最高の礼儀か、最高の歩きか、最高の報告か、最高の計画か、最高の指導か、最高の掃除か、自分は最高の恋人か、最高の夫であるか、

最高の妻であるか、最高の親であるか、最高の社員であるか：勿論一つたりとも私は最高を持っていないが、常にこの言葉を思い出しながら生きていたい。目の前の愚痴を語るより、何か一歩でも最高に近づくことは出来ないかを常に考えたい。

目の前の深刻な問題と直面するとき、対策はこれしかないと思う人間は時代を引っ張れない、人を引っ張る責任を負えないのだ。今考えていることは最高の選択ではない、自分たちの知恵はいつも不足しているのだ。このことは常に謙虚に受け入れよう。勿論、私は最高の社長には遥か遠いが、最高の社長を目指さねばならないと思っている。プレシードを最高の会社にしたいから。

2013年3月26日

2019年から未来へ予感

30年前に創業した時、今日という日は遥か彼方の未来でした。子供の頃、何時の日か未来に到達するのだろうか、と憧れの気持ちを持って漠然と考えていた時期も長かったようにも思いますが、30代の創業時からさえ、今振り返ればあつという間に30年後にたどり着いてしまったというのが実感です。そして今は、今日の現在さえもいつか遥か昔に過ぎ去っていく無常さを日増しに感じるようになりました。

では10年後、20年後、30年後はどうなっているか、過去から今までを生きた経験から想像してみたいと思います。これは学者が行うデータベースで説得するようなものではなく、60余年もの間もがき苦しみ必死で生きて来た中で体感したこと、垣間見てきた先端産業で感じていること、昨今の社会の世相の変化で感じることを合わせて未来を予測してみたいと思います。

プレシードを創業して30年間運営してきた中で、それを守り育てるために感度を上げ、産業界を見つめ、社会を見つめ、社内と社員諸君を見つめ、政治も経済も浅学な

りに見つめて来ました。

経営するということは自分の人生だけでなく社員諸君の家族人生にまで影響する事であり、正に感度を上げ必死に見つめて来ました。その間の技術の進歩は目覚ましく、インターネットとの出会い、ロボットとの出会い、スマホ、ドローン等々、想像していなかった未知との出会いは私の人生を十分興奮させてくれました。

貧しかった子供の頃に、科学の力で未来を明るく幸福にするということを信じていた私には嬉しさの連続でしたが、一方では多くの分野で人間と社会の質の劣化を感じることが日増しに強くなりました。人はどちらへ進もうとしているのだろうか、と思うことが多くなりました。

20世紀までに何度も経験した戦争や宗教、イデオロギー対立から共存に根気よく努力せねばならないことを学び、国際連合を造り、EUを造り、東西の冷戦の壁を取り除きました。しかし、私にはその動きも1980年代が人類の哲学のピークのように思えてなりません。

その後、技術の発展は世界を一つの生活圈にしましたが、共存思想より支配への欲望、支配されることへの不安から対立の構造を生み始めました。人類は正に1980

年代をピークに劣化し、国家のエゴのぶつかり合いが始まりました。拝金、物欲、排他主義がはびこり、見える不愉快さに対しては話し合うことより排除に動くことが見え始めた気がします。

さて、人類は過去の歴史から、悩み傷つきながら得た貴重な哲学や知恵を、忘れ去らずに発展させることが出来るのか、私の今の最大の未来への関心と不安です。

10年後予測

未来の混とんさがピークを迎えると予感します。エネルギー問題、環境破壊問題、AI運用問題と、その頃にはまだ現状より不安は拡大しながらも抜本対策は見えていないのではないのでしょうか。未来への不安が拡大するのは誰もが感じながら、一度身に付け味わった便利さや快適さに制限を加えて未来を守るという文化は未だ大きく始まってはいないでしょう。

現状より快適で問題解決案が見えれば新しい道を選択できるでしょうが、我慢を強いられる温暖化対策、廃棄物対策、AIの安全活用などには、今までの人類が経験しなかった欲望を抑える政治が必要です。壊滅的状况にならない限り人間は快適さを捨

てられません。10年後はその手遅れへの入り口ではないでしょうか。勿論、20世紀の末に生れかけていた相互理解と大道に就くという文化が復活し動いているのを祈ります。

20年後予測

もし人類は過去に経験から学んだ哲学的英知を活用して、発展と欲望を抑制する政治が始動していれば、ゆつくりと停滞と安定の選択へ向かっているかもしれません。出来ていなければ欲望に任せ、年ごとに未来の明るさを失っていき、私の子供の頃と逆の時代に入っているかもしれません。未来は科学の発達で人類を豊かさで幸福へ導くと思っていた時代に回帰できなければ、温暖化、海洋汚染、富の局在化、生きる喜びの創出…、人がパンだけを求めて生きる間に悪魔とも対峙する気迫を失って、まるでゾンビ集団となるのでしょうか。SFは型を変えて現実となりはじめるのかもしれませんが。

30年後予測

人類が目先の欲望に従って社会を継続してきたのであれば、社会の運営は人の手を離れ、AIに生かされた人類社会となっているかもしれません。AIに感情がなければ、邪魔ではない人類は退廃的社会を造って生きているでしょうが、もしAIに感情が導入されていたのであれば、不要な人間のいる場所にコストは不要との判断で抹殺もあるかもしれません。AIにとってこれは理性であり、残酷なことではありません。何故なら痛みも命も肉体の無いAIにとっては不可解な言葉に過ぎませんから。

30年後に人類が過去の英知を活かし切れていけば、生きて成長して進化する欲びもある人間生活をAIがサポートする社会となっているかもしれません。幸福は苦痛や痛みを知る者にこそ存在するのであれば、今の進化は未だ未だ快樂主義のレベルの低い社会のような気がします。人類は戦争や疫病で絶望的な不幸に出会った際に復活してきましたが、これから先は快樂の延長にある地獄を回避できるのか…、生ある限り見つめていきたいと思います。

見届けたいテーマと予測

不老不死…人類の永遠の夢であり、不死は達成できなくても老化はメカニズムが解

明され場合によつては一部組織の若返り実現、私が20歳ころ言っていた予言の「我々は最後の老人となる。我々が老人になった頃には『お前らもいつか俺のような老人になるのだ』という言葉が通らなくなる。『僕たちは老化しないよ』と言われる。」でした。私が死んだ後のことでしょうが、あり得る様な気がします。

肉食…現代は生きた生物の命を絶って食していて、美食自慢する。若くて虫も殺さないような可愛い女性が鶏の足を握ってかぶりつく現代。「牛のロースが美味い」など、昔の野蛮で残酷な風習として語られるようになるでしょう。

喫煙…30年前の起業時に意を決して禁煙した時に思っていたこと、いつの日か「草を乾かして紙で巻いたモノに火をつけて、煙を吸って脳を酸欠とニコチンで麻痺させるような原始的行為は、未開のジャングルに住む人間が鼻で煙を吸い込む風景を見て我々が感じるものと同列でフィルムの中に残るだろう。なんて原始的な風習が21世紀まで残っていたのか。」と言われる日が来ると語っていたのを思い出します。これは30年後には画像でみる以外には痕跡も残っていないでしょう。

循環社会…再生可能エネルギーへのシフトは言われて久しいが、化石エネルギー依存からの脱却、地球温暖化ストップは成し遂げられているだろうか。廃棄物による環境破壊は止められるのだろうか。100年前の自然データに戻るのだろうか。プラスチック廃棄物、化学汚染は決して生活に不可欠な物から生まれるものだけではない。商業主義や便利さに踊らされて社会に出回ってしまったものなら社会の意志で歯止め可能なはずだが、未だ製造側の利益が先行し未来に大きな負担を付け回し続ける。100年後も同じ地球を保証できる社会が30年後になってもらいたいのだが…。死んだ後の社会に対して深刻に悩む人類の責任感は生まれないのだろうか。

哲学…グローバリズムは国際化の加速で衰退していった。“地球は一つ”と言われてグローバリズムが20世紀末に起きかけたが、その後は国際化が進む中にエゴ社会になっていった印象を持っている。哲学なき時代となった。個人主義、一国主義、大国主義、拝金主義…、文明の基盤であった人間の哲学は冷戦時代を終えた後に消滅していった気がしてならない。国際化は逆に一国主義に傾いて行った。領土争い、権益主

義、…人道主義や自然主義、平等主義などは政治家のプロパガンダでない限り聴くことが少なくなった。30年後は更にエゴと個人主義となっているのか…。

人間関係…人は家族、一族、村など社会的生き物でした。何故なら一人で生きるには出来ないことが沢山あり、寄り添うことで生き延びる選択をして来ました。科学が進化しソフトを始め道具の進化により一人で快適環境を維持できるようになり、冠婚葬祭も苦しみも喜びも個人の範囲で治まるようになってきました。病気で集まることもないし、旅に出る時に饑餓を送る習慣も無くなりました。田植えや収穫には大勢が集まって作業することもなくなりました。人は猿や類人猿時代の社会的生き物だった時代を終わり、個として生きて行こうとしているような風潮が見られます。家にいてさえ家族とのコミュニケーションよりネット交流が中心になってきました。しかし、不幸と共に歓びがあり、共に分かち合って人間は生きて来ました。歓びだけの社会、幸福だけの社会を目指しても真の幸福はないと確信します。欲求不満生活となるだけと思うのですが…。

人は人と寄り添って生きてこそ、悲しみを乗り越え歓びを倍増できる進化を辿ってきた気がします。百万年以上かけて創って来た人類の特性は科学で変えられないものがあるように思いますが、それさえも変えて行こうとするのであれば、今から見れば覚せい剤やモルヒネと同列に見えます。しかし其れも遺伝子操作で解決するのでしょうか…。

最後に

齢を重ねるというものは不思議なもので、気持ちには意外と幼いままであり、体は思うに任せない。だから諦めて自分を老人として受け入れるという気持ちが正直なところでしょうが、冷静に観察すれば記憶力、思考力の劣化は否定できません。それでも絶対的に言えることは、古い記憶と体験を持つていることです。

例えば歴史に学ぶという言葉がありますが、我々が明治時代をどんなに残っている資料で再現したり歴史評価をしようとしても、やはり明治時代に生きた人が残した資料を理解するのは実に難しい事の様な気がします。何故なら私が見て来た昭和30年代がよくドラマや写真で紹介されますが、平成に生れた人に伝わるだろうか、或は我々さえも当時の時代背景と視点を持って見ているだろうかと思ひながら見ることが度々

です。

例えば、自宅に電話もなかったし隣の県に直通電話がかからなかった。電報や手紙、文通など実に生活に必要な道具でした。冷蔵庫もコンビニも電気炊飯器もなかった時代に、毎食の用意は実に大変なことでした。トランジスタさえなかった時代はパソコンはおろか電卓さえなかった。町の病院は深夜でも自転車呼びに行けば駆けつけてくれました。だからこそ皆に感謝され尊敬されて「先生」と呼ばれていました。日曜日に病院が休みになると聴いて、子供の頃まさかと思った遠い記憶があります。家には昭和30年には家にはコンセントはありませんでした。天井電灯の二股ソケットに繋いで、日本全国の情報が流れる真空管式ラジオを聴いていたのを思い出します：etc。色々な時代背景の中で事件があり政治が動き企業も生まれ法律も変わっていく中で、貧しく不便でも人の笑顔があり、喜怒哀楽がありました。不幸は確かに多かったような気がします。アコンもなかった時代に扇風機が届いた出来事は今のエアコンに勝る気がします。初めての電気こたつの赤いランプの色に科学の恩恵さえ感じました。

以上のようなことは昭和20年代の人には当たり前前の記憶体験ですが、若い世代には想像でしかない時代であり、共有していない事への配慮不足を自分で時折思ったりします。

プレシードの30年の歴史にも様々なこととの出会い、今があります。決して自慢できる今ではありませんが、30年の流れの帰結であるのは事実です。そして、30年後も今からの流れを引き継いでいくのであれば、過去の30年の生々しい企業活動を残していくのも、いつの日かどこかで問題解決に役立つような貴重な資料ともなるのではないかと考える次第です。

過去を見誤る者は未来を見誤る、と思います。過去を見誤らせないために何か役立てれば幸いです。

2019年6月28日

今後のプレシードへ

プレシードは私の末っ子四男坊だと思って育てる、と設立当初から公言してきました。ある人は自分の言うがままに従わせ育てるという意味にとったかもしれませんが、私が伝えたかったのは、末っ子だから最も大事に育てて後世に自分の想いというDNAを継承する者として育てるという意味でした。

厳しく正しく勇気もって先端を切り拓く気概をもつと後に続く人たちに道標として残せる存在を目指しました。何が出来たのかを語る自信がありませんが、そのような思いをもった創業者がいたことは伝え、意志を引き継ぐ人が一人でも現れたら創業者の本懐と思って30年育ててきました。

外国人でもいい、家族でもいい、男子でも女子でもいい、生え抜きでも外来でも、エンジニアでも営業でも財務端でもいい。DNA受け継いでくれるのであれば、創業者として本懐を遂げたことになると思っています。

創業以来のこの30年間、技術は第四次産業革命といわれるほど劇的な進歩の中に居ます。特にコンピューターネットワークは、まさしく世界を一つに且つ同時に繋ぐ

ということを成し遂げました。正にグローバル、ワールドワイド化した世界は中小企業も大企業も同じ市場で同じ情報を手することが出来る時代となり、これが成功への入り口でもあり市場から消える原因ともなっています。

社内で「世界調達、世界販売」言い始めた2000年初頭から、世界の中のプレシードの存在意義を自問するようになりました。今でもプレシードの存在意義を世に主張するのは抵抗がありますが、これを語れる企業でなければ存在意義がない企業と言わざるを得ません。

今まではともかく、今後のプレシード存在意義を私なりに語り残したいと思います。創業の思いは別の記述に詳しくは譲るとして、技術志向で世渡りが下手なエンジニアですが、一生懸命技術を追えば豊かな人生が送れる環境づくりを目指しました。決して有名大学卒のエンジニアだけでなく、ただモノづくりで新しいものを創造し世の中に貢献できる職場を漠然と考えていました。そうこうする内に社員も100名を超え、技術好きの集団が社会的責任も真剣に考え実行することを期待される存在となりました。もう私の想いだけで会社を四男坊として扱うことは許されなくなりました。今までに作って来たプレシードの企業文化をもう一度共有し全社員で理解し合う

ことから始め、今後は多くのプレリーダーが企業文化創造と行く方向を示すビジョンを確認し合って進めてくれることを願うこの頃です。

2019年7月2日

編集後記

熊本県はじめ公的な団体での勤務を終え、平成29年6月にプレシードの門をたたいて以来、初体験のことに驚く毎日でしたが、中でも社長が社員への指示事項や日々の生き方等をこまめに書いておられることに、強烈な印象を持ったことを今でも忘れません。創立30周年記念事業の一つとして、この「魁魂」をはじめ、「PRECEED PHILOSOPHY」、「MAKE NEXT〜PRECEED30years」、「社長かわら版」等の印刷物や、テレビのCMなどの制作編集作業を担当することとなり、プレシードの30年間の歴史を図らずも知る結果となりました。

この「魁魂」は、プレシードの歴史に止まらず、社長の経営に対するロマンや苦しみ、社長個人の生き方、未来への提言などを、原文に忠実にまとめたものであり、松本修一の「人となり」がよく表現されていると思っています。

一人の社員としてこの作業に携わることができたことを嬉しく思い、読んでいただく皆様方にも、プレシードの社是である「技術」と「情熱」を感じ取ってもらえば幸いです。

30周年記念事業担当 取締役 小野上典明

松本修一略歴

昭和28年4月	熊本市生まれ
昭和47年3月	熊本県立済々黉高等学校 卒業
昭和48年4月	熊本大学工学部工業化学科 入学
昭和55年3月	同上 卒業
平成26年4月	熊本大学大学院自然科学研究科 産業創造工学専攻(博士後期課程) 入学
平成29年3月	同上修了 工学博士号 取得

【職歴】

昭和55年5月	平田機工株式会社 入社
昭和61年1月	同上 退職
昭和61年1月	株式会社アリテック共同設立(専務取締役就任)
平成元年10月	同上 専務取締役 退任
平成元年11月	株式会社プレシード設立 同社代表取締役就任
現在に至る	

【所属】

熊本南工業団地協同組合 理事長
生産技術開発協同組合 理事
一般社団法人熊本県工業連合会 副会長
熊本県中小企業団体中央会 理事
熊本経済同友会、熊本市商工会議所、他

魁 魂

Spirit of Preceed

発行日	令和元年11月1日
著 者	松本修一
発行者	松本修一
編集協力	株式会社プレシード30周年記念事業実行委員会
協 力	安永久美 (共栄コア) 西澤俊郎 (ミハラシ)
装 丁	高橋康児 (t-design)
